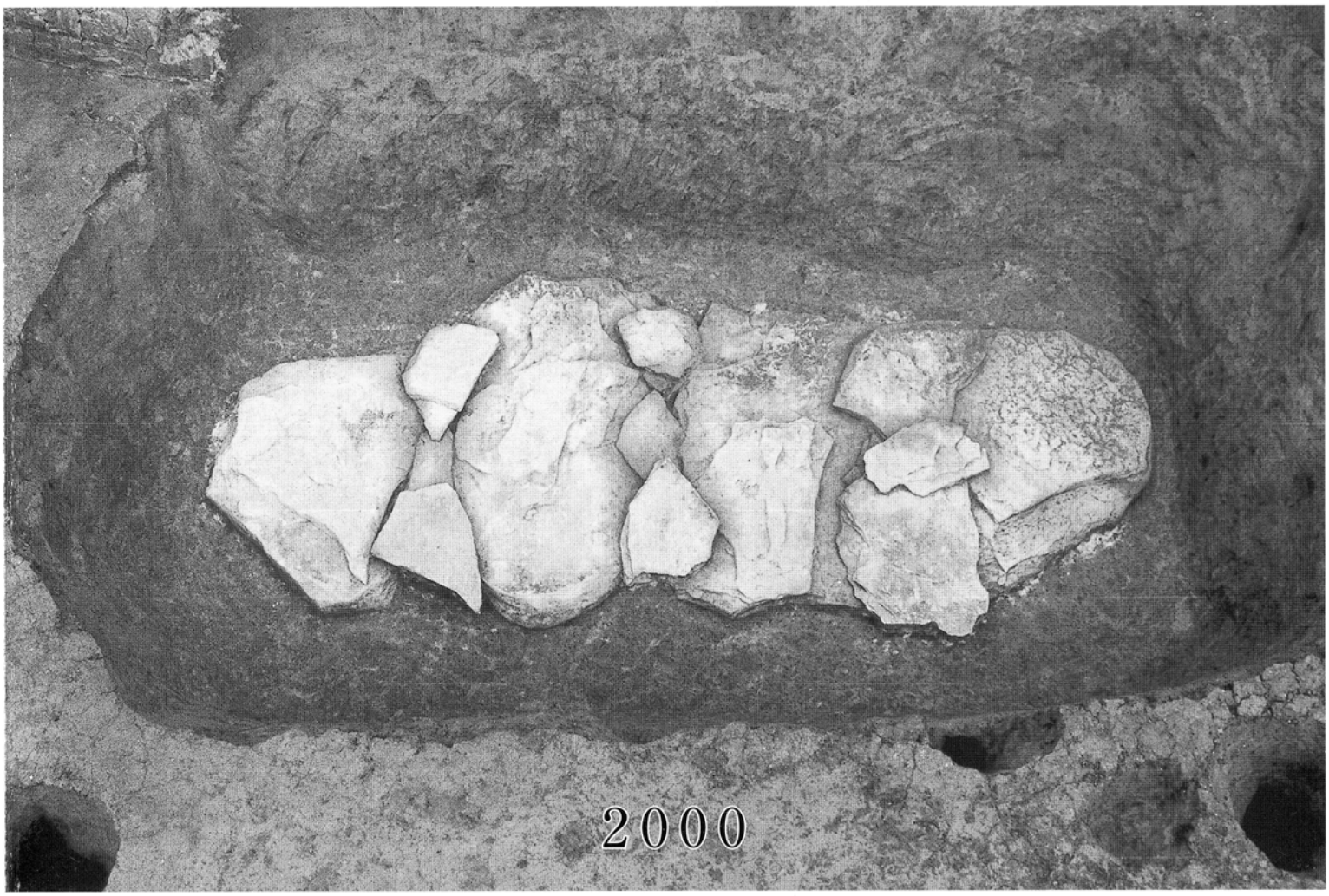
福岡市埋蔵文化財調査報告書第647集

田島小松浦遺跡
第1次調査

田島A遺跡
第1次調査
第2次調査

— 新設道路別府香椎線の建設に伴う発掘調査報告書 —



2000

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、国内外において重要な地域として多くの人に知られています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努め後世に残そうと考えています。

本書は田島小松浦遺跡、田島A遺跡の発掘調査成果を報告するものです。本書が埋蔵文化財の保護と知識を高める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

平成１２年３月３１日　　福岡市教育委員会
教育長　西憲一郎

例　言

1. 本書は、１９８７年度、１９９８年度に福岡市教育委員会が調査を実施した田島小松浦遺跡第１次調査、田島Ａ遺跡第１次、第２次調査の報告書である。調査の担当は加藤隆也である。
2. 田島Ａ遺跡第２次調査は道路建設に伴い、道路面まで切り下げて自動販売機を設置するため発掘調査をおこなったもので、地権者の黨克己氏には多大な協力をいただいた。
3. 本書に使用した遺構の実測は、永井大志、坂田邦彦、田中克子、井上繭子、本田浩二郎、加藤が、遺物の実測図は田中克子、加藤が行った。製図は田中、加集、本田、加藤が行った。使用した遺構、遺物の写真は加藤、本田が撮影した。
4. 本書で用いる方位は全て磁北である。遺構の呼称は記号化し掘立柱建物をＳＢ、土坑・土壙・石蓋土壙墓、貯蔵穴をＳＫ、溝をＳＤ、柱穴をＳＰとした。
5. 石蓋土壙墓の調査・整理においては本田浩二郎の協力を得た。他の執筆、編集は加藤が行った。
6. 本報告に係るすべての出土遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である

遺跡調査番号	9762	遺跡略号	ＴＫＵ－１		
調査地地番	城南区田島２丁目地内、別府２丁目地内				
開発面積	11,880㎡	調査対象面積	1,000㎡	調査実施面積	695㎡
調査期間	1998年１月13日～1998年３月31日				

遺跡調査番号	9801	遺跡略号	ＴＺＡ－１		
調査地地番	城南区田島１丁目地内				
開発面積	2,680㎡	調査対象面積	2,680㎡	調査実施面積	2,014㎡
調査期間	1998年４月６日～99年２月10日				

遺跡調査番号	9830	遺跡略号	ＴＺＡ－２		
調査地地番	城南区田島１丁目４０５				
開発面積	28㎡	調査対象面積	28㎡	調査実施面積	24㎡
調査期間	1998年９月１日～1998年９月11日				

本　文　目　次

第１章　はじめに
　１．調査組織 …… 1
　２．調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境
第３章　田島小松浦遺跡第１次調査の記録
第１節　ＩＡ地区の調査
　１．調査の概要 …… 6
　２．検出遺構 …… 6
第２節　ＩＢ地区の調査
　１．調査の概要 …… 8
　２．検出遺構 …… 8
第３節　Ⅱ地区の調査
　１．調査の概要 …… 11
　２．検出遺構 …… 11
第４節　まとめ …… 12
第４章　田島小松浦遺跡の自然科学分析　（パリノ・サーヴェイ株式会社）
第５章　田島Ａ遺跡第１次、第２次調査の記録
　１．調査の概要 …… 27
　２．検出遺構 …… 29
　　竪穴住居（ＳＣ） …… 29
　　掘立柱建物（ＳＢ） …… 34
　　柱穴（ＳＰ）出土遺物 …… 42
　　土坑・土壙、貯蔵穴（ＳＫ） …… 44
　　溝（ＳＤ） …… 67
　　石蓋土壙墓（ＳＫ） …… 76
　　その他の遺物 …… 80
　３．まとめ …… 86
第６章　田島遺跡の自然科学分析　（パリノ・サーヴェイ株式会社）

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1/25,000) …… 3
Fig. 2　古地図上調査地点(約1/4,000) …… 4
Fig. 3　田島小松浦遺跡調査区位置図(1/500) …… 5
Fig. 4　ＩＡ区遺構配置図(1/100) …… 7

Fig. 5　ⅠB区遺構配置図(1/100) …… 9
Fig. 6　Ⅱ区遺構配置図(1/100) …… 10
Fig. 7　田島小松浦遺跡出土遺物(1/3、1/1) …… 11
Fig. 8　田島Ａ遺跡調査区位置図(1/500) …… 28
Fig. 9　田島Ａ遺跡遺構配置図(1/150) …… 折り込み
Fig.10　竪穴住居（ＳＣ）－２６,２７,３５,３６実測図(1/40) …… 30
Fig.11　竪穴住居（ＳＣ）－８０,８１実測図(1/40) …… 31
Fig.12　竪穴住居（ＳＣ）出土遺物実測図１(1/3) …… 33
Fig.13　竪穴住居（ＳＣ）出土遺物実測図２(1/3、1/1) …… 34
Fig.14　掘立柱建物（ＳＢ）－０１,０２,０３,０４実測図(1/80) …… 35
Fig.15　掘立柱建物（ＳＢ）－０５,０６,０７,０８実測図(1/80) …… 36
Fig.16　掘立柱建物（ＳＢ）－０９,１０,１１実測図(1/80) …… 37
Fig.17　掘立柱建物（ＳＢ）－１２,１３実測図(1/80) …… 39
Fig.18　掘立柱建物（ＳＢ）出土遺物実測図１(1/3) …… 40
Fig.19　柱穴（ＳＰ）出土遺物実測図１(1/3) …… 40
Fig.20　柱穴（ＳＰ）出土遺物実測図２(1/3、1/1) …… 41
Fig.21　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）－０１,０２,０３,０４,０７,０８,０９,１０,１１実測図(1/40) …… 45
Fig.22　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図１(1/3) …… 47
Fig.23　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図２(1/3) …… 48
Fig.24　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）－１２,１３,１６,１７,１８,２１実測図(1/40) …… 50
Fig.25　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図３(1/3) …… 51
Fig.26　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）－２２,２３,２５,３３,３７,４１,４３,５０,５５実測図(1/40) …… 53
Fig.27　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図４(1/3、1/1) …… 54
Fig.28　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図５(1/3) …… 55
Fig.29　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図６(1/3) …… 56
Fig.30　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図７(1/3) …… 59
Fig.31　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図８(1/3) …… 60
Fig.32　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図９(1/3) …… 61
Fig.33　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）－６６,６７,６８,６９,７１,７２実測図(1/40) …… 63
Fig.34　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図10(1/3、1/1) …… 64
Fig.35　土坑･土壙･貯蔵穴（ＳＫ）－７３,７６,７９,８５,８６,８７実測図(1/40) …… 65
Fig.36　溝（ＳＤ）０５,１９,３８,５６,５９,７０実測図(1/40) …… 66
Fig.37　溝（ＳＤ）出土遺物１(1/3) …… 69
Fig.38　溝（ＳＤ）出土遺物２(1/3) …… 72
Fig.39　石蓋土壙墓ＳＫ－４２実測図(1/20) …… 74
Fig.40　石蓋土壙墓ＳＫ－５１実測図(1/20) …… 折り込み
Fig.41　石蓋土壙墓ＳＫ－５２実測図(1/20) …… 折り込み
Fig.42　石蓋土壙墓ＳＫ－５３実測図(1/20) …… 75
Fig.43　石蓋土壙墓出土遺物 …… 77
Fig.44　谷頭土層断面実測図(1/40) …… 80

本　文　目　次

Fig.45　谷頭出土遺物実測図(1/3) …… 81
Fig.46　表採遺物実測図１(1/3) …… 84
Fig.47　表採遺物実測図２(1/3) …… 85

図　版　目　次

ＰＬ．１　(1)ＩＡ区、ＩＢ区全景（西から）　(2)ＩＡ区全景（北西から）
ＰＬ．２　(1)ＩＡ区全景（北西から）　(2)ＩＡ区ＳＫ－０１完掘状況（北東から）
ＰＬ．３　(1)ＩＡ区、ＩＢ区全景（南東から）　(2)ＩＡ区ＳＫ－０２掘削状況（北から）
ＰＬ．４　(1)ＩＢ区南壁土層断面（東から）　(2)ＩＢ区ＳＫ－０１掘削状況（南から）
ＰＬ．５　(1)Ⅱ区全景（西から）　(2)Ⅱ区全景（東から）
ＰＬ．６　(1)Ⅱ区全景（東から）　(2)Ⅱ区段落ち際状況（北東から）
ＰＬ．７　(1)Ⅱ区谷部掘削状況（北西から）　(2)Ⅱ区谷部断面状況（北東から）
ＰＬ．８　(1)調査区掘削状況（東から）　(2)調査区掘削状況（西から）
ＰＬ．９　(1)調査区掘削状況（北から）　(2)調査区掘削状況（西から）
ＰＬ．10　(1)調査区掘削状況（東から）　(2)田島Ａ遺跡２次調査区全景（南西から）
ＰＬ．11　(1)調査区掘削状況（東から）　(2)調査区掘削状況（北から）
ＰＬ．12　(1)ＳＣ－２６完掘状況（西から）　(2)ＳＣ－２６カマド検出状況（西から）
ＰＬ．13　(1)ＳＣ－２７遺物検出状況（北から）　(2)ＳＣ－２７完掘状況（東から）
ＰＬ．14　(1)ＳＣ－３５完掘状況（北から）　(2)ＳＣ－３６完掘状況（北から）
ＰＬ．15　(1)ＳＣ－３６完掘状況（東から）　(2)ＳＣ－８０，８１掘削状況（東から）
ＰＬ．16　(1)ＳＫ－０１掘削状況（北東から）　(2)ＳＫ－０２掘削状況（北東から）
ＰＬ．17　(1)ＳＫ－０３掘削状況（北から）　(2)ＳＫ－０４掘削状況（北から）
ＰＬ．18　(1)ＳＫ－０７遺物検出状況（西から）　(2)ＳＫ－０８遺物検出状況（北から）
ＰＬ．19　(1)ＳＫ－０９掘削状況（北東から）　(2)ＳＫ－１０掘削状況（北東から）
ＰＬ．20　(1)ＳＫ－１１掘削状況（北から）　(2)ＳＫ－１２掘削状況（北から）
ＰＬ．21　(1)ＳＫ－１２掘削状況（北から）　(2)ＳＫ－１３検出状況（東から）
ＰＬ．22　(1)ＳＫ－１６検出状況（北東から）　(2)ＳＫ－１８遺物検出状況（北から）
ＰＬ．23　(1)ＳＫ－２０遺物検出状況（北西から）　(2)ＳＫ－２１遺物検出状況（東から）
ＰＬ．24　(1)ＳＫ－２２遺物検出状況（東から）　(2)ＳＫ－３３遺物検出状況（東から）
ＰＬ．25　(1)ＳＫ－４１遺物検出状況（西から）　(2)ＳＫ－５５遺物検出状況（北から）
ＰＬ．26　(1)ＳＫ－６９遺物検出状況（北から）　(2)ＳＫ－７３遺物検出状況（南から）
ＰＬ．27　(1)ＳＫ－７９遺物検出状況（南から）　(2)ＳＫ－８５遺物検出状況（南から）
ＰＬ．28　(1)ＳＤ－１９検出状況（北から）　(2)ＳＤ－５９土層断面状況（北から）
ＰＬ．29　(1)ＳＫ－４２蓋石状況（北から）　(2)ＳＫ－４２土壙内状況（北から）
　　(3)ＳＫ－４２土壙掘削状況（北から）　(4)ＳＫ－４２土壙内小口部状況（北から）
ＰＬ．30　(1)ＳＫ－５１蓋石状況（西から）　(2)ＳＫ－５１蓋石状況（南から）
　　(3)ＳＫ－５１土壙内状況（西から）　(4)土壙調査状況（南から）

ＰＬ．31　(1)ＳＫ－５２蓋石状況（北から）　(2)土壙内状況（東から）
(3)土壙内状況（北から）　(4)土壙内堆積土掘削状況（南西から）
ＰＬ．32　(1)ＳＫ－５３蓋石状況（西から）　(2)土壙内床面状況（西から）
(3)土壙内状況（南から）　(4)床面白色粘土状況（東から）

写　真　目　次

表紙　石蓋土壙墓ＳＫ－５１
Ph. 1　調査に参加された方々
Ph. 2　竪穴住居８０，８１調査状況
Ph. 3　溜井０２堆積状況
Ph. 4　合せ口壷棺４４検出状況
Ph. 5　貯蔵穴５５調査状況
Ph. 6　溝４６遺構検出状況
Ph. 7　溝３８遺物検出状況
Ph. 8　溝７０調査状況
Ph. 9　石蓋土壙墓配置状況
Ph. 10　唐木田先生調査風景
Ph. 11　谷頭土層断面状況
Ph. 12　合せ口壷棺４４調査状況
Ph. 13　溝４６遺物出土状況

Ph.1　調査に参加された方々

第１章　はじめに

１．調査組織

田島小松浦遺跡第１次調査　（平成９年度）

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　町田英俊

調査総括　文化財部長　　平塚克則

　　埋蔵文化財課長　荒巻輝勝

　　埋蔵文化財課第１係長　二宮忠司

調査庶務　文化財整備課　内野保基

試掘調査　埋蔵文化財課　中村啓太郎

調査担当　埋蔵文化財課　加藤隆也

田島Ａ遺跡第１次、第２次調査　（平成１０年度）

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　町田英俊

調査総括　文化財部長　　平塚克則

　　埋蔵文化財課長　柳田純孝

　　埋蔵文化財課第１係長　二宮忠司

調査庶務　文化財整備課　木原淳二

試掘調査　埋蔵文化財課　中村啓太郎

調査担当　埋蔵文化財課　加藤隆也

発掘作業員

海津宏子	清原ユリ子	佐藤テル子	柴田常人	中園登美子	西尾タツヨ	土生ヨシ子
船越恒人	細川友喜	堀川ヒロ子	松井フユ子	満田雅子	三好道子	門司弘子
山口タツエ	山田ヤス子	岩見敏子	川嶋ツキエ	山尾タマエ	土生ヒサヨ	鳥井原良治
高橋茂子	原　美晴	加集寛隆	水野由美子	税所道泰	指山歌子	指山浩子
徳永洋二郎	大鶴好子	中山竹雄	平山榮一郎	田中和こ	木田ひろこ	矢野和江
高木美千代	田中　肇	城　容子	古庄孝子	高木章夫	持田純子	坂田邦彦
堀　晴介	村本　剛	小林裕明	坂本俊司	柴田シズノ	西田マキエ	森友ナカ
小金丸ミネ子	黛ツギノ	友池冨美恵	深見佳子	田中弘子	永井大志	

整理作業員

田中克子	尾崎君枝	加集和子	山本良子

２．調査の経過

平成８年７月に土木局から都市計画道路別府香椎線の埋蔵文化財の事前審査についての依頼があり、８月、９月、１１月にそれぞれ試掘可能な地点から調査をおこない。試掘の成果から発掘調査対象地点は３カ所あることがわかった。西側の２地点は福岡市文化財分布地図に記載のない新規の遺跡であるため以前の地図と現在の地形変化から範囲をくくり、字名をとって田島小松浦遺跡とした。今回の調査地点は２地点であるが同じ丘陵の同じ事業であるため併せて第１次調査とした。東側の2,680㎡の地点に関しては一部のみ従来の田島Ａ遺跡内にかかっていたが、試掘の成果から北側へ遺跡の広がりがみられ、範囲の拡大をおこなった。

第２章　遺跡の位置と環境

（１）地形

福岡市の平野部は西南部に位置する油山から北へのび、鴻の巣山（標高100.5m）を中心とする平尾丘陵によって東西に二分され、福岡平野と早良平野と形成する。油山と油山に源を発する樋井川が北流する間にはいくつかの低丘陵が油山山麓から北へのびており、その先端部の河岸段丘の頂部に本遺跡が立地している。博多古図によると現在の大濠から鳥飼にかけては草ヶ江の入海であり、以前北側数百メートルまで湿地がせまってきていたと思われる。つまり、北側に展開する湿地帯とその向こう側の博多湾を眺望できる位置にある。

七隈から飯倉にのびる丘陵上には飯倉Ａ遺跡をはじめ、飯倉Ｂ遺跡、飯倉Ｃ遺跡と連続する丘陵に遺跡が広がっており、対して別府遺跡、茶山遺跡、田島小松浦遺跡、田島Ａ遺跡、田島Ｂ遺跡、田島和尚頭遺跡等点在して小地域のまとまりをみせる。田島周辺は現在では宅地化され視覚的にはわからないが、南北方向に複雑に小さな谷が複雑に入っており、このような地理的条件が遺跡の分布を散漫にさせている。

（２）周辺の遺跡

飯倉遺跡

南北にのびる飯倉丘陵に位置する遺跡群であり、地形の変化から飯倉Ａから飯倉Ｇまでの遺跡が分布する。飯倉Ａ遺跡は１次調査、飯倉Ｃ遺跡は３次調査、飯倉Ｄ遺跡は１次調査、飯倉Ｆ遺跡は３次調査、飯倉Ｇは４次調査、飯倉Ｈ遺跡は２次調査まで計１４カ所の発掘調査がおこなわれている。最も最近の飯倉Ｇ遺跡の第４次調査では、南北方向の丘陵を弥生時代中期の深さ４ｍ以上のＶ字溝で切る遺構がみつかっている。他の調査でみられる集落遺跡は弥生時代から古墳時代にかけてのものが主であり、また古墳の分布も重なっており、干隈古墳群Ａ群から干隈古墳群Ｆ群までにわかれる。

別府遺跡

田島遺跡と同様に南北方向の低丘陵先端の遺跡である。現在第１次調査のみおこなわれており、昭和６１年６月１６日から７月２２日まで調査をおこなった。検出遺構は弥生時代中期の土坑、井戸、古墳時代後期の竪穴住居、中世から近世の溝、掘立柱建物である。

小笹遺跡

樋井川に南面する丘陵尾根の先端部に位置する。小笹団地の造成に伴う調査で、昭和４７年４月１０日から６月３日まで調査をおこなっている。石蓋土壙墓６基、土壙墓、祭祀土壙を検出した。石蓋土壙墓出土の遺物は鉄鏃１点のみで、遺構の時期を直接しめす遺物はほかに出土していない。祭祀遺構の遺物は弥生時代後期のものである。

京ノ隈古墳・遺跡

京ノ隈古墳は４世紀末に位置づけられる割竹形木棺を主体部とする前方後円墳である。京ノ隈遺跡は平安時代末期の経塚である。

1．０１１６元寇防塁
2．０２４０西新町遺跡
3．０２４３飯倉Ｂ遺跡
4．０２４５飯倉Ａ遺跡
5．０２４６飯倉Ｃ遺跡
6．０２５３飯倉Ｆ遺跡
7．０２４４別府遺跡
8．０２４８茶山遺跡
9．２４２４七隈古墳群Ｂ群
10．★２７８４田島小松浦遺跡（今回報告）
11．★０１９９田島Ａ遺跡（今回報告）
12．０２４９田島和尚頭遺跡
13．０２００田島Ｂ遺跡
14．０２０１神松寺遺跡
15．０１９８六本松遺跡
16．０２０２小笹遺跡
17．０２０３長尾遺跡
18．０８５７京ノ隈古墳

Fig. 1　**周辺遺跡分布図(1/25,000)**

Fig. 2　古地図上調査地点(約1/4,000)

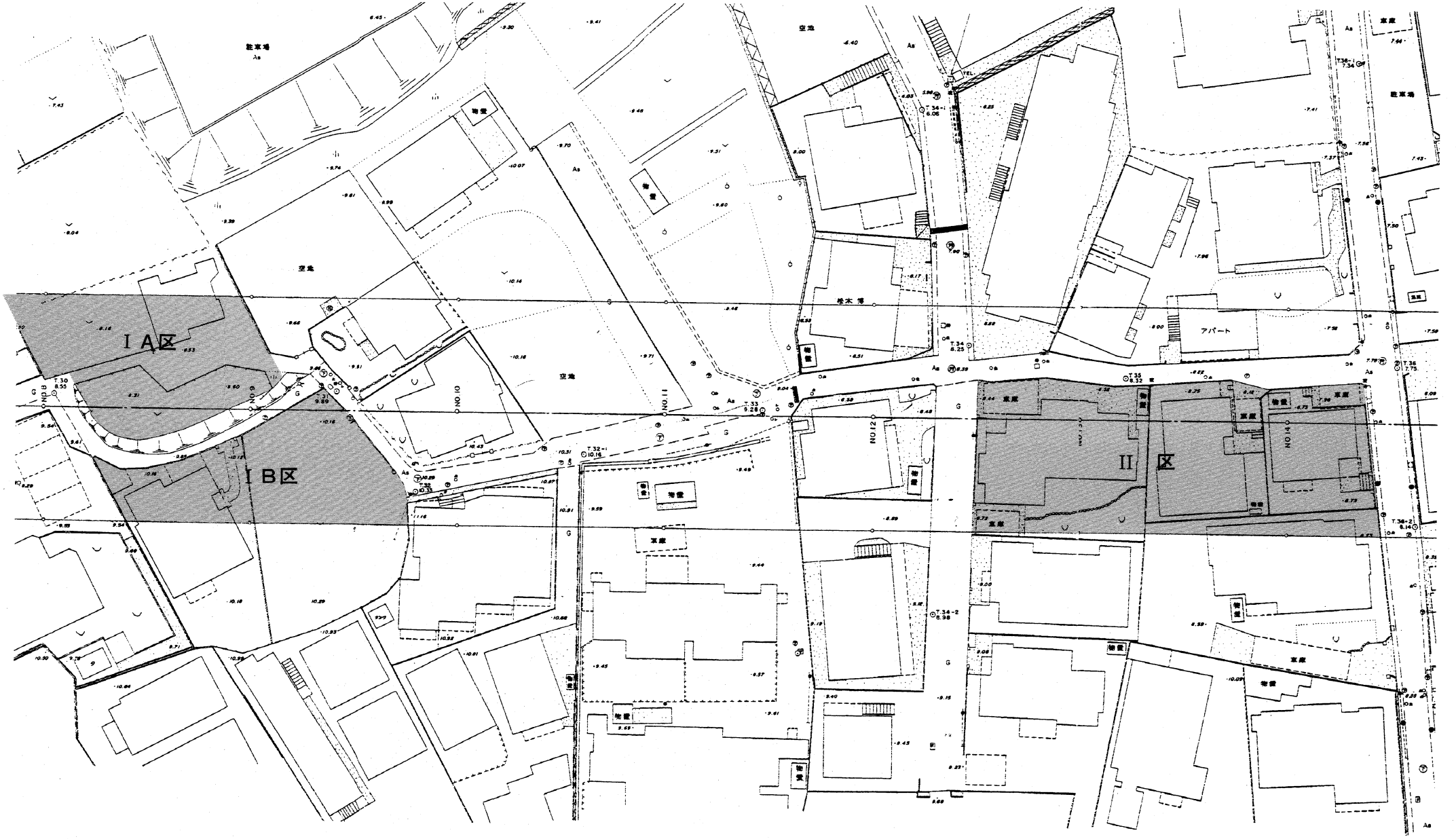


Fig. 3　田島小松浦遺跡調査区位置図(1/500)

第３章　田島小松浦遺跡第１次調査の記録

第１節　ＩＡ地区の調査

１．調査の概要

９８年１月５日プレハブ工事。７日土木局と現地協議。排土の置き場所、障害物、調査範囲の確認をおこなう。８日発掘器材搬入。９日Ｉ区の調査対象地内を東西方向に現行の道路が通っており、閉鎖することができないことがわかり、道路を挟み北側をＩＡ区、南側をＩＢ区とすることとなった。１２日再び現地にて土木局と協議。１４日より表土剥ぎ作業を開始する。１６日バリケード設置。１９日から人力による遺構検出作業を始める。遺構面は風化バイラン土の上面にあたり、北側では現地表から約－３０cm、南側の道路側は道路面が盛り土をしてつくられているため約２m以上の比高差となる。標高は調査区の南東隅が高く8.65mであり北西側に緩やかに低くなり北西隅は7.62mを測る。現況は宅地であったため埋設管や浄化槽等の撹乱が著しい。重機での排土は調査地の東側に出し、作業時にでた排土は西側に積んだ。検出遺構は土坑、柱穴がみられ、古墳時代の遺物片が上面の土層に含まれていた。２月１７日に高所作業車にて全景写真撮影。３月１６日より埋め戻し作業を開始して調査を終了した。

２．検出遺構

ＳＫ－０１（Fig.4、ＰＬ.2）

調査区西側に位置し、撹乱に一部切られる。長軸１０５、短軸７０、深さ５３cmを測る。床面はやや平坦である。覆土は灰茶褐色粘質土であった。地山土と覆土の違いは明瞭であり、覆土もしまっており、何らかの目的で人為的に掘削されたものは明らかであるが、その性格と時代は出土遺物もなく不明である。

ＳＫ－０２（Fig.4、ＰＬ.3）

調査区の西端に位置し、平面楕円形を呈する。長軸１１５、短軸８５，深さ１１cmを測る。覆土は灰褐色粘質土であり、床面は緩やかな船底形を呈する。柱痕跡等はみられない。平面規模に対して遺構の深さが浅く後世の削平が著しいものであったことをうかがわさせる。

ＳＰ－０１（Fig.4）

調査区の南東側に位置する。直径４０cm、深さ２６cmの柱穴である。埋土は暗褐色砂混じり粘土である。柱痕跡は土層面、床面では確認できなかった。壁は直線的に立ち上がり、底はやや平坦である。遺物は土師器の小破片が１点出土している。胎土は均一で細かく、細かい砂粒を含む。埋土は別章でまとめた自然化学分析をおこなった。

ＳＰ－０２（Fig.4）

調査区北側に位置する。直径２５cmほどで平面は不定形である。深さは１１cmであり、底の北側には細い穴みられ、後世木根が遺構を切って生えていたようである。埋土はＳＫ－０２と近似する灰褐色粘質土であった。遺物は土師器の小破片が１点ある。胎土は細かく均一で砂粒はあまりみられない。

その他の遺物

遺構検出時などに採集された遺物には、土師器では厚みのあるやや大きめの甕の破片、片彫りのみ

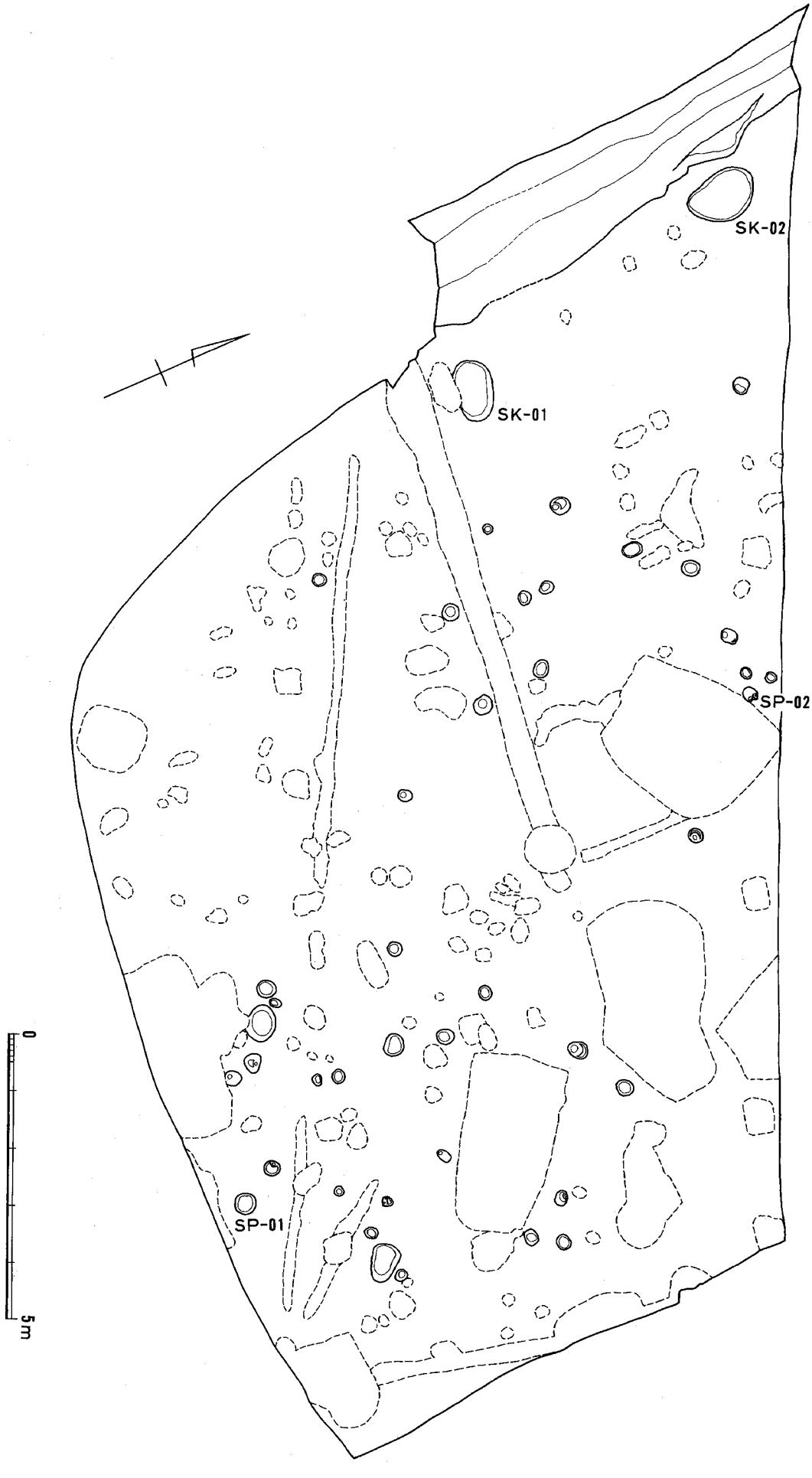


Fig. 4　ＩＡ区遺構配置図(1/100)

られる青磁皿片、陶器片などがみられた。

第２節　ＩＢ地区の調査

１．調査の概要

重機によるＩＡ区の表土剥ぎ作業後すぐにＩＢ区の表土剥ぎ作業にはいった。西側から表土を剥ぎだし、排土は道をこえた西側空き地に積んだ。遺構確認面は現地表土から中央部で90cm、東側で約60cmを測る。地山の上面には10～20cmの暗茶褐色粘質土の遺物包含層が調査区西側を中心にみられた。ただし、この遺物包含層はＩＡ区ではみられなかった。旧地形は東端が最も高く標高9.67mをはかり、西端も9.26mとやや高く、調査区の北側中央部が8.93mを測り最も低くなる。調査区内東側の遺物包含層は上面の堆積土に削られていることから地山面の傾斜はさらにつよいものであったと思われる。検出遺構は柱穴、土坑である。溝状にみられるものは包含層の上面からの掘り込みの緩やかな傾斜をもつものである。

２．検出遺構

ＳＤ－０１（Fig.5）

調査区の東よりにて検出された。遺構の幅は南側調査区壁の観察から約９ｍを測り、遺物包含層の上面から掘り込まれ、地山上で確認された最も深い部分は弧をえがいて西側に緩やかに曲がる。遺構の覆土は灰黄色砂質土である。出土遺物は主に土師器片であるが１点、糸切底の土師器小皿片がみられることから、遺構の掘削時期は中世以降である

ＳＤ－０２（Fig.5）

調査区の西側でみられた。遺構の幅は上記のＳＤ－０１と同じく調査区南側壁の土層観察から約１１ｍを測る。遺構の傾斜も緩やかで、土層の堆積状況からＳＤ－０１堆積以降に掘削されている。遺物は土師器片が数点出土している。遺構の性格はＳＤ－０１もあわせて溝としての掘削ではなく、耕地の縁を画する段のようなものではなかったかと考える。

ＳＫ－０１（Fig.5、ＰＬ.4）

調査区東側にて検出された。平面は長方形を呈し、幅35cm、長さ120cmを測る。底部は北側が一段低くなっており、深さは５０cmを測る。埋土は黒褐粘質土であり、土質はよくしまっている。遺構の壁はほぼ直角に立ち上がる。出土遺物はみられなかった。

ＳＰ－０１（Fig.5）

調査区南壁の際にて検出された。直径は約25cm、深さは30mを測る。南壁の土層では掘り込み面の確認はできなかった。埋土は灰茶色粘質土であった。

ＳＰ－０２（Fig.5）

ＳＤ－０２の掘削下において検出された。直径30cmを測り、深さは21cmである。埋土は暗茶褐色粘質土である。器種は特定できないが土師器片が１点出土している。

表採遺物

主に遺物包含層からの出土遺物である。 **1** は砥石である。 **2** は石鏃。基部を欠くがU字形の抉りが

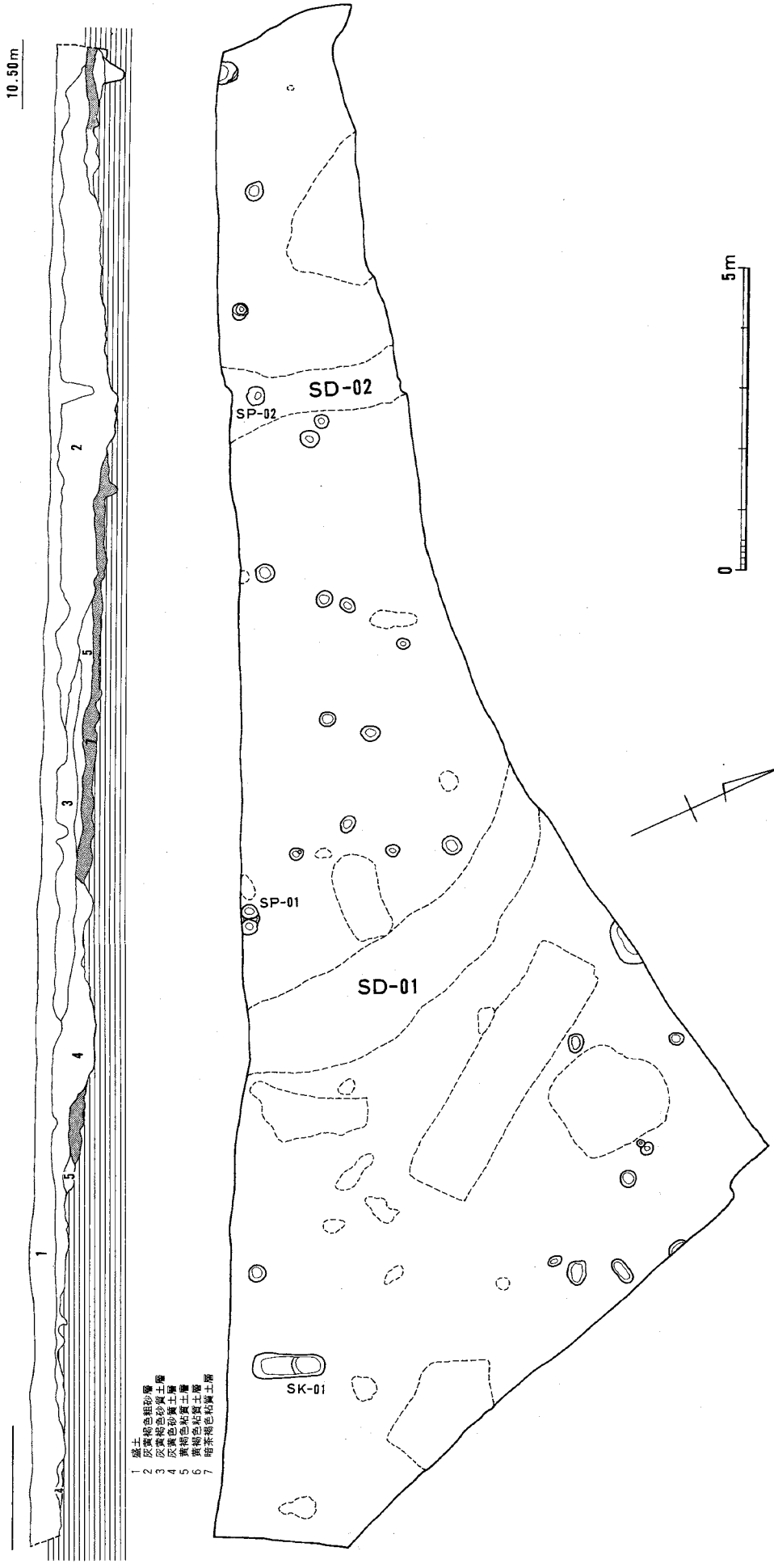


Fig. 5　ＩB区遺構配置図(1/100)

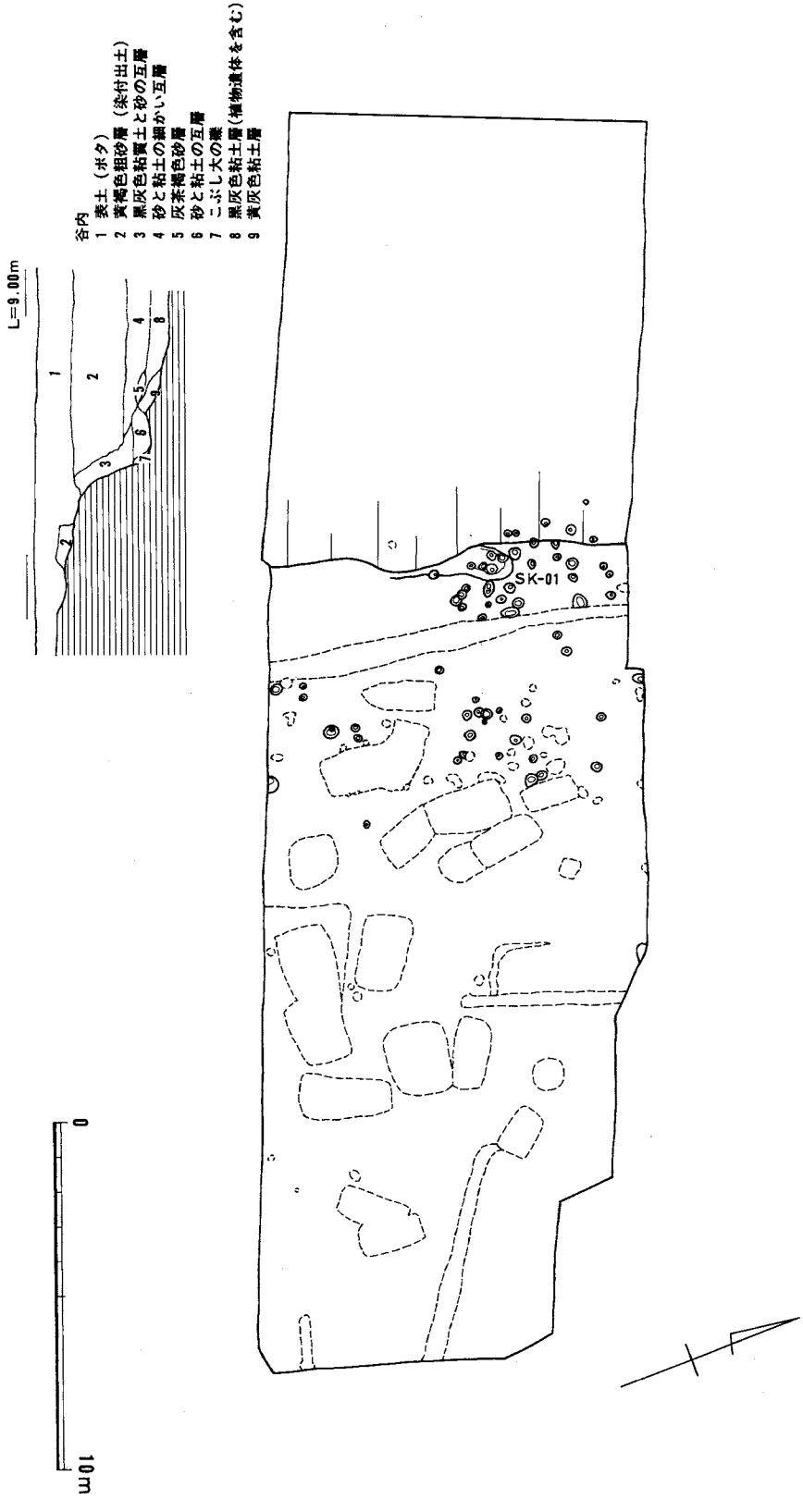


Fig. 6　Ⅱ区遺構配置図(1/100)

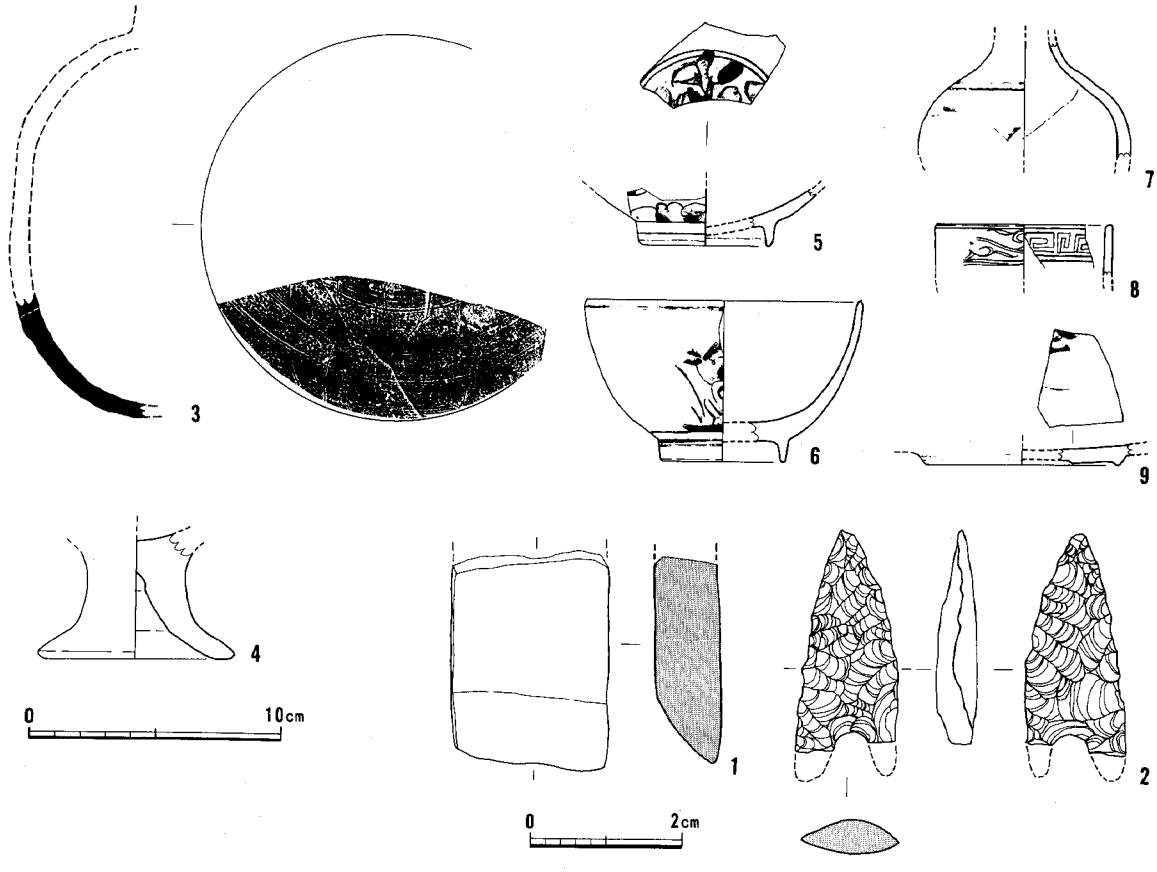


Fig. 7　**田島小松浦遺跡出土遺物(1/3、1/1)**

入り、体部は細身で比較的長い。黒耀石。現存長さ3.0、幅1.3、厚み0.5cm。他に図化できるほど残存が良好ではないがカエリの低い須恵器坏身破片が出土している。

第３節　Ⅱ地区の調査

１．調査の概要

１月２６日からⅡ区の表土剥ぎ作業を開始する。Ⅱ区の調査対象地内の北側にも現行の道路があり、上下水道、ｶﾞｽ管など地下埋設物もあり南側だけの調査をおこなった。試掘の情報として調査区東側は、現地表面より－2.2mまで谷内堆積であることがあらかじめ判っていた。現況は宅地で調査区を通る道路面より約50cm高くなっていたが、すべて宅地化時の盛り土であり、遺構検出面は道路面より約10～20cm下がった風化バイラン土であった。表土剥ぎの結果調査区の西側３分の１は谷状をしていることと、東側Ⅲ分の１は地山が以前はさらに高かったようで遺構は削平のため検出されなかった。よって安定したバイラン土がみられる範囲は幅30mほどで南北方向に現在は埋没してみられないが細かな谷が複数走っていたようである。遺構は谷に向かって傾斜する斜面部にてのみ検出した。１月２９日から手作業による遺構検出をはじめ、地山上の遺構を２月１７日に高所作業車で全景写真を撮り終了し、２月２５日より谷部の調査を開始した。谷の調査は底まで深く、安全のための養生などをとり困難を極めたが、３月１３日に写真撮影をおこない掘削調査を終了した。

２．検出遺構

ＳＫ－０１（Fig.6、ＰＬ.6）

調査区西側、谷の落ち際にあたり、平面は不定形を呈する。床面は緩やかに弧をえがき、壁は緩や

かにひらく。深さは約35cmを測る。水を低地へ落す溝の様相も呈するが、残存が悪く全体が不明なため性格は明確にならない。

出土遺物（Fig.7）　**3** は須恵器提瓶。外面は回転ヘラ削り後、上からカキ目を施す。 **4** は土師器高坏。底径7.8cmを測る。

谷内調査

現地表から－１００cmまでは炭坑のボタで埋めている。その下１５０cmが染付が出土する黄褐色粗砂層であり江戸時代末頃の堆積である。よって江戸末までは高低差は約２m以上あったことになる。その下標高7.5mから約１mが今回調査した中層と下層の部分となる。中層は砂と粘土の細かい互層となっており、水成の堆積であることが解る。下層は黒灰色の粘質土であり、掘削時にも植物遺体が視認できた。図化できたもは上層の遺物であり、中層、下層の遺物は極端に少なく、また小破片である。中層の遺物には白磁、青磁片が瓦の破片と混じって出土した。中層の時代は１２世紀から１３世紀頃があてられ、その後江戸時代の末に大きく埋められ、明治になって炭坑からでるボタにより、完全に谷が埋没したと考えられる。

出土遺物（Fig.7）

5 明代青花碗。連子碗。高台径5.4cm。16世紀前半を主体とする。上層出土。 **6** 肥前系染付丸碗。口径11.0、器高6.4、高台径5.0cm。18世紀後半～19世紀。 **7** 肥前系染付徳利。赤絵。上層出土。 **8** 肥前系染付筒碗。口縁内外にペンシルドローイングにより染付け。口径7.0cm。18世紀後半～19世紀。 **9** 肥前系染付皿。蛇の目凹形高台。高台径7.6cm。18世紀前半頃。

第４節　まとめ

今回の調査により、この周辺の地形は現在では埋没してみられないが南北方向に細い谷が複数通っていることが明らかとなった。それ故に高所部分は、古墳時代に集落として利用されるものの大きく削平されており遺構の残存は悪い。古墳時代の環境は詳しくは自然科学分析の章を参照されたいが大まかには、ススキがはえる比較的に開けた乾いた場所で集落の立地としては良好な場所であったと言えよう。またイネ属の細胞や珪酸体もみられたことから、樋井川周辺やまた別の湿地帯などでは水田を営んでいたと思われる。中世の環境は谷内の土壌分析から、深くて細い谷はやや埋まって東西方向の移動もおこないやすくなっていて、アカマツやクロマツなどがみられる人間の手が入った林であった。現在では樋井川側に約百mよると１３世紀前半を中心とする集落が田島Ａ遺跡として調査されているが、このような集落はそれ以外にもこの周辺に散在したのではないかと考えられる。今回の調査は田島小松浦として第１次調査となったが今後の調査により、この地の利用のされ方や各時代の状況がさらに明らかになることを期待し、今回の成果がそのための足がかりとなれば幸いである。

第４章　田島小松浦遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

田島小松浦遺跡（福岡県福岡市城南区に所在）は、鳥飼平野の南に広がる中位段丘の上位面の春日面上に位置する。春日面は仲原礫層からなる河岸段丘であるが、地形面の開析が進んで痩せ尾根状を呈しており、いくつかの谷底平野が形成されている（唐木田ほか，1994）。今回の発掘調査では、古墳時代の集落跡が確認されている。また中世に埋没したとみられる開析谷も認められている。

今回の自然科学分析調査では、古墳時代および中世頃の古環境に関する情報を得ることを目的として、古墳時代の遺物包含層と遺構埋積物、中世の谷埋積物を対象として珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析をそれぞれ実施する。

１．試料

試料は、古墳時代の遺物包含層から採取された１点（試料番号１）、古墳時代の柱穴状遺構埋積物から採取された１点（試料番号２）、谷埋積物の上層および下層から採取された２点（試料番号３・４）、合計４点である。分析試料の一覧表を表１に示す。

表１　分析試料

試料番号	採取地区	立地	採取層位等	時代性	土質	分析項目		
						D	P	P0
1	ＩＢ区	段丘上	遺物包含層	古墳時代	褐色粘土混じり砂質シルト		○	○
2	ＩＡ区	段丘上	柱穴状遺構埋積物	古墳時代	暗褐色砂混じり粘土			○
3	Ⅱ区	谷	埋積物（上層）	中世	灰オリーブ色粘土混じり砂質シルト	○		○
4	Ⅱ区	谷	埋積物（下層）	中世	暗灰黄色砂質シルト	○	○	○

凡例）Ｄ：珪藻分析　Ｐ：花粉分析　P0：植物珪酸体分析

２．分析方法

（１）珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、K.Krammer（1992）などを用いる。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イ

オン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数が200個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の変遷図を作成する。また、産出する化石が現地性の化石か異地性の化石か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたって、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性についてはK.Asai & T.Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（2）花粉分析

試料を湿重で約10ｇ秤量し、水酸化カリウム処理、篩別（250μm）、重液分離（臭化亜鉛，比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン（-）で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

（3）植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出される植物珪酸体の出現傾向から周辺のイネ科植物相について検討するために、植物珪酸体群集の層位的分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

３．結果

（1）珪藻化石

結果を表２、図１に示す。２試料とも珪藻化石が含まれる。完形殻の出現率は、試料番号４が50%、試料番号３が70%であり、試料番号３の方が化石の保存がよい。両試料の珪藻化石群集は、

表２　珪藻分析結果（1）

種　　類	生態性			環境		
	塩分	pH	流水	指標種	3	4
Nitzschia lorenziana Grunow	Meh			E2	-	1
Nitzschia frustulum (Kuetz.)Grunow	Ogh-Meh	al-bi	ind		1	-
Nitzschia obtusa var. scalpelliformis Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	1
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	1
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	12
Anomoeoneis brachysira (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,T	-	1
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	20	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1
Caloneis hyalina Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	-
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	1
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	16
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	2
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	-	1
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1
Eunotia arcus var. bidens Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	1
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	3	7
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	1
Frustulia rhomboides (Ehr.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P	-	1
Frustulia rhomboides var. saxonica (Rabh.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	1
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	6
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	7	5
Gomphonema pseudosphaerophorum H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	5
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	9	6
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	1	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	16	1
Navicula gibbula Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	27	18
Navicula saxophila Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	1
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	3
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2
Neidium affine (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		-	1
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	12	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		2	4
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	2
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	5	4
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	12
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	7	3
Pinnularia borealis var. scalaris (Ehr.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	2
Pinnularia braunii (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		2	1
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	2
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	19

表２　珪藻分析結果（2）

種　　類	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	3	4
Pinnularia inconstans Mayer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	1
Pinnularia macilenta (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	2
Pinnularia major Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	1
Pinnularia cf. mayeri Krammer	Ogh-unk	unk	unk		-	1
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	1
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1
Pinnularia pisciculus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		-	5
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		1	1
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	32	4
Pinnularia silvatica Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	2
Pinnularia streptoraphe Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	2
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	3	2
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	11
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	4
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	2	-
Stauroneis obtusa Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	23	4
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	6
Stauroneis phoenicenteron fo. gracilis (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1
Stauroneis phoenicenteron var. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	2
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	16	-
Surirella bohemica Maly	Ogh-ind	ind	unk		1	2
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	2
Surirella tenera Gregory	Ogh-hob	ind	l-bi		-	2
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	1
海水生種合計					0	0
海水－汽水生種合計					0	0
汽水生種合計					0	1
淡水－汽水生種合計					2	1
淡水生種合計					206	205
珪藻化石総数					208	207

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
- Meh　:汽水生種
- Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種
- Ogh-hil:貧塩好塩性種
- Ogh-ind:貧塩不定性種
- Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素ｲｵﾝ濃度に対する適応性
- al-bi:真ｱﾙｶﾘ性種
- al-il:好ｱﾙｶﾘ性種
- ind　:pH不定性種
- ac-il:好酸性種
- ac-bi:真酸性種
- unk　:pH不明種

C.R.:流水に対する適応性
- l-bi:真止水性種
- l-ph:好止水性種
- ind :流水不定性種
- r-ph:好流水性種
- r-bi:真流水性種
- unk :流水不明種

環境指標種

E2:汽水泥質干潟指標種（小杉，1988）

K:中～下流性河川指標種　O:沼沢湿地付着生種　P:高層湿原指標種（以上は安藤，1990）

S:好汚濁性種　U:広適応性種　T:好清水性種（以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995）

R:陸生珪藻（RA:A群,RB:B群,RI:未区分陸生珪藻、伊藤・堀内，1991）

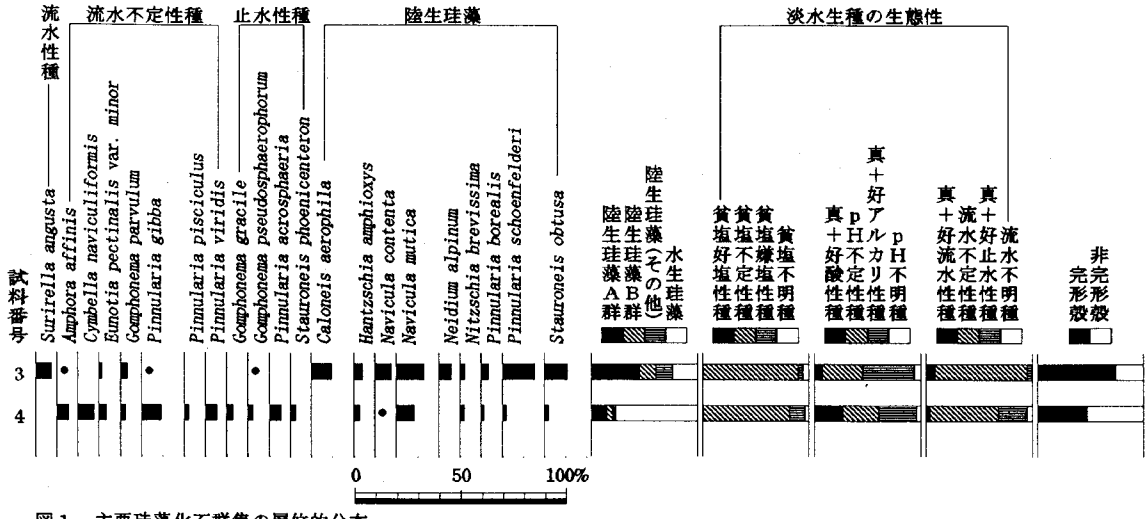


図１　主要珪藻化石群集の層位的分布
海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満の試料について検出した種類を示す。

水域に生育する水生珪藻と陸上の好気的環境に生育する陸生珪藻から構成されるが、その割合は試料により異なる。産出分類群数は、合計で19属70分類群である。

試料番号４は水生珪藻が約70％と優占し、流水域にも止水域にも生育する流水不定性種が優占し、この他に止水域に特徴的な真＋好止水性種が多産する。主な産出種は流水不定性の *Amphora affinis*、*Cymbella naviculiformis*、*Pinnularia gibba*、*P. viridis*、好止水性の *Pinnularia acrosphaeria* である。これらの種の多くは沼沢湿地付着生種群（安藤，1990）とされる。また、陸生珪藻のなかでも耐乾性の強いＡ群（伊藤・堀内，1991）の *Navicula mutica* が約10％産出する。

試料番号３は、陸生珪藻が約70％と優占する。主な産出種は、Ａ群の *Caloneis aerophila*、*Navicula contenta*、*N. mutica*、*Neidium alpinum*、未区分陸生珪藻（伊藤・堀内，1991）である *Pinnularia schoenfelderi*、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻Ｂ群（伊藤・堀内，1991）の *Stauroneis obtusa* である。また、水生珪藻では、流水性の *Surirella angusta* が約10％産出する。

（２）花粉化石

結果を表３、図２に示す。試料番号１では、シダ類胞子が検出されるだけで、花粉化石が全く検出されない。

試料番号４では、花粉化石が比較的良好に検出される。試料番号４で検出される木本花粉の中では、マツ属が約70％出現しており優占する。この他に、ヤマモモ属・クマシデ属－アサダ属・コナラ亜属アカガシ亜属・クリ属－シイノキ属－マテバシイ属・ニレ属－ケヤキ属・ブドウ属などを僅かに伴う。

草本花粉ではイネ科が多産し、オモダカ属・カヤツリグサ科・ホシクサ属・ミズアオイ属・クワ科・ソバ属・キカシグサ属・キク亜科などを伴う。

表３　花粉分析結果

種　類 ／ 試料番号	1	4
木本花粉		
モミ属	-	1
ツガ属	-	2
マツ属	-	172
ヤマモモ属	-	3
クマシデ属－アサダ属	-	11
コナラ属コナラ亜属	-	2
コナラ属アカガシ亜属	-	17
クリ属－シイノキ属－マテバシイ属	-	15
ニレ属－ケヤキ属	-	3
イスノキ属	-	1
カラスザンショウ属	-	1
ニシキギ属	-	1
ブドウ属	-	3
ツバキ属	-	1
ウコギ科	-	1
カキ属	-	1
スイカズラ属	-	1
草本花粉		
オモダカ属	-	2
イネ科	-	506
カヤツリグサ科	-	21
ホシクサ属	-	1
ミズアオイ属	-	4
クワ科	-	21
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	20
タデ属	-	1
ソバ属	-	53
アカザ科	-	4
ナデシコ科	-	10
アブラナ科	-	4
バラ科	-	1
マメ科	-	1
フウロソウ属	-	1
キカシグサ属	-	23
アリノトウグサ属	-	10
セリ科	-	2
オミナエシ属	-	1
ヨモギ属	-	10
キク亜科	-	26
タンポポ亜科	-	11
不明花粉	-	22
シダ類胞子		
シダ類胞子	90	728
合　計		
木本花粉	0	236
草本花粉	0	733
不明花粉	0	22
シダ類胞子	90	728
総計（不明を除く）	90	1697

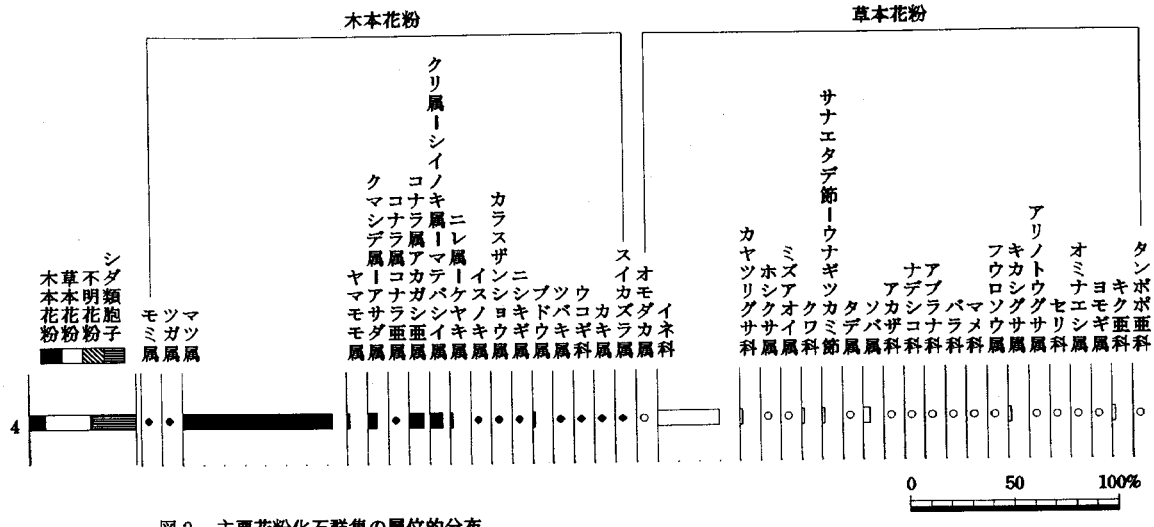


図２　主要花粉化石群集の層位的分布
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は１％未満の試料について検出した種類を示す。

（３）植物珪酸体

結果を表４、図３に示す。試料番号２では、タケ亜科、ウシクサ族ススキ属などが検出されるものの、検出個体数が非常に少ない。

試料番号１では、タケ亜科・ウシクサ族ススキ属が多産し、コブナグサ属・イチゴツナギ亜科を伴う。また、イネ属も僅かであるが検出される。また、近藤・ピアスン（1981）による樹木の葉部内に形成される樹木起源珪酸体の分類で第Ⅲグループおよび第Ⅳグループに属する珪酸体も検出される。

試料番号４・３では、イネ属両珪酸体が高率に出現し、タケ亜科・ウシクサ族が多産する。この他、イチゴツナギ亜科を伴う。また、稲籾に形成されるイネ属穎珪酸体、イネ属の短細胞列や機動細胞列も認められる。この他、樹木起源珪酸体の第Ⅲグループおよび第Ⅳグループに属する珪酸体も検出される。

表４　植物珪酸体分析結果

種　類 ／ 試料番号	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	9	–	101	50
タケ亜科	44	3	32	37
ウシクサ族コブナグサ属	1	–	–	–
ウシクサ族ススキ属	61	4	9	30
イチゴツナギ亜科	6	–	17	17
不明キビ型	47	5	38	52
不明ヒゲシバ型	22	–	4	9
不明ダンチク型	25	3	20	20
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	7	–	42	41
タケ亜科	21	–	17	21
ウシクサ族	42	2	43	22
不明	41	2	20	21
合　計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	215	15	221	215
イネ科葉身機動細胞珪酸体	111	4	122	105
総　計	326	19	343	320
組　織　片				
イネ属穎珪酸体	–	–	3	4
イネ属短細胞列	–	–	13	15
イネ族葉部組織片	–	–	67	40
樹木起源珪酸体				
樹木起源第Ⅲグループ	1	9	–	5
樹木起源第Ⅳグループ	4	6	1	6

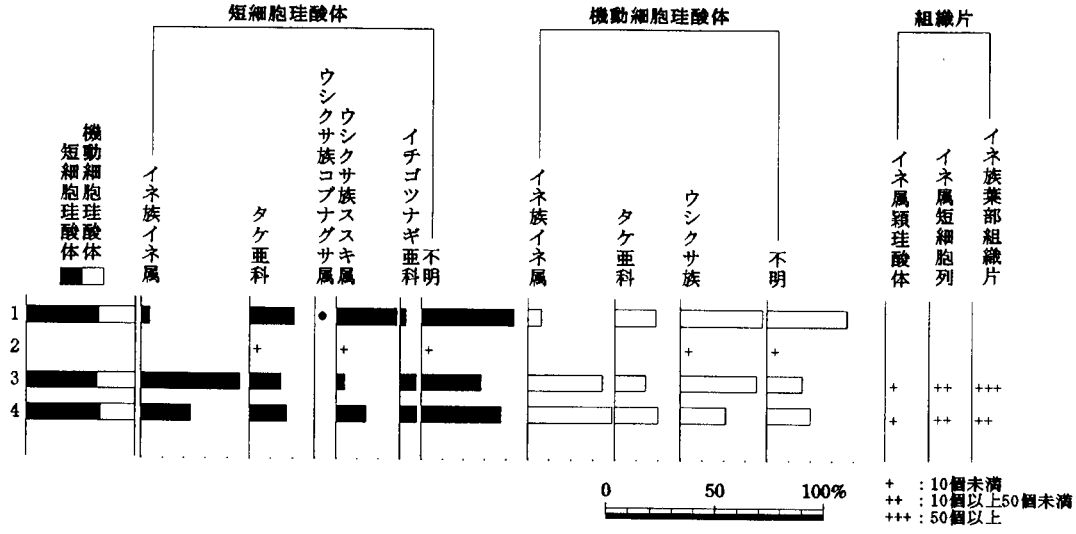


図３　植物珪酸体群集の層位的分布と組織片の産状
　出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++、の記号で示す。

４．遺跡周辺の古環境

（１）古墳時代の古環境

古墳時代の柱穴状遺構内埋積物からは、植物珪酸体がほとんど検出されなかったが、遺物包含層からは多産した。一方、花粉・胞子化石は保存状態が悪く、遺物包含層からシダ類胞子がわずかに検出されただけである。この原因としては、調査地点の立地環境を考慮すると、堆積後の風化作用の影響により分解・消失したことが示唆される。したがって、当時の植生については、植物珪酸体組成に基づいて検討する。

遺物包含層の植物珪酸体組成は、タケ亜科とウシクサ族ススキ属が多産することが特徴である。タケ亜科に含まれるササ類やタケ類は好気的な場所に分布する。ススキ属には乾いた場所に生育するススキのほかに湿地生のオギが含まれるが、植物珪酸体組成において湿地生のヨシ属が全く検出されないことからみて、ススキに由来すると考えられる。したがって、当時の調査地点はススキやササ類などが分布する比較的開けた場所であったことが推定される。

また、植物珪酸体組成には樹木起源の植物珪酸体が認められた。近藤・ピアスン（1981）の分類によれば、今回の珪酸体は第Ⅲグループおよび第Ⅳグループに対比されるものである。第Ⅲグループは維管束細胞の篩部がケイ化したもので大部分の樹木葉部に形成される。イスノキ属の樹木葉の維管束細胞に由来する珪酸体がこの形態と類似するとされている（近藤，1976）。第Ⅳグループは維管束細胞の周辺部に形成されるものである（近藤・ピアスン，1981）。ここでは樹木の種類を特定することはできないが、調査区周辺にはイスノキ属などの暖温帯性の広葉樹が分布

していた可能性がある。このことは、本地域には完新世以降、基本的には暖温帯性の常緑広葉樹林が成立していたと考えられている（畑中，1977；安田，1977；黒田・太田，1978など）ことも調和的である。

本層準からは、栽培植物のイネ属由来の短細胞・機動細胞珪酸体も検出された。出現率が低率であったことや、上記したような環境を考慮すると、調査区内で栽培されていたものではなく、何らかの経路を経て持ち込まれたものと思われる。

（２）中世の古環境

谷埋積物の珪藻化石群集は、中層と下層で異なっていた。下層では、沼よりも浅く水深が１ｍ前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢や、水深の浅い湿地に生育する沼沢湿地付着生種群（安藤，1990）が多産した。これに対して上層では、陸生珪藻が約70％と優占した。陸生珪藻とは好気的な環境の堆積物に繁茂する珪藻である。現在の表層土壌の調査によれば、陸生珪藻が全珪藻化石に占める割合が70～80％以上の場合、その場所は風成堆積した土壌などの好気的な場所であったことを示唆するとされている（伊藤・堀内，1991）。したがって、谷内は、下層が堆積する頃には沼沢～湿地のような湿潤な場所であったが、埋積の進行に伴い次第に離水し、中層が堆積するころには好気的な状態となったことが推定される。

下層の時期の谷内は、草本花粉が多産したこと、その中には水湿地生植物の種類が認められたことから、オモダカ属・ホシクサ属・ミズアオイ属・キカシグサ属などの草本植物を中心とした植生が成立していたと考えられる。また、植物珪酸体において栽培種のイネ属が多産したことから、谷内では稲作が行われていたことが推定される。中層でもイネ属が多産したことから中層堆積期も稲作が行われていたことが推定される。

谷周辺の植生は、木本花粉の中でマツ属花粉が多産したこと、マツ属にはアカマツ・クロマツの２種が知られているがいずれも陽樹であることから、二次林のような性格をもった植生であったことが推定される。また、ヤマモモ属・アカガシ亜属・クリ属－シイノキ属－マテバシイ属・イスノキ属など暖温帯を中心に分布する種類や、カラスザンショウ属・ニシキギ属・ブドウ属・カキ属・スイカズラ属など林縁部など日当たりが良好な場所に分布する種類なども当時の植生を構成する要素であったと思われる。

ところで、完新世後半におけるマツ属花粉の増加現象は日本各地で認められており、九州地方もその例外ではない（中村・畑中，1976：黒田・畑中，1979：Hatanaka，1985など）。本遺跡で捉えられたマツ属花粉の多産も同様な現象に対比されると考えられる。その増加開始時期は各地で異なっており、本地域では少なくとも中世の時期には分布域を広げていたことが推定される。また、マツ属の増加の原因としては、直接的あるいは間接的な人間の植生干渉が著しくなった結果、二次林要素としてマツ類が増加したとする見解が一般的であるが、各地域でその変遷様式は異なっていた可能性が高い。今後、本地域でもこのような視点から植生と、人間活動や自然環境

変化との関係を明らかにしていきたい。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.

K.Asai & T.Watanabe (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

畑中健一（1977）福岡市四箇遺跡の花粉分析学的研究．昭和51年度特定研究「稲作の起源と伝播」，p.25-29.

K.Hatanaka (1985) PALYNOLOGICAL STUDIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WÜRM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University(Series B), 18, p.29-71.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

黒田登美雄・畑中健一（1979）花粉分析よりみた北九州の過去２万年間の植生変遷．花粉，13，p.3-8.

黒田登美雄・太田辰夫（1978）福岡市天神地域の後期更新世－完新世堆積物の花粉分析学的研究，その１．第四紀研究，17，p.1-14.

近藤錬三（1976）樹木起源の珪酸体について．ペドロジスト，20，p.176-189.

近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報）　双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について．帯広畜産大学研究報告，12，p.217-229.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

K.Krammer (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p.1-353., BERLIN・STUTTGART.

K.Krammer & H.Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

K.Krammer & H.Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae, Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

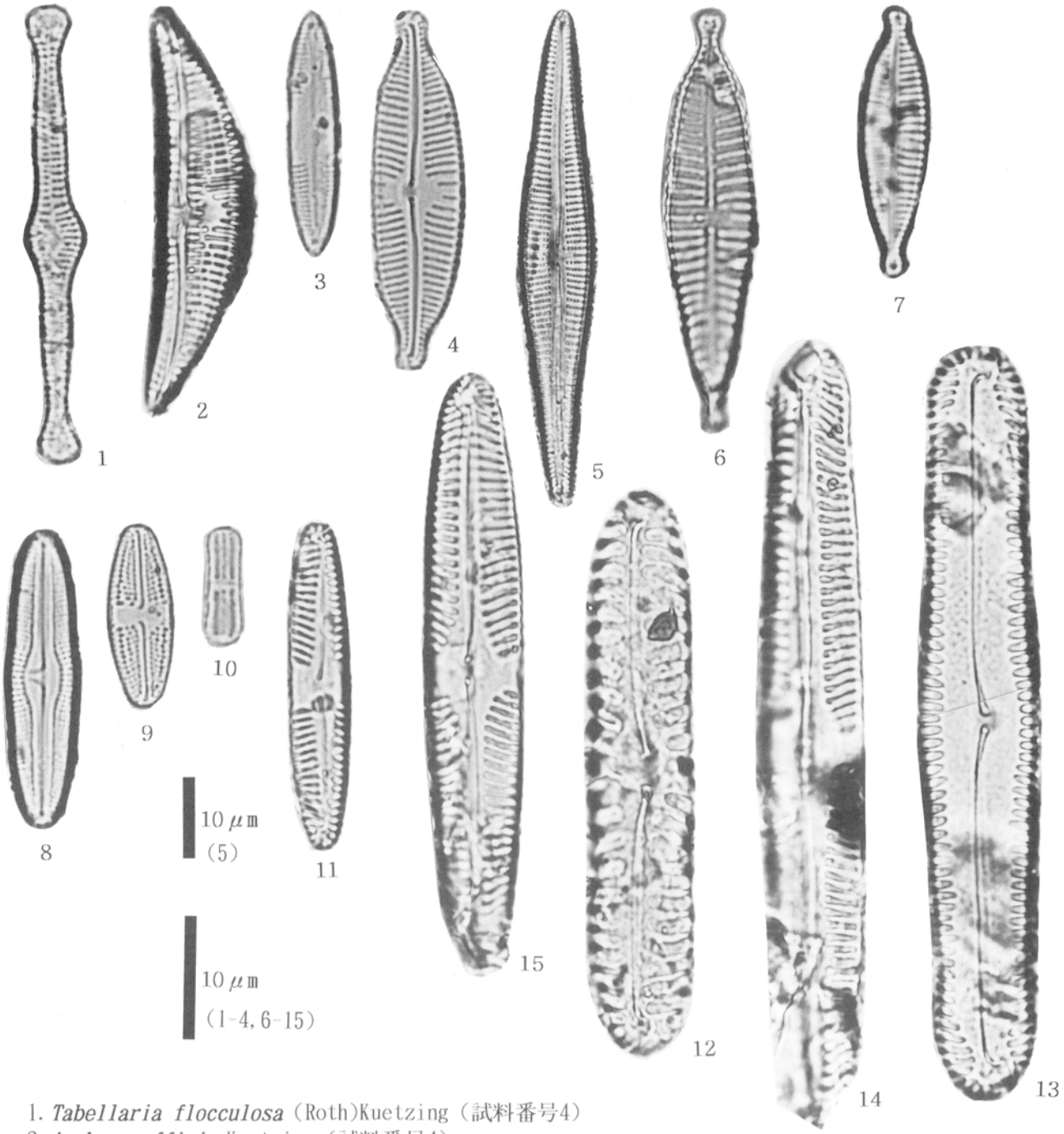
K.Krammer & H.Lange-Bertalot (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae, Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

K.Krammer & H.Lange-Bertalot (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

中村　純・畑中健一（1976）板付遺跡の花粉分析学的研究．福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集「板付　－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書　1971～1974－」，p.29-42，福岡市教育委員会.

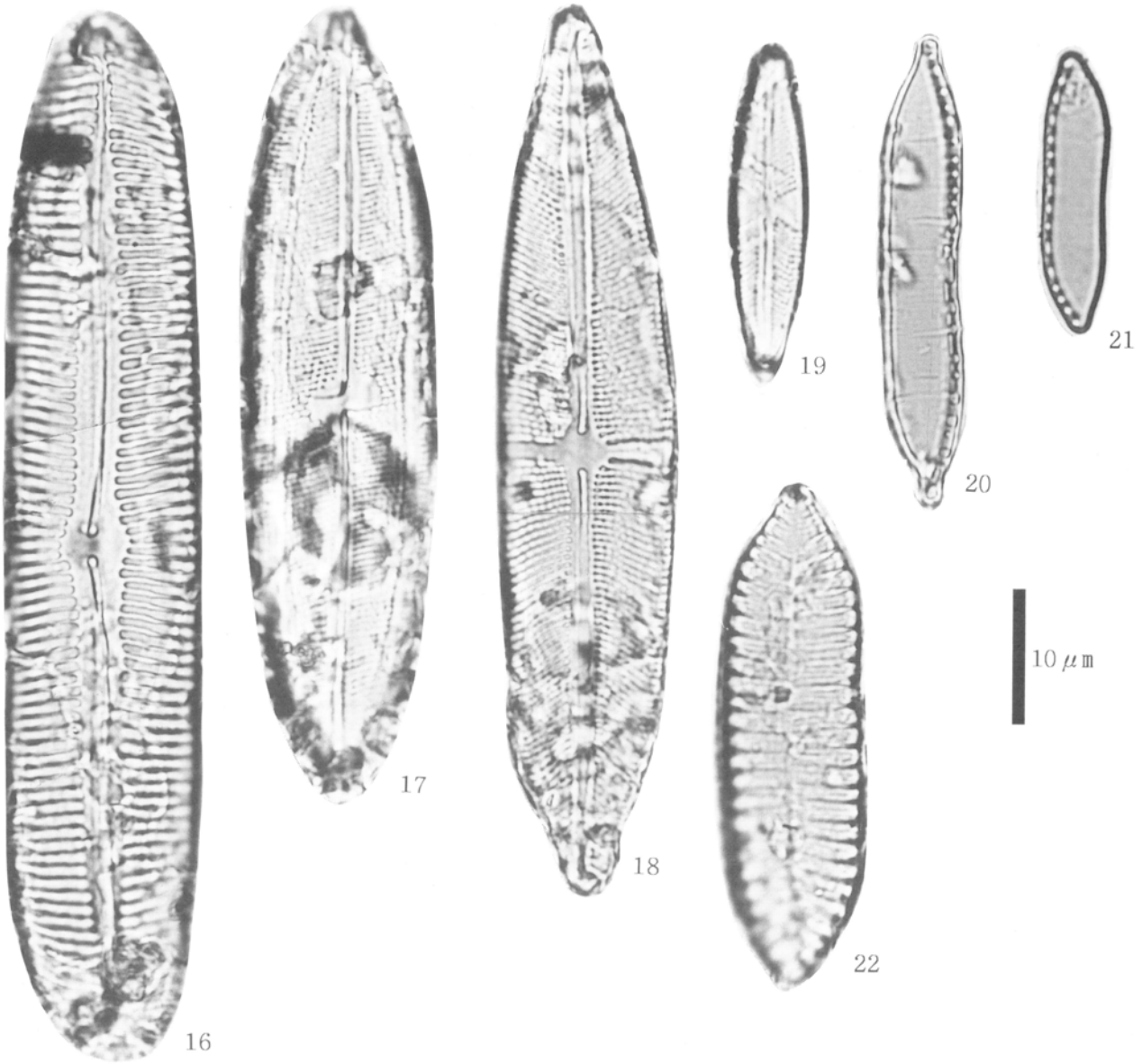
安田喜憲（1977）北九州における２・３の遺跡の泥土の花粉分析．昭和51年度特定研究「稲作の起源と伝播」，p.11-24.

図版１　珪藻化石（１）



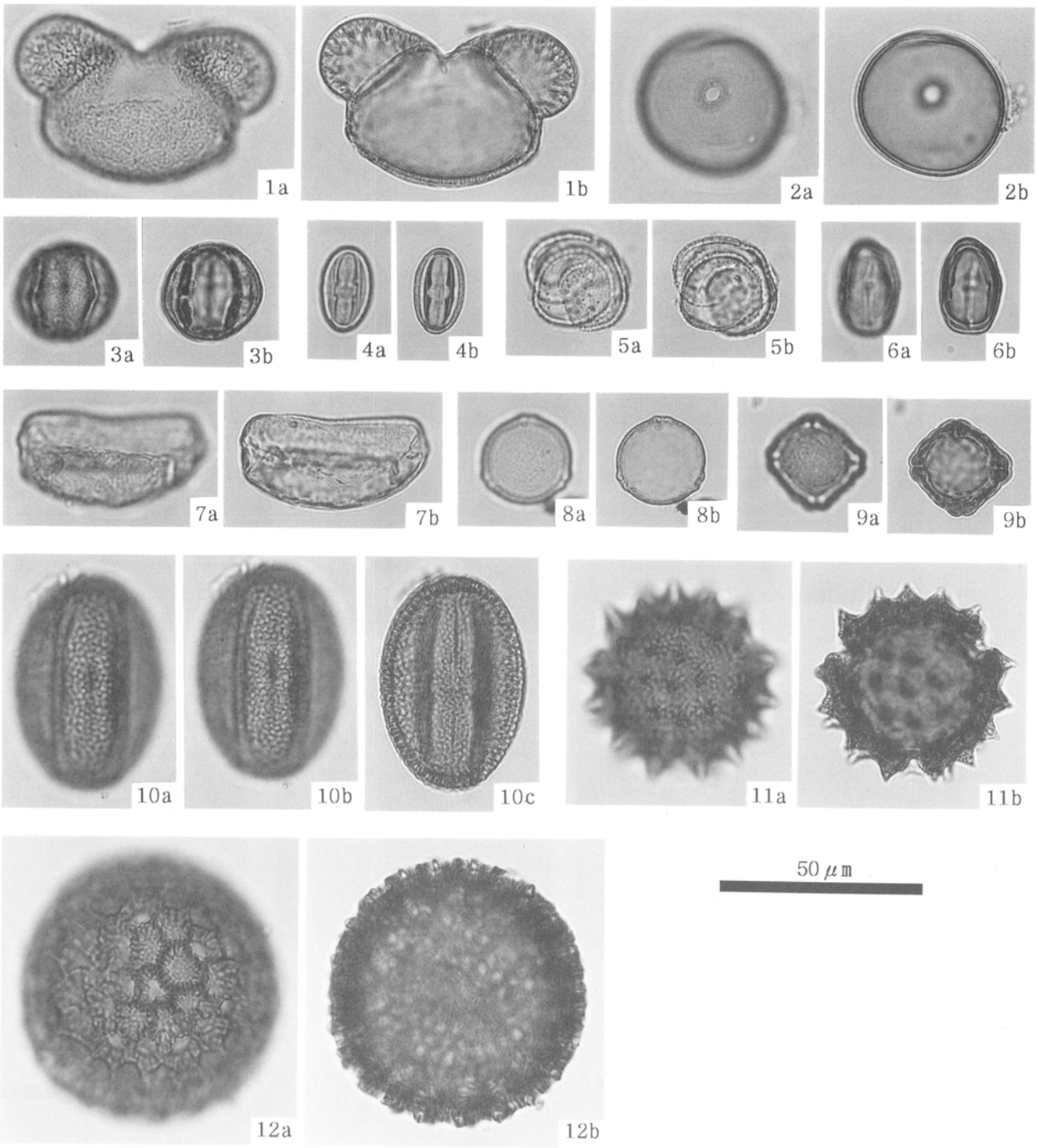
1. *Tabellaria flocculosa* (Roth)Kuetzing（試料番号4）
2. *Amphora affinis* Kuetzing（試料番号4）
3. *Caloneis aerophila* Bock（試料番号3）
4. *Cymbella naviculiformis* Auerswald（試料番号4）
5. *Gomphonema gracile* Ehrenberg（試料番号4）
6. *Gomphonema sphaerophorum* Ehrenberg（試料番号4）
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing（試料番号3）
8. *Navicula gibbula* Cleve（試料番号3）
9. *Navicula mutica* Kuetzing（試料番号4）
10. *Navicula contenta* Grunow（試料番号4）
11. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer（試料番号3）
12. *Pinnularia borealis* Ehrenberg（試料番号4）
13. *Pinnularia acrosphaeria* W.Smith（試料番号4）
14. *Pinnularia gibba Ehrenberg*（試料番号4）
15. *Pinnularia substomatophora* Hustedt（試料番号4）

図版２　珪藻化石（２）



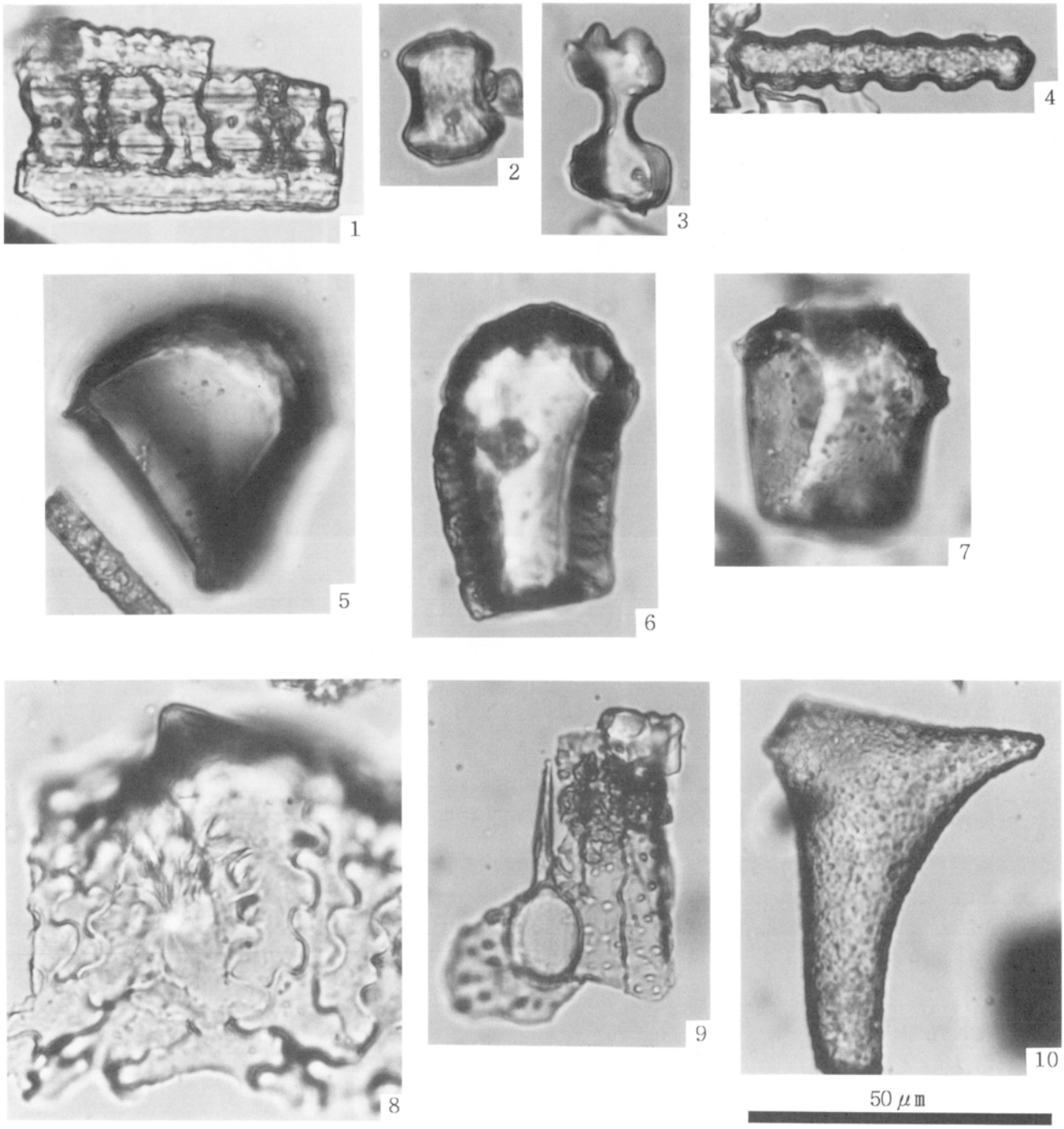
16. *Pinnularia viridis* (Nitz.)Ehrenberg（試料番号4）
17. *Neidium ampliatum* (Ehr.)Krammer（試料番号4）
18. *Stauroneis phoenicenteron* var. *hattorii* Tsumura（試料番号4）
19. *Stauroneis obtusa* Lagerst（試料番号3）
20. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow（試料番号3）
21. *Nitzschia brevissima* Grunow（試料番号3）
22. *Surirella angusta* Kuetzing（試料番号3）

図版３　花粉化石



1. マツ属(試料番号4)
2. イネ科(試料番号4)
3. コナラ属アカガシ亜属(試料番号4)
4. クリ属－シイノキ属－マテバシイ属(試料番号4)
5. ホシクサ属(試料番号4)
6. キカシグサ属(試料番号4)
7. ミズアオイ属(試料番号4)
8. クワ科(試料番号4)
9. アリノトウグサ属(試料番号4)
10. ソバ属(試料番号4)
11. キク亜科(試料番号4)
12. サナエタデ節－ウナギツカミ節(試料番号4)

図版４　植物珪酸体



1. イネ属短細胞列（試料番号3）
2. タケ亜科短細胞珪酸体（試料番号3）
3. ススキ属短細胞珪酸体（試料番号4）
4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（試料番号1）
5. イネ属機動細胞珪酸体（試料番号3）
6. タケ亜科機動細胞珪酸体（試料番号3）
7. ウシクサ族機動細胞珪酸体（試料番号4）
8. イネ属穎珪酸体（試料番号3）
9. イネ族葉部組織片（試料番号3）
10. 樹木（第Ⅲグループ）珪酸体（試料番号4）

第５章　田島Ａ遺跡第１次、第２次調査の記録

１．調査の概要

１９９７年度の田島小松浦遺跡の調査から翌９８年度の田島Ａ遺跡第１次の調査にうつり、調査を４回の排土繰り替えに分け９９年２月まで調査をおこなった。それ以外に道路建設に伴い自動販売機の移動による調査が発生したが調査面積が狭小で、調査にかかる期間が短期間であるため遺跡確認調査のため調査をおこない第２次調査とした。

第１期の調査は中央部から東に向けて約半分の表土剥ぎ作業を４月６日から始めた。遺構は現地表面から約30～40cm剥いだローム層上面にて検出された。この年の春から夏にかけて雨が多く作業ができない日が数日あった。主な遺構は竪穴住居、掘立柱建物、柱穴、溝、土坑、土壙などであり、特に地形的に高い西側の遺構密度は濃い。磁北に沿うように溝がはしり、あわせて掘立柱建物、木棺墓、竪穴状の遺構など中世の集落がみられた。しかし、台地の幅が狭く水源が近くにあったせいか井戸はみられなかった。６月５日には笹丘小学校の生徒が現地見学に訪れる。６月１２日に高所作業車で全景写真撮影を行い６月２２日から埋め戻し作業と第２期調査区の表土剥ぎ作業を開始した。

第２期は調査区東端の調査であり、東に向け緩やかに傾斜しており遺構の残存も良好であった。遺構は地表土下５０～100cmの西側に比べればやや深いレベルで検出された。北東の一角は大きく四角に削られており、周辺に住まわれている老人の話では昭和になって土取りをおこなったという話を聞いた。昭和のはじめ頃の地図でもこの凹みはなく矛盾しない。検出遺構は弥生時代前期の貯蔵穴、古墳時代の石蓋土壙墓、竪穴住居、溝、やや大きめの掘りかたをもつ古代の柱穴、谷頭と思われる堆積がみられる部分もあった。９月１１日より埋め戻し作業にはいった。この年の夏は暑い日が続き調査に参加した作業員や学生も体力的に苦しいものであった。

第２期の調査の後半、田島A遺跡第２次調査をおこなった。幅２ｍの調査であったが、石蓋土壙墓、貯蔵穴など多くの良好な遺構を検出した。土地所有者の黨克己氏には文化財調査に対するご理解とご協力をいただいた。

第３期の調査は作業用のプレハブを調査区外に移転し、中央部から西に向けて調査をおこなった。用地の買収が一部遅れており、西端の部分を残して調査を進めた。遺構面は地表下30～50cmのローム層上でみられ検出作業を行った。主な遺構は古墳時代の竪穴住居、中世の集落にともなう溝、掘立柱建物、墓などであった。第１期調査区と接している部分が最もレベル的に高くなり、そこが最も遺構の密度が高い。ただ、弥生時代の遺構は斜面部だけに限られ、古墳時代の遺構が少なく、残存が悪いことは中世までに高所が大きく削られたことが窺われる。１０月１５日から１６日は大型台風がきて調査区は水浸しとなる。１１月２０日夜、泥棒が事務所の１階小窓から入り、水中ポンプ２個とコードリールを盗まれる。１２月９日高所作業車で全景写真撮影。埋め戻しはせず調査区を引き渡して調査終了。

第４期調査は西端部だけを調査した。年がかわり９８年１月６日より表土剥ぎ作業に入る。地山はローム層であるが西側に向け傾斜がやや急になっている。その上面に20～30cmの遺物包含層が確認でき、含まれる遺物量が多いことから人力による掘削を行った。検出遺構は柱穴、溝などで密度はやや薄くなるが、遺構の残存は良好である。主な遺構の時代は中世であり、弥生時代から古代の遺構は他の部分に比べ著しく薄い。２月４日は雪であったがこの日から埋め戻し作業を始め調査を終了した。

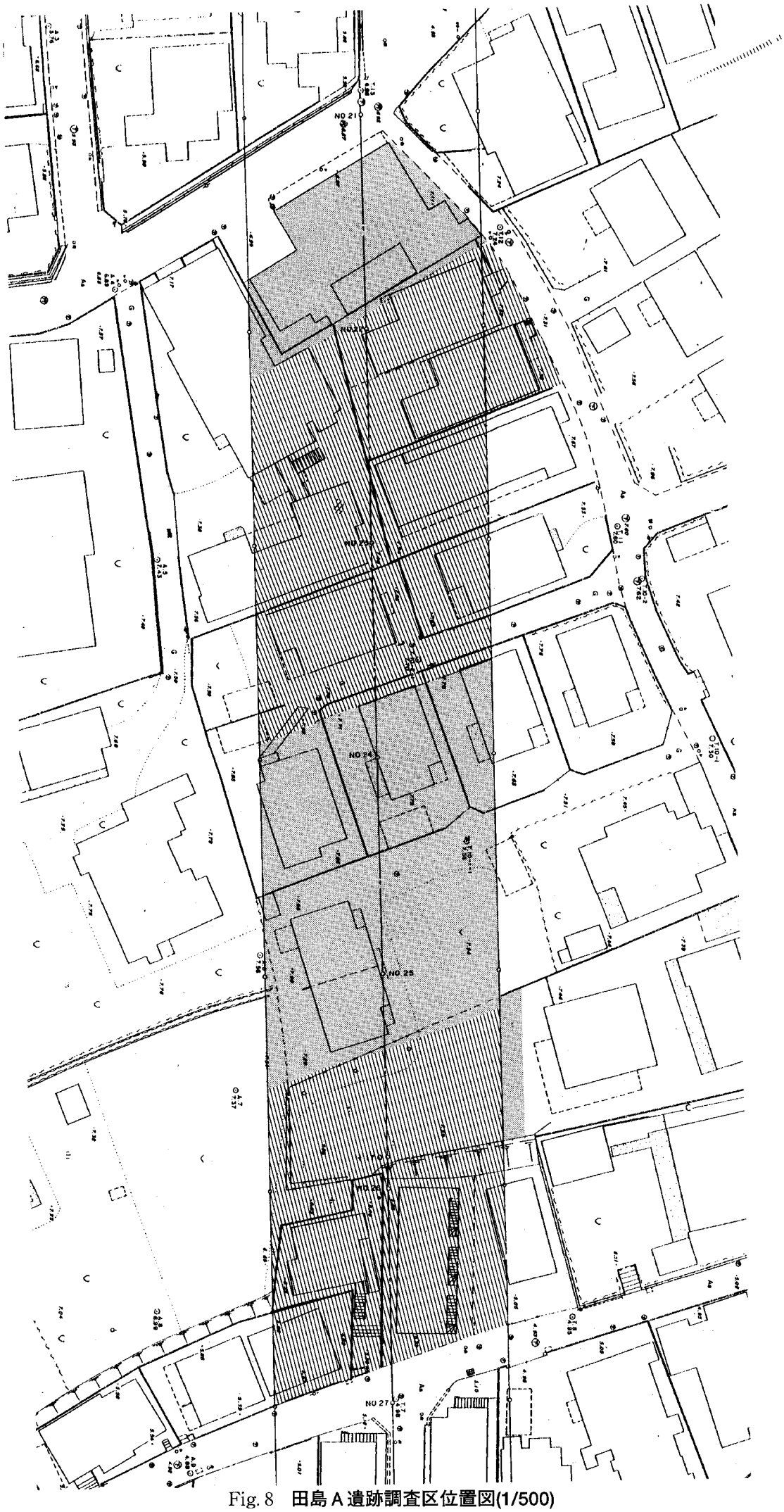


Fig. 8　田島Ａ遺跡調査区位置図(1/500)

Fig.9 田島A遺跡遺構配置図(1/500)

G
H
I
J
K
L
7.25m
7.00m
6.75m
6.75m
6.50m
4.75m
5.00m
6.25m
6.00m
5.75m
5.50m
5.25m
SK-07
SK-06
SP-128
SK-08
SB-04
SP-272
SP-441
SD-19
SK-16
SK-18
SB-05
SK-22
SK-24
SK-23
SP-213
SK-45
SK-44
SK-11
SK-23
SK-10
SC-26
SP-544
SK-20
SK-12
SP-682
SK-21
SD-46
SK-51
SD-48
SK-52
SK-25
SD-47
SP-1853
SD-38
SK-29
SK-28
SK-31
SC-27
SK-50
SD-49
SK-37
SK-34
SK-55
SP-100
SK-39
SK-42
SK-41
SC-35
SC-36
SK-43
SK-33
0
10
20m

2．検出遺構

竪穴住居（ＳＣ）

ＳＣ－２６(Fig.10、ＰＬ.12)

Ｉ－２にて検出され、ＳＫ－２５に切られる。東西3.0m、南北2.9mを測る方形の竪穴住居である。残存深さは45cmを測る。東壁中央部には掘り込みのカマドがみられる。四隅の近くに柱穴があり、幅約10cmの周壁溝がカマド部以外にめぐる。カマドに使われていた白色粘土の残存が良好な部分もみられたが、床面上にも粘土塊が散っていた。

出土遺物(Fig.12) **1** 土師器甕。口縁内面の屈曲明瞭。外面ハケ目調整、内面口縁下手持ちヘラ削り。カマド出土。 **2** 土師器甕。口縁内面の屈曲明瞭。外面縦方向ハケ目調整、内面口縁下手持ちヘラ削り。口径28.2cm。(SK-025出土のものと接合)遺構の時期　図示した甕が古代か古墳のものか不明。SC-025と切り合っており、遺物がどちらに従属するのかは不明。

ＳＣ－２７(Fig.10、ＰＬ.13)

Ｉ－３、Ｊ－３にて検出された。長軸4.6m、短軸3.3mを測る長方形の竪穴住居である。残存は悪く、最も深いところで約10cmであった。南壁の西よりに土坑がつくられる。主柱穴は不明である。

出土遺物(Fig.13) **11** 土師器甕。口縁の屈曲は明瞭、わずかに内湾気味で端部をつまみ出す。口径18.0cm。 **12** 土師器甕。口縁はわずかに内湾気味で端部をつまみ出した名残が若干認められる。口径12.8cm。 **13** 土師器甕。口縁は真っ直ぐ外方にのびる。なで肩。磨滅著しく調整不明。口径19.6cm。 **14** 土師器二重口縁壺。 **15・16** 土師器高坏坏部。磨滅著しく調整不明。口径18.6cm。 **17・18** 土師器高坏脚。いずれも下位で一旦屈曲する。**18**は屈曲した部分に四ヶ所穿孔あり。磨滅著しく調整不明。底径11.4cm。 **19** 土師器鼓形器台。内外面横ナデ調整。くびれ部分上下に突帯あり。底径17.0cm。 **20** 鉄製品。不明。遺構の時期は古墳時代初頭と考える。

ＳＣ－３５(Fig.10、ＰＬ.14)

Ｊ－３，Ｋ－３にて検出された方形の竪穴住居である。東西2.4mを測り、残存する深さは25cmである。南側は調査区外にのびる。四隅近くに柱穴があることから４本柱であると考えられる。

出土遺物(Fig.12) **3** 土師器坏蓋。器高低く、口縁端部は短く立つ。磨滅著しく不明瞭であるが天井部外面は回転ヘラ削りと思われる。口径15.6cm。 **4** 土師器高台付き皿。高台断面は四角形を呈する。磨滅著しく調整不明。高台径18.2cm。　遺構の時期は8世紀前半から中頃と思われる。

ＳＣ－３６(Fig.10、ＰＬ.14・15)

Ｋ－３にて検出された。方形の竪穴住居であり、東西1.3mを測り、南西角は調査区外にのびる。残存深さは25cmである。主柱穴は４本で、建て替えが２回以上おこなわれたと考えられ、柱穴が複数かさなる。中央部の50×100cmの範囲は被熱して赤化しており、西側には直径45cmの範囲に炭化物が集中する部分がみられる。

出土遺物(Fig.12) **5** 須恵器鉢。外面下位にカキ目を施す。 **6** 土師器高坏脚。内面は横、外面は縦方向の手持ちヘラ削り。 **7** 土師器把手。遺構の時期は8世紀前半から中頃と考えられる。

ＳＣ－８０(Fig.11、ＰＬ.15)

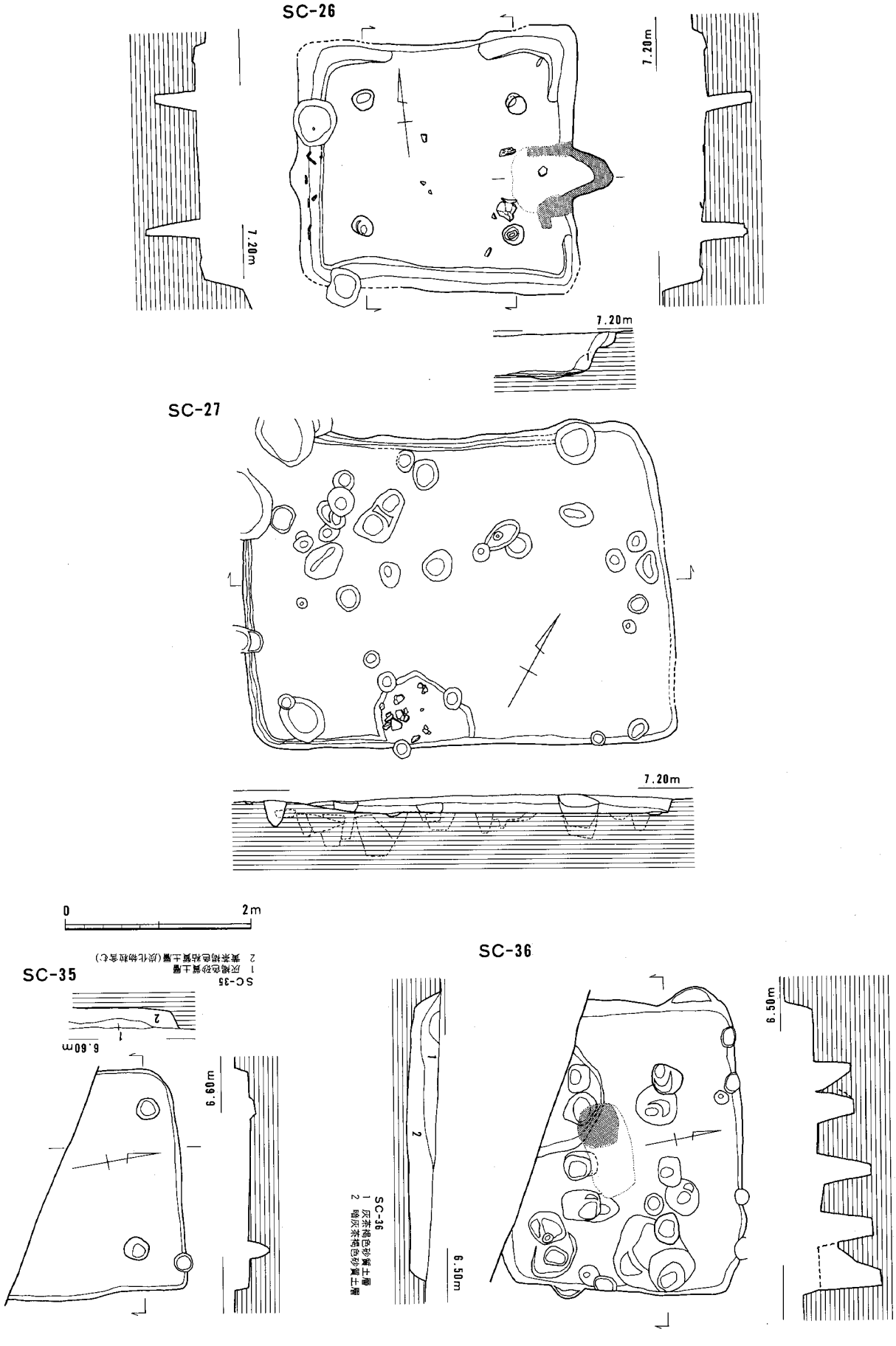


Fig.10 竪穴住居（ＳＣ）－２６,２７,３５,３６実測図(1/40)

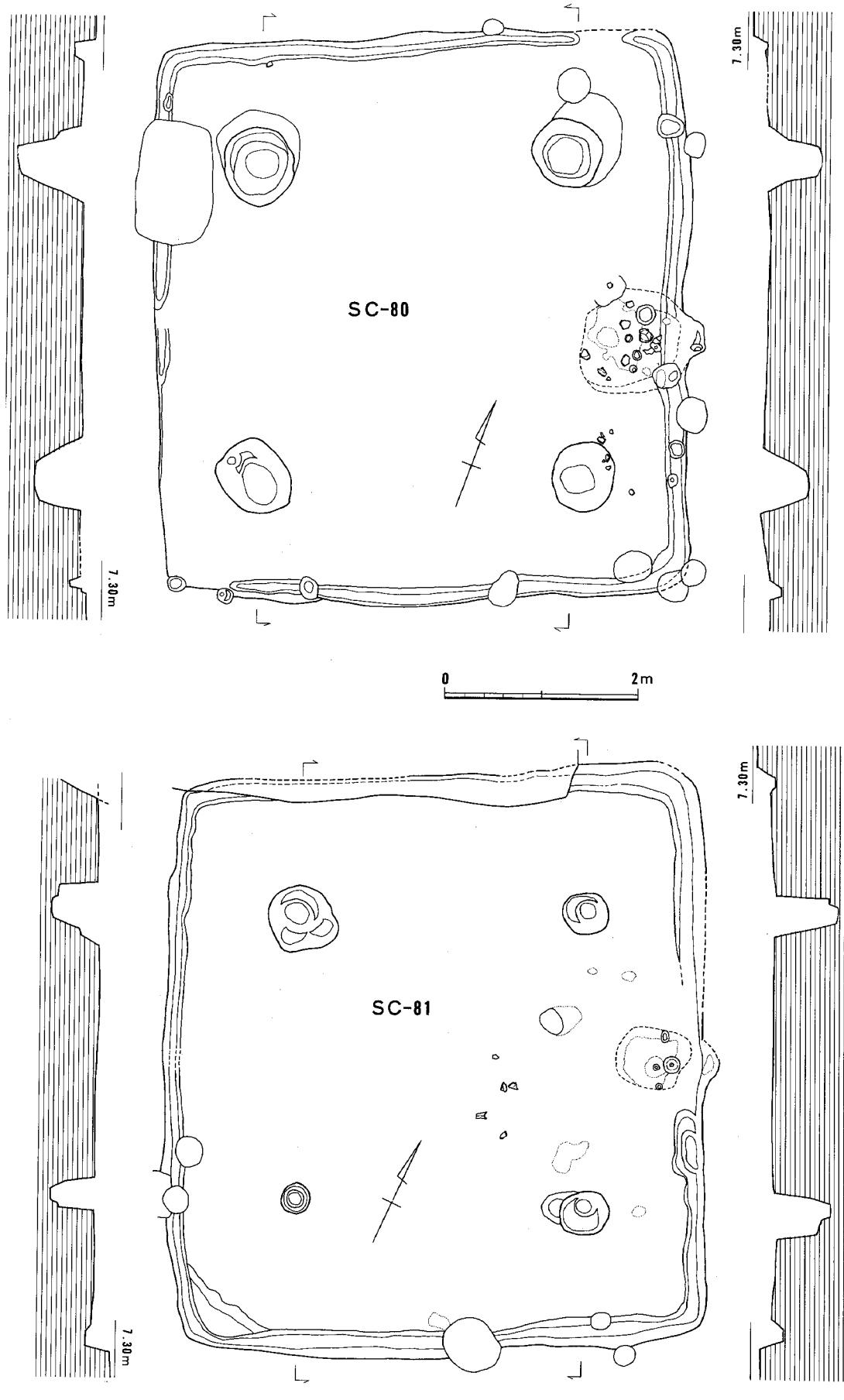


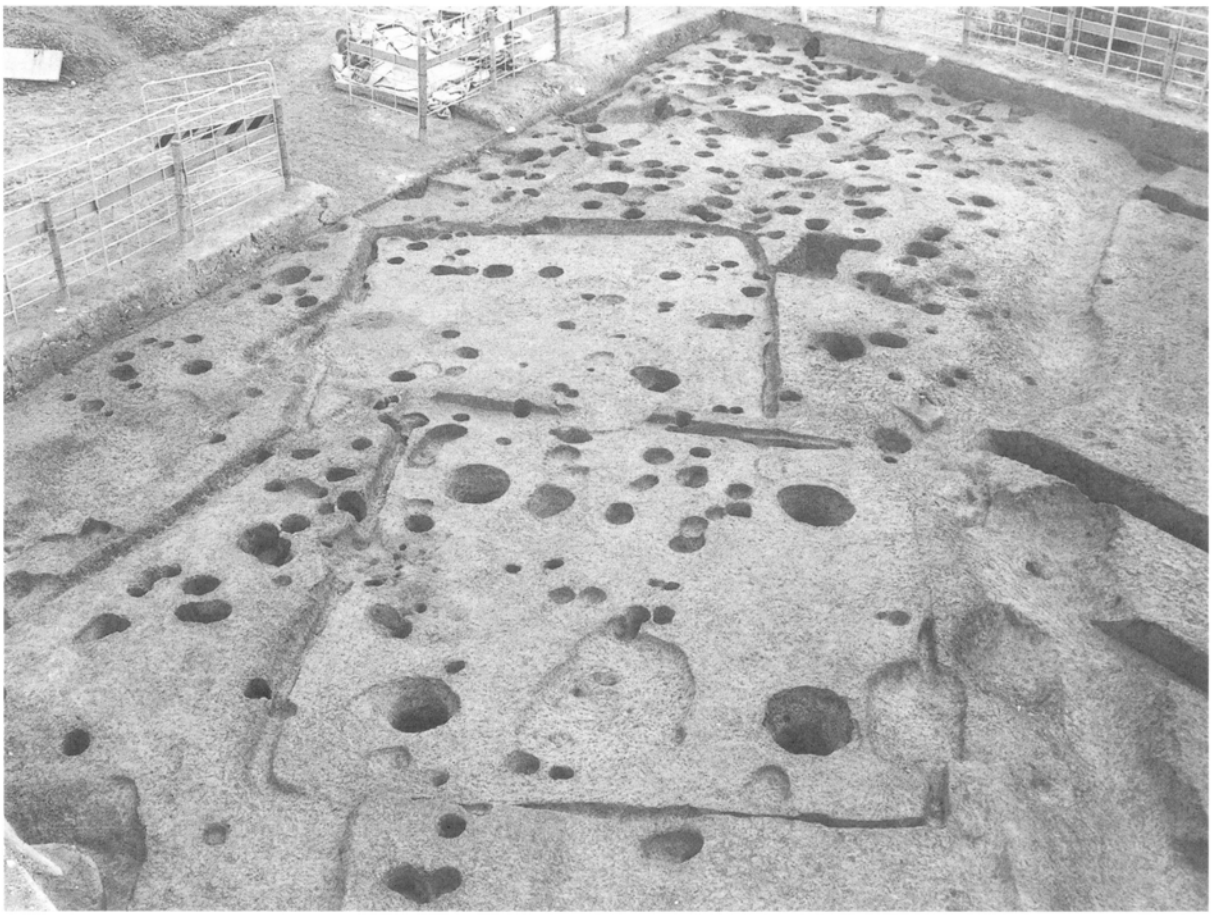
Fig.11 竪穴住居（ＳＣ）－８０,８１実測図(1/40)

Ｅ－２、Ｆ－２にて検出された。方形の竪穴住居であり、ＳＣ－８１を切る。5.9×5.4mのプランを測り、残存は悪いが北東壁にカマドがみられる。カマド部は床面に対して約20cm深くなっており、被熱のため地山が赤色化している。白色の粘土塊がみられた。主柱穴は４本であり、堀方は直径70cm前後と大きく、深さも48～65cmと深い。幅約20cmの周壁溝がまわる。

出土遺物(Fig.12) **8** 土師器高坏。坏部は一旦屈曲して外反、屈曲部には段が付く。脚部も下位で一旦屈曲し、屈曲部のやや上方に三ヶ所穿孔あり。坏部内外面かなり精緻なヘラ磨き、脚部は外面に一部ハケ目が残る。口径18.0cm。6世紀後半頃か。 **9** 土師器高坏。中位に不明瞭な段が付く。内外面磨滅顕著だが、外面下位にカキ目が残る。口径15.2cm。 **10** 土師器高坏脚。大きく外反する。内外面磨滅著しく調整不明。底径14.8cm。遺構の時期は6世紀後半頃と思われる。

ＳＣ－８１(Fig.11、ＰＬ.15)

Ｆ－２、Ｆ－３にて検出された。方形の竪穴住居であり、ＳＣ－８０に切られる。6.0×5.5mのプランであり、北東壁のほぼ中央部にカマドが付く。ＳＣ－８０とは規模、方向、カマドの作り方など酷似しており、住居の造り替えとおもわれる。ただし、残存は良好ではないが、確認できた範囲では埋土の中にブロック状の堆積や地山土がみられないことから、ＳＣ－８１の積極的な埋め戻しはおこなわれなかったと考えられる。切り合いからＳＣ－８０より古いが、プランが酷似することから連続してつくられたと考えられる。



Ｐｈ．２　　竪穴住居８０，８１調査状況

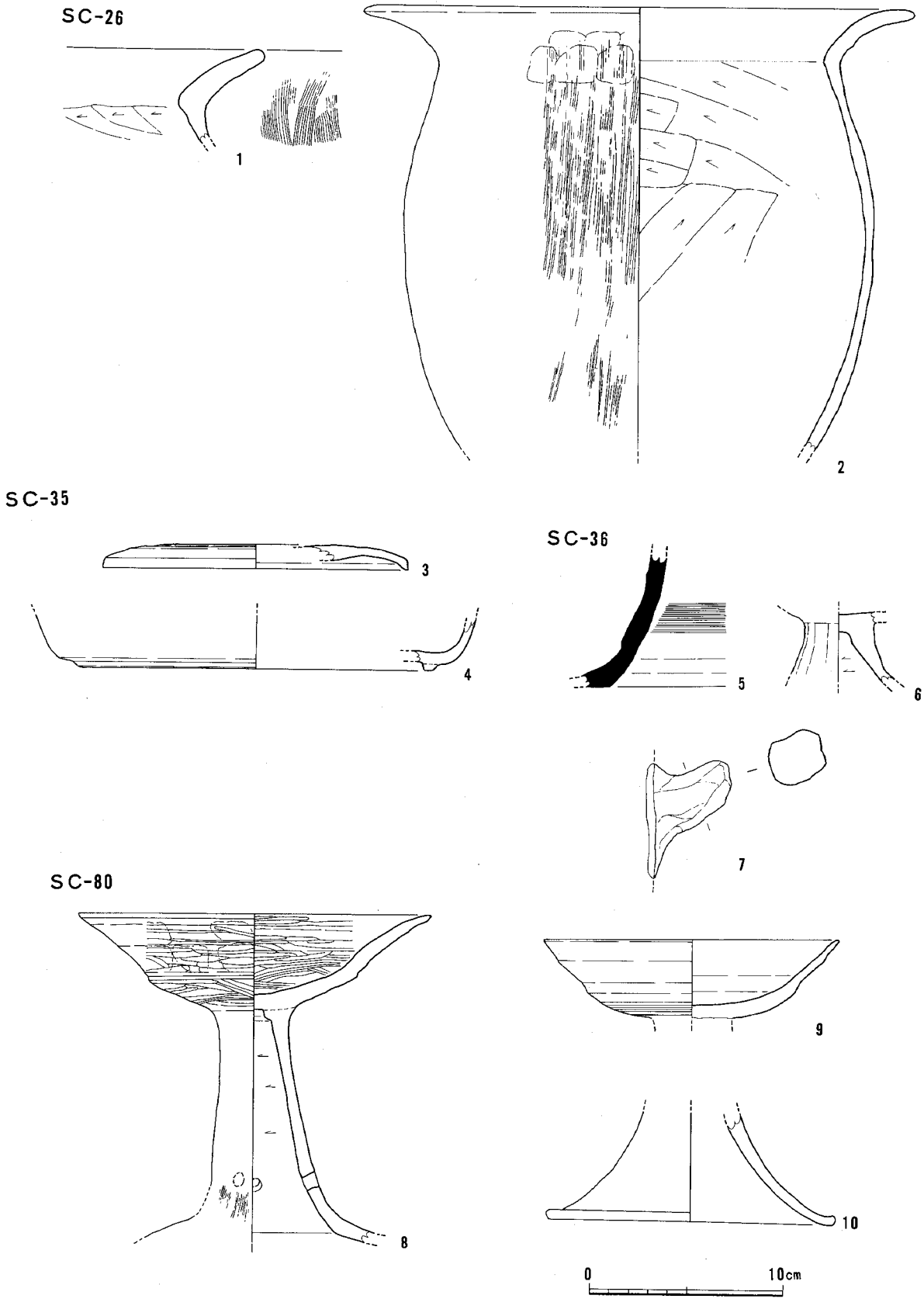


Fig.12 竪穴住居（ＳＣ）出土遺物実測図１(1/3)

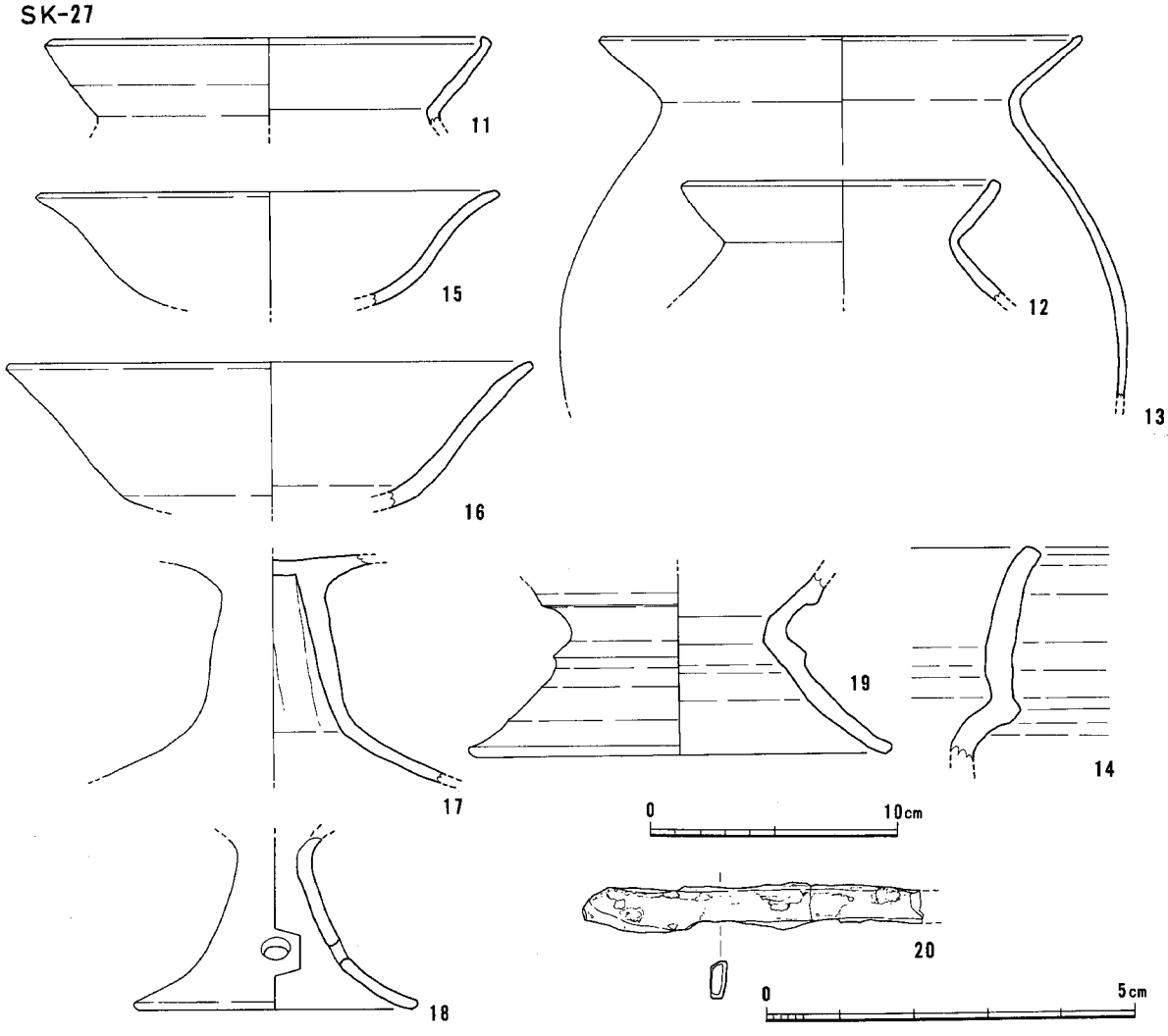


Fig.13 **竪穴住居（ＳＣ）出土遺物実測図２(1/3、1/1)**

掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ－０１(Fig.14)

Ｇ－２にて検出された。方位はほぼ磁北にそう。梁行２間×桁行３間以上であり、調査区北側にのびる。梁行の全長3.3mを測る。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30～60cmを測る。建物の内側にＳＫ－０７がちょうど位置するが、ＳＢ－０１とＳＫ－０７がセットになる積極的なデータは遺物や層位からは得られなかった。

出土遺物(Fig.18) **21** 土師器椀。胎土はかなり白っぽくきめ細かい。口縁は玉縁状に若干肥厚する。口径10.4cm。SP018出土。遺構の時期は中世の範疇に含まれるものと思われる。

ＳＢ－０２(Fig.14)

Ｇ－２，Ｇ－３にて検出された。梁行２間×桁行４間であり、梁行の全長2.4m、桁行全長3.9mを測り、面積約９㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径20～40cmを測る。

出土遺物(Fig.18) **22** 土師器小皿。外底部糸切り。口径7.6、器高0.8cm。SP-074出土。 **23** 土師器小皿。底部糸切りか。口径7.8、器高1.2cm。SP-392出土。 **24** 土師器小皿。底部糸切り。口径8.4、器高1.1cm。SP-367出土。 **25** 土師器小皿。底部糸切り。口径8.6、器高1.1cm。SP-350出土。 **26** 土師器小皿。底部

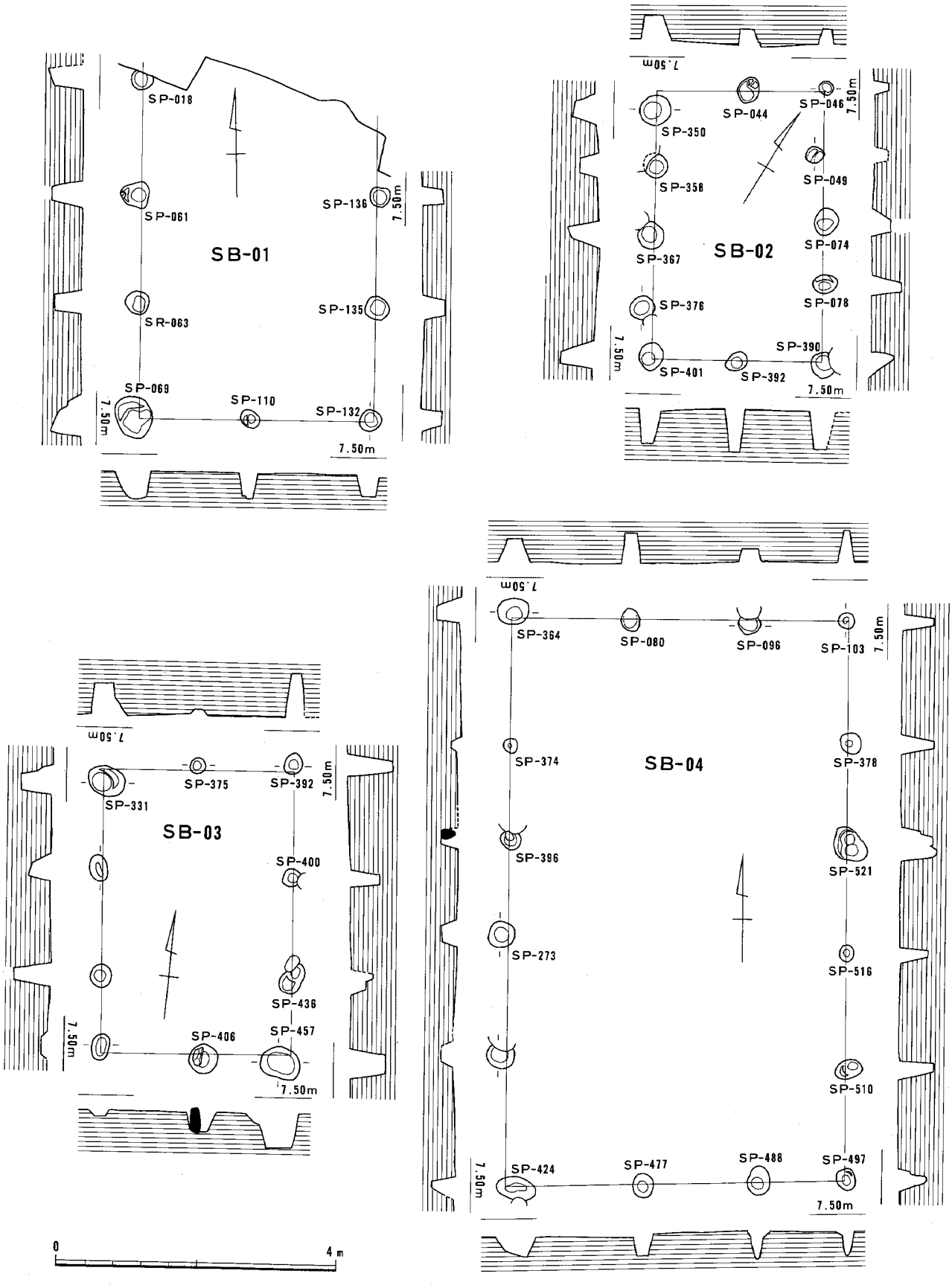


Fig.14 掘立柱建物（ＳＢ）－０１,０２,０３,０４実測図(1/80)

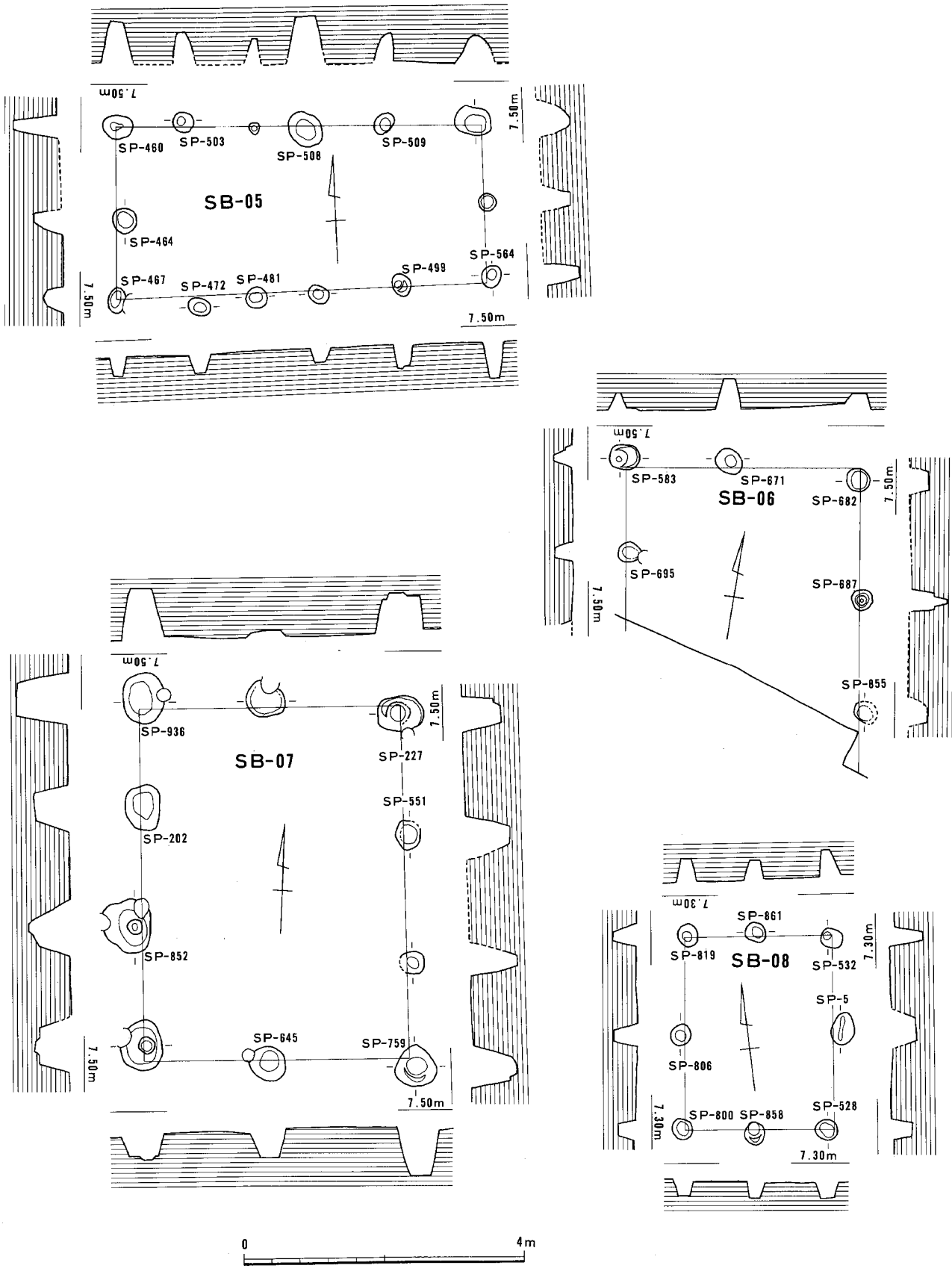


Fig.15 掘立柱建物（ＳＢ）－０５,０６,０７,０８実測図(1/80)

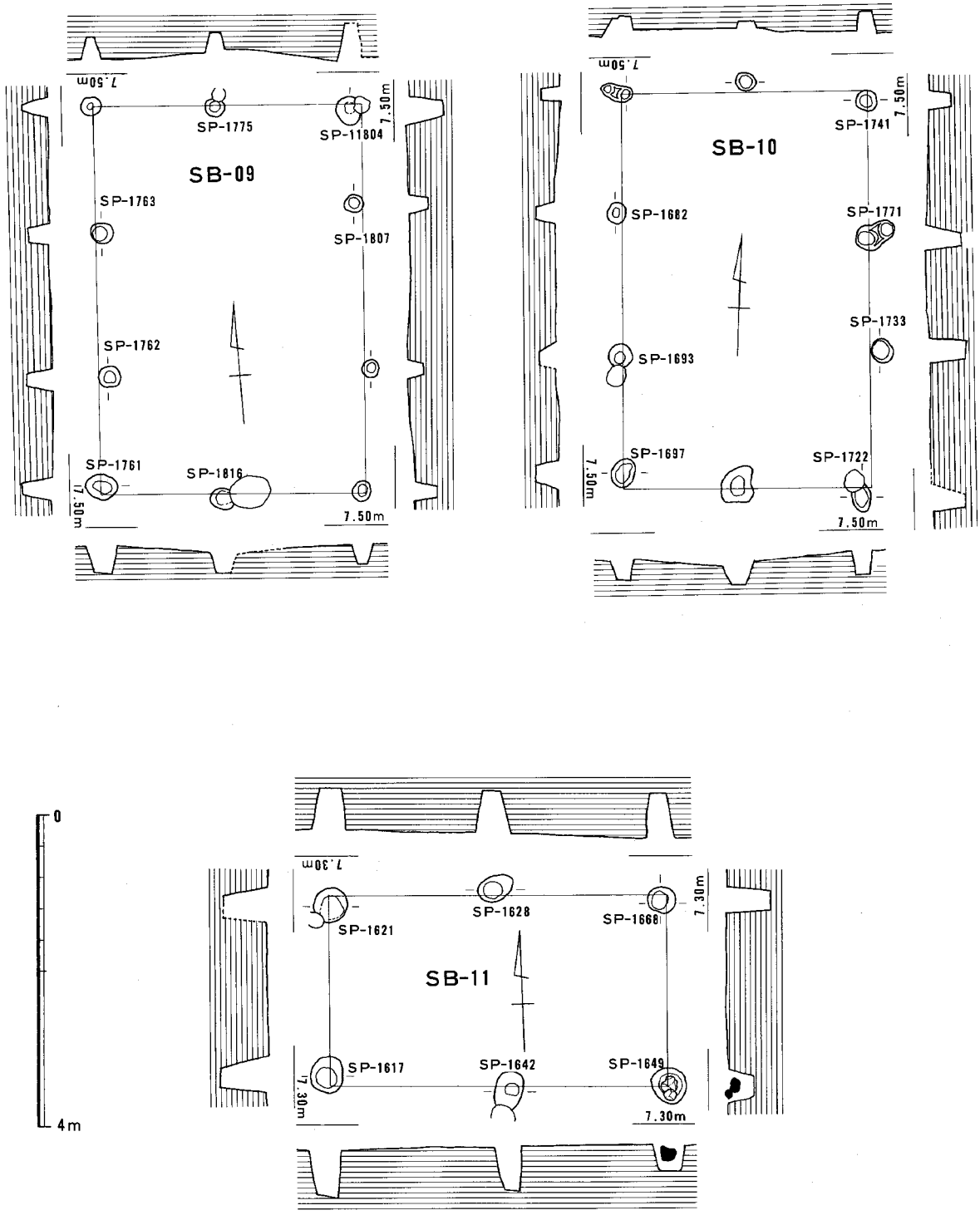


Fig.16 掘立柱建物（ＳＢ）－０９,１０,１１実測図(1/80)

糸切り。口径9.7、器高1.0cm。SP-392出土。 **27** 土師器小皿。底部糸切りか。口径9.2、器高1.0cm。SP-350出土。 **28** 土師器小皿。底部糸切り。口径9.6、器高1.1cm。SP-401出土。 **29** 土師器椀。高台径5.2cm。SP-367出土。 **30** 瓦器椀。口縁内面に沈線が巡る。内面はかなり精緻なヘラ磨き。畿内系か。SP-401出土。 **31** 瓦器椀。内外面の磨きは雑で、特に外面は磨きと磨きの間の空隙が多い。口径18.0cm。SP-350出土。遺構の時期は同安窯系青磁が出土していることから12世紀後半代以降と思われる。

ＳＢ－０３(Fig.14)

Ｇ－３にて検出された。梁行２間×桁行３間であり、梁行の全長2.7m、桁行全長4.1mを測り、面積約11㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径20～60cmを測る。南側の中央柱穴だけに裏ゴメの石がみられた。

出土遺物(Fig.18) **32** 土師器小皿。外底部糸切り。口径9.4、器高1.2cm。SP-331出土。遺構の時期は同安窯系青磁が出土していることから12世紀後半代以降と思われる。

ＳＢ－０４(Fig.14)

Ｇ－２，Ｇ－３，Ｈ－３にて検出された。方位はほぼ磁北にそう。梁行３間×桁行５間であり、梁行の全長4.9m、桁行全長8.2mを測り、面積約40㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径20～40cmを測る。西側の一穴にのみ裏ゴメの石がみられる。残存深さは10～45cmである。

出土遺物(Fig.18) **33** 土師器小皿。外底部糸切り。口径8.6、器高1.0cm。SP-103出土。 **34** 土師器小皿。底部糸切り。口径8.8、器高1.1cm。SP-521出土。 **35** 土師器小皿。底部糸切り。口径8.6、器高1.1cm。SP-521出土。 **36** 土師器小皿。底部糸切り。口径9.0、器高1.1cm。SP-378出土。 **37** 高台付き土師器小皿。底部糸切りか。口径8.4、器高1.8(皿部1.1)、高台径6.0cm。SP-521出土。 **38** 土師器坏。底部糸切り。口径15.6、器高2.6cm。SP-273出土。 **39** 白磁平底皿Ⅵ類。口径10.4、器高2.6、底径4.4cm。SP-273出土。 **40** 同安窯系青磁皿。口径11.0cm。SP-521出土。　遺構の時期は土師器の法量と、同安窯系青磁が出土していることから13世紀前後から前半代と考えられる。

ＳＢ－０５(Fig.15)

Ｇ－３，Ｈ－３にて検出された。桁行の方位はほぼ磁北に直交する。梁行２間×桁行５間であり、梁行の全長2.3m、桁行全長5.2mを測り、面積約12㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径20～50cmを測る。残存深さは20～60cmである。

出土遺物　遺構の時期は龍泉窯系青磁、同安窯系青磁が出土していることから12世紀後半代と思われる。

ＳＢ－０６(Fig.15)

Ｈ－３，Ｉ－３にて検出された。梁行２間×桁行２間以上であり、調査区南側にのびる。梁行の全長3.3mを測る。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30～40cmを測る。残存深さは20～50cmである。

出土遺物　遺構の時期は同安窯系青磁片が出土していることから遡っても12世紀後半代以降と思われる。

ＳＢ－０７(Fig.15)

H-2,H-3,I-2,I-3にて検出された。梁行２間×桁行３間であり、梁行の全長3.8m、桁行全長5.0

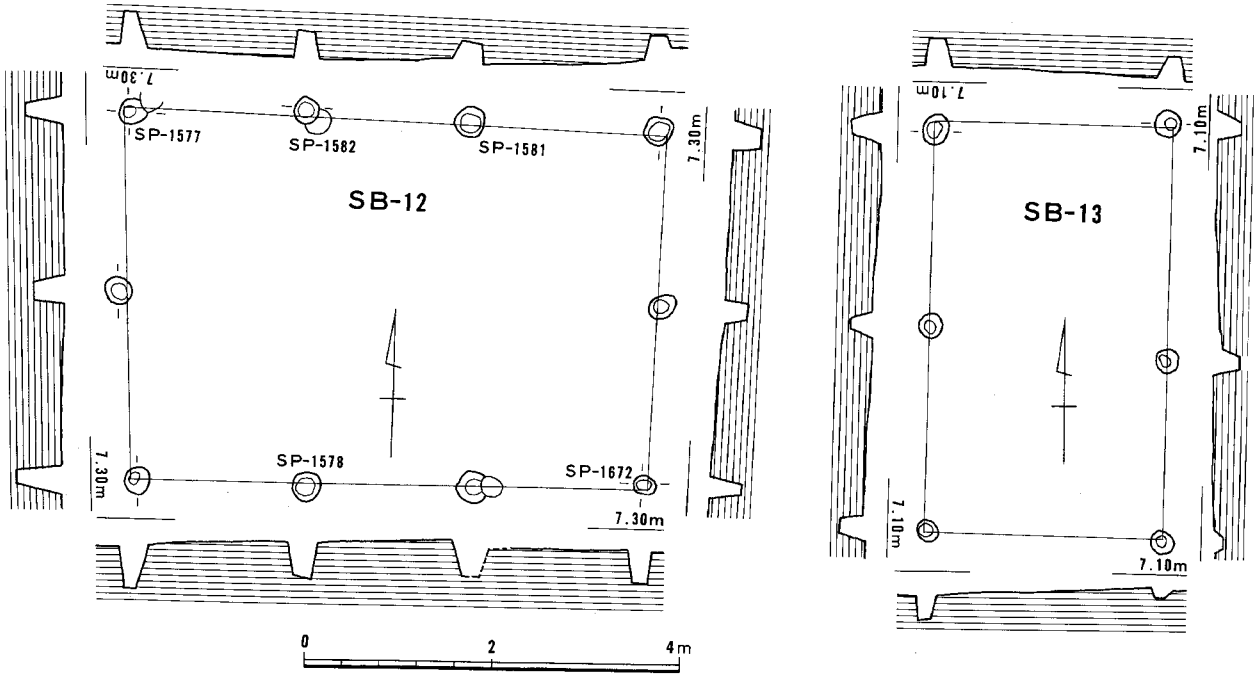


Fig.17 **掘立柱建物（ＳＢ）－１２,１３実測図(1/80)**

ｍを測り、面積約19㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径50～60cmを測り、やや大型である。

出土遺物　遺構の時期をきめられる遺物なく、時期不明。

ＳＢ－０８(Fig.15)

Ｉ－３にて検出された。梁行２間×桁行２間であり、梁行の全長2.1ｍ、桁行全長2.8ｍを測り、面積約６㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30cm前後を測る。

出土遺物(Fig.18) **41** 土師器小皿。口径8.8、器高1.0cm。SP861出土。遺構の時期は中世の範疇に含まれるものと思われる。

ＳＢ－０９(Fig.16)

Ｆ－３にて検出された。建物の方位はほぼ磁北に向く。梁行２間×桁行３間であり、梁行の全長3.3ｍ、桁行全長5.0ｍを測り、面積約17㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径20～40cmを測る。

出土遺物　遺構の時期は土師器片の出土から中世の範疇に含まれるものと考える。

ＳＢ－１０(Fig.16)

Ｅ－２，Ｆ－２にて検出された。桁行の方位はほぼ磁北にそう。梁行２間×桁行３間であり、梁行の全長3.2ｍ、桁行全長5.1ｍを測り、面積約16㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30～40cmを測る。

出土遺物　遺構の時期は土師器片の出土から中世の範疇に含まれるものと考える。

ＳＢ－１１(Fig.16)

Ｅ－３にて検出された。建物の方位は磁北に直交する。梁行１間×桁行２間であり、梁行の全長2.5ｍ、桁行全長4.3ｍを測り、面積約11㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30～40cmを測り、南東の一穴だけに裏ゴメの石がみられる。

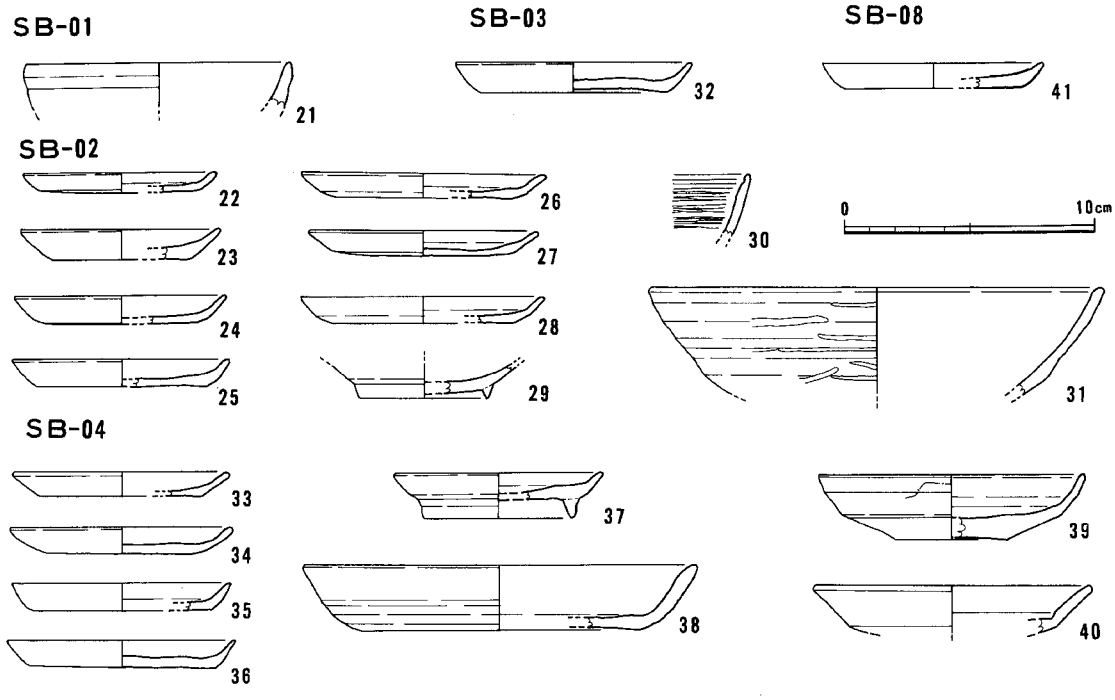


Fig.18 掘立柱建物（ＳＢ）出土遺物実測図１(1/3)

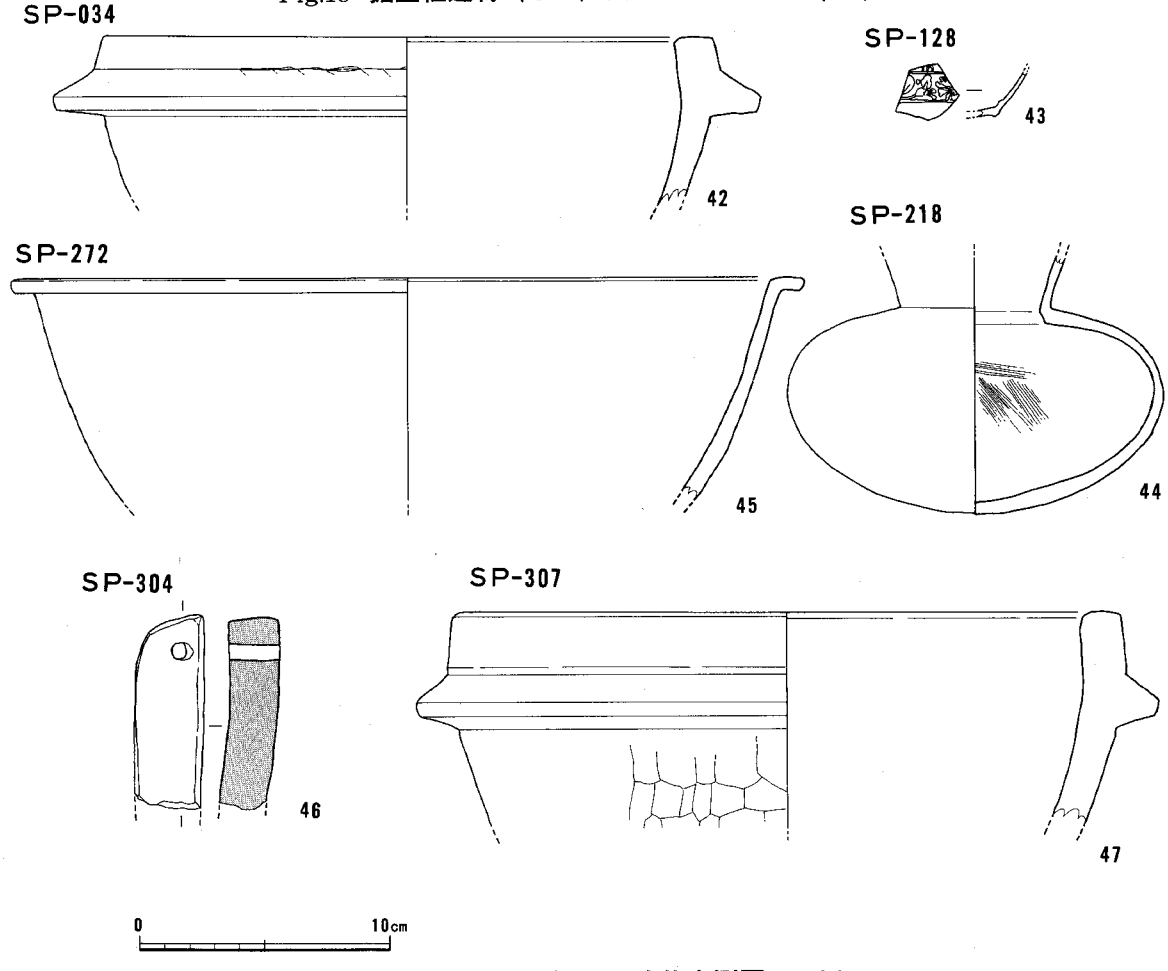


Fig.19 柱穴（ＳＰ）出土遺物実測図１(1/3)

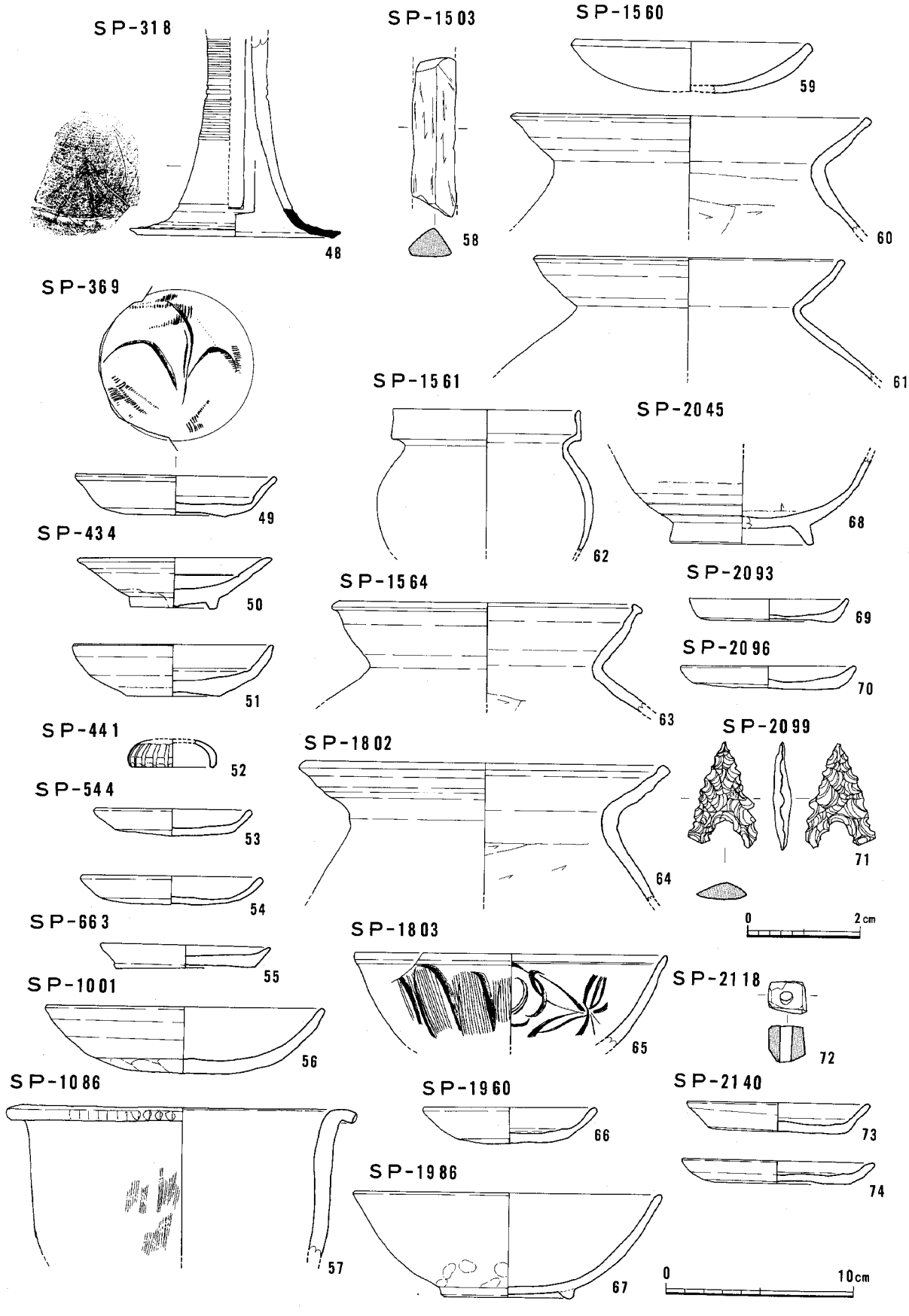


Fig.20 柱穴（ＳＰ）出土遺物実測図２(1/3、1/1)

出土遺物　遺構の時期は土師器片の出土から中世の範疇に含まれるものと考える。

ＳＢ－１２(Fig.17)

Ｄ－２，Ｅ－２にて検出された。建物方位は磁北に直交する。梁行２間×桁行３間であり、梁行の全長3.8m、桁行全長5.8mを測り、面積約22㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30cm前後を測る。

出土遺物　遺構の時期を決められる遺物なく、時期不明。

ＳＢ－１３(Fig.17)

Ｄ－２，Ｄ－３にて検出された。桁行方位は磁北と同じくする梁行１間×桁行２間　梁行の全長2.5m、桁行全長4.4mを測り、面積約11㎡である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30cm前後を測る。

出土遺物　遺構の時期を決められる遺物なく、時期不明。

柱穴（ＳＰ）出土遺物

ＳＰ－０３４(Fig.19)

42　滑石製鍋。外面口縁下に鍔が巡り、鍔から下には煤が付着。口径24.2cm。

ＳＰ－１２８(Fig.19)

43　白磁碗。全体に薄作りで、内面に陽印刻文を施す。口ハゲ腰折れ碗のタイプと思われる。14世紀前半代～中頃か。

ＳＰ－２１８(Fig19.)

44　土師器丸底壷。

ＳＰ－２７２(Fig.19)

45　土鍋。口縁は逆L字状に外折する。外面には煤が付着。口径42.0cm。

ＳＰ－３０４(Fig.19)

46　滑石製品。石鍋の転用品と思われる。端部に一ヶ所穿孔。

ＳＰ－３０７(Fig.19)

47　滑石製鍋。口縁下に鍔が巡り、鍔から下には煤が付着。口径26.4cm。

ＳＰ－３１８(Fig.20)

48　須恵器高坏脚。おそらく二ヶ所に長方形の透かしが入る。中位に沈線が二条巡り、その上下にカキ目が入る。下半部にヘラ記号あり。

ＳＰ－３６９(Fig.20)

49　同安窯系青磁皿。外底部は施釉後釉剥ぎする。口径10.6、器高2.1、底径5.3cm。

ＳＰ－４３４(Fig.20)

50　白磁高台付き皿。口径10.2、器高2.7、高台径4.5cm。　**51**　白磁平底皿Ⅵ類。口径10.6、器高2.8、底径4.8cm。

ＳＰ－４４１(Fig.20)

52　青白磁合子蓋。口縁端部から内面は露胎。口径4.4、器高1.5cm。

ＳＰ－５４４(Fig.20)

53　土師器小皿。ヘラ切りか、糸切りか不明。口径8.4、器高1.4cm。　**54**　土師器小皿。ヘラ切りか。口径9.6、器高1.5cm。

ＳＰ－６６３(Fig.20)

55　土師器小皿。糸切り。口径8.9、器高1.2cm。

ＳＰ－１００１(Fig.20)

56　土師器丸底坏。内面磨き、外面押し出し痕あり。口径14.7、器高3.5cm。

ＳＰ－１０８６(Fig.20)

57　弥生土器甕。口縁外折し、端部に刻み目あり。口径18.4cm。弥生前期。ＳＫ－５５付近

ＳＰ－１０５３(Fig.20)

58　砥石。全面を使用、両端は欠損。石材は粘板岩。

ＳＰ－１５６０(Fig.20)

59　土師器浅椀。外面は手持ちヘラ削りか。口径12.8、器高2.7cm。　**60**　土師器甕。口縁はやや内湾気味で端部は平坦。口径19.2cm。　**61**　土師器甕。口縁は強く屈曲しやや内湾気味に開き、端部は平坦。口径16.6cm。

ＳＰ－１５６１(Fig.20)

62　土師器二重口縁壷。頸部が強くくびれ、口縁は短く直立する。吉備系か。口径9.9cm。

ＳＰ－１５６４(Fig.20)

63　土師器甕。口縁はやや内湾気味で端部をつまみ出す。口径16.4cm。

ＳＰ－１８０２(Fig.20)

64　土師器甕。口縁はやや内湾気味に大きく外に開く。端部をつまみ出すが、稜は不明瞭。口径19.6cm。

ＳＰ－１８０３(Fig.20)

65　龍泉窯系青磁碗Ｉ類。内面は劃花文、外面は脈入り蓮弁文。口径16.4cm。

ＳＰ－１９６０(Fig.20)

66　土師器小皿。ヘラ切りか。口径9.1、器高2.0cm。

ＳＰ－１９８６(Fig.20)

67　瓦器椀。高台は小さく断面三角形。磨滅著しく調整は不明瞭であるが、内面は磨き、体外面下部に指頭痕が残る。口径16.2、器高5.6、高台径7.0cm。

ＳＰ－２０４５(Fig.20)

68　灰釉椀。胎土はかなり白っぽくきめ細か。淡灰白色の不透明釉を薄くかける。内底と体外面下半は露胎。高台径7.6cm。猿投か。

ＳＰ－２０９３(Fig.20)

69　土師器小皿。糸切りか。口径8.4、器高1.2cm。

ＳＰ－２０９６(Fig.20)

70　土師器小皿。糸切りか。口径9.4、器高1.2cm。

ＳＰ－２０９９(Fig.20)

71　石鏃。黒耀石。基部にはV字形に抉りが入る。全面に細かな二次調整を施し、両側辺は鋸歯状になる。小ぶりで長さ1.8、幅1.3、厚み0.3cm。

ＳＰ－２１１８(Fig.20)

72　滑石製品。石鍋の転用と思われる。サイコロ状を呈し、中央に穿孔。

ＳＰ－２１４０(Fig.20)

73　土師器小皿。ヘラ切りか。口径9.7、器高1.5cm。

ＳＰ－２１４０(Fig.20)

74　土師器小皿。ヘラ切り。口径10.2、器高1.2cm。

土坑・土壙、貯蔵穴（ＳＫ）

ＳＫ－０１(Fig.21、ＰＬ.16)

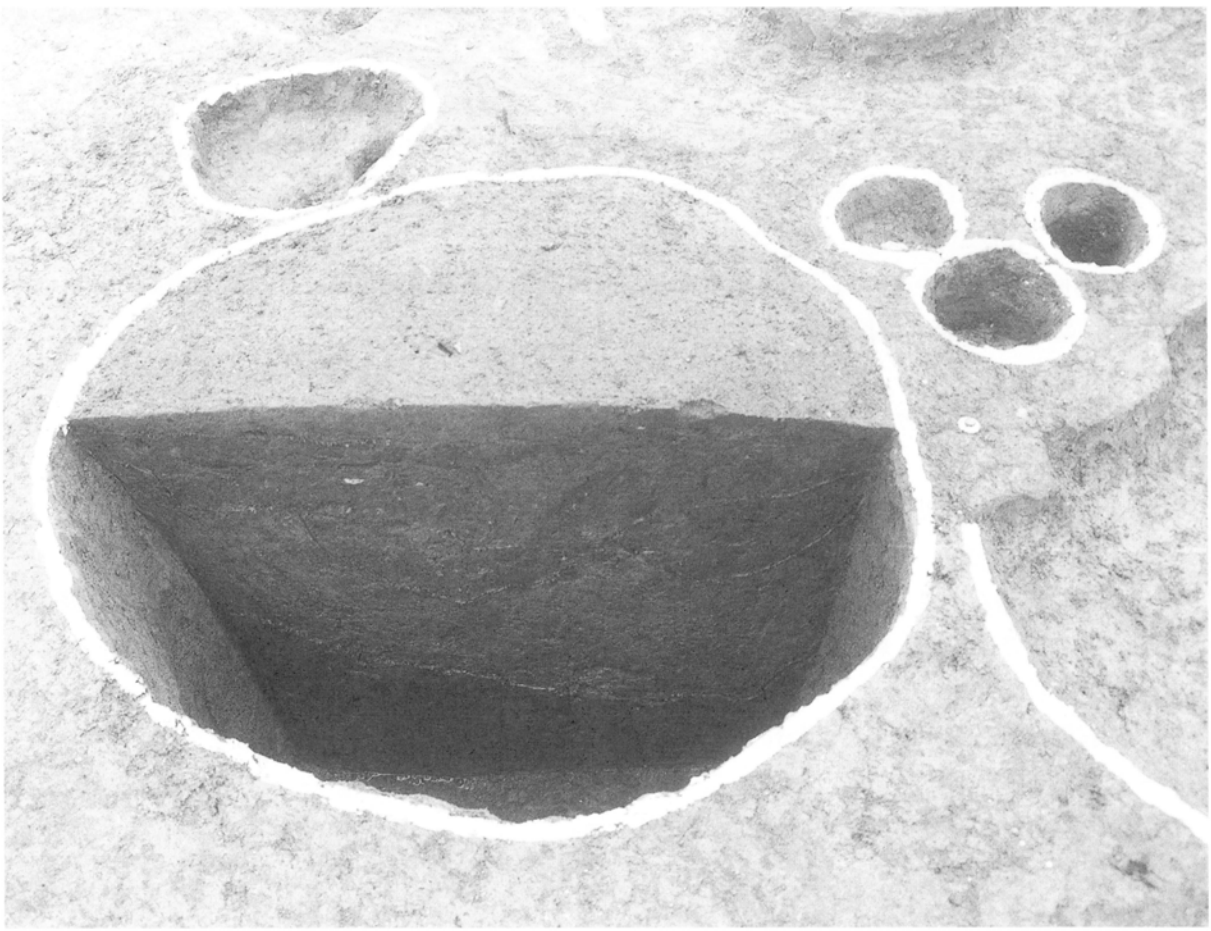
Ｇ－２にて検出された。長軸160cm、短軸85cmを測り、平面形は楕円形を呈する。南側が一段深くなっており、遺構の壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰黒色砂質土、灰茶色砂質土であり、底面にこぶし大の礫や土器を廃棄していた。

出土遺物(Fig.22) **75** 土師器坏。磨滅著しく調整等不明。口径14.4、器高2.7cm。 **76** 土師器坏。底部糸切り。口径16.0、器高3.2cm。 **77** 同安窯系青磁碗。口径15.6、器高6.9、高台径4.8cm。 **78** 龍泉窯系青磁碗Ｉ類。畳付けから高台内は露胎。高台内にハマの痕あり。高台径5.8cm。遺構の時期は土師器坏の法量と龍泉窯系、同安窯系青磁が出土していることから12世紀後半代～13世紀前後と思われる。

ＳＫ－０２(Fig21.、ＰＬ.16)

Ｇ－２にて検出された。直径100cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。遺構の残存深さは約100cmを測り、遺構の壁は垂直に立つ。遺構の底部は八女粘土まで掘られていないことから、降雨時にのみ水が溜まる溜井ではないかと考えられる。。

出土遺物(Fig.22) **79** 土師器小皿。底部糸切り。口径8.3、器高1.0cm。 **80** 土師器小皿。底部糸切り。口径8.8、器高1.3cm。 **81** 土師器坏。底部糸切り。口径13.6、器高3.2cm。 **82** 龍泉窯系青磁碗Ｉ類。口径16.6cm。遺構の時期は土師器の法量と出土陶磁器から13世紀代と考えられる。



Ｐｈ．３　溜井０２堆積状況

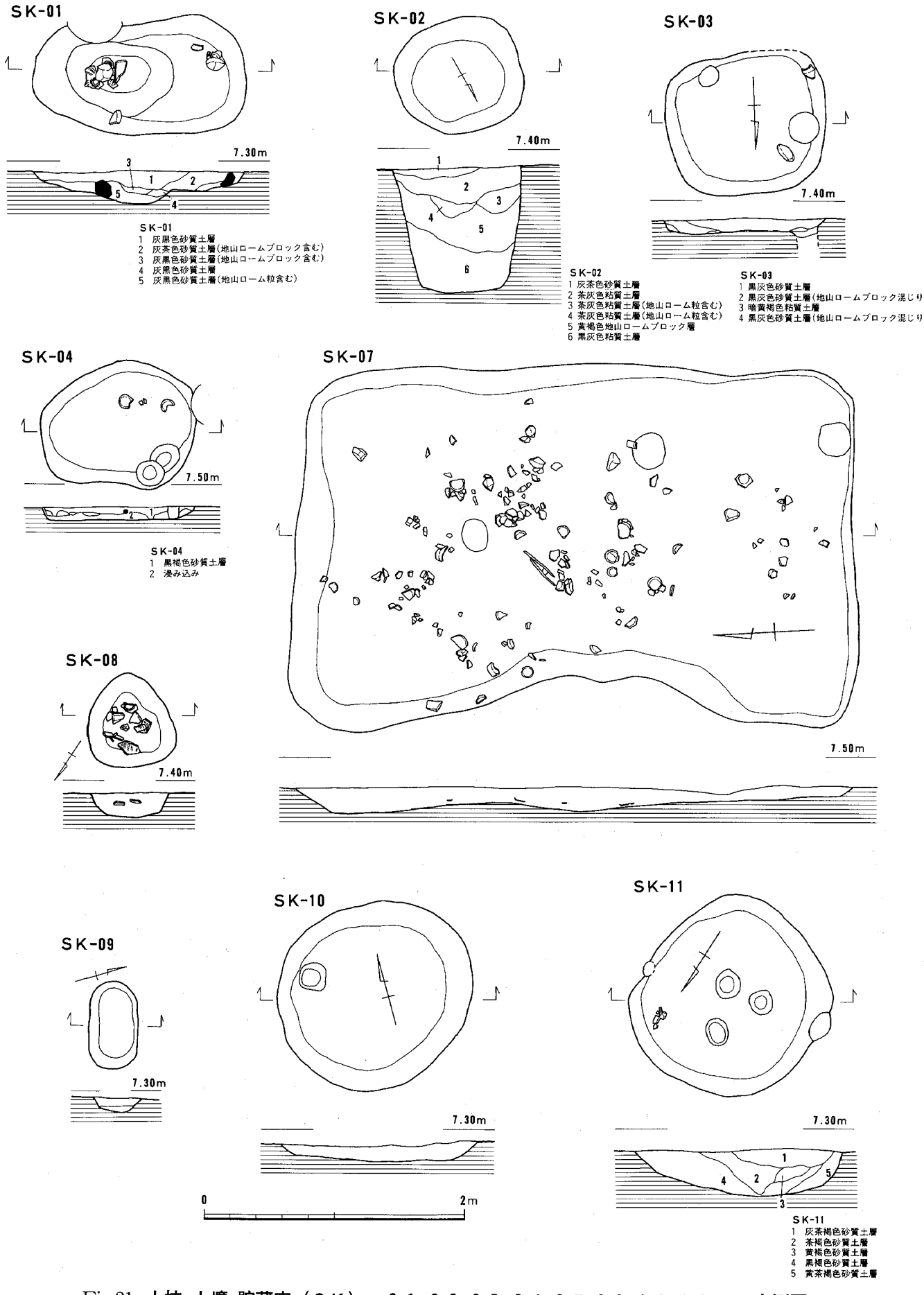


Fig.21 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）－０１,０２,０３,０４,０７,０８,０９,１０,１１実測図(1/40)

ＳＫ－０３(Fig.21、ＰＬ.17)

Ｇ－２にて検出された。長軸120cm、短軸110cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。遺構の深さは約10cmを測り、遺構の壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物(Fig.22) **83** 中国産陶器Ｂ群長瓶。口縁端部に白泥付着。口径6.0cmを測る。 **84** 同安窯系青磁碗。遺構の時期は法量の計測できる土師器遺物が少なく不確定だが、同安窯系青磁があることから少なくとも12世紀後半代以降と考えられる。

ＳＫ－０４(Fig.21、ＰＬ.17)

Ｇ－２にて検出された。長軸120cm、短軸90cmを測り、平面形は楕円形を呈する。遺構の深さは10cmを測り、遺構の壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物(Fig.22) **85** 土師器小皿。底部糸切り。口径8.6、器高1.3cm。 **86** 土師器小皿。底部糸切り。口径9.0、器高1.1cm。遺構の時期は土師器の出土点数は少ないが、13世紀前半代と考えられる。

ＳＫ－０６

Ｇ－２にて検出された弥生時代前期の貯蔵穴である。平面形長方形を呈し、長辺220、短辺180cmを測る。深さは約40cmを測り、遺構の多くは削られている。

出土遺物(Fig.22) **87** 弥生土器壷。肩部に沈圏線と羽状文が入る。前期。 **88** 弥生土器壷。肩部に沈圏線と羽状文が入る。前期。 **89** 弥生土器壷。肩部に羽状文が入る。前期。

ＳＫ－０７(Fig.21、ＰＬ.18)

Ｇ－２にて検出された。長軸430cm、短軸270cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。床面は平坦ではなく、貼床や整地などの状況も土層断面の観察ではみられなかった。掘立柱建物ＳＢ－０１の中におさまるが、いかなる関係であるのか不明である。

出土遺物(Fig.23) **95～114** 土師器小皿。底部糸切り。平均法量(25点)口径8.9、器高1.1cm。 **115～122** 土師器坏。底部糸切り。平均法量(13点)口径14.8、器高3.0cm。 **123** 白磁碗Ⅵ類。口径17.0cm。 **124** 白磁碗。内面口縁下に沈圏線巡る。口径16.8cm。 **125** 白磁合子身。かなり白っぽい精良な胎土に、透明釉がかかる。外面は露胎、内面は施釉、釉下には化粧土を施す。型作り。高台径4.8cm。 **126** 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。口径16.0cm。 **127** 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。畳付けから高台内は露胎。高台径6.2cm。 **128** 龍泉窯系青磁皿。外底は施釉後釉剥ぎ。口径10.6、器高2.5、底径4.4cm。 **129・130** 同安窯系青磁碗。129は口径16.0cm、130は16.7cm。 **131～133** 同安窯系青磁皿。いずれも全面施釉後、外底釉剥ぎ。131は口径11.4、器高2.5、底径4.8cm。132は口径11.0、器高2.2、底径5.6cm。133は口径10.6、器高1.9、底径5.6cm。 **134** 青白磁合子蓋。天井部外面には陽印刻文を施す。外面と内面天井部に施釉。口径7.8cm。 **135** 中国産陶器B群長瓶。発色悪く、暗緑灰色の不透明釉が全面にかかる。口径6.2cm。 **136・137** 鉄製火バシ。二本一対で頭部が鎖でつながっていたと思われる。断面は隅丸方形か。長さ30.5cm。遺構の埋没時期は土師器の法量と龍泉窯系青磁Ⅱ類がないことから、12世紀後半代と思われる。

ＳＫ－０８(Fig21.、ＰＬ18.)

Ｈ－２にて検出された。直径70cmを測り、平面は不定形を呈する。残存深さ20cmを測る。

出土遺物(Fig.22) **90** 須恵質土器鉢。東播系。外底は糸切り、上からナデ調整。内面は使用のためか磨滅する。底径12.0cm。 **91** 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。畳付けから高台内は露胎。高台径5.8cm。遺構の時期

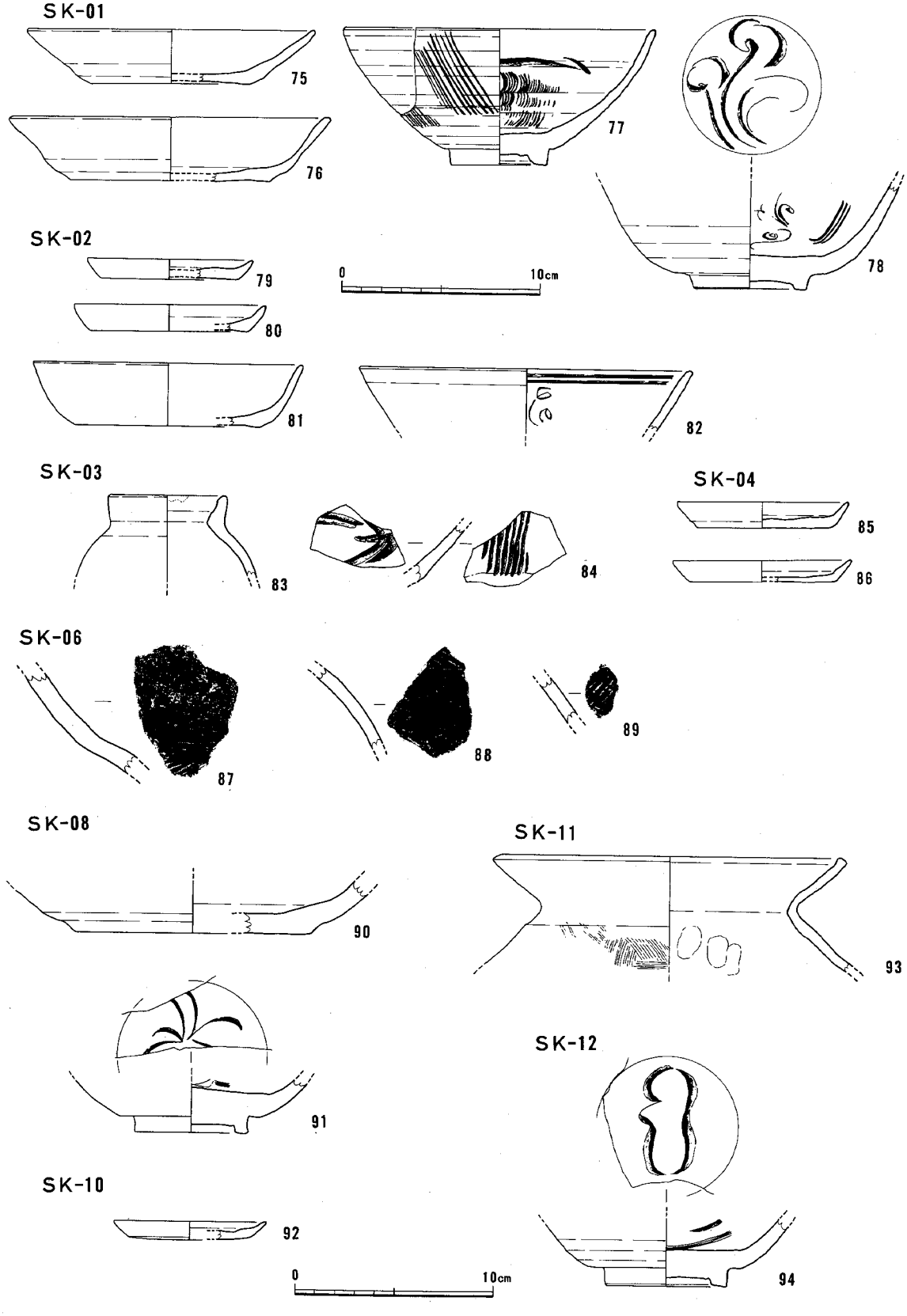


Fig.22 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図１(1/3)

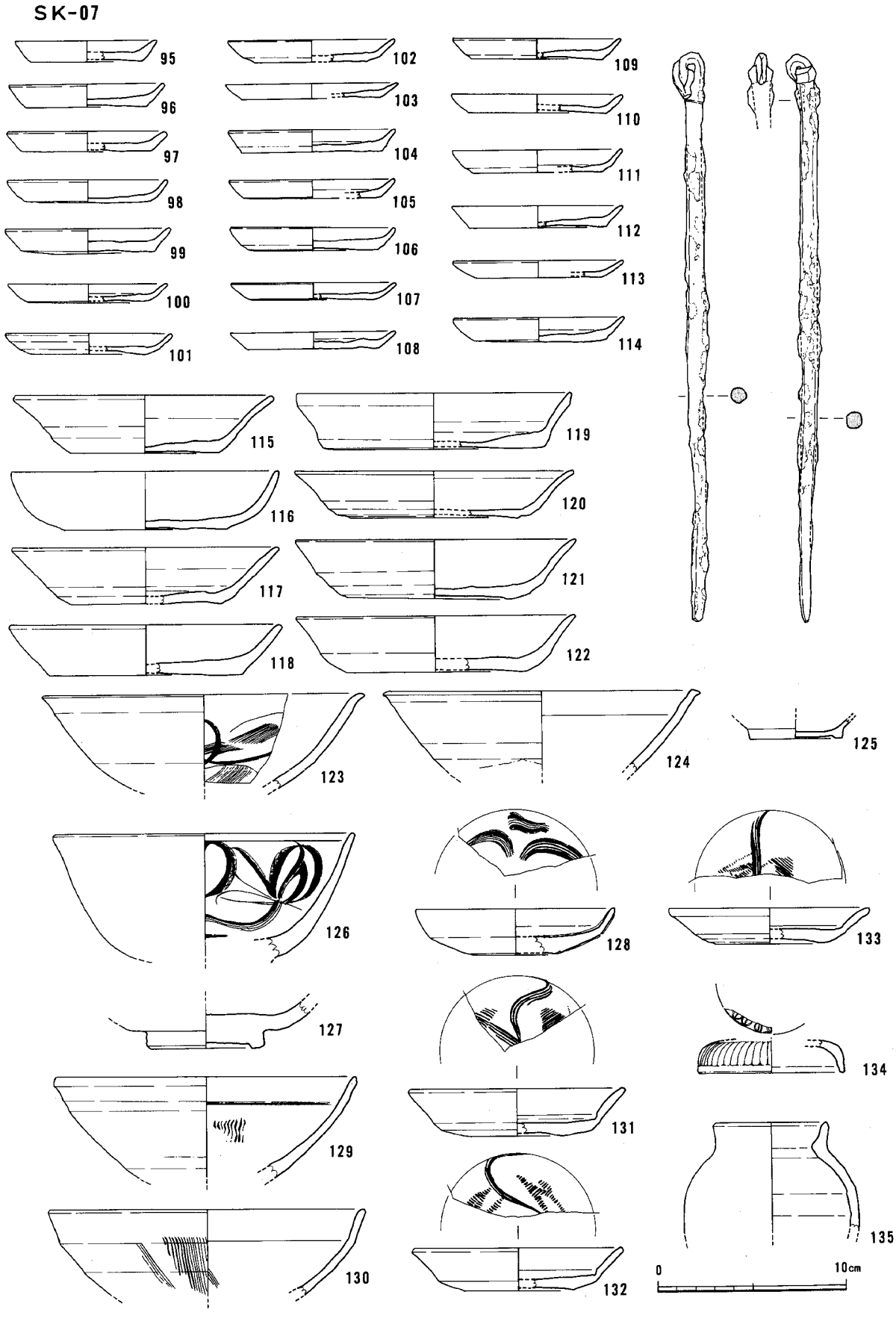


Fig.23 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図２(1/3)

は法量の計測できる土師器の出土が少なく不明確だが、龍泉窯系青磁があることから少なくとも12世紀後半代以降と思われる。

ＳＫ－０９(Fig.21、ＰＬ.19)

Ｈ－２にて検出された。長軸70cm、短軸40cmを測り、平面は長楕円形を呈する。残存深さ15cmを測る。覆土は灰茶褐色砂質土で下位には炭化物粒が多くみられた。炉の可能性も考えられる。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＫ－１０(Fig.21、ＰＬ.19)

Ｉ－２にて検出された。直径150cmを測り、平面は略円形を呈する。残存深さは約15cmを測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.22) **92** 土師器小皿。磨滅著しく調整等不明。口径7.6、器高0.9cm。遺構の時期は土師器の出土が少なく不明確だが、同安窯系青磁があることから少なくとも12世紀後半代以降と考えられる。

ＳＫ－１１(Fig.21、ＰＬ.20)

Ｉ－２にて検出された。直径140cmを測り、平面は不定形を呈する。残存深さは35cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物(Fig.22) **93** 土師器甕。口縁端部は若干つまみ出すが稜は不明瞭。体部外面はハケ目、内面はナデ調整、指頭痕残る。口径18.0cm。

ＳＫ－１２(Fig.24、ＰＬ.20・21)

Ｈ－３，Ｉ－３にて検出された。長軸190cm、短軸140cmを測り、平面は略台形を呈する。残存深さ15cmを測る。

出土遺物(Fig.22) **94** 龍泉窯系青磁碗Ｉ類。畳付けから高台内は露胎。高台径6.2cm。遺構の時期は出土遺物から、少なくとも12世紀後半代以降と考えられる。

ＳＫ－１３(Fig.24、ＰＬ.21)

Ｆ－２，Ｆ－３，Ｇ－２にて検出された。長軸170cm、短軸80cmを測り、平面は長楕円形を呈する。残存深さは約25cmで床面はほぼ平坦である。

出土遺物　土師器片のみが数点出土しており、須恵器は混じらない。

ＳＫ－１６(Fig.24、ＰＬ.22)

Ｇ－３，Ｈ－３にて検出された。長軸400cm、短軸250cmを測り、平面は不定形を呈する。平面形から複数の遺構が切りあったもののようであるが、明瞭な切り合い関係は不明である。

出土遺物(Fig.25) **138～144** 土師器小皿。すべて底部糸切り。口径-器高は順に、8.8-1.3、8.8-0.8、9.4-1.2、9.6-1.2、9.6-1.0、9.7-1.1、9.7-1.0cm。 **145** 土師器坏。底部糸切り。底径11.0cm。 **146** 瓦質土器鉢。内面は横方向の丁寧なハケ目調整、下半は使用のため磨滅。外面はハケ目調整施すが、かなり雑で指押さえの痕が顕著に残る。口径26.4cm。 **147・148** 龍泉窯系青磁碗Ｉ類。口径は147は16.0、148は16.4cm。 **149** 龍泉窯系青磁皿。口径9.4cm。 **150** 同安窯系青磁碗。高台径4.6cm。 **151～153** 同安窯

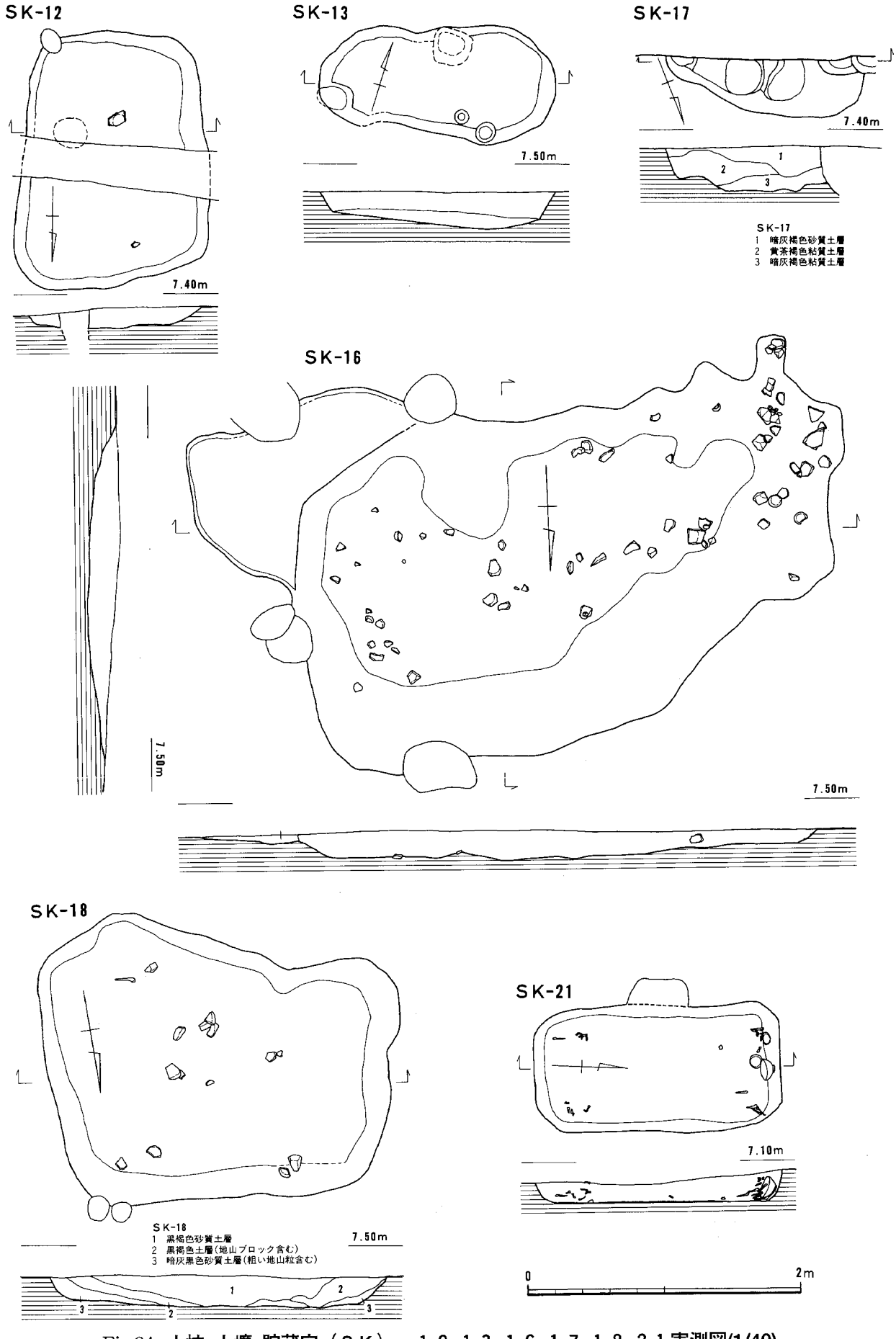


Fig.24 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）－１２,１３,１６,１７,１８,２１実測図(1/40)

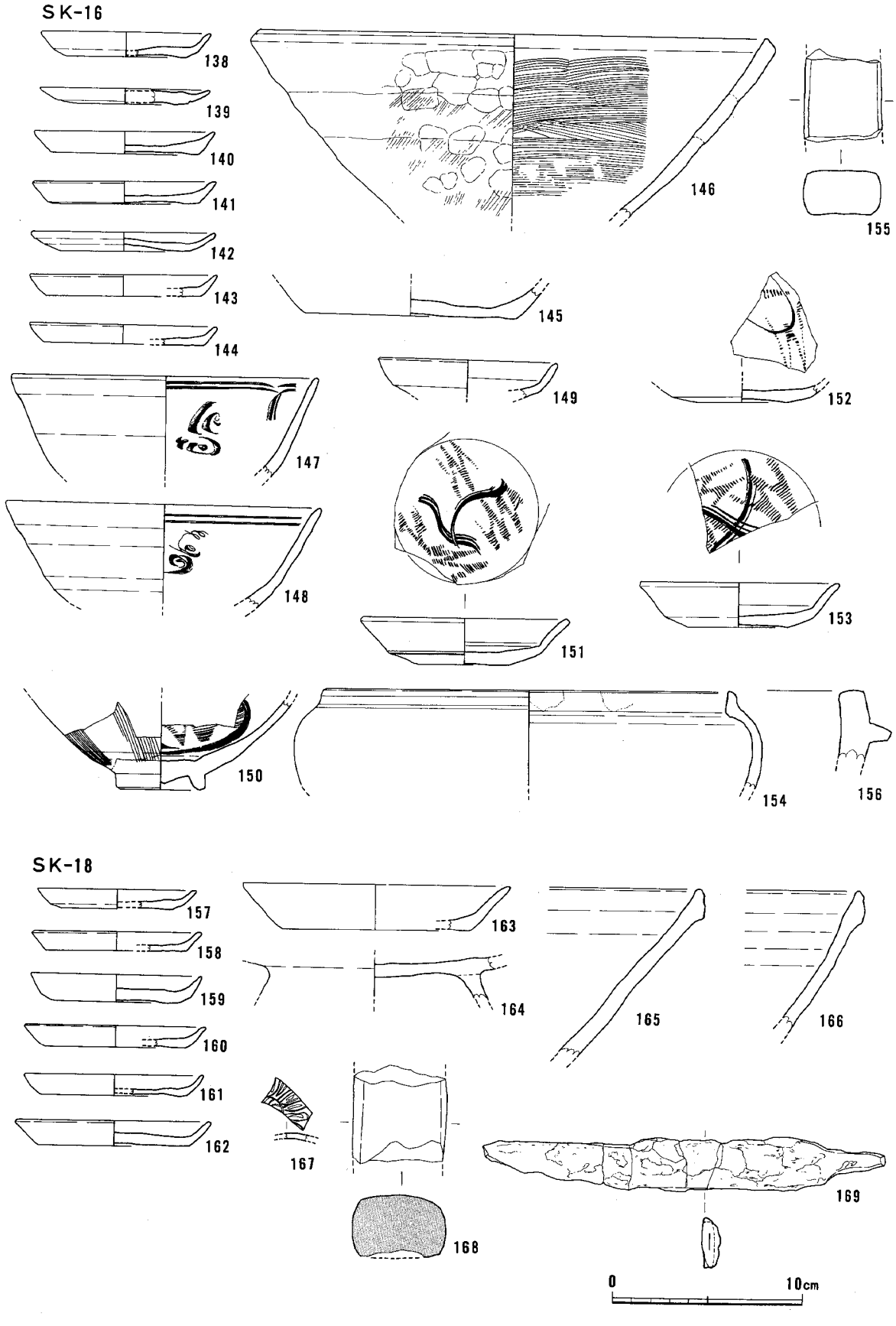


Fig.25 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図３(1/3)

系青磁皿。いずれも全面施釉後、外底釉剥ぎ。**151**は口径10.8、器高2.4、底径4.6cm、**152**は底径4.6cm、**153**は口径10.4、器高2.4、底径5.2cm。 **154** 中国産陶器B群鉢。やや灰色がかった淡オリーブ色の不透明釉が全面にかかり、口縁内面には目痕が残る。口径21.4cm。 **155** 不明土製品。祖砂粒を多く含み、二次的に被熱したと思われる。断面長方形。 **156** 滑石製鍋。外面口縁下には鍔が巡り、煤付着。 遺構の時期は土師器の法量と、同安・龍泉窯系青磁Ⅰ類が多く出土、龍泉窯系青磁Ⅱ類が混じらないことから12世紀後半代と思われる。

ＳＫ－１８(Fig.24、ＰＬ.22)

Ｈ－３にて検出された。長軸250cm、短軸180cmを測るり、平面は不定形を呈する。残存深さは約20cmを測る。

出土遺物(Fig.25) **157～162** 土師器小皿。すべて底部糸切り。法量(口径-器高)は順に、8.2-1.0、8.8-1.0、8.8-1.4、9.4-1.2、9.2-1.1、10.0-1.3cm。 **163** 土師器坏。磨滅著しく調整等不明。口径13.8、器高2.4cm。 **164** 土師器高台付き坏。磨滅著しく調整等不明。 **165・166** 須恵質土器鉢。東播系。口縁上方は尖り気味で断面はやや扁平な三角形。156は使用のため内面磨滅する。 **167** 青白磁合子蓋。外面には陽印刻文あり。内外とも施釉。 **168** 不明土製品。粗砂粒を多量含み、二次的に被熱する。SK-16出土の146と同じ。 **169** 鉄製小刀。長さ20.9、幅2.6cm。遺構の時期は土師器の法量と、同安・龍泉窯系青磁Ⅰ類が多く出土、龍泉Ⅱ類ないことから12世紀後半代と思われるが、東播系鉢は時期的に13世紀初頭～前半位のものとも思われる。

ＳＫ－２１(Fig.24、ＰＬ.21)

Ｉ－３にて検出された。長軸180cm、短軸95cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。残存深さは約20cmを測り、床面は平坦である。遺構の長軸はほぼ北を向く。木棺墓である。

出土遺物(Fig.27) **170～173** 土師器小皿。すべて底部糸切り。法量(口径-器高)は順に、9.2-0.9、9.0-0.9、9.3-1.2、9.0-0.9cm。 **174** 同安窯系青磁碗。体部から口縁にかけてはやや内湾気味。高台内の削りはかなり雑。口径15.8、器高7.2、高台径5.1cm。 **175** 青銅製品。薄く半球形を呈する。頂部に一ヶ所穿孔あり。側面の穿孔は故意にあけたものか不明。口径3.4、器高2.2、厚さ0.1cm。 **176～183** 鉄釘。いずれも断面は四角形。175は上部に木質が残る。 遺構の時期は土師器法量、同安窯系青磁が出土していることから12世紀後半代と思われる。

ＳＫ－２２(Fig.26、ＰＬ.24)

Ｈ－３にて検出された。長軸150cmを測り、平面は長円形を呈する。残存深さは約30cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物(Fig.27) **184** 土師器小皿。底部糸切り。口径9.2、器高1.1cm。 **185** 土師器小皿。底部糸切り。口径7.6、器高1.0cm。 **186** 土師器坏。磨滅著しく調整等不明。口径14.2、器高2.1cm。 **187** 白磁碗Ⅸ類。内底は輪状釉剥ぎ。口径16.8cm。 **188** 白磁碗Ⅵ類。内底に沈圏線巡る。高台径6.2cm。 **189** 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。口径16.6cm。 **190** 滑石製鍋。口縁両側に縦耳が付く。口径17.0cm。 **191** 砥石。表裏面と片側面の一部を使用。石材は砂岩。遺構の時期は土師器の法量と、同安・龍泉窯系青磁Ⅰ類が出土していることから12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。

ＳＫ－２３(Fig.26、ＰＬ.24)

Ｈ－３にて検出された。調査区の南側にあたり、遺構は調査区外に広がる。遺構残存深さは約10cm

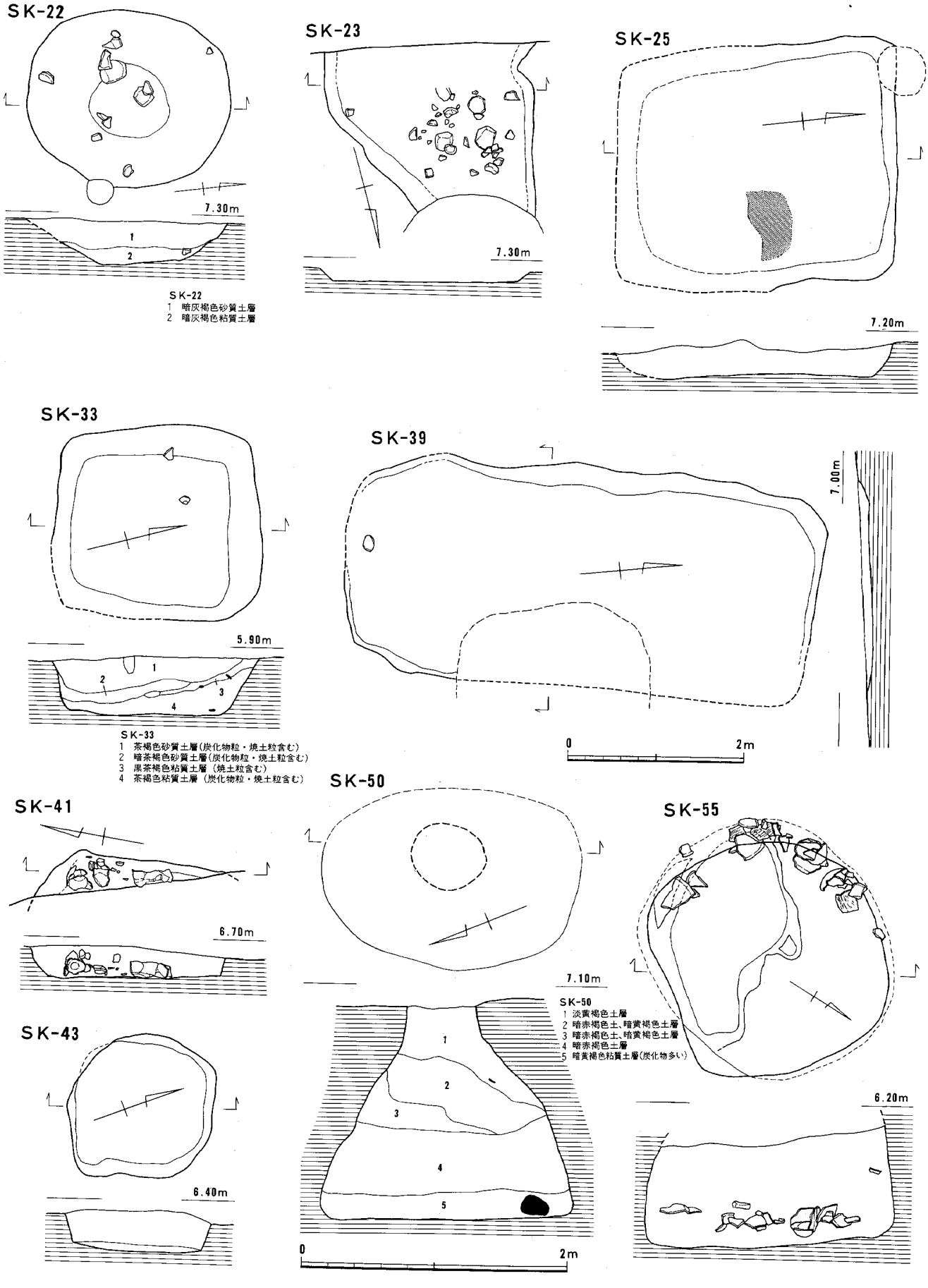


Fig.26 土坑・土壙・貯蔵穴（SK）－22,23,25,33,37,41,43,50,55実測図(1/40)

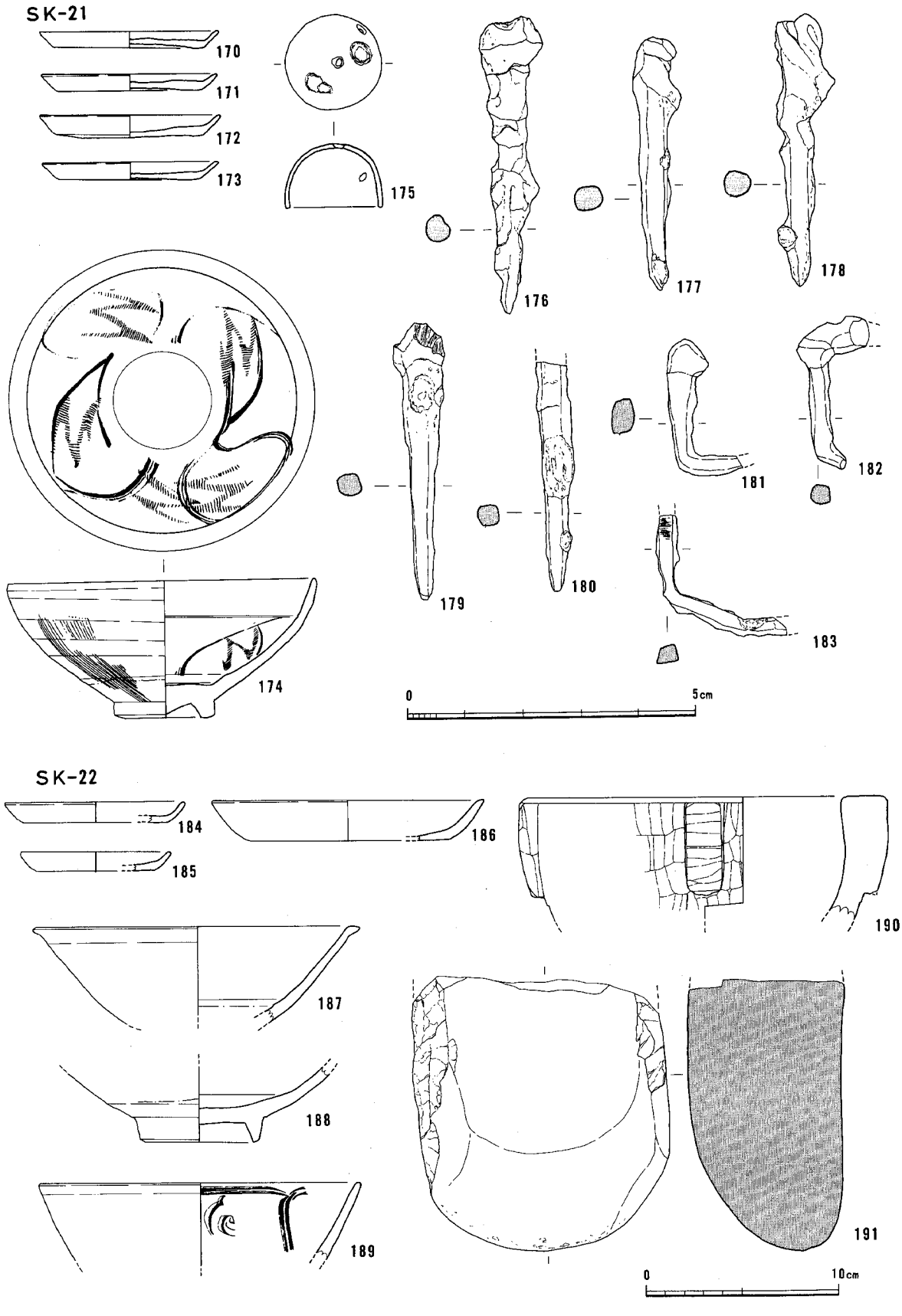


Fig.27 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図４(1/3、1/1)

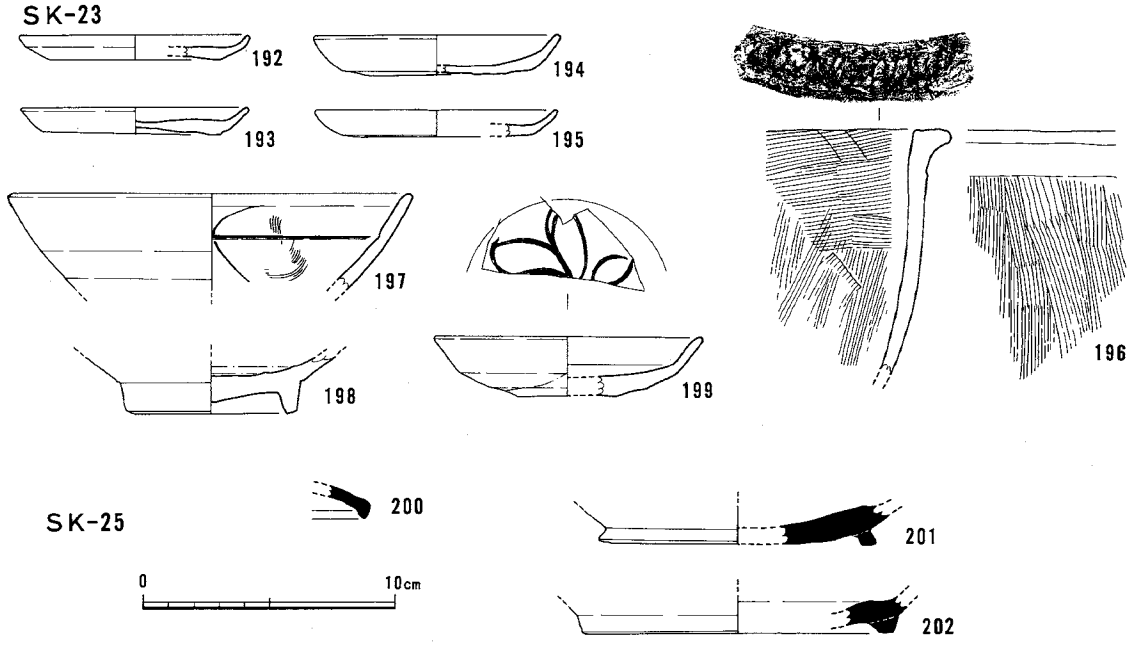


Fig.28 **土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図５(1/3)**

を測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.28) **192** 土師器小皿。底部糸切り。口径9.0、器高1.0cm。 **193** 土師器小皿。底部糸切り。口径9.0、器高1.0cm。 **194** 土師器小皿。底部ヘラ切りか。口径9.8、器高1.6cm。 **195** 土師器小皿。底部糸切りか。口径9.6、器高1.1cm。 **196** 土鍋。口縁は逆L字状に短く外折し、上端面には縄目を押圧する。内外ともハケ目調整。 **197** 白磁碗。口径15.8cm。 **198** 白磁碗Ⅸ類。内底を輪状釉剥ぎする。高台径6.8cm。 **199** 白磁平底皿Ⅶ類。体外面下半は露胎。内底には劃花文が施される。口径10.6、器高2.4、底径3.8cm。遺構の時期は土師器の法量と、土鍋、同安・龍泉窯系青磁Ⅰ類が出土していることから12世紀後半代と思われる。

ＳＫ－２５(Fig.28)

Ｉ－２にて検出された。ＳＣ－２６を切る。長軸215cm、短軸190cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。遺構の深さは約20cmを測り、底面は平坦である。底面東側には炭化物が集中する部分がみられた。

出土遺物(Fig.26) **200** 須恵器坏蓋。口縁の屈曲は明瞭で断面三角形を呈する。 **201** 須恵器坏身。高台は断面四角形で底部と体部の境に付く。高台径11.0cm。 **202** 須恵器坏身。高台は断面台形で底部と体部の境に付く。高台径12.4cm。切り合いと遺物の出土状態からＳＣ－２６は６世紀後半から７世紀初頭、ＳＫ－２５は８世紀後半頃の埋没であろうと考えられる。

ＳＫ－３３(Fig.26)

Ｌ－３にて検出された。長軸155cm、短軸150cmを測り、平面は略方形を呈する。底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.29) **203** 土師器坏蓋。扁平なつまみが付く。天井部外面は回転ヘラ削りか。 **204** 須恵器坏蓋。かなり扁平、口縁の屈曲は強く断面三角形を呈する。天井部外面は回転ヘラ削り。口径14.0cm。 **205** 須恵器坏身。高台は断面四角形で体部と底部の境に付く。高台径7.2cm。 **206** 土師器甕。

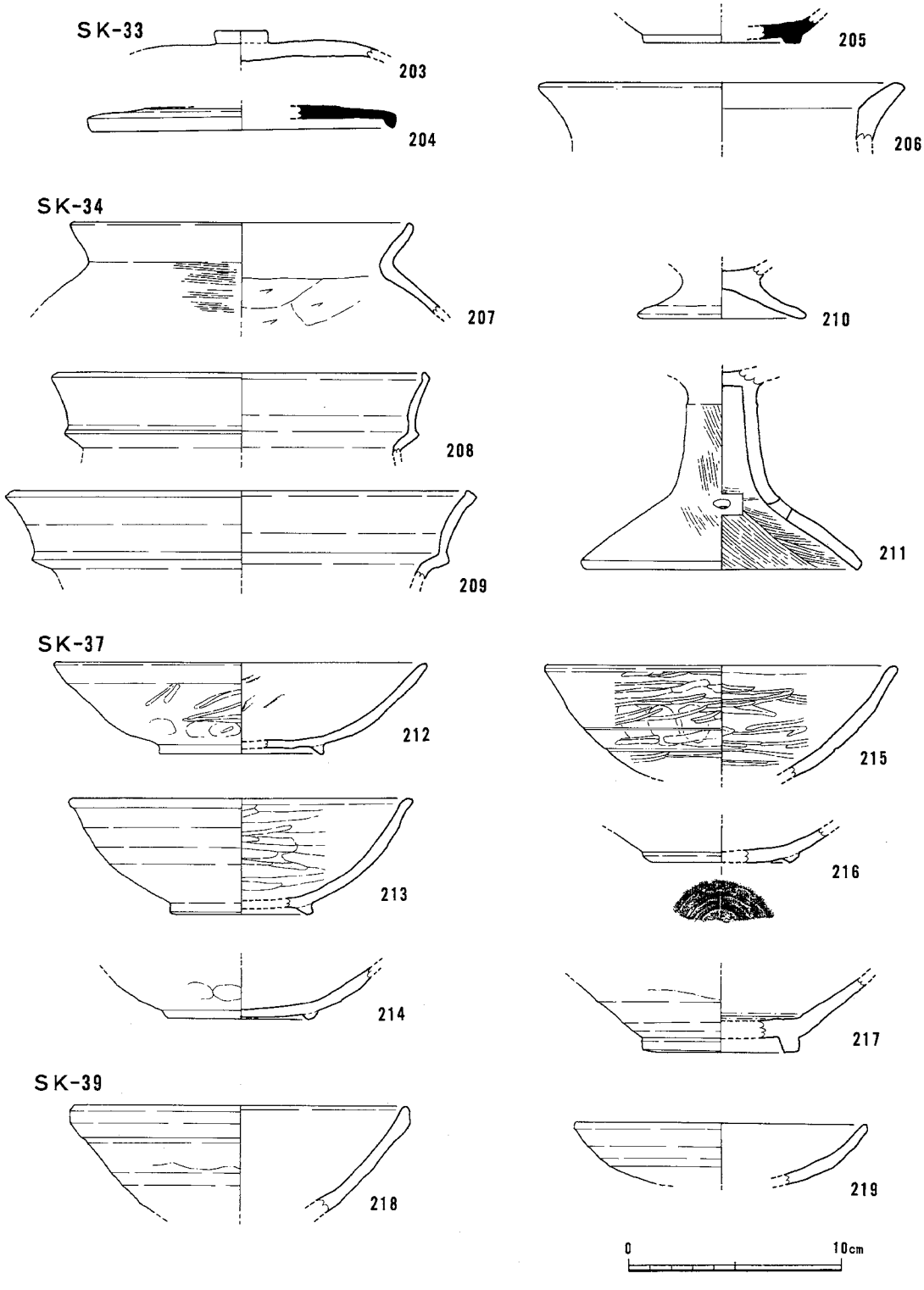


Fig.29 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図 6 (1/3)

口縁は短くやや外反、屈曲部内面の稜は明瞭。口径17.0cm。遺構の時は８世紀代後半と思われる。

ＳＫ－３４

Ｊ－２，Ｋ－２にて確認された土坑である。谷の落ち際の包含層上にあり明確なプランは不明である。

出土遺物(Fig.29) **207** 土師器甕。口径15.6cm。 **208** 土師器二重口縁壷。口縁端部をつまみ出す。口径17.6cm。 **209** 土師器二重口縁壷。口縁端部を若干つまみ出す。口径22.0cm。 **210** 土師器高坏か台付き壷。底径7.8cm。 **211** 土師器高坏脚。下位で一旦屈曲し大きく開く。屈曲部に二ヶ所穿孔あり。内外ハケ目調整。底径13.0cm。遺構の時期は古墳時代初頭と思われる。

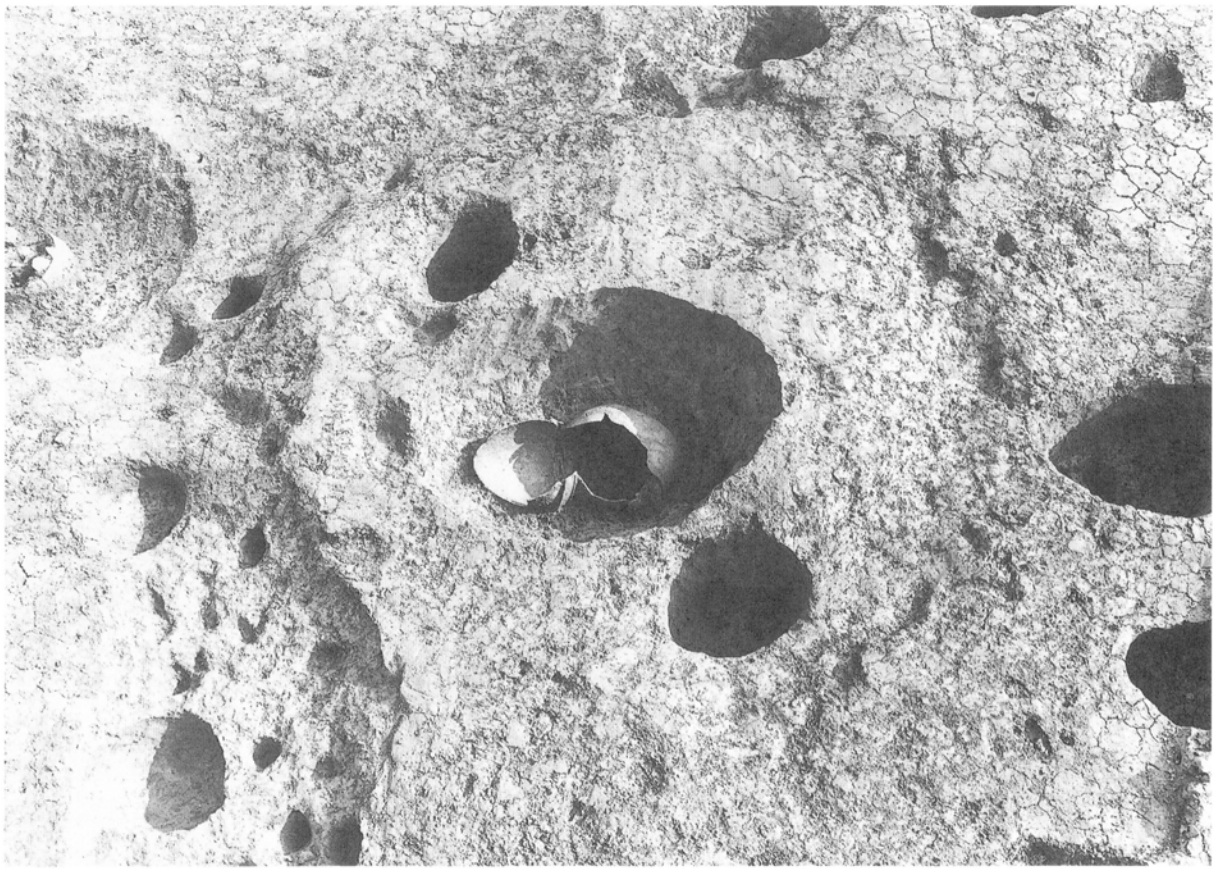
ＳＫ－３７

Ｊ－２，Ｋ－２にて確認された土坑である。谷の落ち際の遺物包含層上にあり明確な規模や性格は不明である。

出土遺物(Fig.29) **212～216** 瓦器椀。高台は小さく断面略台形を呈す。内外ヘラ磨き施すが雑で、磨きと磨きの間の隙間が多く、外面に指押さえの痕が残るものもある。外底はヘラ切り。212は内面にコテあての痕が残る。口径17.4、器高4.3、高台径7.7cm。213は口径16.0、器高5.5、高台径6.6cm。214は高台径6.8cm。215は口径16.4cm。216は高台径6.4cm。外底にヘラ記号が認められる。 **217** 白磁碗Ⅸ類。内底を輪状釉剥ぎする。高台径7.2cm。遺構の時期は白磁碗と瓦器の形態から12世紀中頃～後半代と思われる。

ＳＫ－３９(Fig.26)

Ｊ－２，Ｊ－３にて検出された。長軸355cm、短軸170cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。



Ｐｈ．４　　合せ口壷棺４４検出状況

出土遺物(Fig.29) **218** 白磁碗Ⅳ類。口径15.8cm。 **219** 土師器丸底坏か。外底は糸切りで、板状痕が残る。押し出しの痕は認められず、内面の調整もヘラ磨きと思われるが不明瞭。口径13.6cm。遺構の時期は龍泉窯系青磁Ⅱ類が出土していることから13世紀前後以降と思われる。

ＳＫ－４１(Fig.26、ＰＬ.25)

Ｊ－３にて検出された。撹乱に大きく切られプラン、規模は不明である。底面は平坦であり、遺構のコーナとおもわれる部分がみられプランは長方形であったかと思われる。

出土遺物(Fig.31) **221** 甕。胎土は暗茶褐色～黒褐色で白色砂粒多量含む。胴部は丸味をおび、口縁は短く外反。口縁端部外面に刻み目を施す。外面はハケ目調整。内面は剥落著しく調整不明。口径19.2、器高24.8、底径7.0cm。 **222** 弥生土器甕。胎土は224と同じ。外底中央は粘土盤接合のためか若干凹む。底径8.8cm。遺構の時期は弥生時代前期である。

ＳＫ－４３(Fig.26)

Ｋ－３にて検出された。一辺105cmを測り、平面は略方形を呈する。残存深さは約30cmを測り、床面はほぼ平坦である。遺構の壁は直線的に立ち上がり、一部はえぐれる。貯蔵穴と思われる。

出土遺物(Fig.31) **223** 甕。底径8.4cm。遺構の時期は出土遺物が少ないが弥生前期と考えられる。

ＳＫ－４４

Ｈ－２で検出された小児用の合せ口壷棺である。直径約２ｍ、幅20～40cmの溝が円形に巡り、その中央部に片方の壷口縁を打ち欠き、２個体を合わせ口にして壷棺としている。溝は出土遺物もほぼ同時期のＳＤ－４６と一部接しながらつくられており、付設するようにつくられたと考える。壷の方向は東西方向を向いており上甕は東を向く。調査時での傾斜角度は１３°である。

出土遺物(Fig.31) **224** 上甕。土師器壷。口縁を打ち欠いているが、下甕と同じ二重口縁壷であったと思われる。長胴であるが胴部最大径はやや上位にある。外面はかなり細かなハケ目調整を施すが、器面剥落が著しく不明瞭。内面は手持ちヘラ削り、下半部は指押さえの痕が顕著。器高27.7cm。 **225** 下甕。二重口縁壷。口縁端部は外面につまみ出し、断面三角形に小さく肥厚する。上甕と同じく、長胴であるが胴部最大径はやや上位にありなで肩。外面はハケ目調整施すが、器面剥落著しく不明瞭。肩部に波状文あり。頚部と底部に指押さえの痕顕著に残る。口径24.4、器高37.0cm。

ＳＫ－５０(Fig.26)

Ｊ－１にて検出された。上面の入り口部は直径約50cmを測り、底面は長軸195cm、短軸135cmを測る。断面形はフラスコ形を呈する。底面はほぼ平坦であり、平面は楕円形を呈する。貯蔵穴である。

出土遺物(Fig.30) **220** 鉢。外面横方向の細かなヘラ磨き調整。底径12.8cm。弥生時代前期である。

ＳＫ－５５(Fig.26、ＰＬ.25)

Ｊ－２にて検出された。底面の長軸は200cm、短軸170cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。床面に遺物がみられた。貯蔵穴である。

出土遺物(Fig.32) **231** 鉢。胎土は赤褐色～暗褐色、粗砂粒を多量含む。底部から大きく外に開き、口縁は短く外反する。内外面全面に横方向のかなり精緻なヘラ磨きを施すが、内面口縁付近にはは指押さえの痕が残る。外底はヘラ状工具によるナデ調整。口径42.6、器高23.2、底径13.0cm。 **232** 鉢と思わ

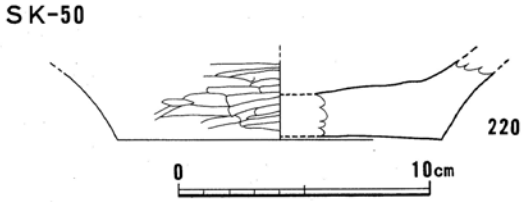


Fig.30 **土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図７(1/3)**

れる。胎土は赤褐色、白色粗砂粒を多量含む。外面は底部近くはハケ目調整、上からヘラ磨き。内面はナデ調整。外底はヘラ状工具によるナデ調整。底径10.8cm。 **233** 壷。胎土は黄褐色、白色粗砂粒を多量含む。肩部に細い沈線が二条巡る。外面は磨き調整と思われるが、磨滅著しく不明瞭。 **234** 甕。胎土は暗赤褐色、粗砂粒を多量含む。口縁はやや外反し外面端部には刻み目が入る。外底は粘土盤接合によりかすかに凹む。外面は縦方向のハケ目調整、内面には焦げが付着。口径23.9、器高22.4、底径9.2cm。 **235** 甕。胎土は赤褐色、粗砂粒を多量含む。磨滅著しく不明瞭であるが、内外に磨き痕が若干残る。口径24.4cm。 **236** 甕。胎土は淡黄白色、粗砂粒を多量含む。口縁は大きく外反し外面端部に刻み目を施す。外面はハケ目調整。口径17.6cm。 **237** 甕。胎土は暗褐色～黒褐色、粗砂粒を多量含む。外面はハケ目調整。外底は粘土盤接合により若干凹版。底径7.0cm。**238**土製紡錐車。直径3.8、厚さ1.1cm、中央に径0.5cmの穿孔。**239**打製石器。縁辺に粗い打割調整を加える。長さ8.3cm、幅8.0、厚み3.2cm。弥生時代前期である。

Ｐｈ．５　貯蔵穴５５調査状況

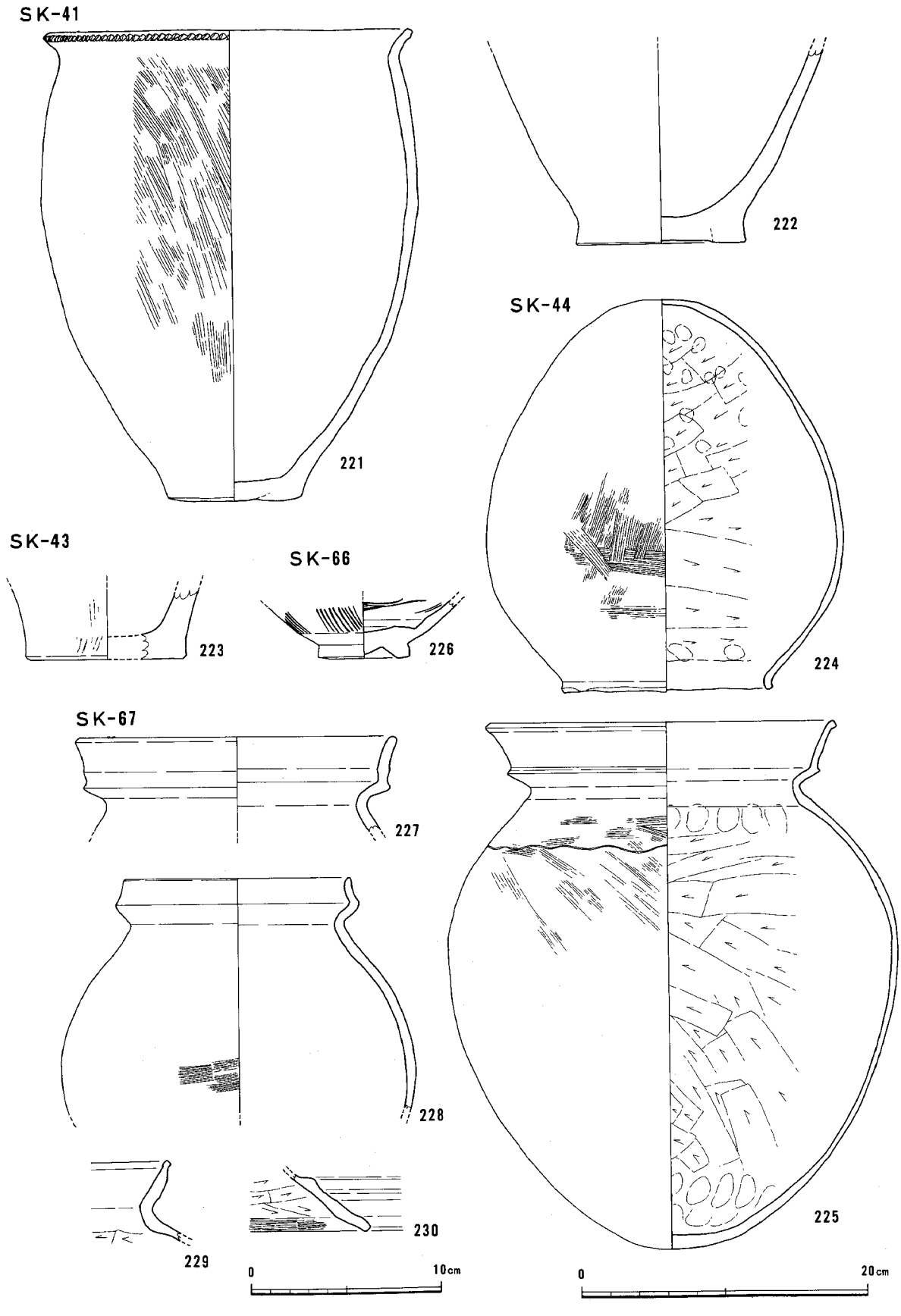


Fig.31 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図８(1/3)

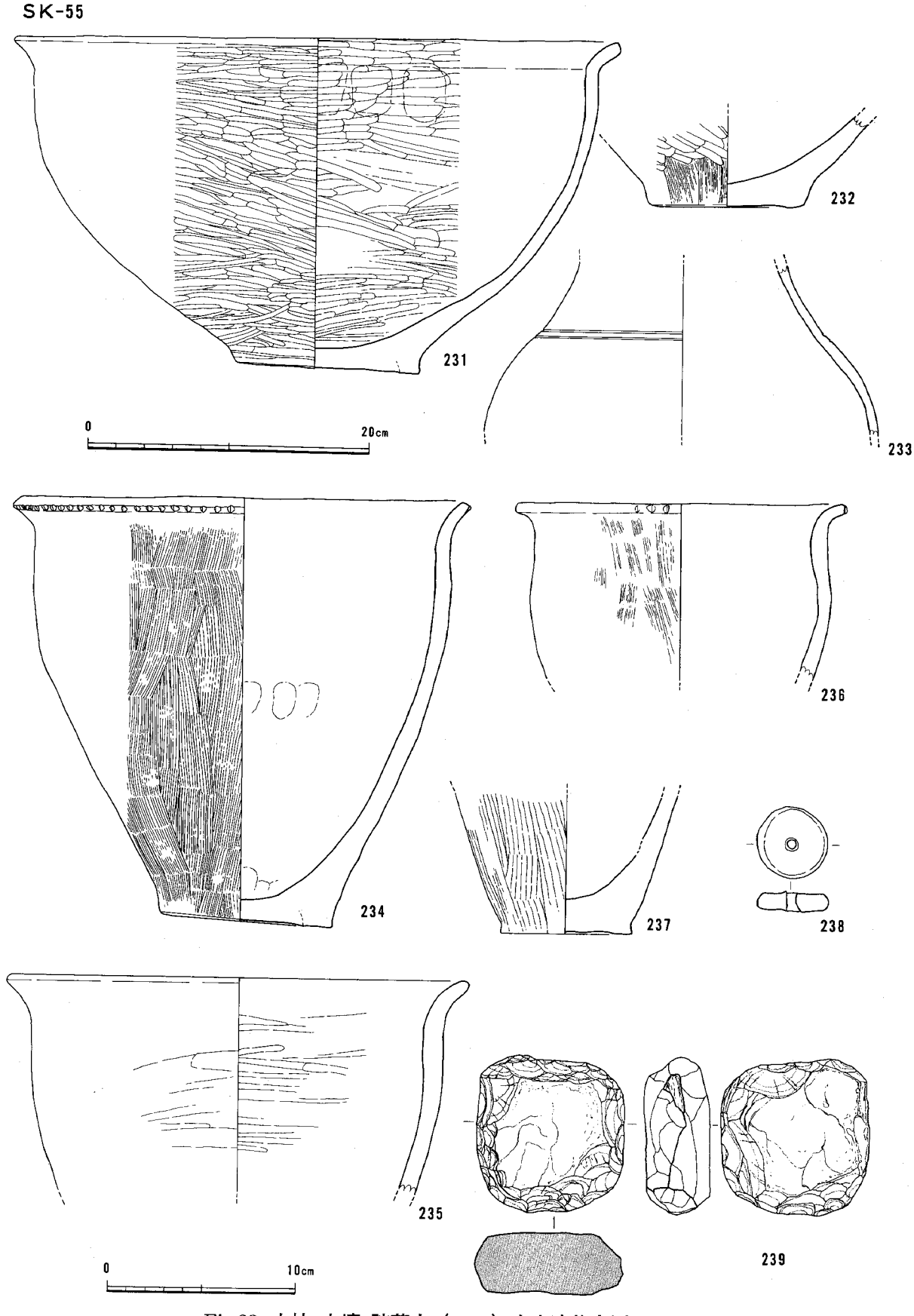


Fig.32 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図９(1/3)

ＳＫ－６６(Fig.33)

Ｄ－３にて検出された。長軸130cmを測り、平面は不定形を呈する。柱穴の切り合いかとも思われるが、明瞭な切り合いはみられなかった。

出土遺物(Fig.31) **226** 同安窯系青磁碗。高台径4.8cm。遺構の時期は出土遺物が少なく不確定だが、12世紀後半以降と思われる。

ＳＫ－６７(Fig.33)

Ｄ－３にて検出された。調査区の南端あたり、遺構はさらに南側に広がる。残存深さは約10cmであり、東側にむけて高くなる。

出土遺物(Fig.31) **227** 土師器二重口縁壷。口縁端部は丸くおさまる。磨滅著しく調整不明。口径16.8cm。 **228** 土師器二重口縁壷。頸部の屈曲強く、口縁は短く内傾する。磨滅著しく調整は不明瞭だが、外面一部かなり細かなハケ目調整が認められる。口径11.8cm。 **229** 土師器甕。 **230** 土師器鼓形器台。内面は手持ちヘラ削り、下位は横方向のハケ目調整。遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

ＳＫ－６８(Fig.33)

Ｄ－３にて検出された。長軸140cm、短軸60cmを測り、平面は長楕円形を呈する。深さは約15cmを測る。

出土遺物　土師器小皿片、青磁片が出土している。

ＳＫ－６９(Fig.33、ＰＬ.26)

Ｄ－３，Ｄ－４，Ｅ－３，Ｅ－４にて検出された。長軸195cm、短軸190cmを測り、平面は隅丸方形を呈する。残存深さは約30cmを測る。底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.34) **240** 土師器小皿。底部糸切りか。口径8.4、器高1.0cm。 **241** 土師器小皿。外底部糸切りか。口径8.8、器高1.0cm。 **242** 土師器小皿。底部糸切り。口径9.6、器高1.3cm。 **243** 土師器坏。底部糸切り。口径12.6、器高2.2cm。 **244** 瓦器椀。高台小さく断面三角形を呈する。内外磨き調整。高台径7.0cm。 **245** 土鍋。口縁は逆L字状に外折し、上端面は縄目を押圧する。内面はハケ目調整。 **246** 滑石製鍋。縦耳が口縁端部に付く。欠損品を再加工しようとしたのか、破面に溝が二条入る。遺構の時期は土師器の法量と、土鍋、同安、龍泉窯系青磁I類があることから12世紀後半代～13世紀代と思われる。

ＳＫ－７１(Fig.33)

Ｄ－３，Ｅ－３にて検出された。長軸385cm、短軸200cmを測り、平面は隅丸長方形を呈し、長軸は磁北に向く。残存深さは10cmを測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.34) **247** 須恵器ははそう。外面下部は回転ヘラ削り、上から胴部最大径を挟んで上下にカキ目を入れる。外面頸部下に一条沈線が巡る。 **248** 須恵器甕。口縁端部は上下に拡張する。外面口縁下には突帯が巡り、その下には波状文を施す。

ＳＫ－７２(Fig.33)

Ｅ－３にて検出された。長軸460cmを測り、平面は不定形を呈する。底面には凹凸がみられる。

出土遺物(Fig.34) **249** 須恵器脚付き椀。脚は撥状に開き、体部は真っ直ぐ上にのびる。体部下位は回転ヘラ削り、体部中位の二条の沈線を挟んで上下にカキ目を施す。

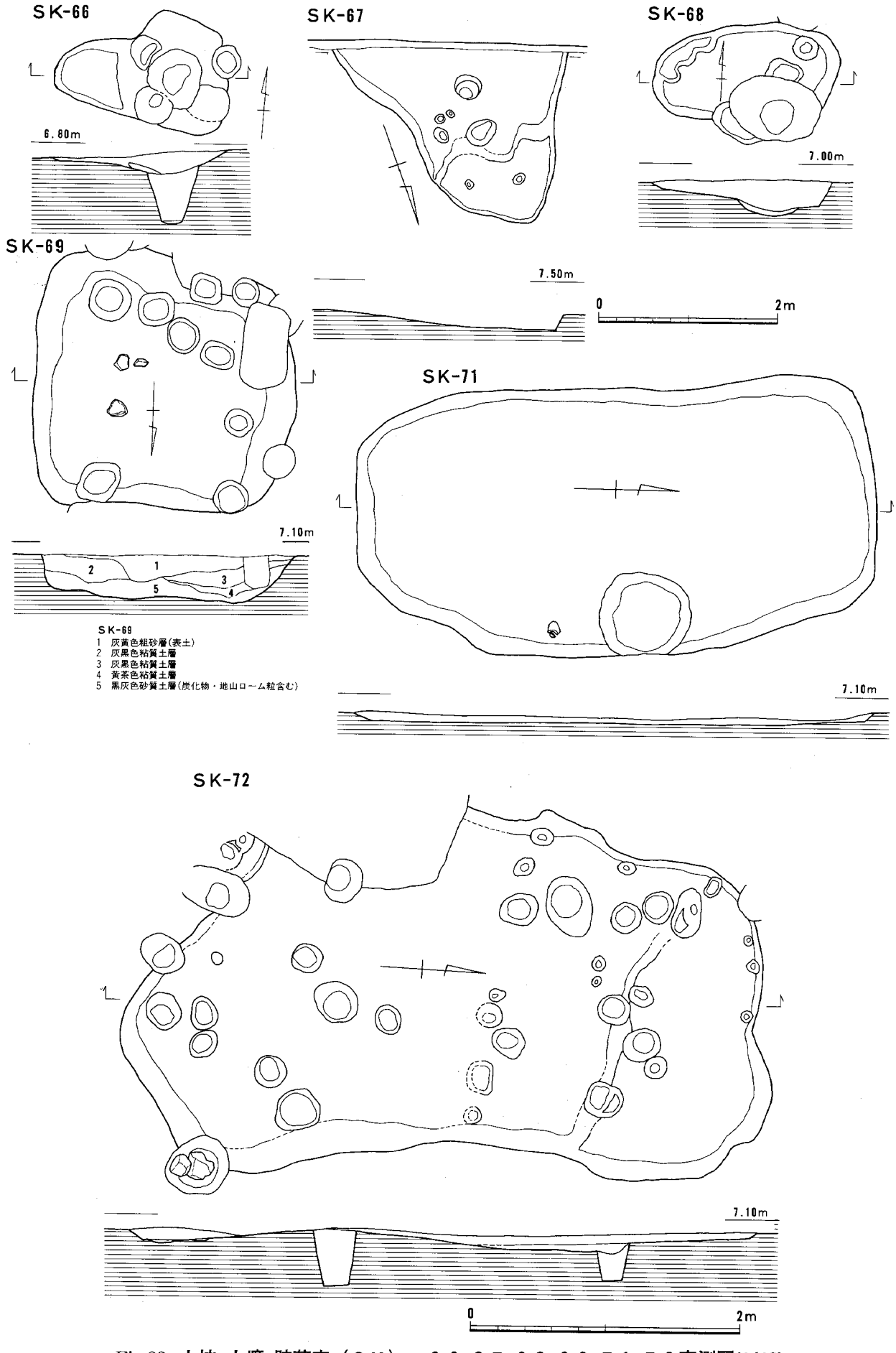


Fig.33 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）－６６,６７,６８,６９,７１,７２実測図(1/40)

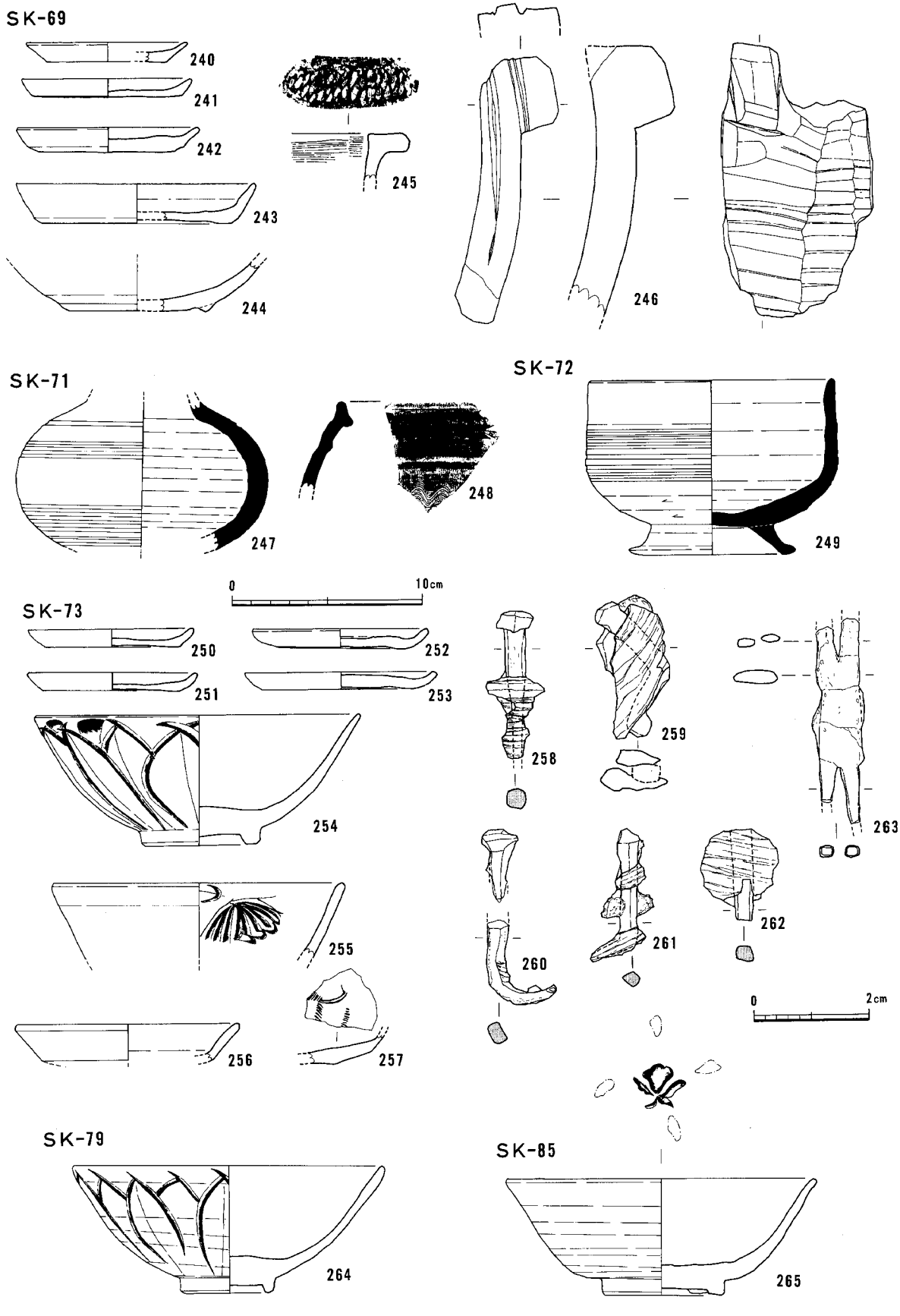


Fig.34 土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）出土遺物実測図10(1/3、1/1)

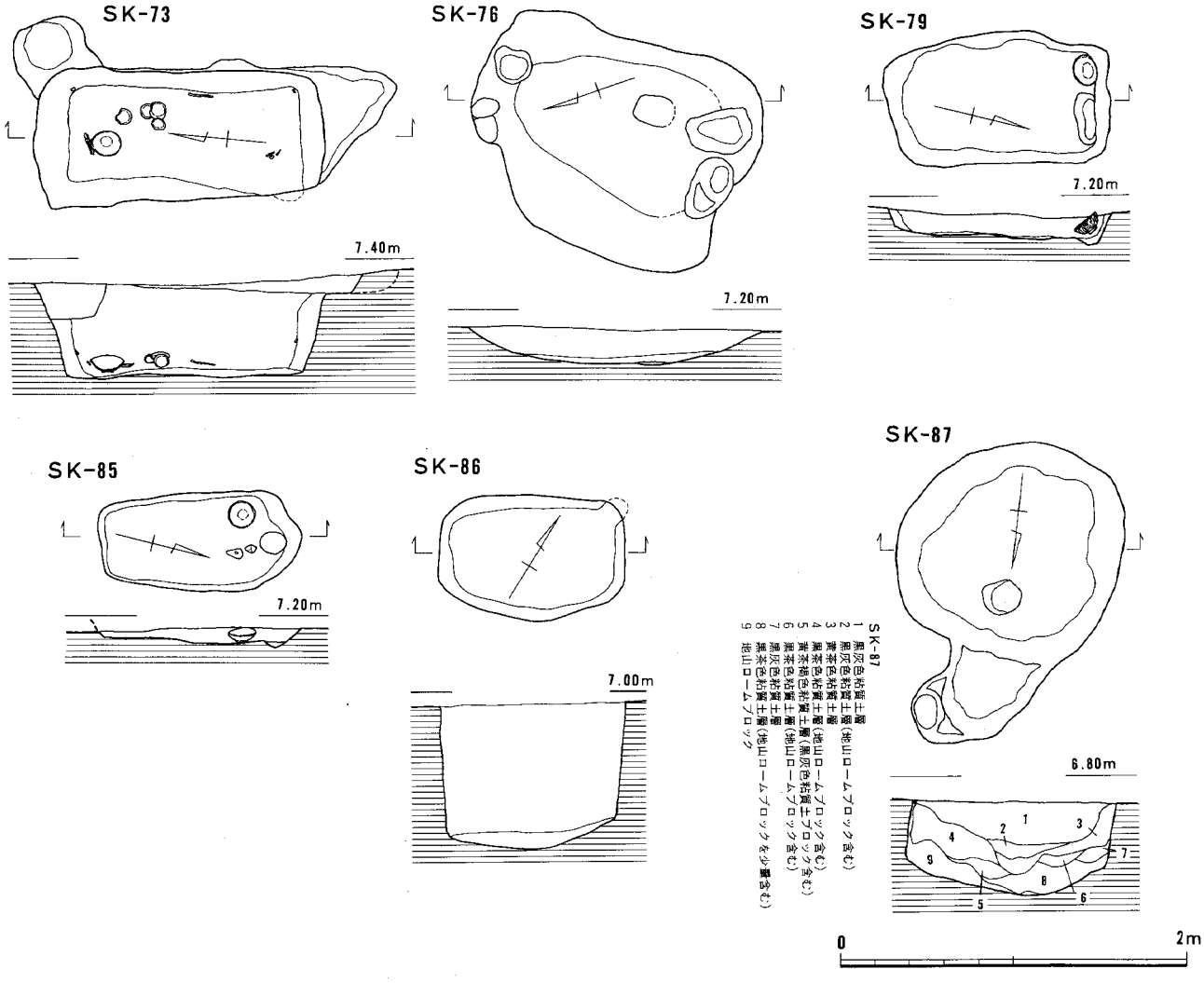


Fig.35 **土坑・土壙・貯蔵穴（ＳＫ）－７３,７６,７９,８５,８６,８７実測図(1/40)**

ＳＫ－７３ (Fig.35、ＰＬ.26)

Ｆ－３にて検出された墓である。長軸165cm、短軸75cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。残存深さは約50cmを測り、底面は平坦である。鉄釘がみられることから木棺墓である。

出土遺物(Fig.34) **250～253** 土師器小皿。すべて外底部糸切り。法量(口径-器高)は、順に8.6-1.0、8.8-1.0、9.2-1.0、10.0-1.0cm。 **254** 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。外面には複弁鎬蓮弁文を施す。畳付けから高台内は露胎。口径17.0、器高6.9、高台径6.2cm。 **255** 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。内面には劃花文を施す。口径15.2cm。 **256** 同安窯系青磁皿。口径11.6cm。 **257** 同安窯系青磁皿。外底は施釉後釉剥ぎ。 **258～262** 鉄釘。断面は方形と思われる。いずれも木質が付着する。 263 鉄製品。不明。埋葬時期は13世紀前後～前半代と思われる。

ＳＫ－７６ (Fig.35)

Ｄ－２にて検出された。長軸160cm、短軸120cmを測り、平面は不定形を呈する。残存深さは約20cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物　手づくねの球状をした不明土製品が１点のみ出土している。

ＳＫ－７９(Fig.35、ＰＬ.27)

Ｅ－２にて検出された墓である。長軸130cm、短軸75cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。残存深さは約15cmを測り、底面は平坦である。

出土遺物(Fig.34) **264** 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。外面には鎬蓮弁文を施す。畳付けから高台内は露胎。口径16.3、器高6.7、高台径4.9cm。遺構の時期は出土遺物から13世紀前後～前半代と思われる。

ＳＫ－８５(Fig.35、ＰＬ.27)

Ｆ－２，Ｆ－３にて検出された。長軸115cm、短軸55cmを測り、平面は略隅丸長方形を呈する。長軸方向は磁北からややずれる。残存深さは約10cmを測り、南側に向けて高くなる。

出土遺物(Fig.34) **265** 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。内底に印花文施す。畳付けから高台内は露胎。内底四ヶ所に目跡が残り、外底にはハマが付着する。口径16.2、器高6.1、高台径6.4cm。遺構の時期は出土遺物から12世紀後半代と思われる。

ＳＫ－８６(Fig.35)

Ｆ－３にて検出された。105長軸cm、短軸70cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。遺構残存深さは80cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＫ－８７(Fig.35)

Ｂ－２，Ｃ－２にて検出された。直径130cmを測り、平面は略円形を呈する。残存深さは約50cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物　土師器片、須恵器の大型甕破片が出土している。

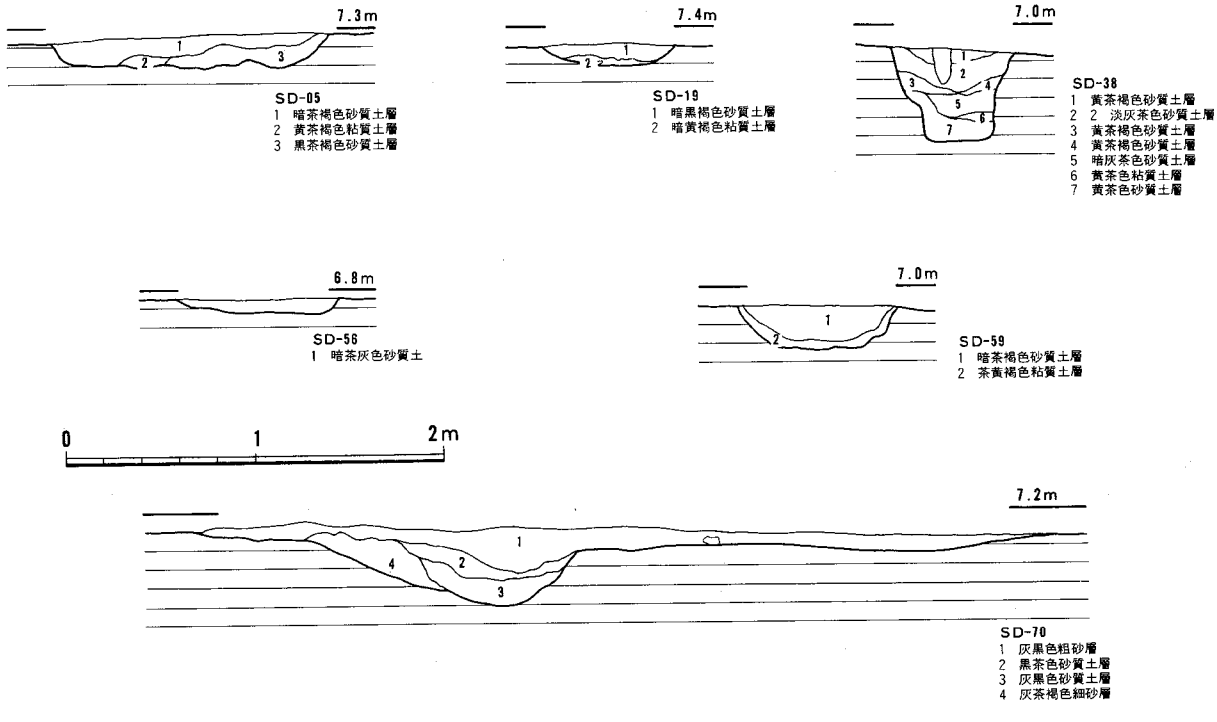


Fig.36 **溝（ＳＤ）０５,１９,３８,５６,５９,７０実測図(1/40)**

溝（ＳＤ）

ＳＤ－０５(Fig.36)

Ｆ－２，Ｇ－２で検出されたＮ－18°－Ｗ方向の溝である。確認された長さは約7.5m、幅は上端で約1.5mを測る。残存する深さは15～20cmであり、底面はやや平坦である。覆土は上から暗茶褐色砂質土、黄茶褐色粘質土、黒茶褐色砂質土であり、水の流れを示す粗砂の堆積はみられない。

出土遺物(Fig.37) **267** 須恵器の壺口縁破片である。 **268** は土師器壷の口縁破片である。

ＳＤ－１５

Ｆ－３、Ｇ－３にて検出された。方向は約Ｎ－28°－Ｗである。確認された長さは約６ｍ、幅は上端で最大1.2mを測る。北側に深さ60cm、直径約２ｍの溜まり状の土坑が付設する。溝の深さは約20cm前後であるが南から北側にかけて緩やかに低くなっており、溜まり部にむかっている。遺構の半分ずつを別の調査区で確認したため全体の写真は撮影されていない。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物(Fig.37) **269** 土師器甕。口縁内面の屈曲は明瞭。口径18.0cm。他に須恵器の高坏破片などが出土している。

ＳＤ－１９(Fig.36、ＰＬ.28)

Ｇ－２，Ｈ－２，Ｈ－３にて検出された。方向はほぼ磁北方向である。確認された長さは42m、幅約70cmを測る。深さは10cm程度であるが下端の幅は均一で直線的にのびる。覆土は上から暗黒褐色砂質土、暗黄褐色粘質土である。

出土遺物(Fig.37) **270** 土師器小皿。糸切り。口径8.4、器高1.1cm。 **271** 土師器小皿。糸切り。口径9.2、器高1.2cm。遺構の時期は出土遺物から中世とおもわれる。

ＳＤ－３８(Fig.36)

確認できた長さは約５ｍで東側は撹乱に切られる。西側はＳＤ－１５同様溜まり状の遺構で終わる。Ｎ－８７°－Ｅを測る東西方向の溝である。幅は上端で80cmから１ｍ、下端は約30cmを測り、壁の立ち上がりは強い。溜まり状遺構の深さは約35cmであり、不定形を呈する。覆土は上から黄茶褐色砂質土、淡灰茶色砂質土、黄茶褐色砂質土、暗灰茶色砂質土、黄茶色粘質土、黄茶色砂質土である。水が流れる状況にはなく、水が溜まっていたと考えられる。

出土遺物(Fig.37) **272** 須恵器壷。口縁端部は外面に断面三角形に肥厚し、その下に突帯が一条めぐる。突帯下に一条、頚部中位あたりに三条の沈線が巡る。外面はカキ目を施し、沈線の間にはヘラ状工具の先端によって縦方向の沈線を入れる。口径32.8cm。 **273** 土師器鉢ないしは脚付き椀。胎土は赤褐色で細かい。外面はカキ目が施され、口縁下と体部中位下にそれぞれ三条の沈線が巡る。口径11.6cm。遺構の埋没時期は出土遺物から古墳後期と考えられる。

ＳＤ－４６

Ｉ－１，Ｉ－２にて検出された。石蓋土壙墓群を構成する溝と思われる。溝の幅は40～100cm、深さは約25cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土であった。復元直径は約４ｍほどであろうと思われるが中央部を立ち割ったが遺構はみられなかった。地上に構築される施設も予想されるが、それを裏付けるものはみられなかった。遺構の南側において底面に接する状態で壷１点を検出した。

出土遺物(Fig.37) **274** 土師器壷。口縁は二重口縁で短く直立する。口縁立ち上がりは明瞭で段を有する。口径8.5cm。 **275** 土師器二重口縁壷。口径19.0cm。 **276** 土師器二重口縁壷。磨滅著しく調整不明。口径18.0、器高33.0cm。遺構の時期は出土遺物から古墳初頭と考えられる。

ＳＤ－４９

Ｊ－１，Ｊ－２，Ｋ－２にて検出した。残存する幅は上端で1.8m、深さは35cmを測る。底面のレベルは北側から緩やかに弧を描きながら低くなり、東方向へ湾曲する。覆土は灰褐色砂質土の単層である。この遺構が屋敷を画する溝の南西角であると仮定すれば、現在調査区東側は急激な斜面になっているが、中世屋敷の北東側への広がりが予想される。

出土遺物　図化できないが龍泉Ⅱ類の碗の破片が出土しており、遺構の埋没時期は13世紀前後から前半代が考えられる。

ＳＤ－５６(Fig.36)

Ｂ－２，Ｃ－２，Ｃ－３にて検出された。方位はＮ－２°－Ｗをむく。検出された長さは約２１ｍを測り、さらに遺構は南側にのびる。幅は約１ｍで直線的にのび、底面のレベルは南側に向けて徐々に低くなる。覆土は暗茶灰色砂質土であった。

出土遺物(Fig37) **277** 須恵器坏蓋。口縁やや上に沈線が二条巡る。 **278** 須恵器甕。口縁は外面に若干肥厚する。外面には格子目叩き、内面にはあて具の痕が残る。口径23.4cm。出土遺物では古墳時代のものが出土しているが、覆土が他の遺構では中世にみられる土色に近いこともあり、遺構の時期については不明としたい。

Ｐｈ．６　　溝４６遺構検出状況

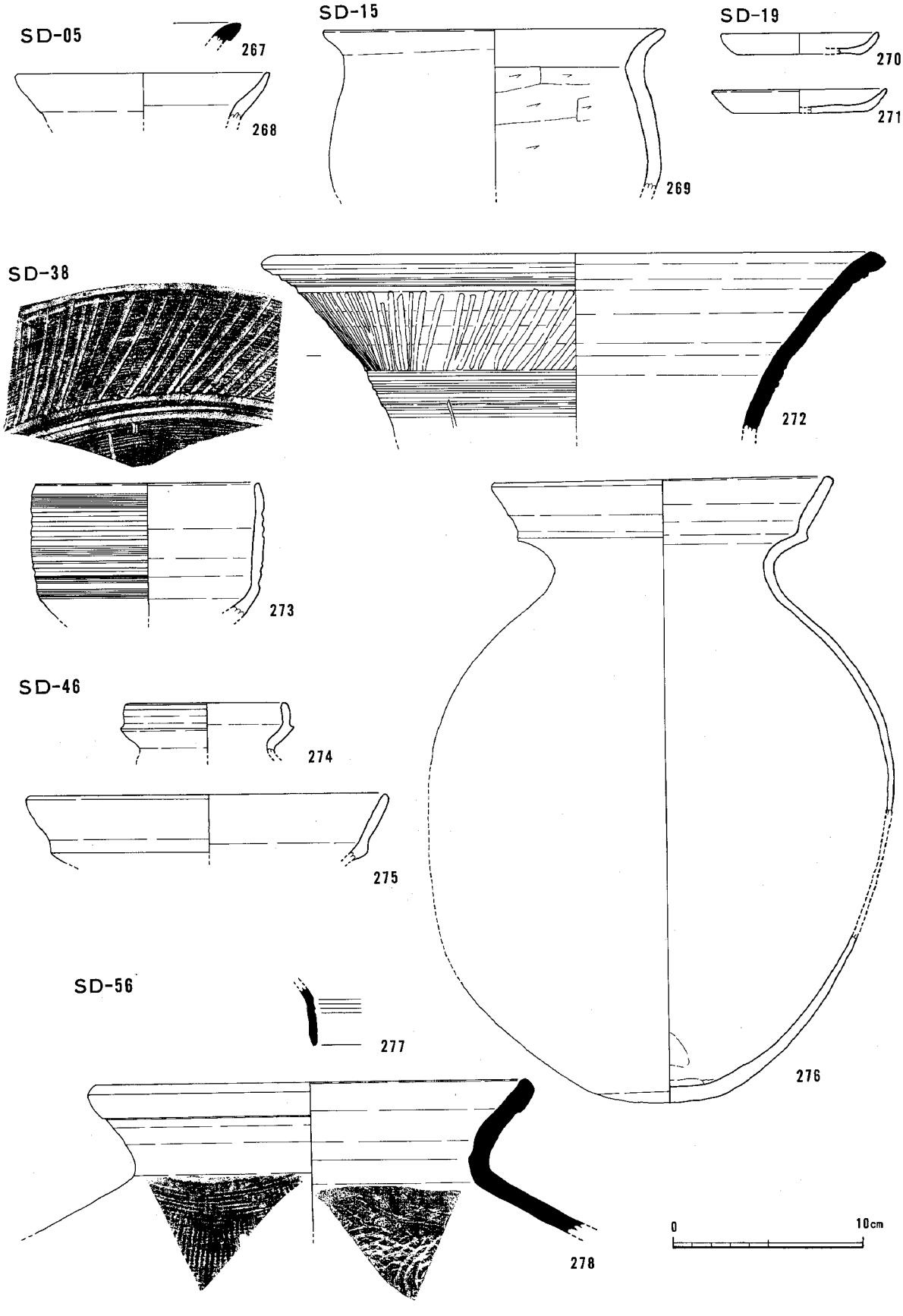


Fig.37 溝（ＳＤ）出土遺物１(1/3)

ＳＤ－５９(Fig.36、ＰＬ.28)

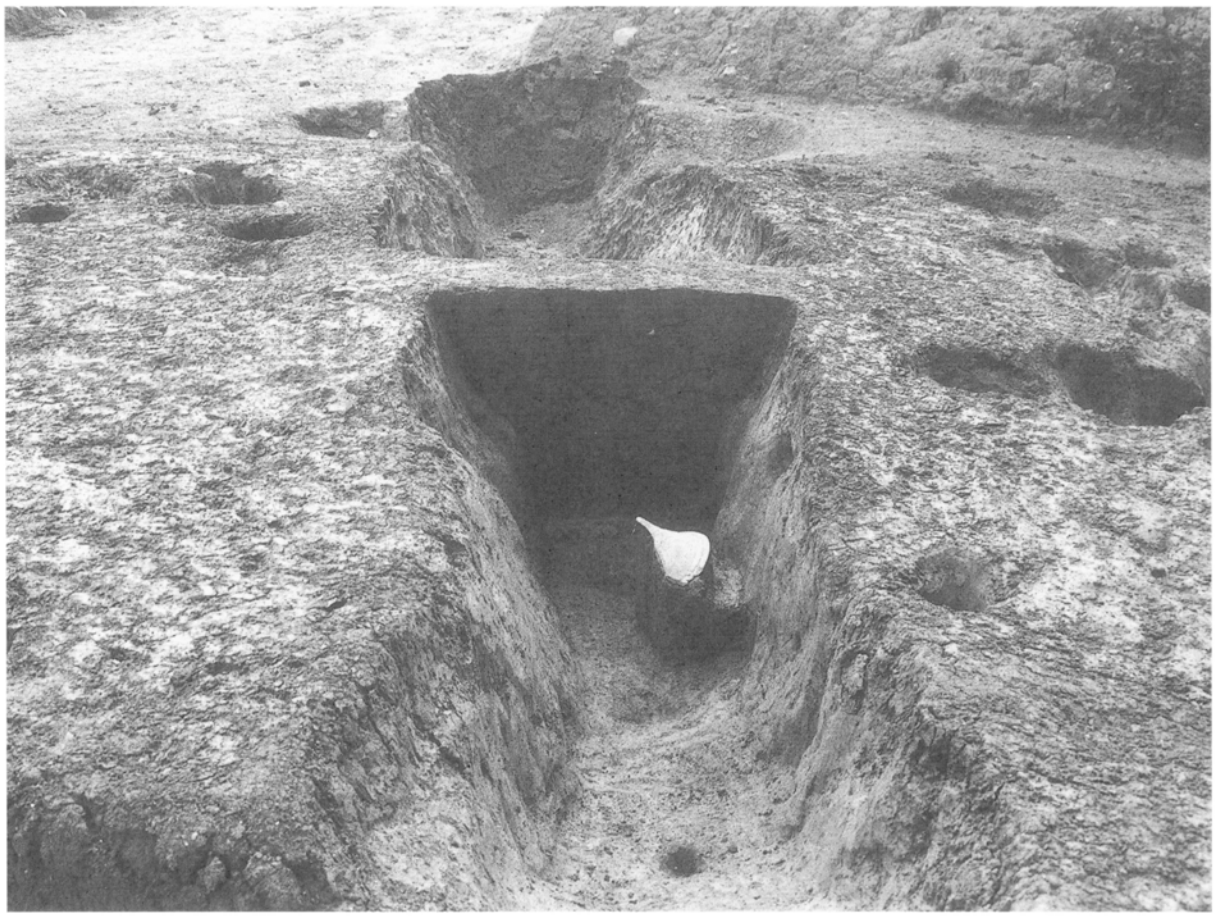
Ｃ－２，Ｃ－３，Ｄ－３にて検出した。方向はほぼ磁北とあっており、直線的にのびる。幅は0.8～1.2mで深さは約25cm程度である。底面のレベルは南北ほぼおなじである。覆土は上から灰茶褐色砂質土、茶黄褐色粘質土である。

出土遺物(Fig.38) **279** 須恵器坏蓋。鈕付く。口縁端部は断面三角形を呈するがかなり退化した感じで、内面に浅い沈線が巡る。天井部外面はヘラ切り離しのまま未調整。口径13.4、器高2.8cm。 **280** 須恵器坏身。外底はヘラ切り離し後、ヘラ状工具でナデ調整を施す。口径12.8、器高3.4、底径7.4cm。遺構の埋没時期は出土遺物から８世紀後半～9世紀初頭と考えられる。

ＳＤ－７０(Fig.36)

Ｄ－１、Ｄ－２、Ｅ－２、Ｅ－３、Ｆ－２、Ｆ－３にて確認された。平面は南北方向にあるが緩やかに西側に弧を描く。覆土は上層から灰黒色粗砂層、黒茶色砂質土、灰黒色砂質土、灰茶色粗砂層である。幅は2.5～3.8mを測るが、溝の掘り返しが複数回おこなわれていることは土層断面や平面の観察からも明らかであり、後世の削平を考慮すると当時の溝幅はさらに広がるものと考える。底面のレベルは南北端に特に傾斜はみられない。中央部に一部張り出す所があり、東西方向の溝ないしは何か別の施設が付くのか不明であるが、この部分の深さが全体の中で最も深い。

出土遺物(Fig.38) **281** 土師器小皿。糸切り。口径9.0、器高0.8cm。 **282** 土師器小皿。糸切り。口径9.4、器高0.9cm。 **283** 土師器坏。糸切り。口径13.0、器高2.6cm。 **284** 土師器坏。糸切り。口径13.3、器高2.3cm。 **285** 瓦質土器鍋。外面に格子目叩き、内面はハケ目調整を施す。周防型足鍋か。 **286** 白



Ｐｈ．７　溝３８遺物検出状況

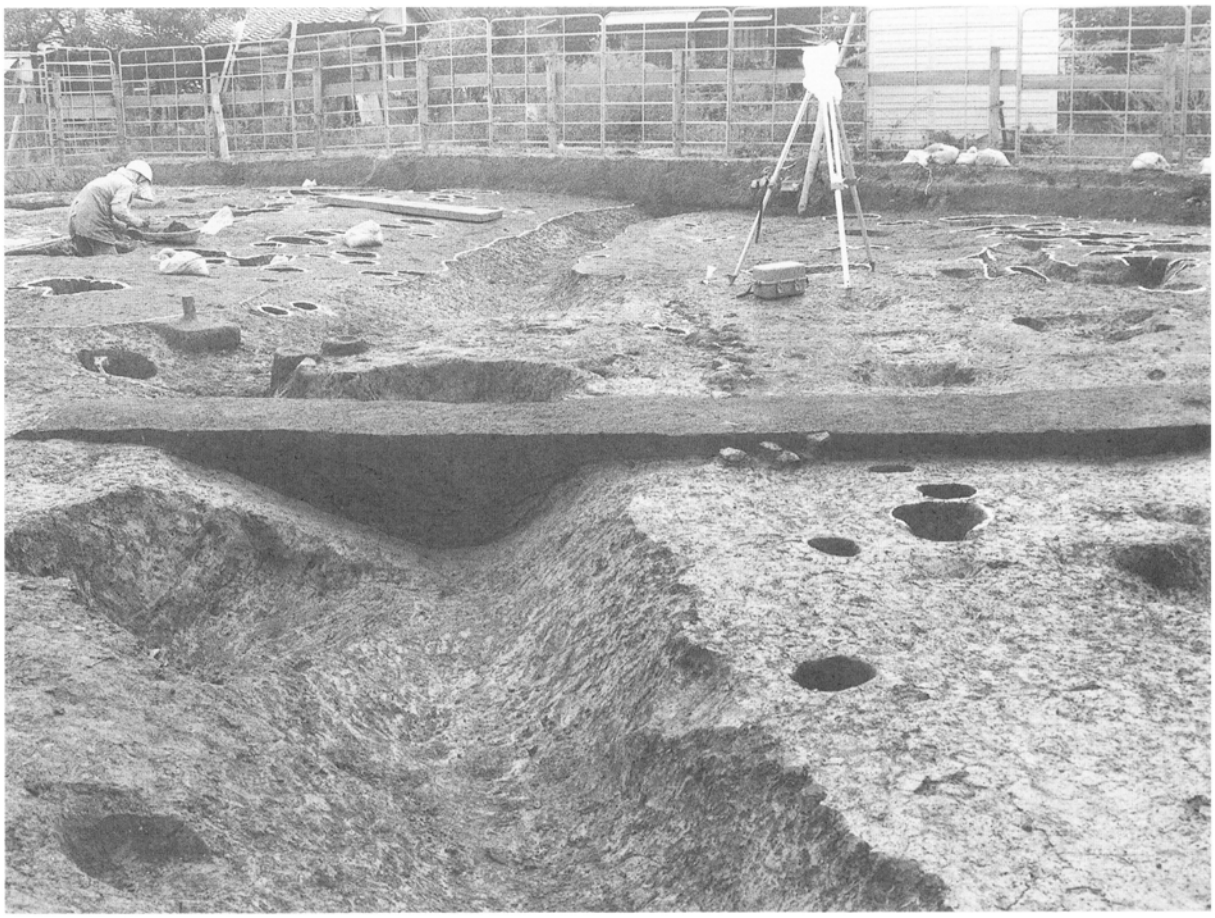
磁碗Ⅸ類。内底を輪状釉剥ぎする。高台径6.5cm。 **287** 白磁碗Ⅳ類。外底には墨書が残る。高台径7.2cm。 **288** 青磁碗。胎土は淡灰白色、白色と黒色微粒が入る。釉調は緑黄色不透明釉で、全面施釉。高台畳付けの釉は掻取り、内底には白色の目土が残る。高麗か。高台径6.7cm。 **289** 同安窯系青磁碗。高台径3.0cm。 **290** 青白磁碗。胎土は白色で精良、釉調はわずかに空色がかった透明釉。腰折れ。口径9.6cm。 **291** 滑石製品。石鍋の転用品か。表面に一ヶ所、裏面に二ヶ所穿孔途中の穴がある。遺構の埋没時期は土師器の法量と龍泉Ⅱ類が出土していることから13世紀前後～13世紀前半代と思われる。

ＳＤ－７５

Ｅ－２，Ｆ－２，Ｆ－３にて検出した。方向は南側はほぼＳＤ－７０に沿うが北側では２本に分かれ蛇行する。幅は1.5～２ｍを測り、深さは約20cmである。覆土は灰茶色砂質土であり、土層の観察では明確ではなかったが北側では複数に分かれることから溝の掘り返し、または切り合いなどがあることが考えられる。ＳＤ－７０同様台地の落ち際を巡るものであろう。

出土遺物(Fig.38) **292** 白磁碗。淡黄白色のきめ細かな胎土に乳白色の不透明釉がかかる。口径16.1cm。 **293** 白磁碗Ⅸ類。内底を輪状釉剥ぎする。高台径6.4cm。 **294** 青白磁碗。内面口縁下に沈圏線巡る。胎土は淡灰白色、きめ細かく精良。釉調は淡水色透明釉でよくとけている。口径15.4cm。 **295** 鉄製品。遺構の時期は土師器が少なく不確定だが、龍泉Ⅱ類あることから13世紀前後～13世紀前半代が考えられる。

ＳＤ－７７



Ｐｈ．８　　溝７０調査状況

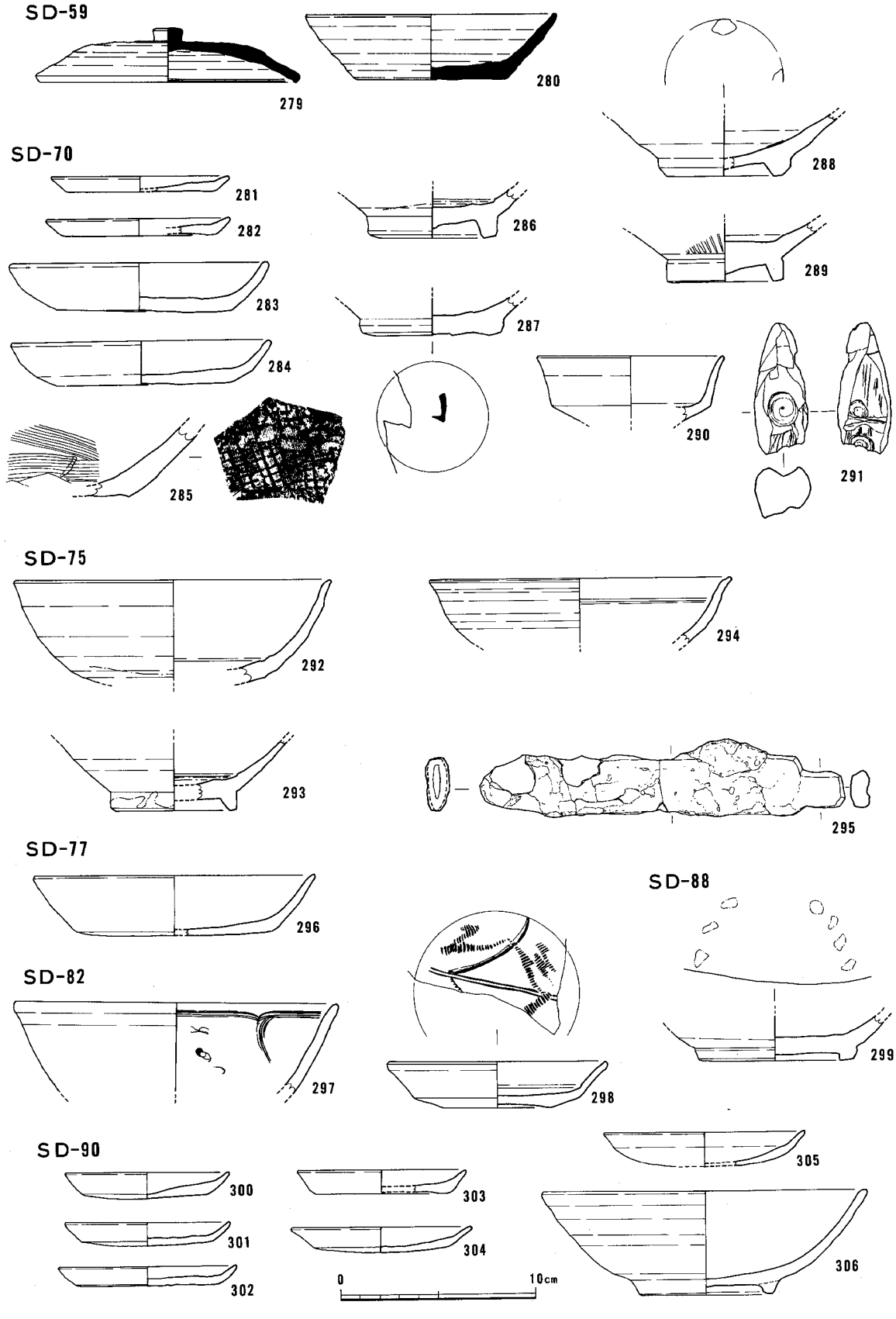


Fig.38 溝（ＳＤ）出土遺物２(1/3)

Ｆ－３にて検出された。ＳＤ－７５の東側で同じ方向を向く。南側では幅約1.2m、深さ15cmを測るが、北側ではプランが不明瞭となる。覆土はＳＤ－７５とよく似た灰茶色砂質土であった。断面形は緩やかなＵ字型をしており、底面のレベルから水の流れは北から南側に流れる。

出土遺物(Fig.38) **296** 土師器坏。糸切りと思われるが器面磨滅著しく不明瞭。口径14.2、器高3.1cm。遺構の時期は出土遺物が少なく不確定だが、龍泉Ｉ類が出土していることから古くとも12世紀後半代以降と考えられる。

ＳＤ－８２

Ｆ－３にて検出した。方向は磁北に直行する。確認できた長さは約3.5mであり、幅は90cmを測る。深さは10cmほどで、断面は緩やかなＵ字型を呈する。覆土は灰茶褐色砂質土であり、南北方向の溝とつながるものと考えられる。

出土遺物(Fig.38) **297** 龍泉窯系青磁碗Ｉ類。内面に劃花文施す。口径16.4cm。 **298** 同安窯系青磁皿。外底は施釉後釉剥ぎ。口径11.2、器高2.4、底径5.4cm。遺構の時期は出土遺物が少なく不確定だが、龍泉窯系、同安窯系遺物があることから古くとも12世紀後半代以降が考えられる。

ＳＤ－８８

Ｂ－２，Ｂ－３，Ｃ－２，Ｃ－３にて検出した。確認できた長さは5.2m、幅約60cm、深さは10cmを測り、直線的にのびる。方向はＮ－86°－Ｅを向く東西溝である。断面の形は緩やかなＵ字形を呈し、覆土は灰茶色砂質土である。

出土遺物(Fig.38) **299** 越州窯系青磁碗(精製品)。輪状高台で全面施釉。内底と高台畳付けに目痕が残る。高台径8.0cm。遺構の時期は遺物量が少量のため詳しくは不明であるが、中世の範疇でとらえられる遺構と考えられる。

ＳＤ－８９

Ｃ－３にて検出された。ＳＤ－９０に切られる。方向はＮ－８８°－Ｗを指し、直線的にのびる東西溝である。確認された長さは2.9m、幅約30cm、深い部分で８cmを測る。磁北方向と直行することからも複数の磁北方向の南北溝とつながるものと考えられる。

出土遺物　　遺構の時期は時期を特定できる遺物が出土していないが、ＳＤ－９０に切られるが、土師器片と陶磁器片がみられることからＳＤ－９０の時期を大きく遡らないものと考える。

ＳＤ－９０

Ｃ－３にて検出された。ＳＤ－８９を切る。溝がほぼ直角に屈曲した部分のみで、深さも８cm程度である。覆土はＳＤ－８９と近似する灰茶色砂質土である。幅は約50cmで、溝の方向は磁北に規制されている。底面上に張り付いた状態で遺物を検出した。

出土遺物(Fig.38) **300** 土師器小皿。ヘラ切り。口径8.4、器高1.3cm。 **301** 土師器小皿。ヘラ切りか。口径8.5、器高1.2cm。 **302** 土師器小皿。糸切りかヘラ切りか不明。口径9.0、器高1.0cm。 **303** 土師器小皿。糸切り。口径8.6、器高1.2cm。 **304** 土師器小皿。ヘラ切り。口径9.2、器高1.3cm。 **305** 瓦器小皿。磨滅著しく調整等不明。口径10.2、器高1.8cm。 **306** 瓦器椀。高台はやや太く断面略台形。磨滅著しく調整不明。口径16.6、器高5.4、高台径7.0cm。遺構の時期は土師器皿の底部切り離し技法に糸、ヘラが混在することと、龍泉Ｉ類があることから12世紀中～後半代が考えられる。

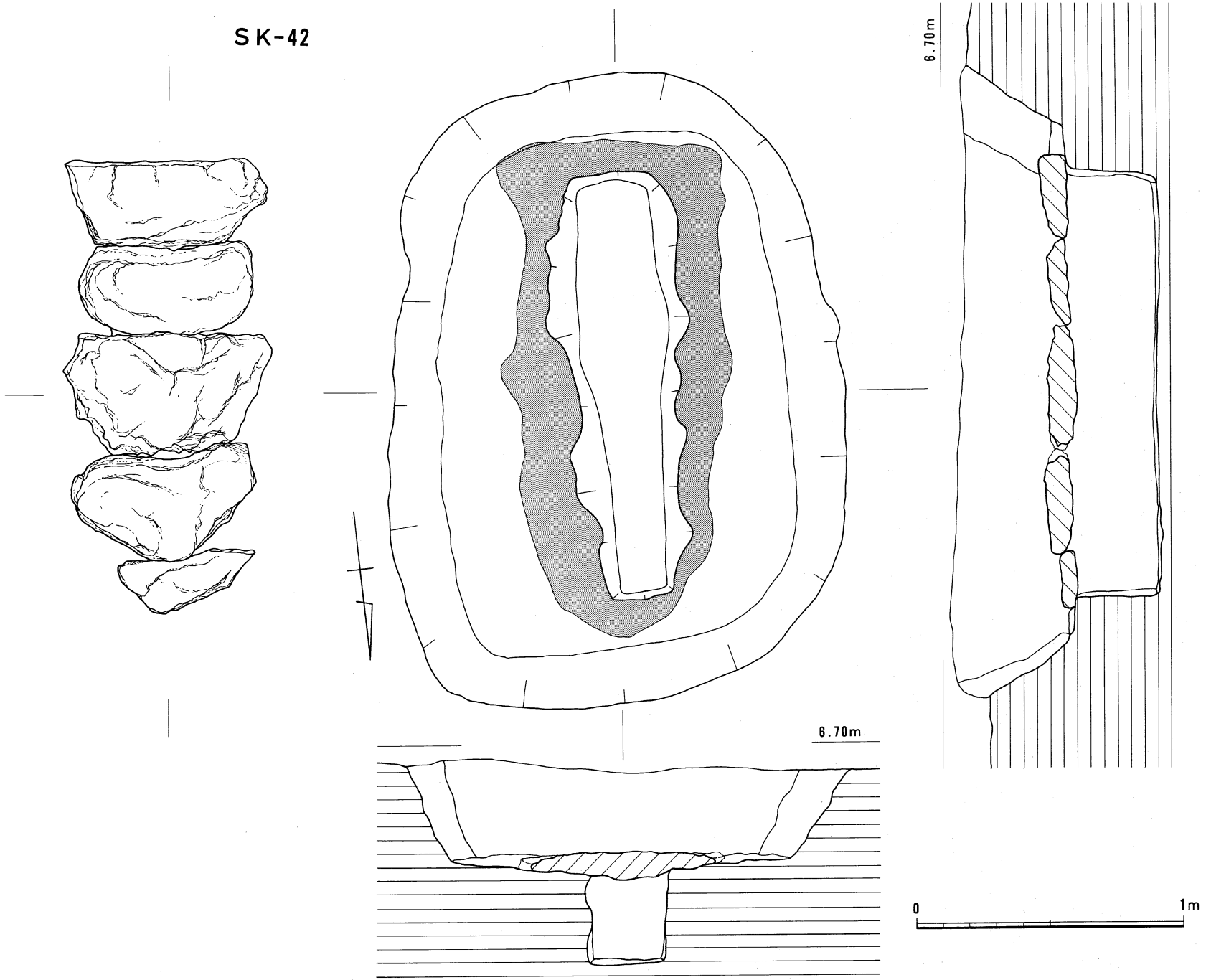


Fig.39 石蓋土壙墓ＳＫ－４２実測図(1/20)

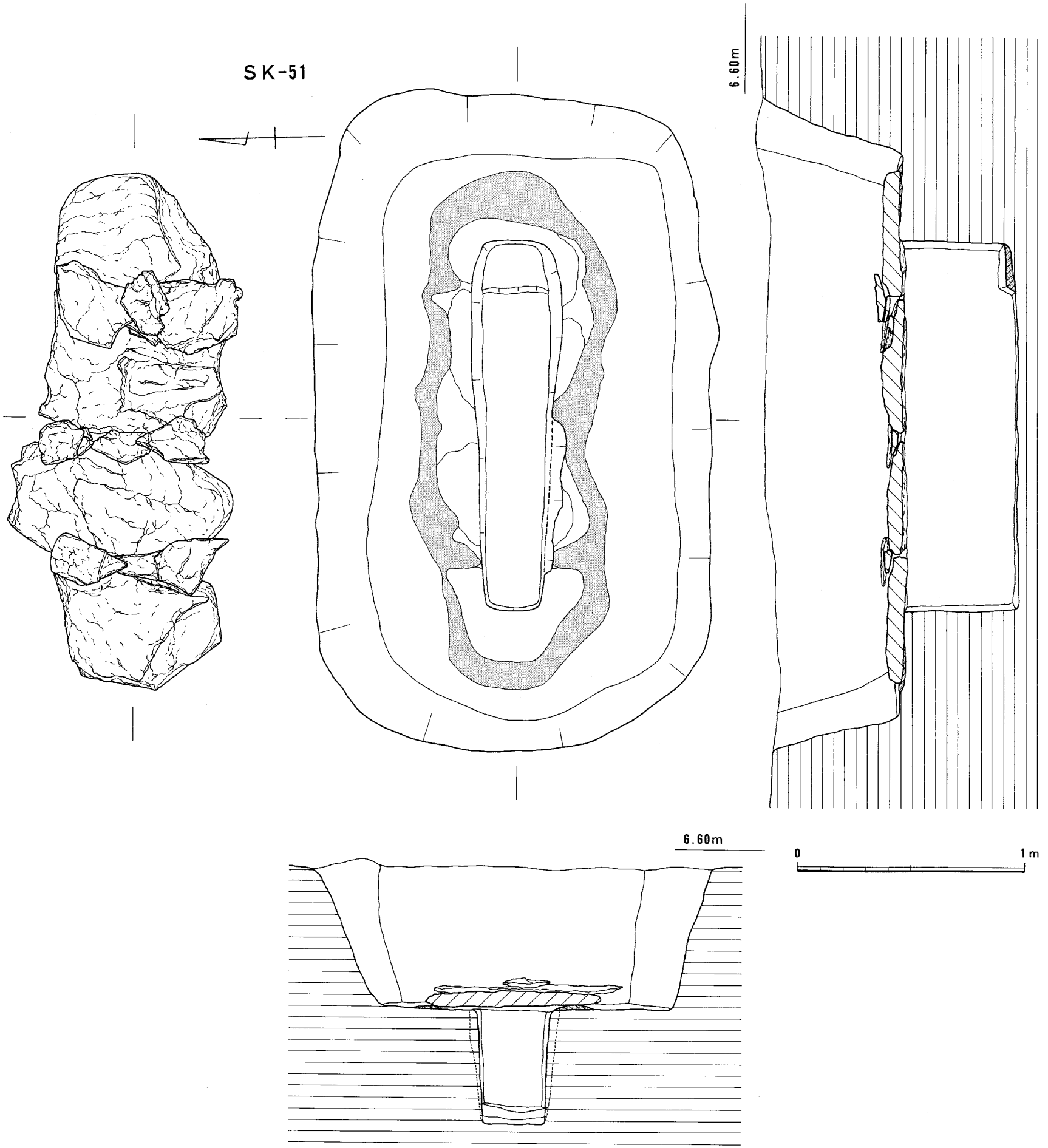


Fig.40　石蓋土壙墓SK-51実測図(1/20)

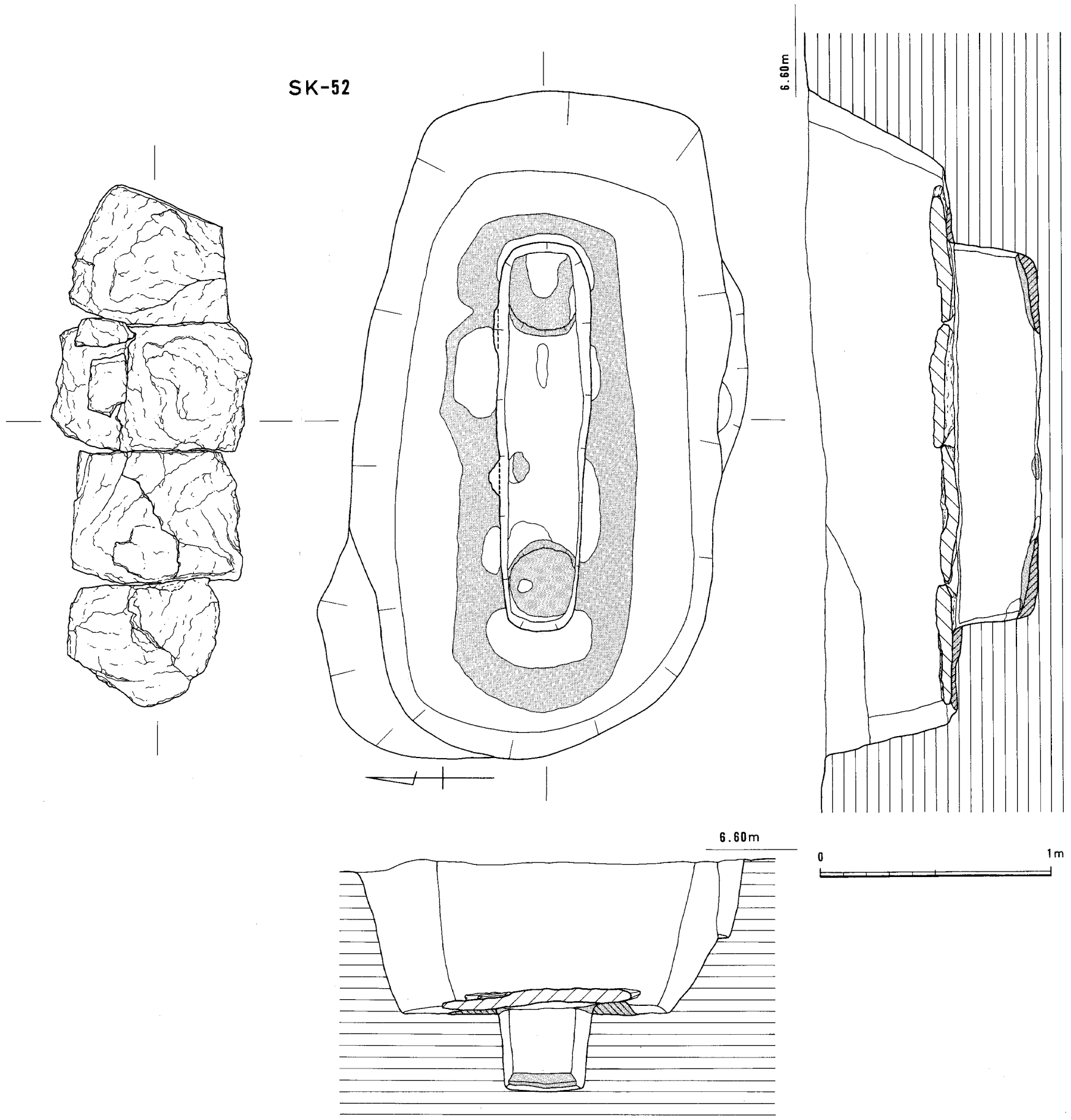


Fig.41　石蓋土壙墓ＳＫ-52実測図(1/20)

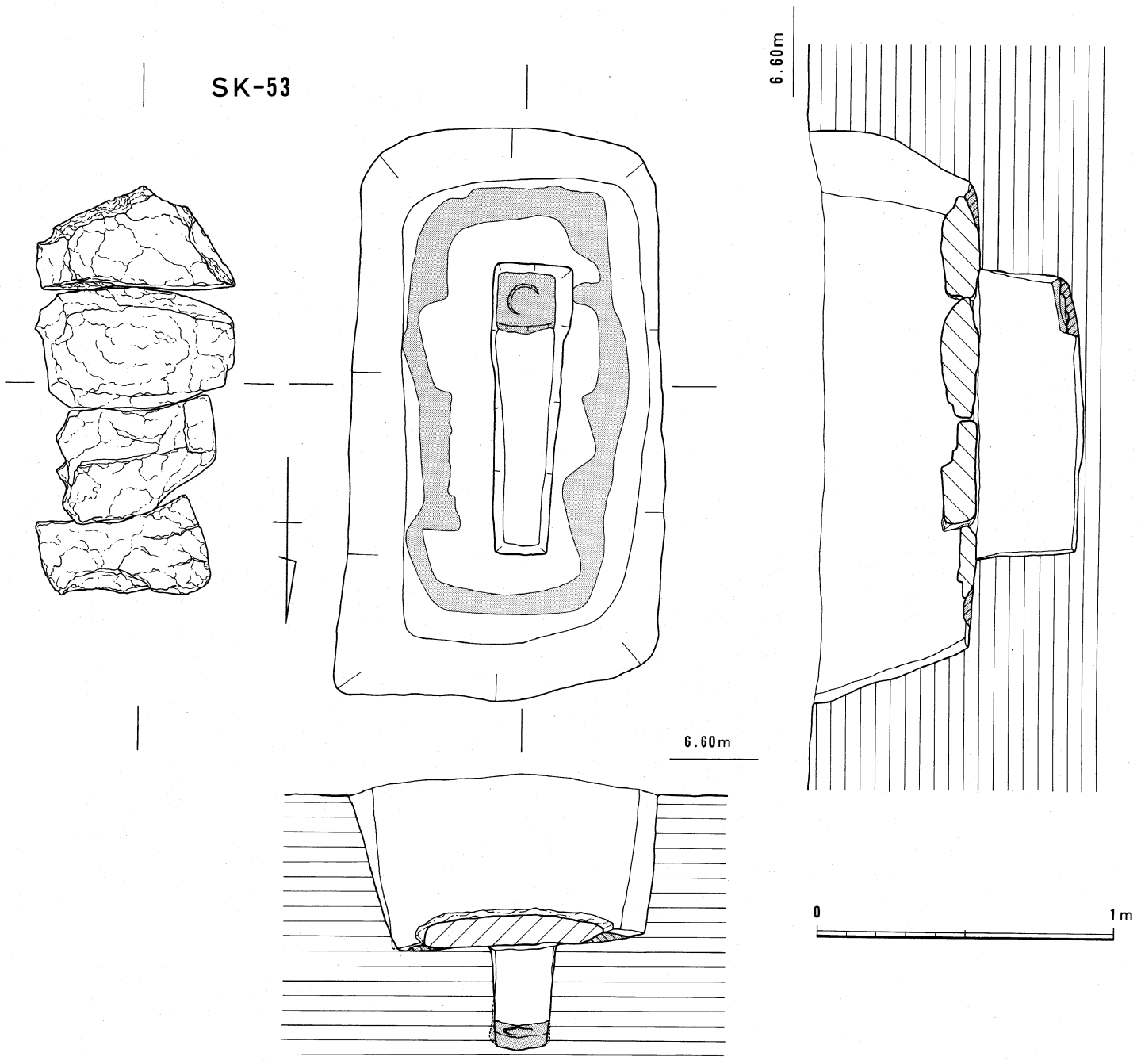


Fig.42　石蓋土壙墓SK-53実測図(1/20)

石蓋土壙墓

ＳＫ－４２(Fig.39、ＰＬ.29)

Ｊ－３，Ｋ－３にて検出された。一段目の掘りかた上端の平面は長円形を呈し、長軸273cm、短軸168cmを測り、残存深さは38cmを測る。床面は平坦であり、壁はやや傾斜をもってつくられている。二段目の掘りかた上を６石の玄武岩の板石と白色粘土を目張りにつかい塞いでいる。北側から２石目と３石目の間に透き間があいているが、掘り下げ時に誤って１石取り外してしまったが、隙間を塞ぐように玄武岩の板石が白色粘土で目張りして据えられていた。二段目の掘りかた上端の平面はクサビ形を呈し、長軸158cm、広部38cm、狭部25cmを測る。深さは35cmを測り、壁は平坦につくられており、直線的に立ち上がる。壁面には工具痕、板状の痕跡等はみられなかった。壁面、床面には赤色顔料の塗布が全面にてみられた。二段目の掘りかたの平面形から幅広側を頭位と仮定するなら南側を向くこととなる。

出土遺物(Fig.43) **307** 土師器甕。口縁端部をつまみ出すが不明瞭。口縁内面の屈曲明瞭。墓壙の掘りかたより出土した。

ＳＫ－５１(Fig.40、ＰＬ.30)

Ｉ－１，Ｊ－１にて検出された。一段目の掘りかた上端の平面は隅丸長方形を呈し、長軸288cm、短軸176cmを測り、残存深さは62cmを測る。床面は平坦であり、壁はやや傾斜をもってつくられている。二段目の掘りかた上を玄武岩の大きな板石４枚と複数の小板石とを組み合わせ塞いでいる。白色粘土は板石の下側にももぐり込んでいることから、二段目の掘りかた上端の周囲に粘土をおいてから大石を据えている。二段目の掘りかた上端の平面は長方形を呈し、長軸162cm、東側小口部30cm、西側小口部25cmを測る。深さは50cmを測り、壁は平坦につくられており、直線的に立ち上がる。壁面には工具痕、板状の痕跡等はみられなかった。壁面、床面には赤色顔料の塗布が全面にてみられた。二段目の掘りかたの平面形から幅広側を頭位と仮定するなら東側を向くこととなる。

ＳＫ－５２(Fig.41、ＰＬ.31)

Ｊ－１，Ｊ－２にて検出された。一段目の掘りかた上端の平面は長楕円形を呈し、長軸287cm、短軸157cmを測り、残存深さは60cmを測る。床面は平坦であり、壁はやや傾斜をもってつくられている。二段目の掘りかた上を玄武岩の大きな板石４枚と玄武岩の小片とを組み合わせ塞いでいる。白色粘土は板石の下側にももぐり込んでいることから、二段目の掘りかた上端の周囲に粘土をおいてから大石を据えている。二段目の掘りかた上端の平面は長方形を呈し、長軸170cm、東側小口部30cm、西側小口部27cmを測る。深さは36cmを測り、壁は平坦につくられており、直線的に立ち上がる。壁面には工具痕、板状の痕跡等はみられなかった。壁面、床面、石蓋の内面側には赤色顔料の塗布が全面にてみられた。二段目の掘りかたの平面形から幅広側を頭位と仮定するなら東側を向くこととなる。

出土遺物(Fig.43) **308** 土師器鉢。内面はハケ目調整、外面下位は手持ちヘラ削り。口径19.0、器高4.2cm。 **309** 土師器鼓形器台。内面はヘラ削りした後、ハケ目調整を施す。口径19.8cm。墓壙の掘りかた内より出土した。

ＳＫ－５３(Fig.42、ＰＬ.32)

Ｉ－１，Ｉ－２，Ｊ－１，Ｊ－２にて検出された。一段目の掘りかた上端の平面は隅丸長方形を呈し、長軸191cm、短軸105cmを測り、残存深さは55cmを測る。床面は平坦であり、壁はやや傾斜をも

ってつくられている。二段目の掘りかた上を玄武岩の板石４石で塞いでいる。白色粘土は板石の下側にももぐり込んでいることから、二段目の掘りかた上端の周囲に粘土をおいてから大石を据えている。二段目の掘りかた上端の平面はクサビ形を呈し、長軸98cm、南側小口部27cm、北側小口部17cmを測る。深さは37cmを測り、壁は平坦につくられており、直線的に立ち上がる。壁面には工具痕、板状の痕跡等はみられなかった。壁面、床面、石蓋の内面側には赤色顔料の塗布が全面にてみられた。床面南端には、厚さ約３cmの白色粘土を枕状に敷いた部分がみられた。二段目の掘りかたの平面形と枕状の遺構から頭位は南側を向く。

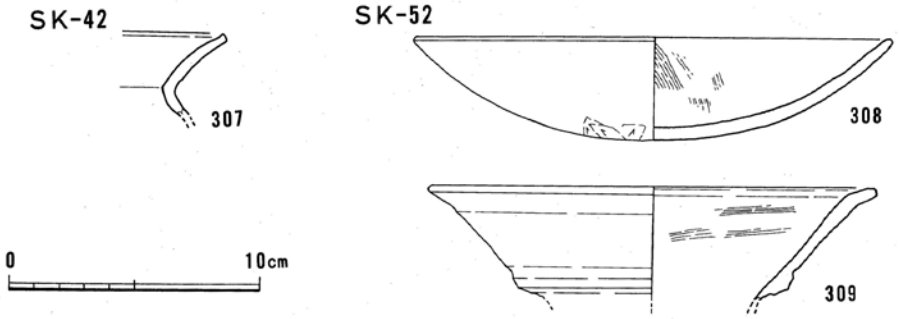
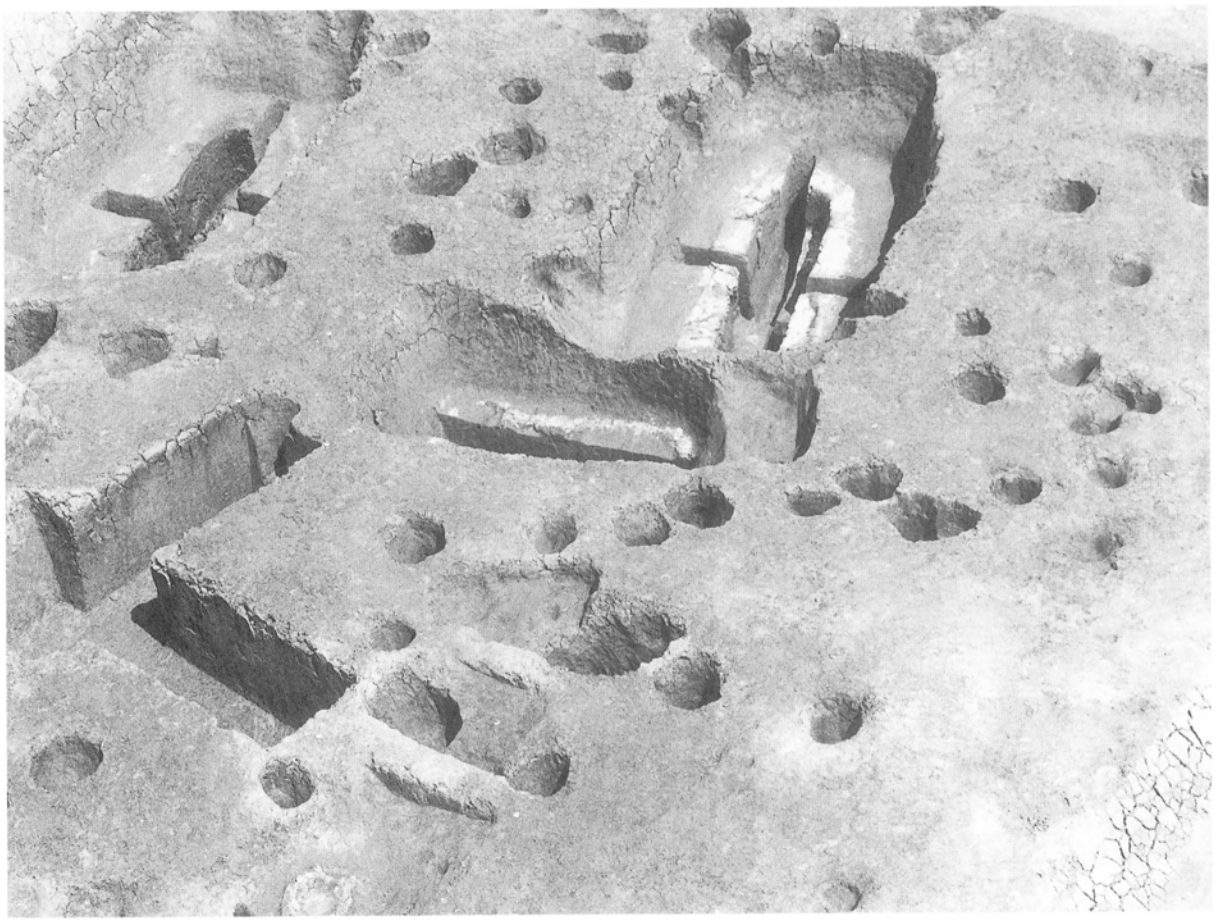


Fig.43 **石蓋土壙墓出土遺物**



Ｐｈ．９　　石蓋土壙墓配置状況

福岡市内における石蓋土壙墓一覧表

1988『井尻B遺跡』福岡市教育委員会 に加筆

	遺跡・遺構名	標高	石材・枚数	墓壙	土壙	遺物	備考
1	井尻		板状結晶片岩		？×0.4×0.4	？	床面に赤色顔料
2	井尻B遺跡SK－10	14.3	板状泥質3	(2.3×1.3)隅丸方形	1.9×0.5×0.3 N-129°-E不整長方形	無	成人 頭位北東 床面、石蓋裏に赤色顔料
	SK－12	14.4			1.8×00.8×0.2～0.25 N-41°E 不整長方形	板状鉄器、土器片	成人 頭位南東 床面、石蓋裏に赤色顔料
3	小笹遺跡1号	37.7	板状(3)		1.25×0.21～0.3×0.39不整長方形	無	小児もしくは横臥 弥生後期前半
	2号	35.6	板状花崗岩4		0.95×0.55×0.35長楕円形	無	小児 棺内埋土
	3号	35.1	板状花崗岩割石4		0.98×0.25×0.25隅丸長方形	無	小児 棺内埋土
	4号	35.1	板状砂岩、花崗岩7		1.70×0.50×0.35長楕円形	鉄鏃1	成人 頭位西
	5号	35.1	板状花崗岩割石5		1.11×0.44×0.33長楕円形	無	小児
	6号	35.0	砂岩、花崗岩割石4		1.07×0.48×0.30隅丸長方形	無	小児 棺内空洞
4	日佐原遺跡						13基
5	雑餉隈石蓋土壙其一		板状(2)		(0.84)×0.36×0.42長方形	無	側壁、石蓋裏にベンガラ
	其二		板状花崗岩(2)割石		1.57×0.34×0.27長方形	弥生式坩形土器	成人 床面に少量の赤色顔料
	其三		板状花崗岩結晶片岩(4)				石蓋裏に赤色顔料
6	堤ヶ浦古墳群2号墳周溝外SK－4	50.2	花崗岩塊石4	(1.85×1.1)×0.1長方形	1.1×0.5×0.5 N-82°-W隅丸長方形	無	小児頭位東
7	宝満尾古墳丘下石蓋土壙墓		板状多種(4)礫片積	(1.77×1.25)×0.18長方形	1.38×0.38～0.3×0.15 S-70°-W長方形	勾玉2 管玉17	小児 頭位東
	宝満尾遺跡B地点1号土壙墓	25.1	板状花崗岩、砂岩(4)	(0.56×0.91)×0.25長方形	(1.70×0.48×0.25)N-25°-E長方形	土器片1	成人 石蓋内赤色顔料
	13号土壙墓	26.4	滑石、片岩、砂岩板状7		2.11×0.65×0.42 N-71°-E長方形	素環頭刀子1棺外	成人 頭位西 石棺と同時埋葬
8	老司古墳第5主体部	43.8	板状礫(3)				長軸東西方向 墳丘築造の前後
9	飯倉G遺跡第1次調査Ⅱ区SK－02	22.4		1.9～2.0×1.3～1.4×0.15長方形	1.8×0.45～0.5×0.45 N-72°-E	小形彷製鏡 鉄刀子	土坑内に赤色顔料
	飯倉G遺跡第1次調査Ⅱ区SK－04	22.2	玄武岩		1.8×0.5×0.23 N-84°-W	無	

文　献

1 中山平次郎 1924「井尻の弥生式土器」『考古学雑誌』14－12, 同1926「井尻及び寺福童の甕棺」『考古学雑誌』17－12

2 山口譲治・吉留秀敏 1988『井尻B遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集

3 柳田純孝他 1973『小笹遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集

4 鏡山猛 1954「環濠住居阯小論(四)」『史淵』78

5 中山平次郎 1931「雑餉隈駅付近に発見せる石蓋土壙と無蓋土壙」『考古学雑誌』21－9

6 吉留秀敏 1987『堤ヶ浦古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集

7 山崎純男他 1974『宝満尾遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集

8 山口譲治・吉留秀敏 1989『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集

石蓋土壙墓について

今回調査では４基の石蓋土壙墓を調査した。遺構の残存は良好であり、調査をおこなって気が付いたことを２，３記したい。

土坑内は赤色顔料が石蓋の内面を含め全面塗布されており、壁面にもその痕跡がみられた。自然科学分析で明らかになったことには、ＳＫ－５１の頭部赤色顔料には水銀朱が含まれており、その他はベンガラのみを使っており、施朱の使い分けが石蓋土壙墓でもおこなわれていることがわかった。

壁面の壁はなめらかで、板状の痕跡はみられず、また床面にも板を立てたような痕跡はない。土坑と石蓋との間には白色粘土を敷き、石と石の間を板状の小石で塞ぐときにも白色粘土を隙間に充填しており、白色粘土により土坑を密閉するという感覚を強く受けた。

４基の石蓋石材を西南学院大学名誉教授の唐木田芳文先生に観察していただいたところ、石材は角閃石を多く含む玄武岩であり、角閃石の多少はあるもののすべて同質の石で同じ場所から運んできたと考えられるとの教示を得た。また玄武岩は響灘沿岸でみられ、福岡市周辺では現在今山周辺で見られるとも教えていただいた。

石材はＳＫ－５３の４個のうち花崗岩が１個含まれるのみで、あとはすべてこの玄武岩である。石の表面が風化して丸みを持つもの（ＳＫ－５１の東端石）があり、露出している石を採集したようである。古墳の石室に好んで玄武岩が使われるようになるのと同じく石蓋土壙墓でも同様のことがおこなわれているようである。そしてこの墓をつくった集団は同じ場所のにその石を取りに行ったことになる。

ＳＫ－５１にはＳＤ－４７とＳＤ－４８で墓の周囲を溝が巡っていたと考えられ、石蓋土壙墓に溝が伴うことが明らかとなった。また小児合せ壺棺のＳＫ－４４は溝をＳＤ－４６に取り付くかたちでつくられており、遺物からも矛盾がない。ＳＤ－４６がなにを囲んでいたのかは不明であるが、供献土器を伴う構造物が想像される。。

配置の関係とＳＫ－５２がＳＫ－５３を切ることから、まずＳＫ－４２とＳＫ－５３の頭位を北方向に向けるやや小型で散漫な配置をみせる２基がつくられ、その後やや時間を経て、頭位を東側に向ける大型のＳＫ－５１，ＳＫ－５２，ＳＫ－４４が溝を共有するようにつくられていったと考えれば、切り合いの存在と頭位方向の時期的な差として説明がつく。今後の石蓋土壙墓の発見と研究に期待したい。

Ｐｈ．１０　唐木田先生調査風景

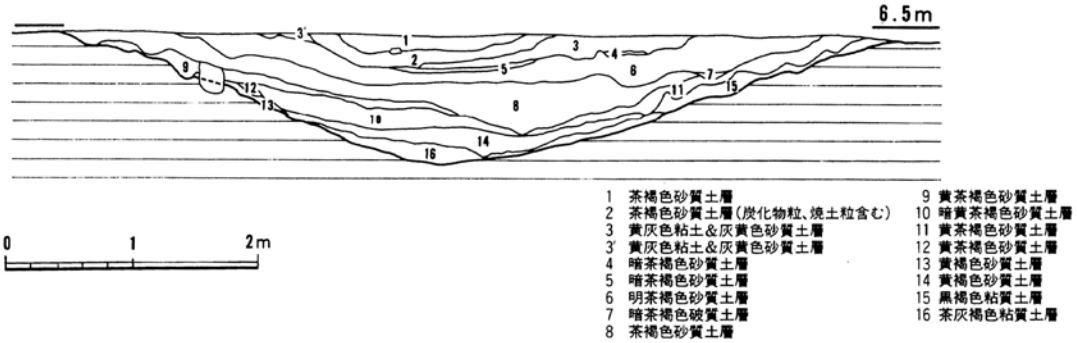


Fig.44　**谷頭土層断面実測図(1/40)**

Ｐｈ．１１　谷頭土層断面状況

その他の遺物

谷頭部調査

調査区東側大きく削平を受けた部分にて谷状に凹む部分がみられた。立地と状況からから谷頭部分と思われる。谷の土層断面の観察から上、中、下層の３つに大きく分けた。第１層から第５層までの黄褐色に発色する層を中心として上層とした。中層を茶褐色砂質土の堆積である第６層から第１３層までとし、第１４層と第１５層の黒褐色粘質土を下層とした。第１６層は上面からのしみ込みである。自然科学分析をおこなった谷ベルト１は土層番号第２層、谷ベルト２は土層番号第８層、谷ベルト３は土層番号第１５層からそれぞれ採集した。遺物の出土状況は上層には須恵器を含み遺物量が多い。中層は遺物量が少なく古式土師器を含む。下層には遺物がみられない。

自然科学分析ではそれぞれの層が堆積した時代の環境や堆積の状況を復元できるデータは得られなかった。遺物の出土状況から、古墳時代初頭では居住面と数メートルの高低差をもつ谷状の凹みであったと思われる。最深部では平坦面、硬化面などは特にみられなかった。ただ地形的に降雨時は雨水が流れる状況であったと思われる。第８層に切られるピット状の遺構が土層断面にみられることから構築物があった可能性が考えられる。谷頭のすぐ前にＳＫ－４２の石蓋土壙墓がつくられている。６世紀から７世紀初頭頃には谷はある程度埋没していて、浅い凹み状をなしていたと思われる。堆積の厚さはこの時期のものが最も厚い。古代には埋没してしまい。中世では凹みすらない状況であったと考えられる。

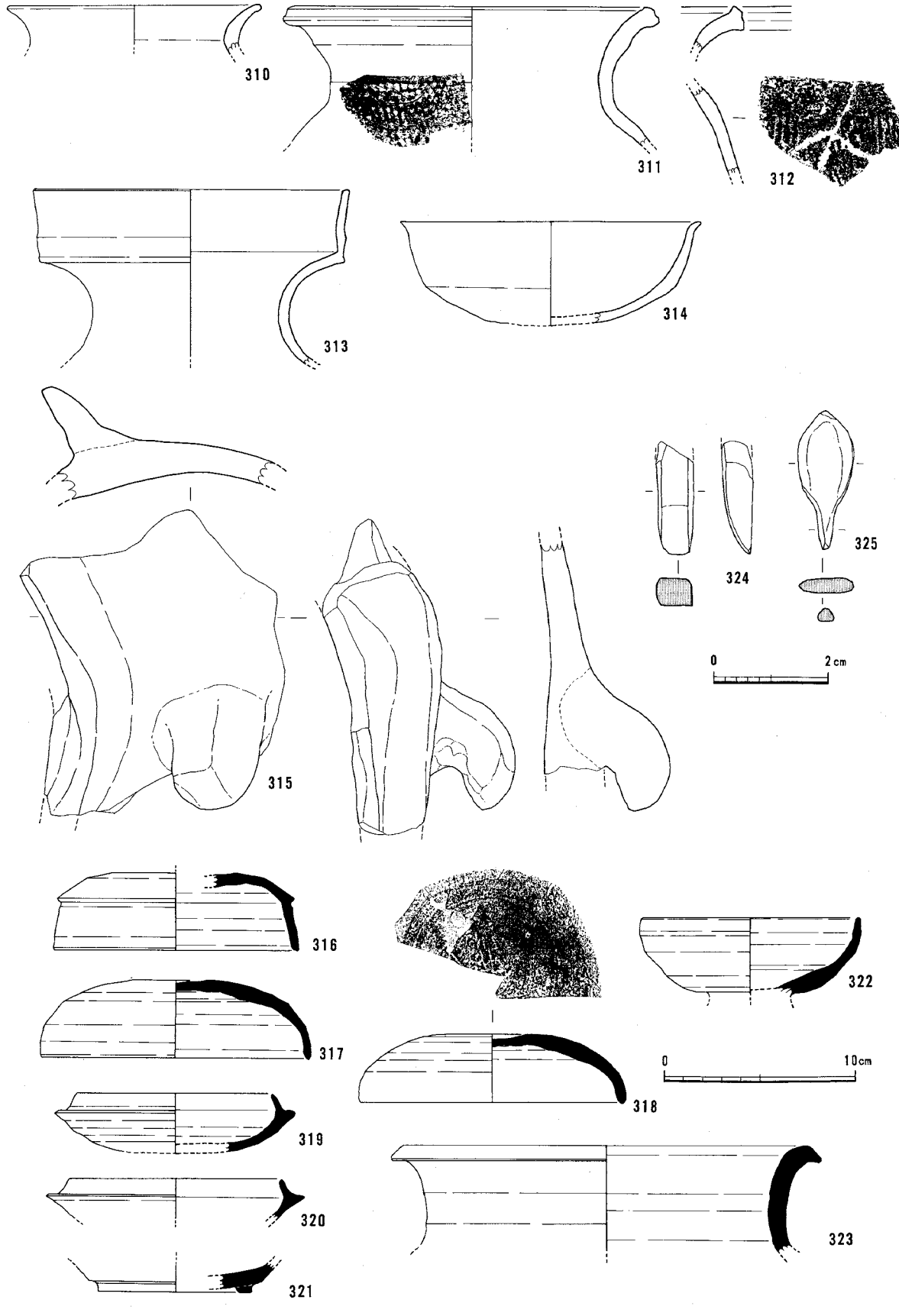


Fig.45　谷頭出土遺物実測図(1/3)

310　土師器甕。口径13.4cm。上層出土。

311　土師器甕。胎土は黄褐色、細かな砂粒多く含む。口縁は外反、上端面はやや凹む。外面に擬格子状叩き痕残る。口径19.6cm。

312　土師器甕。胎土は明黄褐色、細かな砂粒多く含む。口縁端部は上下に拡張し、外面はやや凹む。外面に平行叩き痕残る。

313　土師器二重口縁壷。口縁は真っ直ぐ立ち上がる。磨滅著しく調整不明。山陰系。口径16.4cm。

314　土師器鉢。胎土は暗赤褐色。丸底で、口縁は上位で外反。磨滅著しく調整不明。口径15.6、器高5.5cm。

315　土師器竈。把手は下方に向く。内面は被熱しており赤変する。下層出土。

316　須恵器坏蓋。天井部と口縁の境は明瞭な段がつく。天井部外面は回転ヘラ削り。口径12.8cm。下層出土。

317　須恵器坏蓋。器高高く、口縁端部は丸くおさまる。天井部外面は回転ヘラ削り。口径14.0、器高4.1、ただし歪み著しく不明確。上層出土。

318　須恵器坏蓋。器高高く、口縁端部は丸くおさまる。天井部外面は回転ヘラ削りか、ヘラ記号あり。口径13.9、器高3.6、ただし歪み著しく不明確。

319　須恵器坏身。口縁立ち上がりは内傾する。外底は回転ヘラ削り。口径10.0、器高3.1cm。上層出土。

320　須恵器坏身。口縁立ち上がりはやや内傾する。口径11.0cm。

321　須恵器坏身。高台は断面四角形で底部と体部の境のやや内側に付く。高台径8.0cm。上層出土。

322　須恵器高坏。坏部下位は回転ヘラ削り。口径11.4cm。上層出土。

323　須恵器甕。口縁は外反し、端部は先細りとなる。口径22.4cm。上層出土。

324　石鑿。全面研磨。現存長さ4.0、幅1.3、厚み1.0cm。石材は粘板岩。

325　磨製有茎石鏃。かなり風化著しい。長さ4.9、幅2.0、厚み0.5cm。石材は粘板岩。　遺構の時期は不明。古代の遺物数点、多くは6世紀末～7世紀初頭と思われる。古式土師器も多い。

包含層、その他

326～329　弥生土器壷。胎土は淡赤褐色で粗砂粒多量含む。外面肩部には沈圏線と羽状文が施される。326～328は同一個体と思われる。いずれも前期。

330　土師器甕。口縁端部のつまみ出しはかなり退化しており、内面に不明瞭な段が付く。磨滅著しく調整不明。口径15.8cm。古墳時代前期。

331　須恵器坏蓋。器高は高く口縁はやや内傾気味、端部は丸くおさまる。天井部外面は回転ヘラ削り、ヘラ記号がある。口径13.0、器高3.8cm。6世紀末～7世紀初頭。

332～342　土師器小皿。335・336・339・340はヘラ切り、338・341・342・344は糸切り。口径は8.2～9.6cm、器高は0.9～1.3cm。

343・344　土師器高台付き小皿。高台径いずれも5.4cm。

345　土師器坏。ヘラ切り、板状痕残る。口径9.6、器高2.5、底径7.8cm。

346　土師器坏。糸切り。口径14.0、器高2.8、底径9.0cm。

347　土師器小椀。磨滅著しく調整等不明。口径8.0、器高2.7、高台径4.4cm。

348～355　土師器椀。口縁は玉縁状を呈し、高台は太い。胎土はいずれもかなり白っぽく、きめ細かいのが特徴で、他の土師器とは異質。磨滅が著しく調整等は不明瞭であるが、内面は磨き調整を施

しており、コテあて痕が残る。外面に指押さえの痕が残るものがある。白磁碗Ⅳ類を模倣したものか。福岡市内では田村、石丸古川遺跡でも出土しており、田村では11世紀の遺構から出土している。

356・357　瓦器小皿。358は内面にコテあて痕が残るのみ。口径10.4cm。359は内外に雑な磨き痕が残る。口径11.2cm。

358・359　瓦器椀。358は内外磨き施すが、外面は磨きと磨きの隙間が多い。外底はヘラ切り。口径16.3、器高4.7、高台径6.9cm。359は内外磨き。内面はかなりていねいだが、外面は雑で磨きと磨きの隙間が広い。押し出ししており、外面下半に板状痕が残る。口径16.2cm。

360・361　土鍋。いずれも口縁は逆L字状に外折する。口縁上端面に360は縄目、361は棒状工具による押圧が施される。外面はハケ目調整。

362　須恵質土器椀。器壁薄く、口縁端部を上方につまみ上げる。内外横ナデ。口径16.6cm。搬入品と思われる。表採。

363　須恵質土器鉢。口縁端部を上方に引き上げ、断面三角形に肥厚する。内外横ナデ調整、内面下半は使用のため磨滅。口径26.8cm。東播系。

364・365　越州窯系青磁碗。輪状高台精製品。全面施釉、内底と高台畳付けに目痕残る。高台径は364は8.0、365は6.6cm。

366　青磁碗。胎土は灰白色で精良、釉調は淡青緑色透明釉、かなり細かな氷裂が入る。内面口縁下に沈圏線が巡り、外面には縦方向にヘラ彫りが施される。口径11.7cm。

367　龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。高台内側まで釉がかかり、畳付けの釉を雑に掻取る。内底には劃花文が施される。高台径6.2cm。

368・369　白磁碗Ⅳ類。368は口径16.6、器高6.4、高台径7.4cm。369は高台径7.0cm。

370　白磁碗。体外面下半は露胎。高台径4.8cm。

371　白磁高台付き皿Ⅱ類。内底輪状釉剥ぎ。高台径4.6cm。

372　白磁碗Ⅵ類。外底に「大」の墨書。高台径4.8cm。

373　白磁小壷。胎土は白色、精良、釉調はわずかに空色かかった透明釉。釉下には化粧土が施される。口縁端部内外は施釉後釉剥ぎする。外面は口縁下に小さな珠文が巡り、その下に縦方向の細線を施す。口径6.4cm。広東産か。

374・375　土錘。374は現存長さ4.2、幅1.7、厚み1.5cm、重さ10g。375は長さ4.2、幅1.4、厚み0.9cm、重さ5g。

376　用途不明土製品

377～379　滑石製鍋。377は口縁外面に縦耳が付く。口径44.2cm。欠損品を転用しようとしたらしく、底部の破面を再度削り穿孔する。378・379は外面口縁下に鍔が巡る。

380　砥石。上端に穿孔途中。石材は砂岩。

381　石匙。横型。姫島産黒曜石を使用。全面にかなり細かな二次加工を施す。現存長さ2.8、幅4.3、厚み0.5cm。

382　石鏃。基部は凹状になる。両面の一部に研磨あり。サヌカイト。長さ2.8、幅1.4、厚み0.25cm。

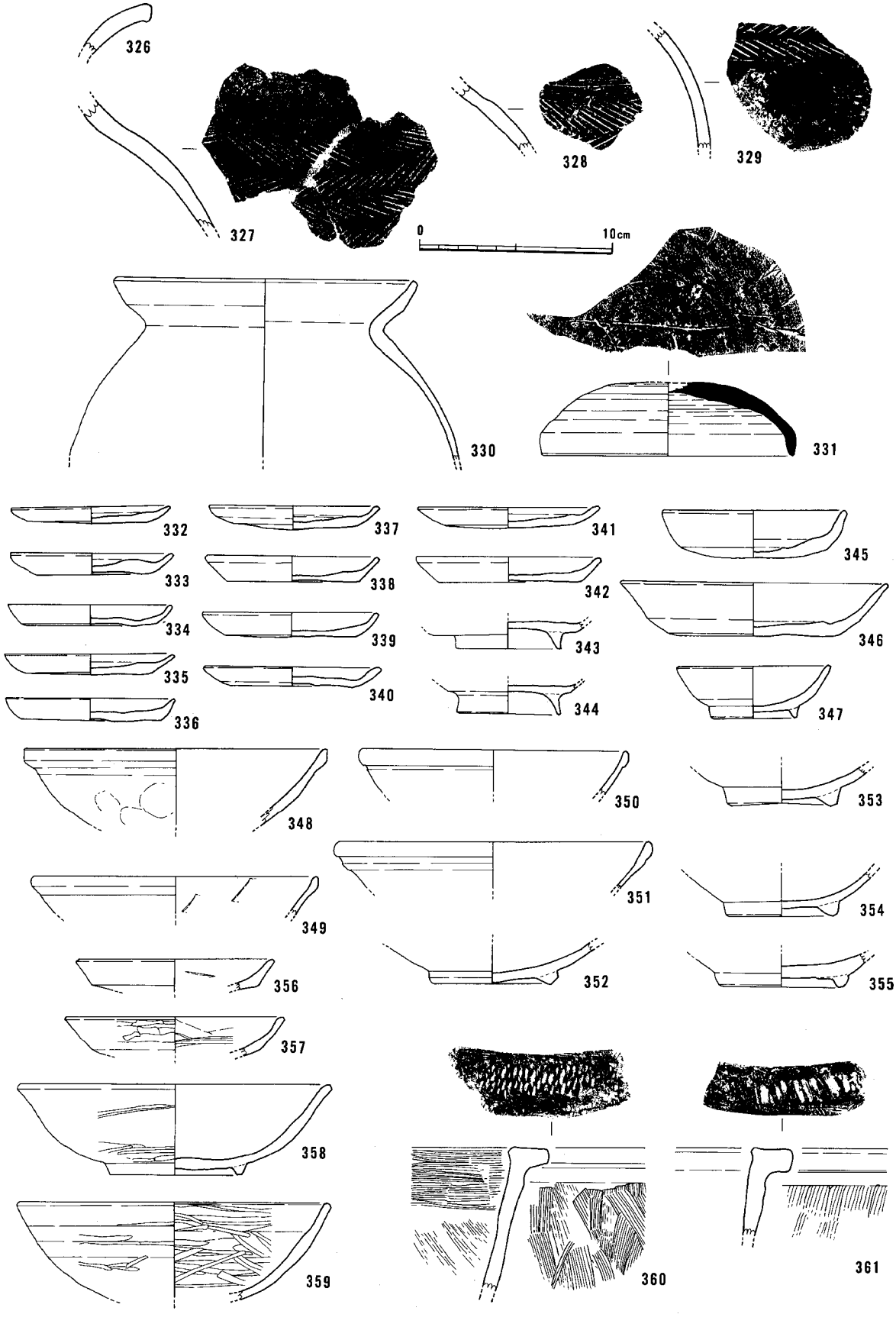


Fig.46　表採遺物実測図 1 (1/3)

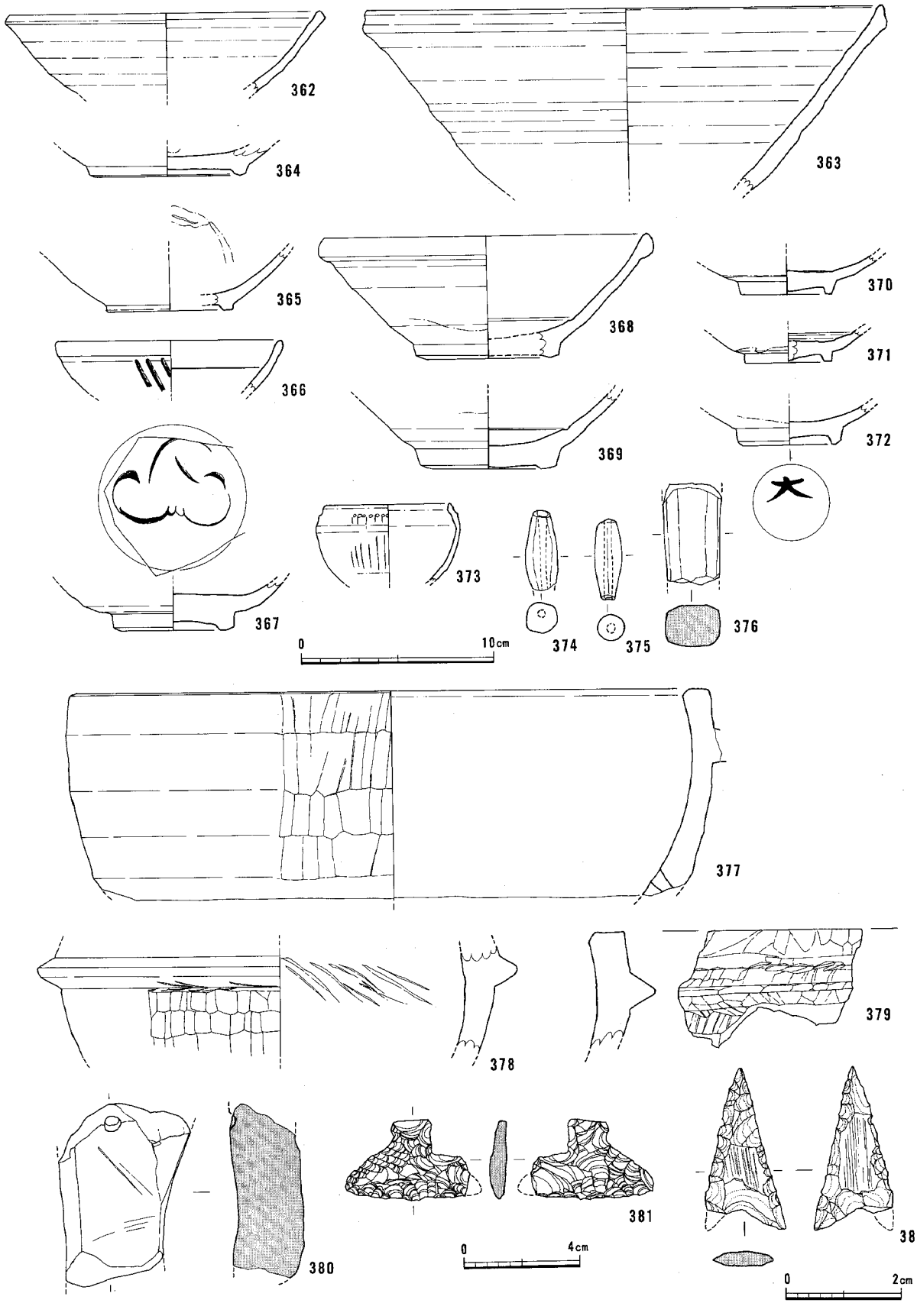


Fig.47　表採遺物実測図 2 (1/3)

３．まとめ

今回の調査は南北方向にのびる台地を東西方向に横切って帯状に調査をしたことになる。検出遺構は竪穴住居６棟、掘立柱建物１２軒、石蓋土壙墓４基、土坑、溝、合せ口壷棺、土坑墓、溜井など樋井川の西側段丘上の立地をいかして長い間、集落として利用されていることが明らかになった。出土遺物から大きく５期にわたって人間の生活がみられた。

第１期は最も時代的の遡る弥生時代前期の貯蔵穴群の時代である。配置は台地の頂部から東側斜面にかけて計４基検出した。ＳＫ－０６だけは台地の高所に位置するが、他の３基ＳＫ－４６，５０，５１は東側斜面付近に列ぶ。遺構の残存が悪いことから後世の削平が著しいことは明らかであり、かつては住居と貯蔵穴の組み合わせによる集落が広がっていたことが想像される。

第２期は古墳時代初頭である。この時期に位置づけられる住居はＳＫ－２７のみであるが、同時期の埋葬施設である石蓋土壙墓の広がりが予想されることから、この時期の集落の密集部は今回の調査区外にあることが考えられる。

第３期は６世紀後半から７世紀初頭頃である。この時期の遺構としては竪穴住居ではＳＣ－２６、ＳＣ－８０，８１、溝のＳＤ－３８、５６があたる。密度は散漫であるが住居址は切り合っており、意図的に古い方の住居を埋め戻していないことから、住居廃絶後自然の堆積により平坦地となり、再び同規模の住居が建てられることから、生活の時間幅が広いことがわかる。

第４基は８世紀後半の時期である。規模の小さい竪穴住居と直線的にのびるＳＤ－５９や、台地の東側裾部に何穴かみられる方形の掘りかたを持つ掘立柱建物がこの時期にあたる。建物の規模は不明であるが、居住範囲の広がりが台地の下にものびていったようである。

第５期は１２世紀から１３世紀の集落である。溝を掘って屋敷を画し、屋敷内は掘立柱建物、溜井、土坑、屋敷内墓、などで構成されるようである。溝には直線的にのびるものとＳＤ－７０のように地形の沿ってやや蛇行するものがある。屋敷の中には降雨時に一時的に水の溜まる溜井（ＳＫ－０２）が１基みられたのみで、他に井戸は検出されなかった。近くに樋井川が流れていて水の確保が容易であったためかと思われる。台地頂部には掘立柱建物が複雑に建て替えられており、今回の調査で規模・方向が確認できた１２棟の建物はほんの一部であり、検出された柱穴の数からこの何倍もの建物が建っていたことは明らかである。今回の調査では一時期の屋敷の規模、建物配置、出入り口などの構造、周辺の道路などを明らかにすることはできなかった。

調査地周辺の地形は細かい小さな谷が複数はいり、たいへん複雑であるが、大きくは南から北へ台地が高度を下げながらのびており、各時期の検出遺構の方向がほぼ一致するのは台地の方向に規制されることに原因があるようである。自然科学分析で谷の下層からイネ科の花粉と溜井ＳＫ－０２からイネの植物珪酸体が検出されており、すなわち樋井川は肥沃な耕地を我々に与え続けて、この地に生活する人々の生命の根幹を支えてきたことを裏付ける。

田島Ａ遺跡は昭和初期の土取り時に甕や壷が出土したとの話や、耕作土内に遺物の散布がみられることから遺跡の存在は以前から知られていたが、発掘調査としては今回の調査が初めてとなった。調査地周辺は古くから宅地化しており、今回の新設道路建設を機に再び宅地の立て替えなどが進むことが予想され、調査の機会も今後増加する事であろう。今後の調査からもさらなる田島周辺の地域史が明らかになることを期待する。

第６章　田島遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

田島遺跡は、鳥飼平野を流れる樋井川の左岸に位置する。本遺跡では、古墳時代の埋没谷、時期不明の土坑などが検出されている。この他にも石蓋土坑墓などが検出されている。

今回の自然科学分析調査では、古墳時代頃の遺跡周辺の古環境に関する情報を得るために珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。また石蓋土坑墓内から検出された顔料の素材を検討するためにＸ線回折と電子顕微鏡観察をそれぞれ実施する。

１．試料

土壌試料は、時期不明であるＳＫ－０２下層から１点、また古墳時代初頭～６世紀代の谷埋積物から３点（試料名：谷ベルト１～３）、合計４点が採取された。これら４試料について珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を行う。

Ｘ線回折と電子顕微鏡観察を行う試料は、ＳＫ－４２から採取された１点、ＳＫ－５１集中部および枕推定部から採取された２点、ＳＫ－５２の集中部および西側小口部から採取された２点、合計５点である。これらの赤色顔料が採取された遺構は、すべて石蓋土坑墓とされている。

２．分析方法

（１）珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。珪藻の同定と種の生態性については、Desikachiary（1987）、Hustedt,F.（1930,1937-1938,1938,1955,1959,1961-1966）、K.Krammer & H.Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、などを参考にした。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（ｐＨ）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率２％以上の主要な種類について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたって、陸生珪藻については伊藤・堀内（1989,1991）、汚濁耐性についてはK.Asai & T.Watanabe（1995）

の環境指標種を参考とする。

（２）花粉分析

試料を湿重で約10ｇ秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛，比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

（３）植物珪酸体分析

試料を湿重約５ｇ秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

（４）Ｘ線回折分析

各試料中に含まれる赤色顔料を可能な限り純粋に抽出し、105℃で2時間乾燥させた赤色物質をメノウ乳鉢で微粉砕する。この微粉砕試料をアセトンを用いてスライドグラスに塗布し、以下の条件でＸ線回折分析を行う（足立，1980；日本粘土学会，1987）。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をＸ線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐，未公表）により検索した。

装　置：島津制作所製ＸＤ－３Ａ	Time Constant：1.0sec
Target：Ｃｕ（Ｋα）	Scanning Speed：2°/min
Filter：Ｎｉ	Chart Speed：2cm/min
Voltage：30KVP	Divergency：1°
Current：30mA	Recieving Slit：0.3mm
Count Full Scale：5,000C/S	Scanning Range：5～45°

（５）電子顕微鏡観察

試料台にカーボンを織り込んだ両面テープを貼り、その上に赤色顔料を粉砕したものを載せる。それを走査型電子顕微鏡で観察する。

3．結果

（1）珪藻分析

結果を表１・図１に示す。以下、各地点ごとに珪藻化石の産状を述べる。

ＳＫ－０２下層では、比較的多くの珪藻化石が検出される。検出される種群は、淡水生種を主として淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。生態性の特徴をみると貧塩－不定性種、好アルカリ性種、流水不定性種が優占する。主な産出種は、*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、

表１　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境	SK-02	谷ベルト		
	塩分	pH	流水	指標種	下層	1	2	3
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	4	-	-	-
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	7	-	-	-
Amphora ovalis (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-
Diploneis elliptica (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	RA,T	1	-	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	147	29	22	14
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	-	1	-
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	18	7	9	10
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	1	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1	-	1	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	2	8	15
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	-	-	-
Pinnularia molaris (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RB,U	2	-	-	3
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	3	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	14	-	-	3
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	1	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	5
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	3	-	-	-
海水生種合計					0	0	0	0
海水－汽水生種合計					0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0
淡水－汽水生種合計					4	0	0	0
淡水生種合計					200	39	48	52
珪藻化石総数					204	39	48	52

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
- Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種
- Ogh-ind:貧塩不定性種
- Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
- al-il:好アルカリ性種
- ind　:pH不定性種
- ac-il:好酸性種
- unk　:pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
- l-ph:好止水性種
- ind :流水不定性種
- r-ph:好流水性種
- unk :流水不明種

環境指標種

S:好汚濁性種　U:広適応性種　T:好清水性種（以上はAsai,K. & Watanabe,T. 1995）

R:陸生珪藻（RA:A群,RB:B群,RI:未区分陸生珪藻、伊藤・堀内, 1991）

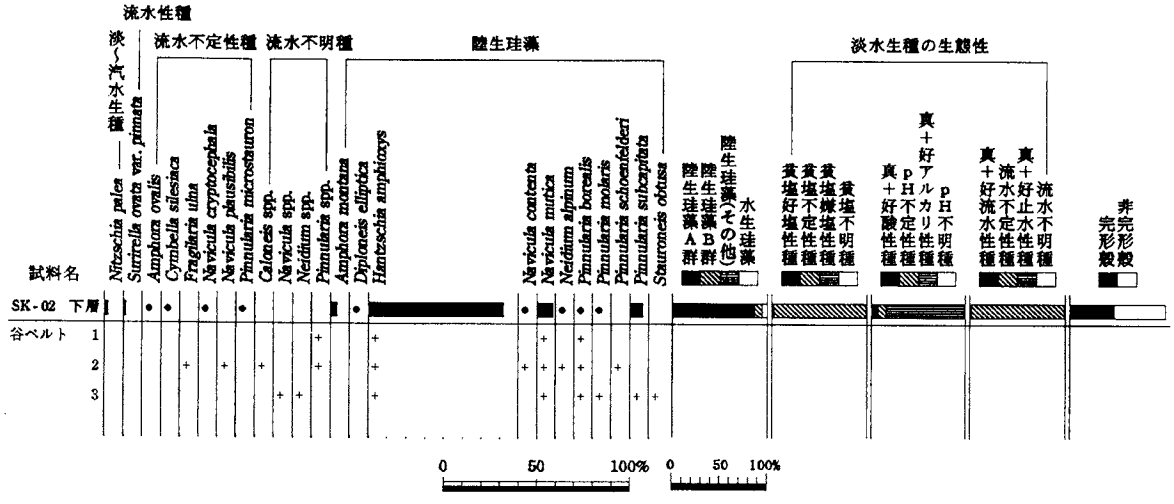


図１　主要珪藻化石群集の層位分布
海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

Navicula mutica、*Pinnularia subcapitata* であり、陸生珪藻が全体の95％を占める。陸生珪藻とは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉，1988）である。

一方、谷ベルト１～３では、珪藻化石の検出個体数が100個体以下である。陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis* などが多産する傾向にある。

（２）花粉分析

結果を表２に示す。花粉・胞子化石は少なく、全試料からシダ類胞子石、谷ベルト２でスギ属、谷ベルト３でイネ科が検出された。これら検出された花粉化石の保存状態は著しく悪い。

（３）植物珪酸体分析

結果を表３に示す。ＳＫ－02下層では、植物珪酸体の保存状態が悪いものの、イネ属、

表２　花粉分析結果

種　類	SK-02	谷ベルト		
試料名	下層	1	2	3
木本花粉				
スギ属	–	–	1	–
草本花粉				
イネ科	–	–	–	1
シダ類胞子				
シダ類胞子	2	3	20	13
合　計				
木本花粉	0	0	1	0
草本花粉	0	0	0	1
シダ類胞子	2	3	20	13
総計	2	3	21	14

表３　植物珪酸体分析結果

種　類	SK-02	谷ベルト		
試料名	下層	1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	21	–	–	–
タケ亜科	14	7	2	–
ウシクサ族ススキ属	7	–	2	2
イチゴツナギ亜科	3	4	–	–
不明キビ型	3	–	1	1
不明ヒゲシバ型	2	–	–	–
不明ダンチク型	7	–	–	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	20	–	–	–
タケ亜科	5	3	3	–
ウシクサ族	11	–	–	4
不明	20	4	1	3
合　計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	57	11	5	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体	56	7	4	7
総　計	113	18	9	11
組　織　片				
イネ属穎珪酸体	6	–	–	–
イネ属短細胞列	9	–	–	–
イネ属機動細胞列	2	–	–	–

タケ亜科、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められ、特にイネ属の産出が目立つ。また、イネ属に由来する珪化組織片も認められる。谷ベルト１～３では保存状態が悪く、検出個数も少ない。各試料からはタケ亜科、ウシクサ族などがわずか、あるいは稀に認められる。

（４）Ｘ線回折分析

各赤色顔料のＸ線回折図を図２に示す。ＳＫ－５１枕推定部を除く４点の回折パターンは、ほぼ類似したパターンを示し、約20°（２θ）付近からベースが高くなる。このことから、酸化鉄を含むことが明らかである。ピークとして検出された鉱物は、石英（quartz）、斜長石（plagioclase）、カリ長石（k-feldspars）、クリストバライト（cristobalite）、赤鉄鉱（hematite）、スメクタイト（smectite）の６種類である。

一方、ＳＫ－５１枕部顔料は、赤鉄鉱と共に辰砂（cinnabar）と同定される回折ピークが認められるが、辰砂の最強回折線が石英の最強回折線と重複するため確実な判定は難しい。

なお、他の鉱物は岩石や土壌にごく一般的に認められる鉱物であることから、赤色物質採取時に混在した土壌由来の鉱物と推定される。

（５）電子顕微鏡観察

全体的に試料が少量のものが多く、保存状態の良い部分での観察ができない。また、比較的状態の良好であったＳＫ－５２小口部では、組織のような痕跡は観察できない。

４．考察

（１）古環境の検討

ＳＫ－０２下層で検出された珪藻化石は、大半のものが陸生珪藻に属するものであった。この中で、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* などは、乾燥に対する耐性の強い種郡であり、陸生珪藻Ａ群とされる（伊藤・堀内，1989,1991）。また、過去の堆積物において、陸生珪藻が70～80％以上と優占する結果が得られれば、その堆積物は水域以外の空気に曝された、乾いた状況に置かれていた可能性が高いことが指摘されている。これらのことから、本土坑内には水が溜まることはほとんどなかったことが推定される。また、土坑壁面の崩落や周辺の乾いた土壌が流れ込んでいる可能性もある。花粉化石が検出されなかった原因としては、このような堆積環境が関係している可能性があり、おそらく風化作用により分解・消失したとみられる。

本土坑からは栽培種のイネ属珪酸体が産出し、イネ属の珪化組織片も見られた。このことから、土坑内部には稲藁や稲籾殻が混入していた、あるいは稲作耕土により埋積されたなどの可能性が考えられる。また、本時期に遺跡周辺で稲作が行われていたことも示唆される。

一方、古墳時代の谷埋積物からは、花粉化石・植物珪酸体ともほとんど検出されなかった。わずかに検出された花粉化石・植物珪酸体の種類は、当時の周辺植生を構成する要素であった可能性があるが、植生を推定するには至らない。珪藻化石の産状は、ＳＫ－０２下層と同様に陸生珪

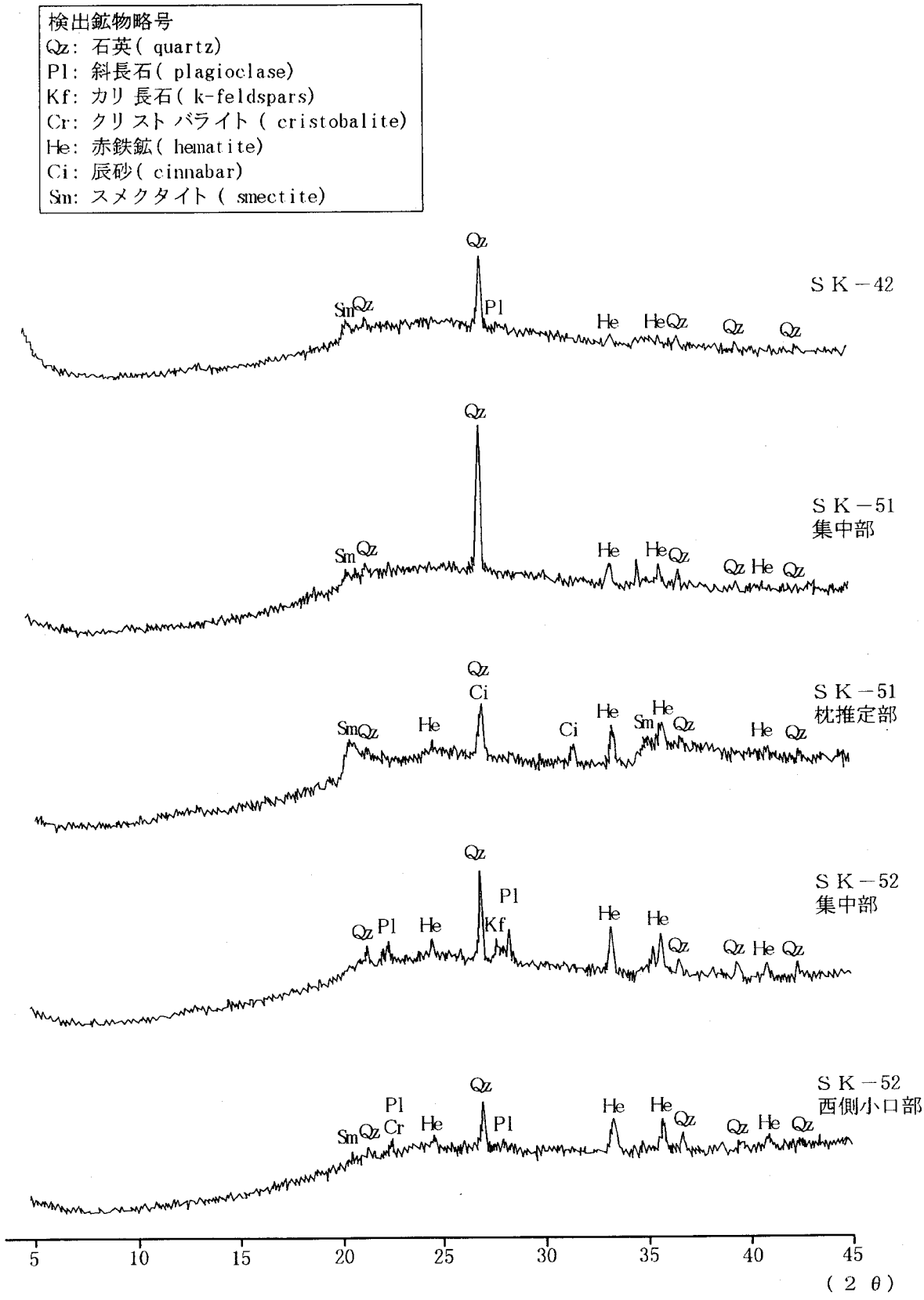


図2　赤色顔料のX 線回折図

藻Ａ群に属するものが多産した。このことから、谷内も常に冠水しているのではなく、ほとんどの時期が好気的な状態に置かれていたことが推定される。

（２）赤色顔料の検討

石蓋土坑墓内から検出された赤色顔料のうち、ＳＫ－５１枕推定部を除く４点は、いずれも類似した回折パターンが得られた。この４点は、赤鉄鉱を含むことから、ベンガラと考えられる。ベンガラの原料には、赤鉄鉱の他にも様々な酸化第二鉄を含む鉱物が利用される（本田，1997）。また、ベンガラの中には、しばしばパイプ状構造を持つものがある。このパイプ状構造は、実験の結果から、鉄バクテリアにより生成された鉄分に富む物質を焼成してベンガラに精製したことが明らかとなっている（降幡・沢田，1997；岡田，1997）。今回の試料は、電子顕微鏡で観察した限りでは、パイプ状構造と考えられる構造は認められない。このことから、得られたベンガラは、赤鉄鉱を原料としたことが推定される。一方、ＳＫ－５１の枕推定部では、ベンガラと共に辰砂と考えられる鉱物が確認され、２種類の赤色顔料が混在している様子が確認される。

墓の遺体埋納部に赤色顔料を塗布する、いわゆる施朱の習慣は各地の墓で見られる。また、九州地方では、遺体に施朱を施した例が知られている。このうち、福岡県内の立岩遺跡や一貫山銚子塚古墳などの例では、頭頂部に辰砂（水銀朱）、胸部以下はベンガラという使い分けが確認されている（市毛，1998）。今回の試料でもＳＫ－５１枕推定部に辰砂が見られたことから、同様に遺体の場所による顔料の使い分けが行われていた可能性がある。この辰砂は、ベンガラと混在していることから、ベンガラと辰砂を混ぜて利用したことや、実際には明確に塗り分けられたものが遺体の腐敗と共に混ざったことなどが考えられる。

引用文献

足立吟也（1980）粉末Ｘ線回折法．「機器分析のてびき３」．p.64-76，化学同人．

K.Asai & T.Watanabe (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

Desikachiary, T.V. (1987) Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT.Maps & Publications Private Limited, 328, G.S.T. Road, Chromepet, Madras-600044. I～VI. Plates:22-621A.

本田光子（1997）出土ベンガラの多様性について．日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集，p.78-79.

Hustedt, F. (1930) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p..

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen -Flora von Java, Bali und Sumatra. I～III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809, 15, 1-155,

274-349.

Hustedt, F. (1938) Systematische und okologische untersuchungen uber der diatomeen flora von Java, Bali und Sumatra nach dem material der Deutschen limnologischen Sunda Expedition. Arch. Hydrobiol. suppl.

Hustedt, F. (1955) Marine littoral diatoms of Beaufort, North Carolina. Bull. mar. Lab. Duke. Univ. 6, p. 1-67.

Hustedt, F. (1959) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p..

Hustedt, F. (1961-1966) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p..

市毛　勲 (1998) 新版　朱の考古学. 296p., 雄山閣.

伊藤良永・堀内誠示 (1989) 古環境解析からみた陸生珪藻の検討－－陸生珪藻の細分－－. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－. 植生史研究, 1, p. 9-44.

近藤錬三・佐瀬　隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-64.

K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae, Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae, Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

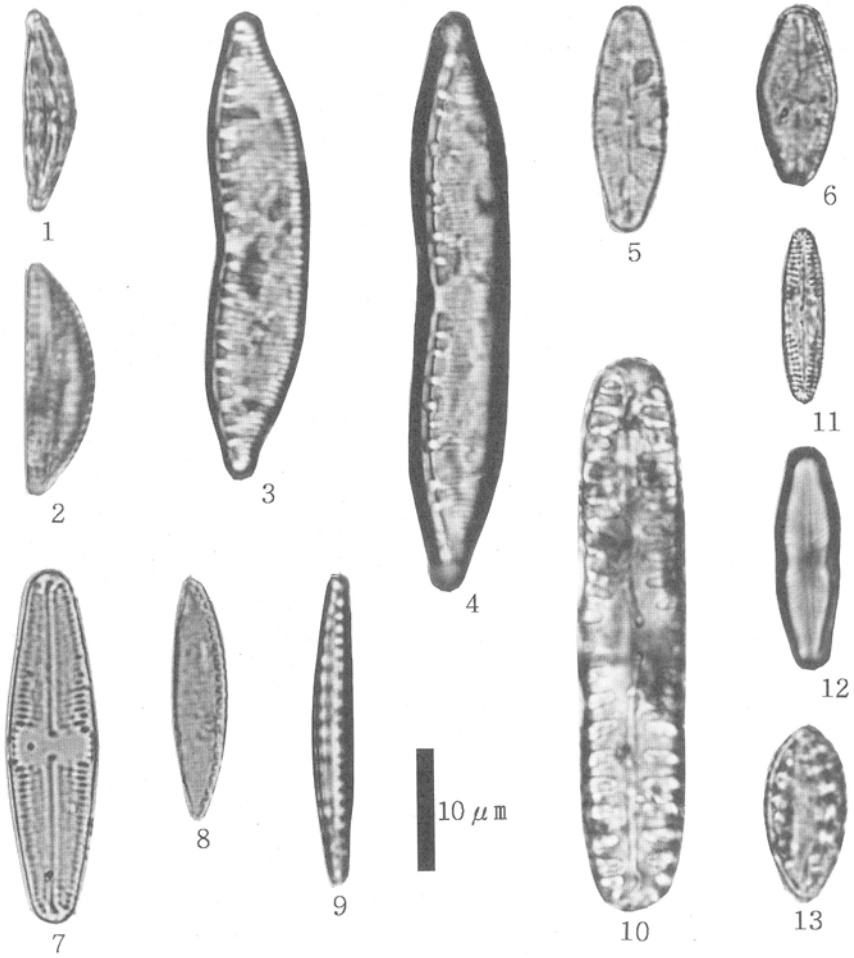
K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

日本粘土学会編 (1987) 粘土ハンドブック　第二版. 1289p., 技報堂出版.

岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p. 38-39.

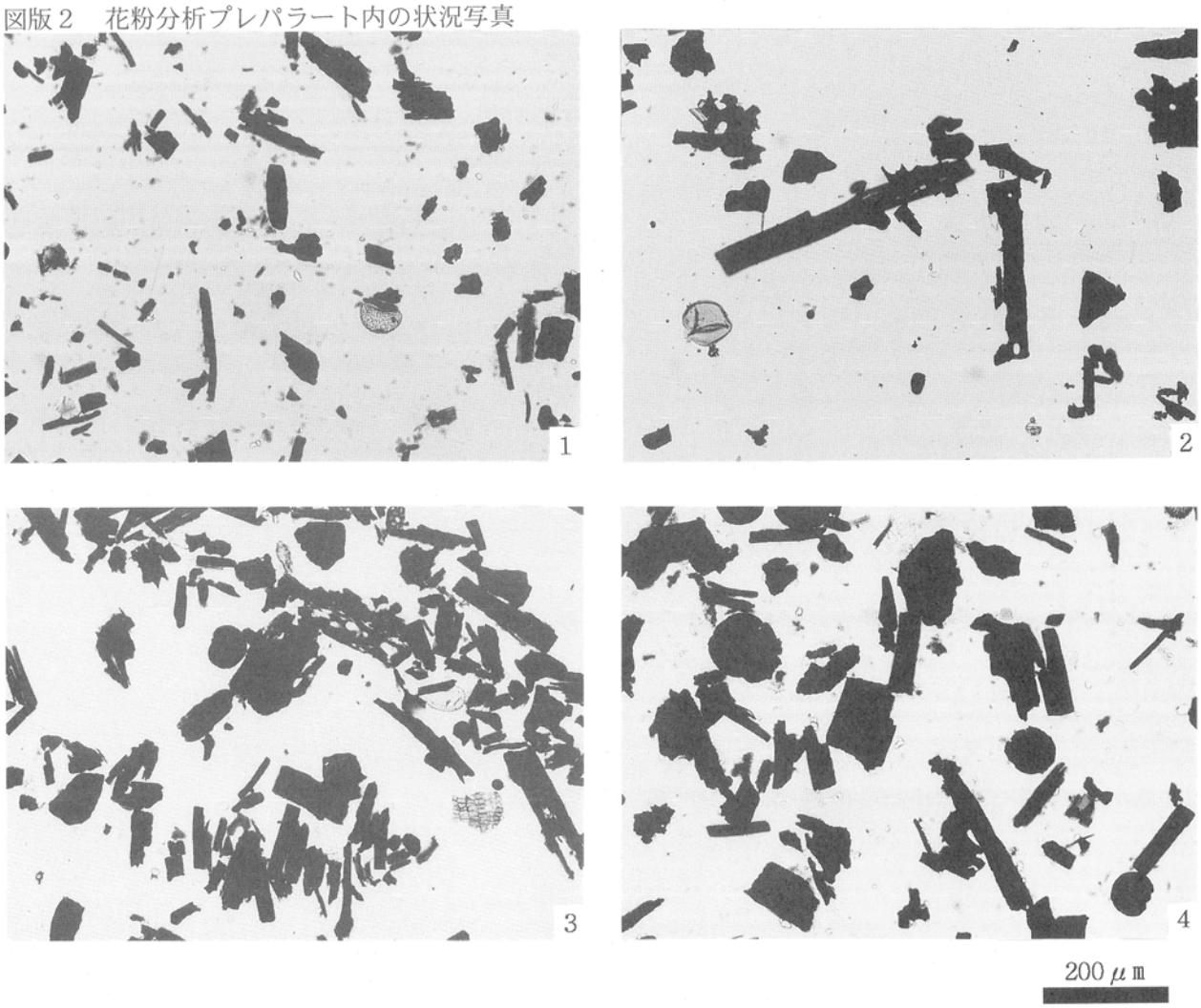
降幡順子・沢田正昭 (1997) 酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p. 76-77.

図版１　珪藻化石



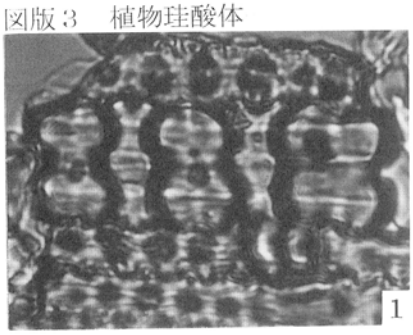
1. *Amphora montana* Krasske （ＳＫ－０２下層）
2. *Cymbella silesiaca* Bleisch （ＳＫ－０２下層）
3. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow （ＳＫ－０２下層）
4. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow （ＳＫ－０２下層）
5. *Navicula mutica* Kuetzing （ＳＫ－０２下層）
6. *Navicula mutica* Kuetzing （ＳＫ－０２下層）
7. *Navicula mutica* Kuetzing （谷ベルト１）
8. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith （ＳＫ－０２下層）
9. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith （ＳＫ－０２下層）
10. *Pinnularia borealis* Ehrenberg （ＳＫ－０２下層）
11. *Pinnularia borealis* Ehrenberg （ＳＫ－０２下層）
12. *Stauroneis obtusa* Lagerstedt （谷ベルト３ ）
13. *Surirella ovata* var. *pinnata* (W. Smith) Hustedt （ＳＫ－０２下層）

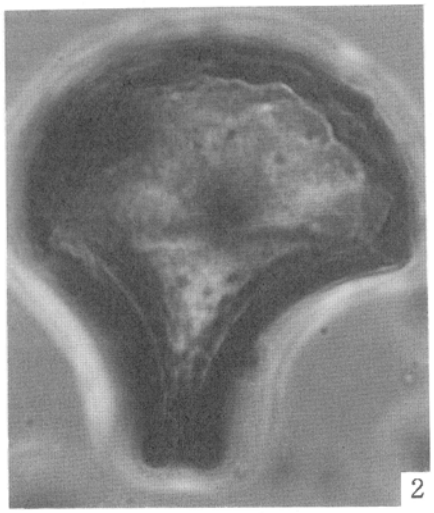
図版２　花粉分析プレパラート内の状況写真

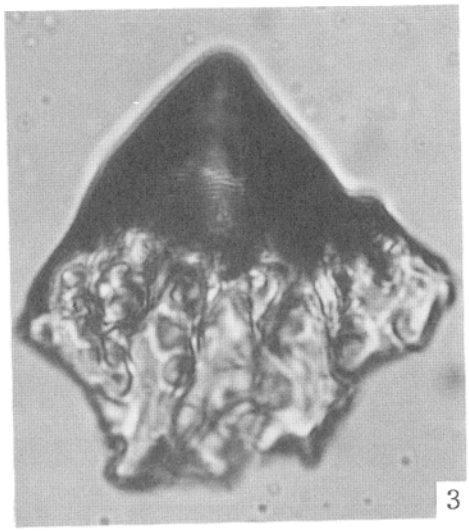


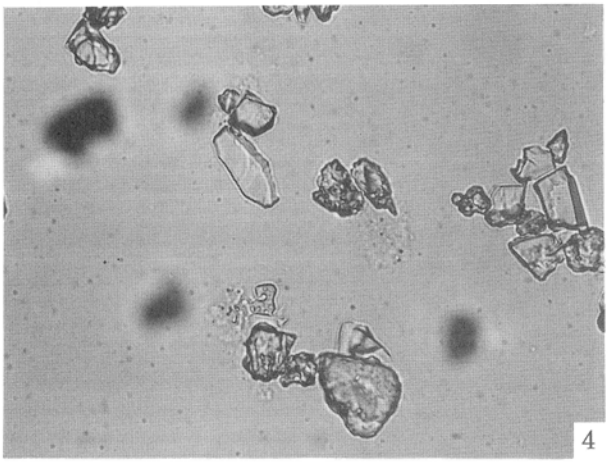
1. 状況写真（ＳＫ－０２下層）
2. 状況写真（谷ベルト１）
3. 状況写真（谷ベルト２）
4. 状況写真（谷ベルト３）

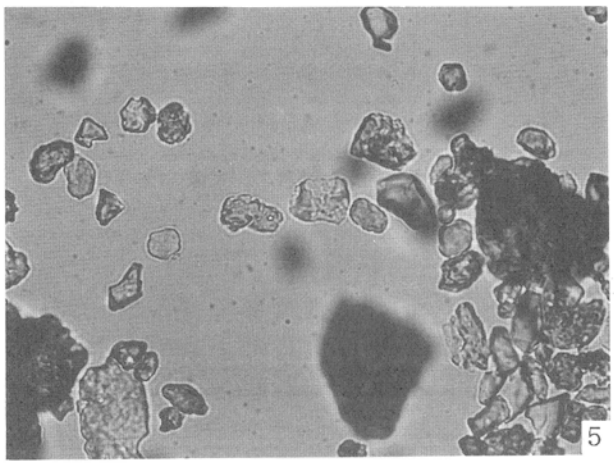
図版３　植物珪酸体









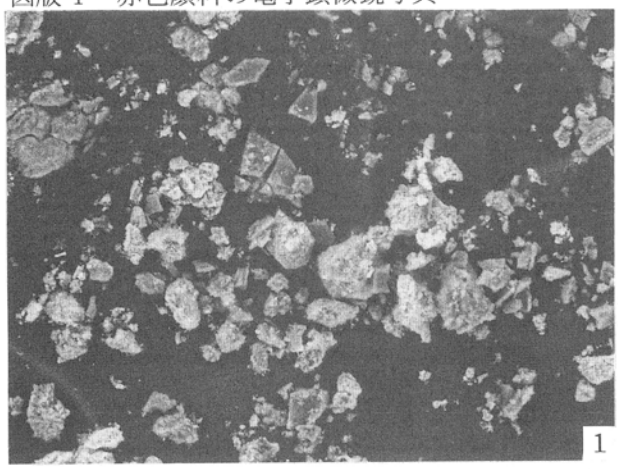


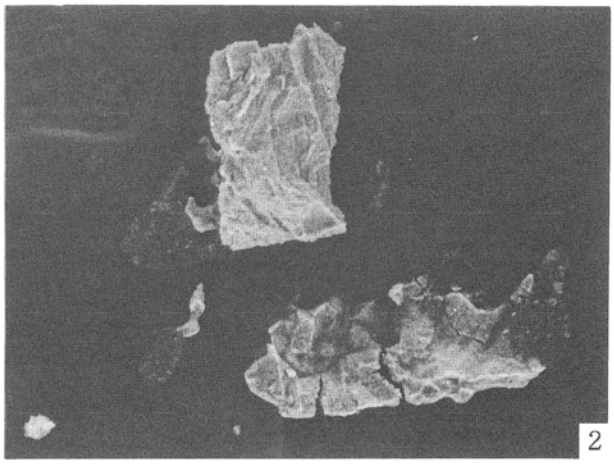
50 μm
(1-3)

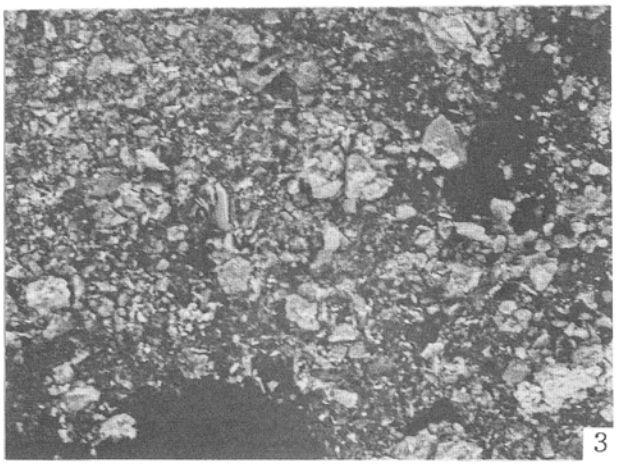
50 μm
(4,5)

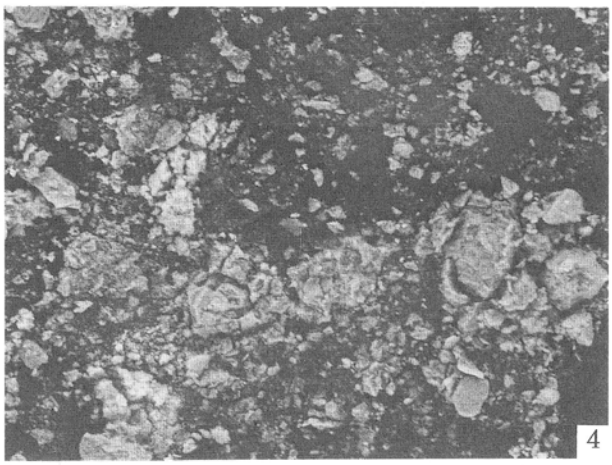
1. イネ属短細胞列（ＳＫ－０２下層）
2. イネ属機動細胞珪酸体（ＳＫ－０２下層）
3. イネ属穎珪酸体（ＳＫ－０２下層）
4. 状況写真（谷ベルト２）
5. 状況写真（谷ベルト３）

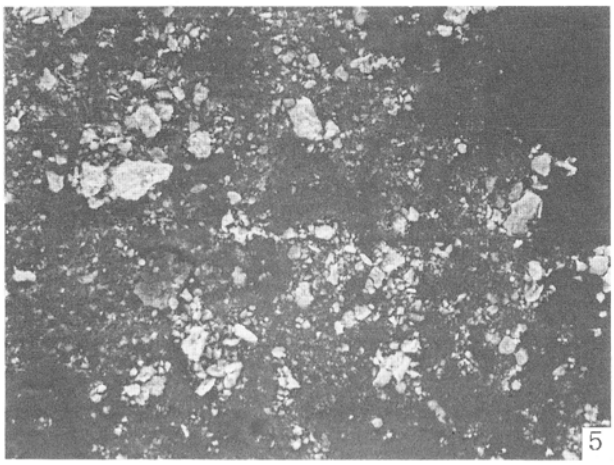
図版４　赤色顔料の電子顕微鏡写真











40 μm

1. SK-52西側小口部赤色　　2. SK-51枕部顔料
3. SK-52赤色顔料　　4. SK-51赤色顔料
5. SK-42赤色顔料

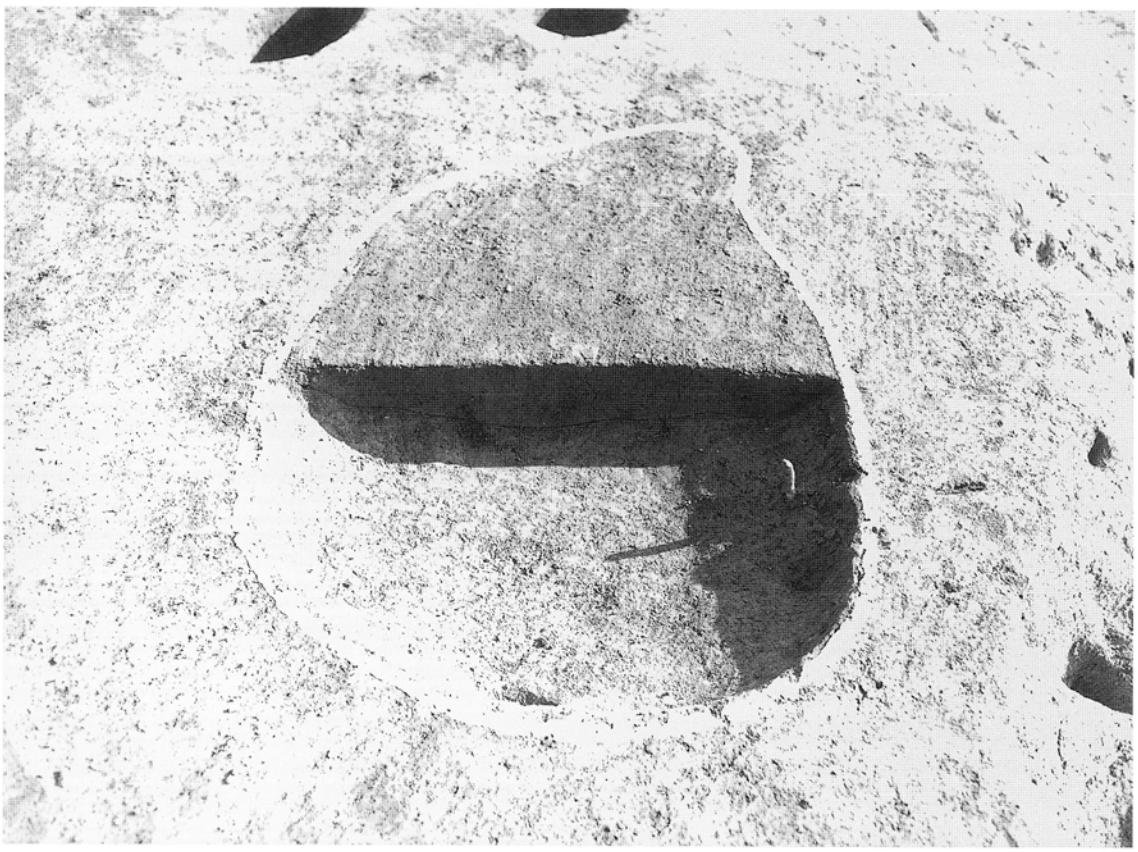
(1)ＩＡ区、ＩＢ区全景（西から）

(2)ＩＡ区全景（北西から）

(1)ＩＡ区全景（北西から）

(2)ＩＡ区ＳＫ－０１完掘状況（北東から）

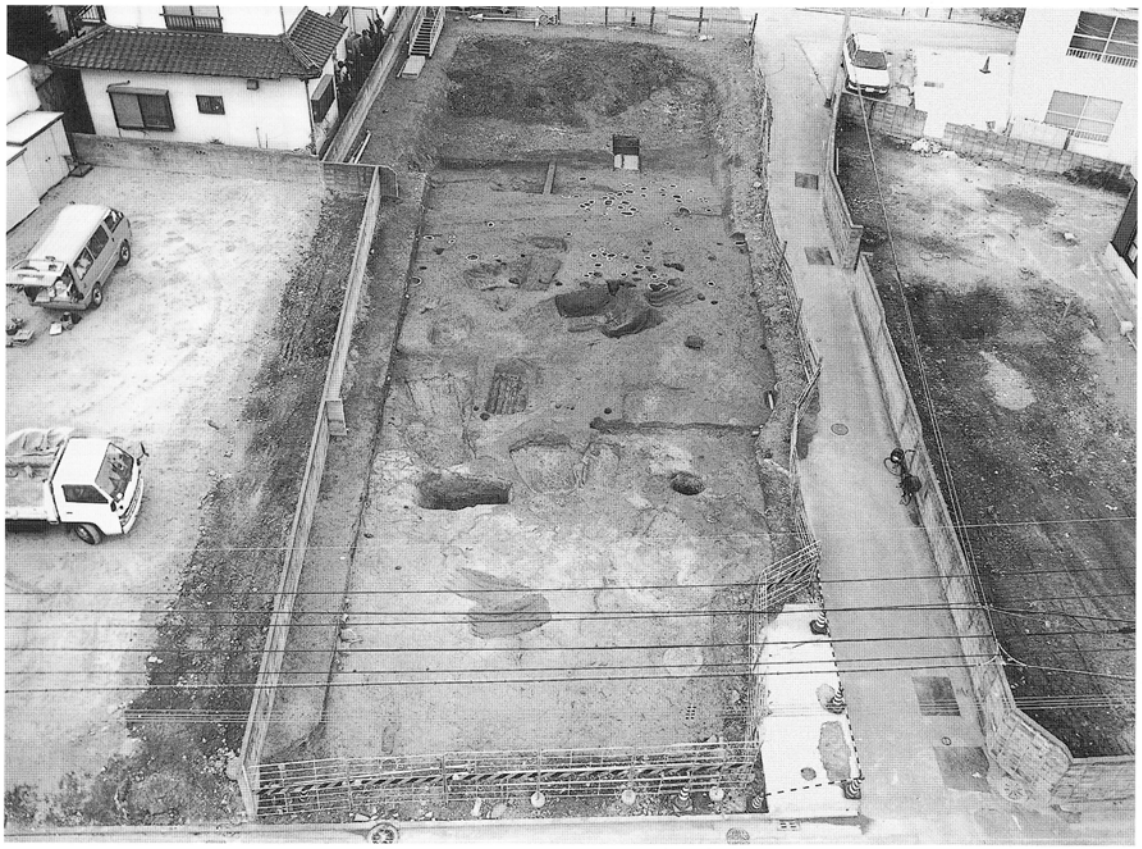
(1)ＩＡ区、ＩＢ区全景（南東から）



(2)ＩＡ区ＳＫ－０２掘削状況（北から）

(1)ＩＢ区南壁土層断面（東から）

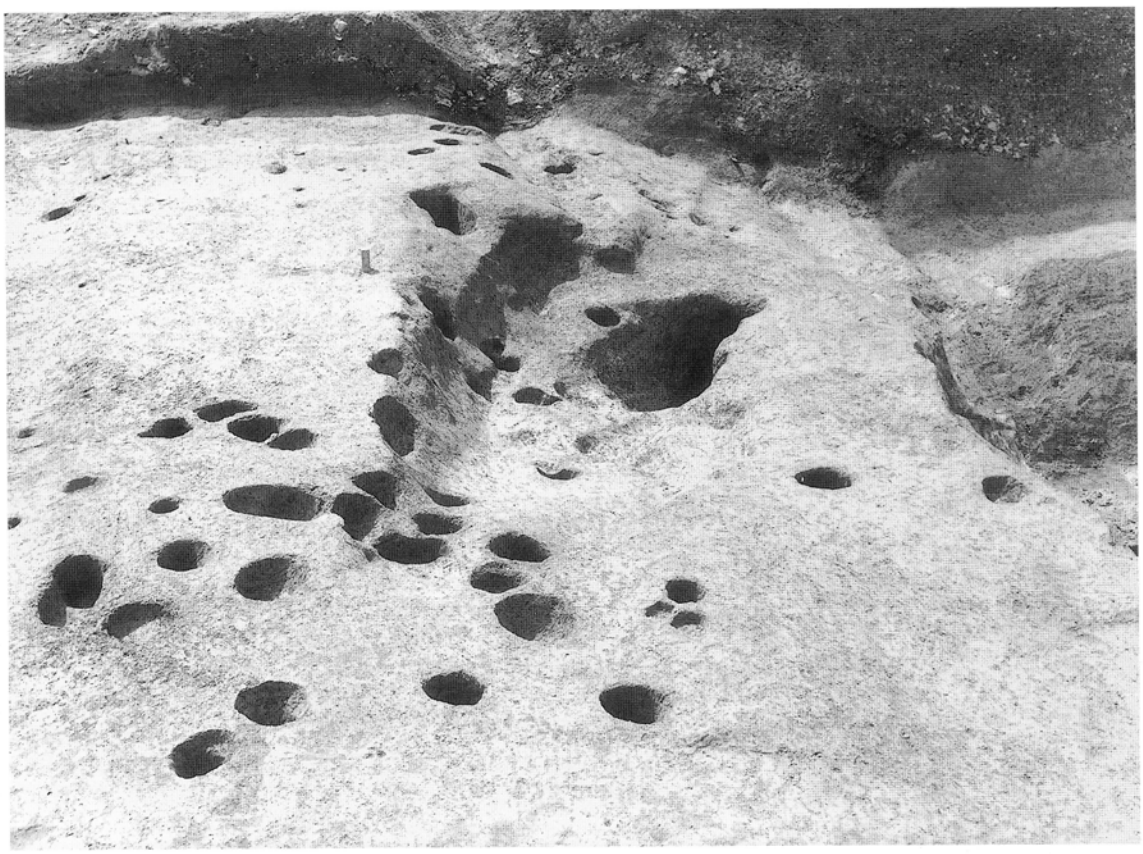
(2)ＩＢ区ＳＫ－０１掘削状況（南から）



(1)Ⅱ区全景（西から）

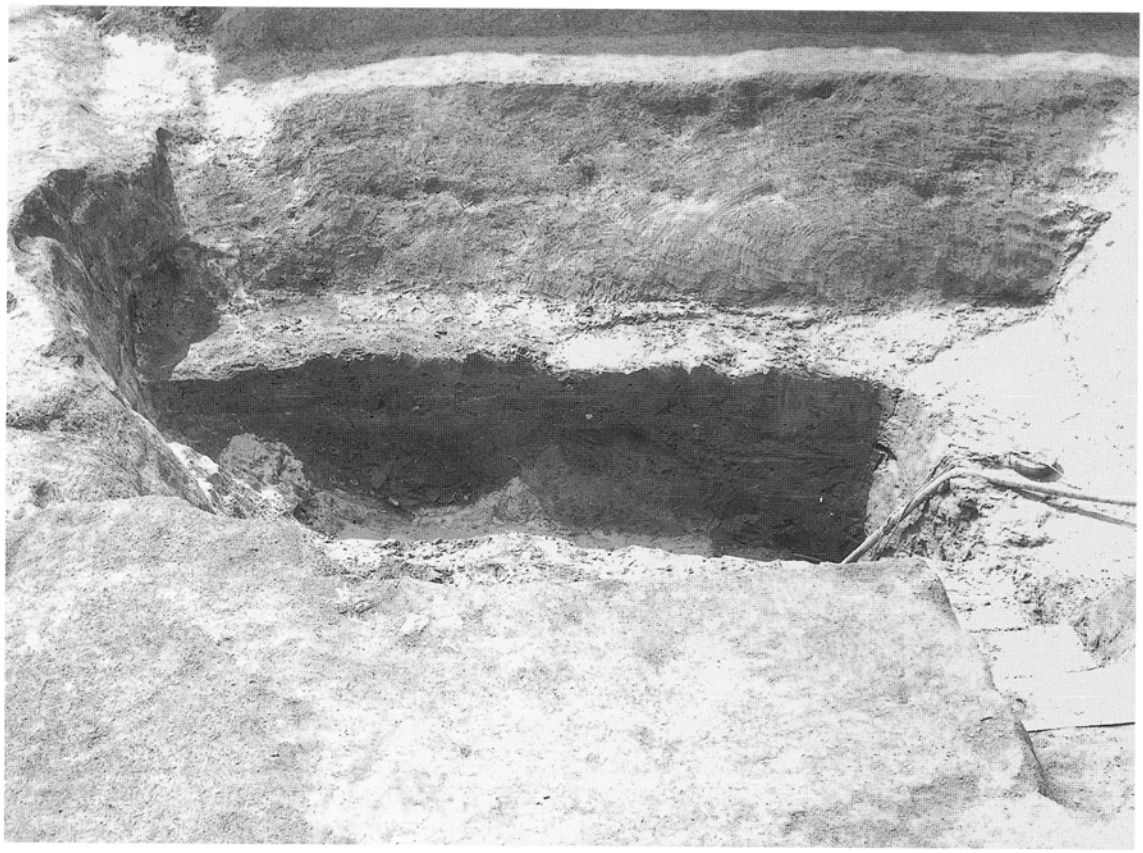
(2)Ⅱ区全景（東から）

(1) Ⅱ区全景（東から）



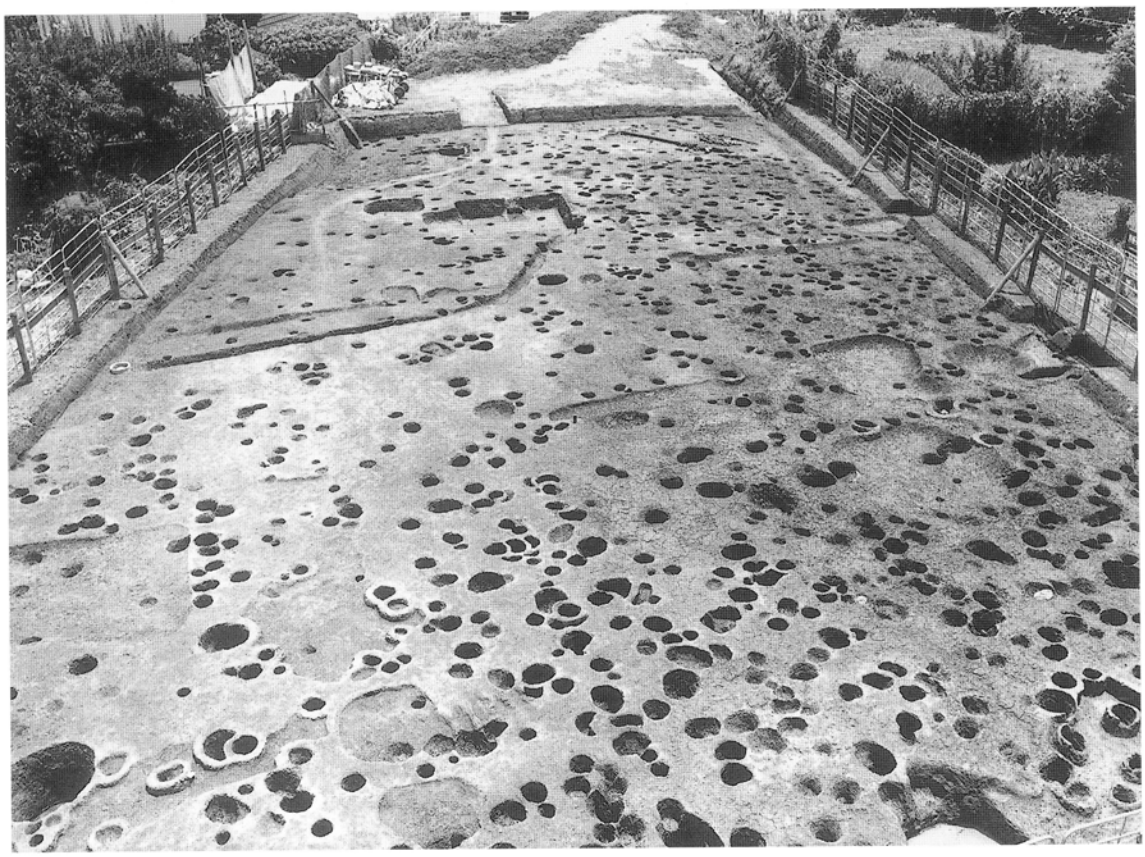
(2)Ⅱ区段落ち際状況（北東から）

（1） Ⅱ区谷部掘削状況（北西から）



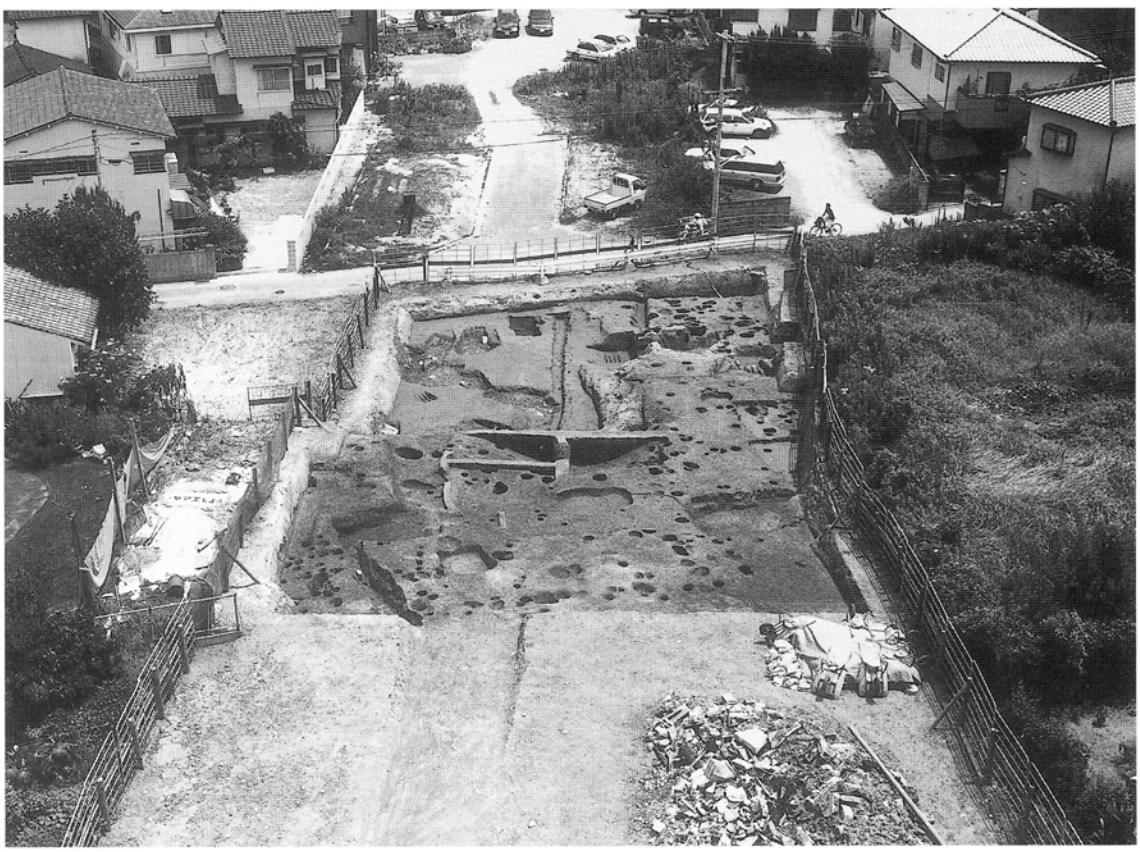
(2)Ⅱ区谷部断面状況（北東から）

(1) 調査区掘削状況（東から）



(2)調査区掘削状況（西から）

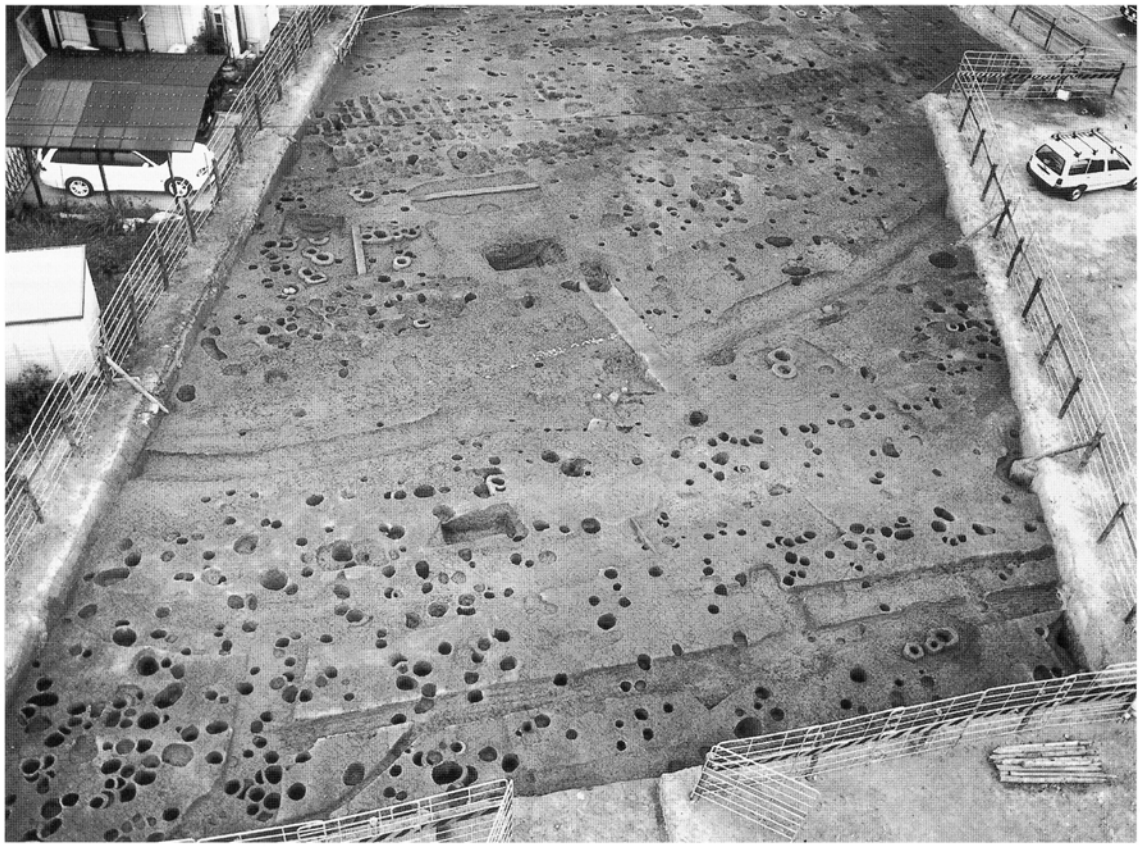
(1)調査区掘削状況（北から）



(2)調査区掘削状況（西から）

(1)調査区掘削状況（東から）

(2)田島Ａ遺跡２次調査区全景（南西から）

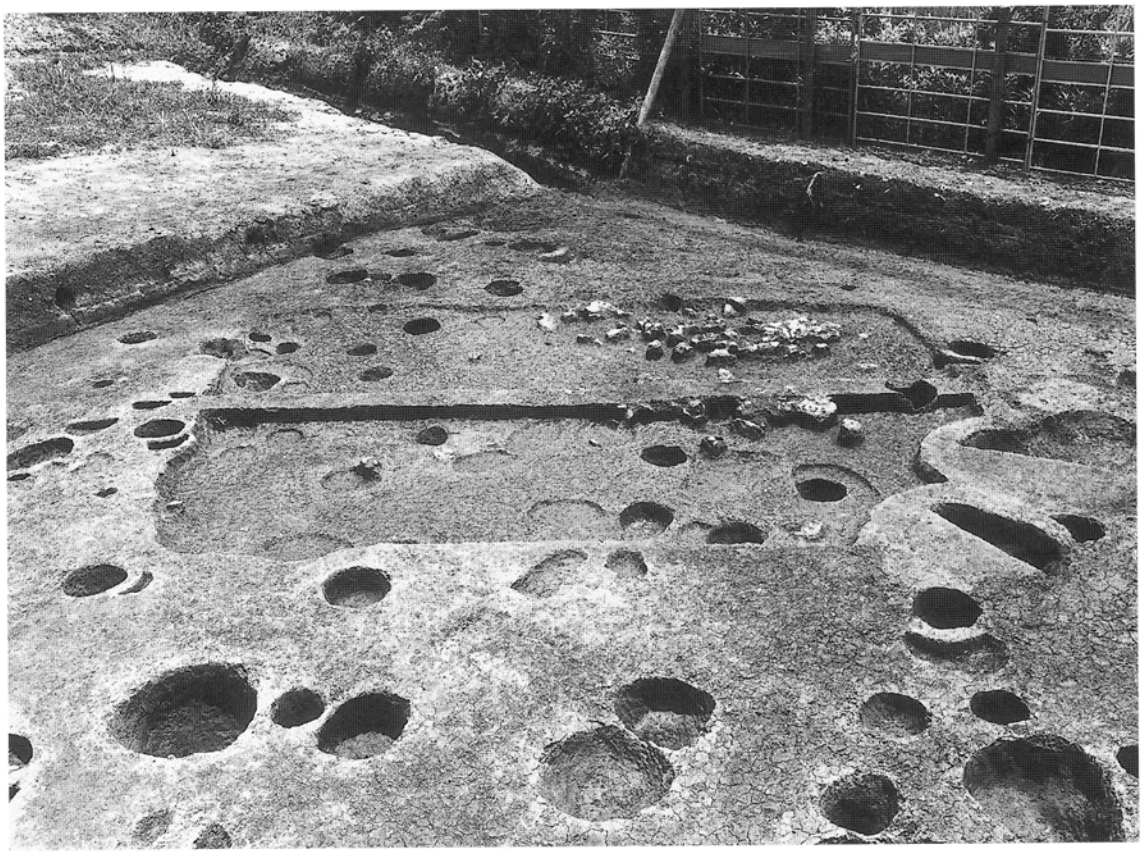


(1)調査区掘削状況（東から）

(2)調査区掘削状況（北から）

(1)ＳＣ－２６完掘状況（西から）

(2)ＳＣ－２６カマド検出状況（西から）



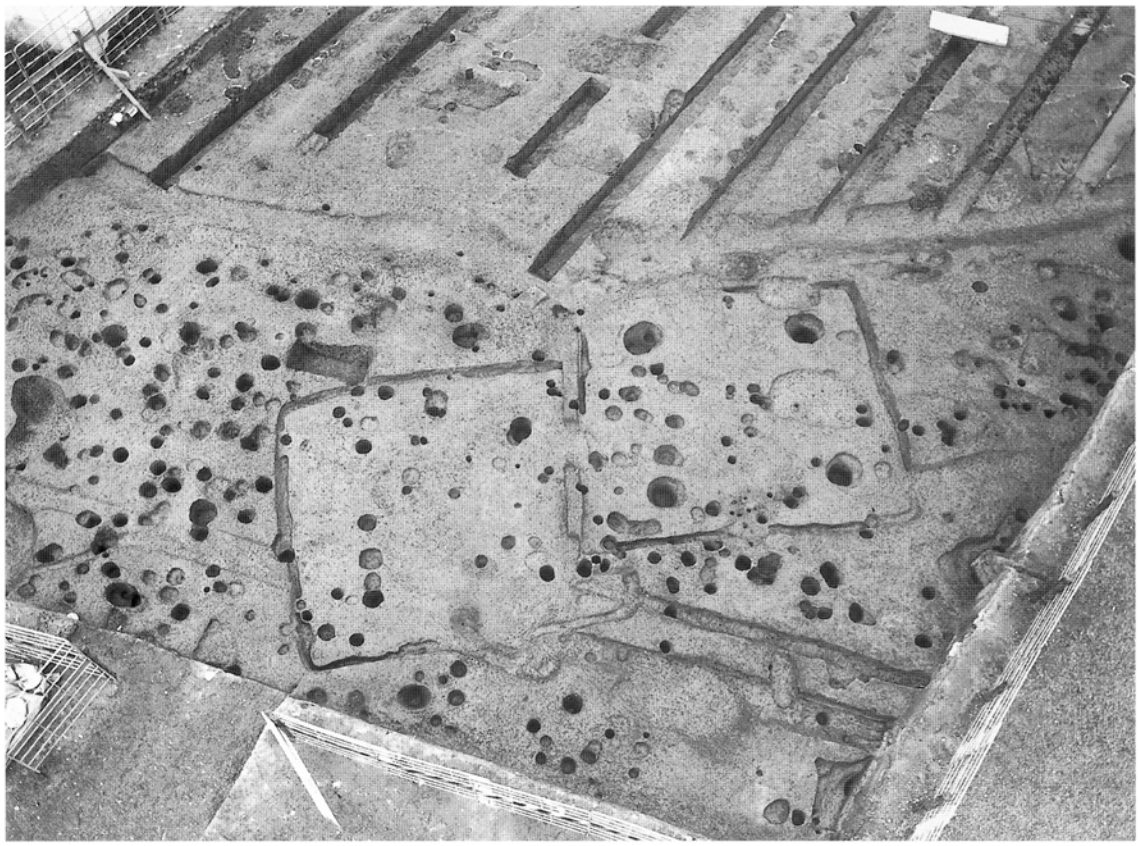
(1)ＳＣ－２７遺物検出状況（北から）

(2)ＳＣ－２７完掘状況（東から）

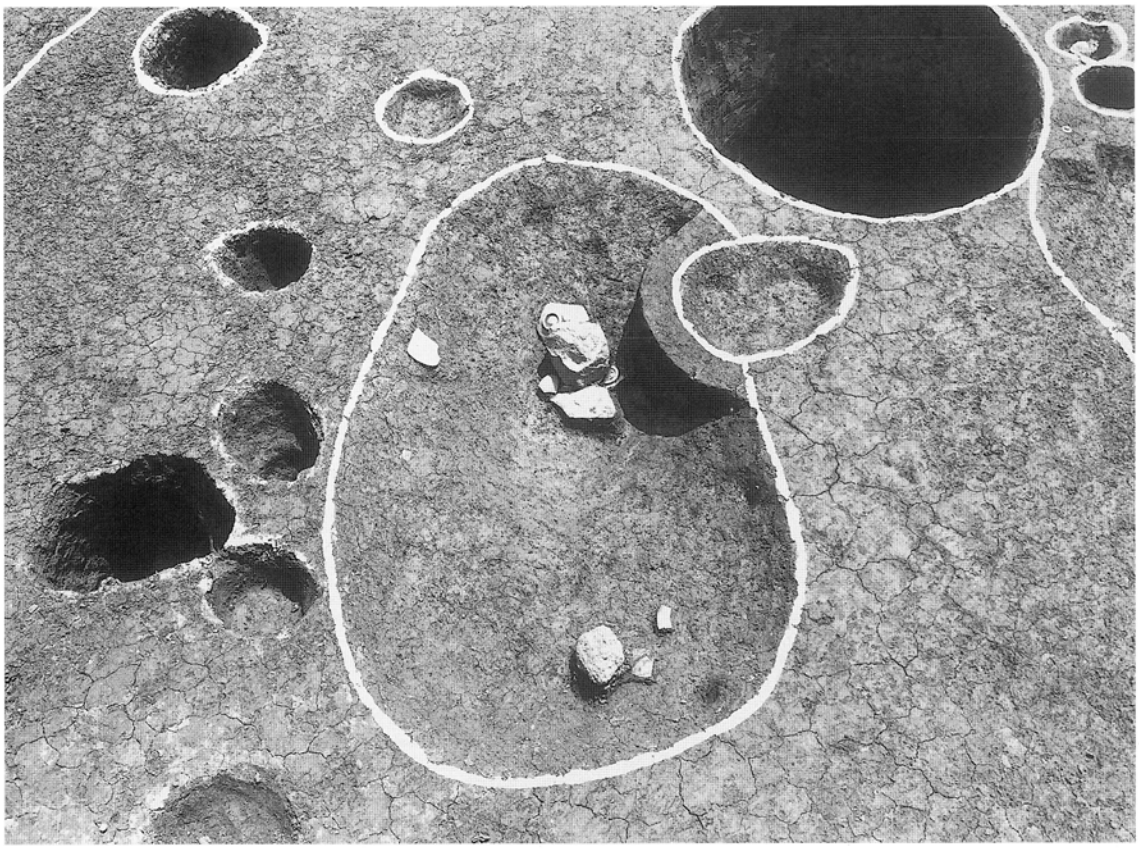
(1)ＳＣ－３５完掘状況（北から）

(2)ＳＣ－３６完掘状況（北から）

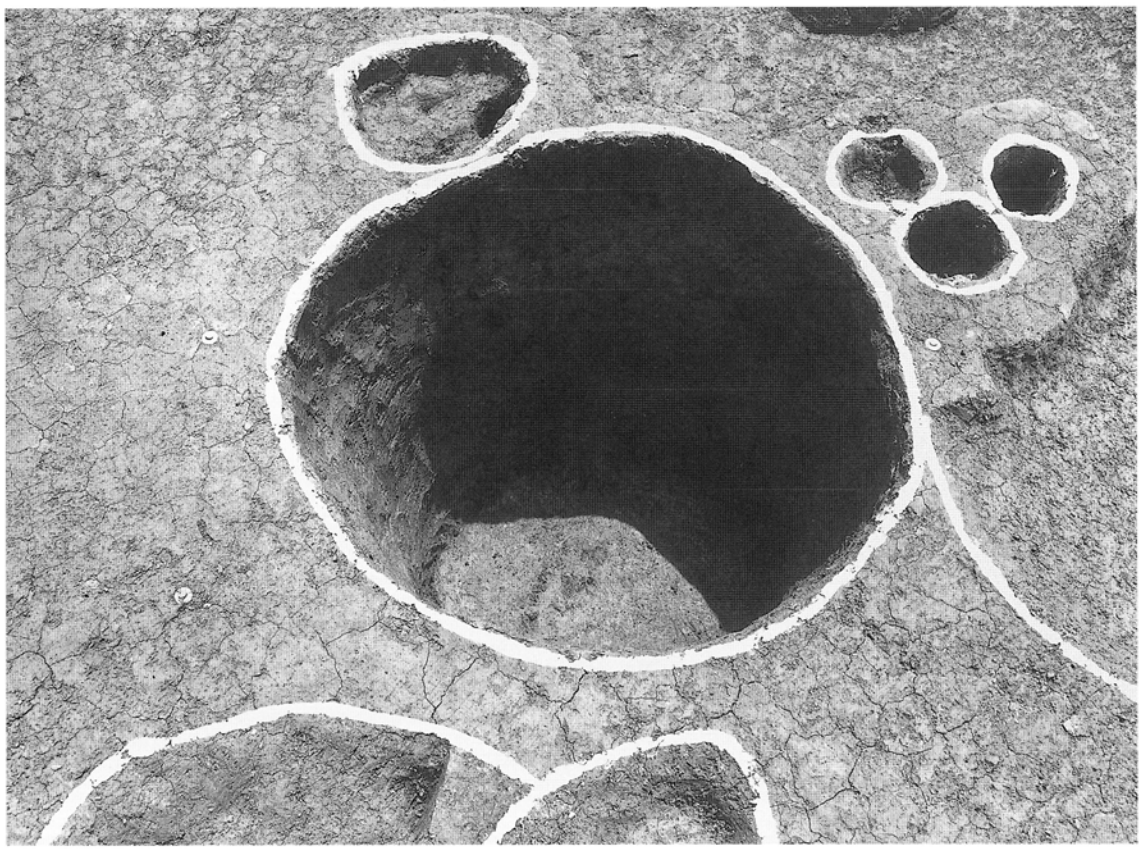
(1)ＳＣ－３６完掘状況（東から）



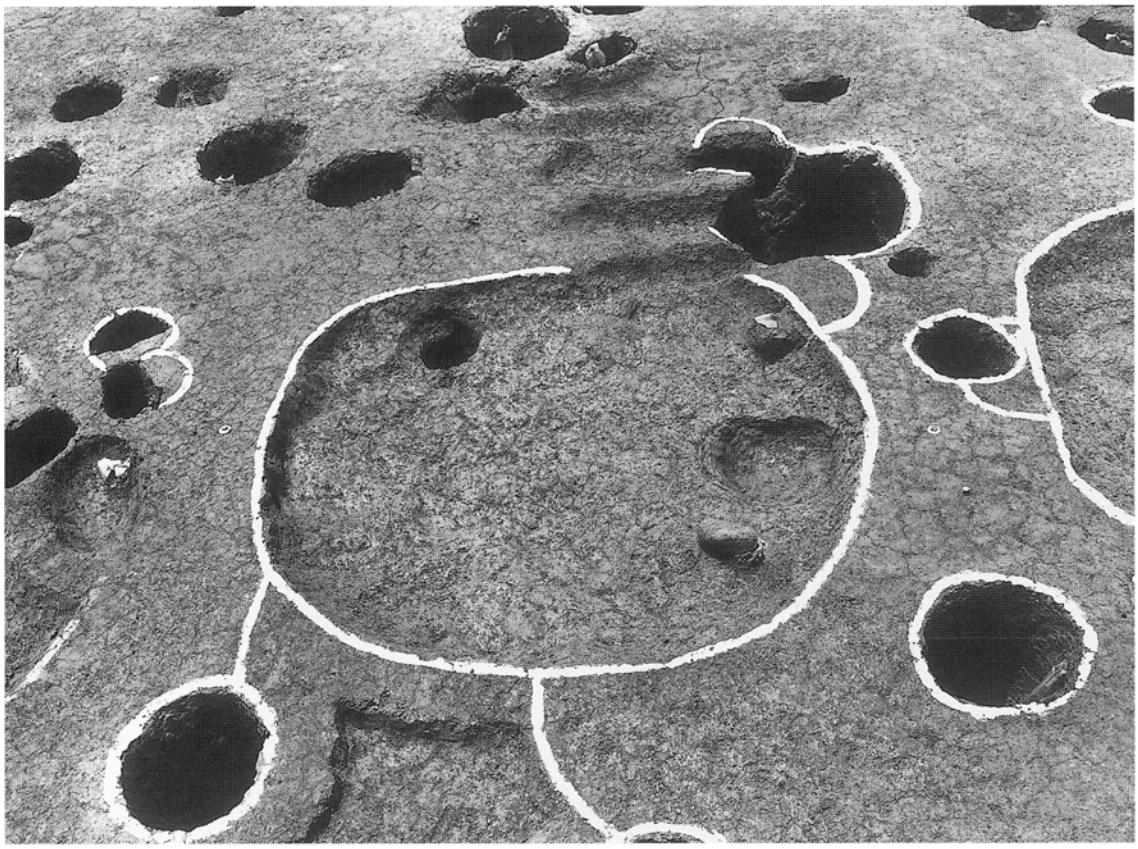
(2)ＳＣ－８０，８１掘削状況（東から）



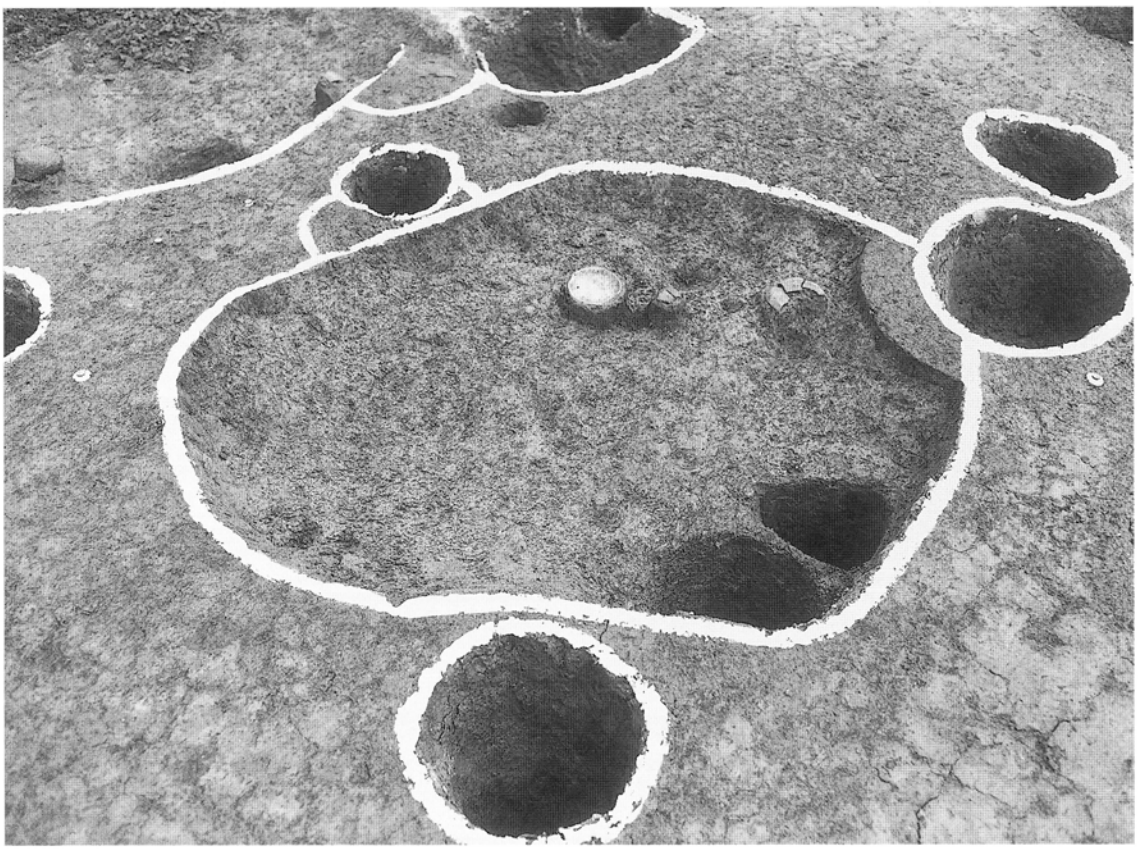
(1)ＳＫ－０１掘削状況（北東から）



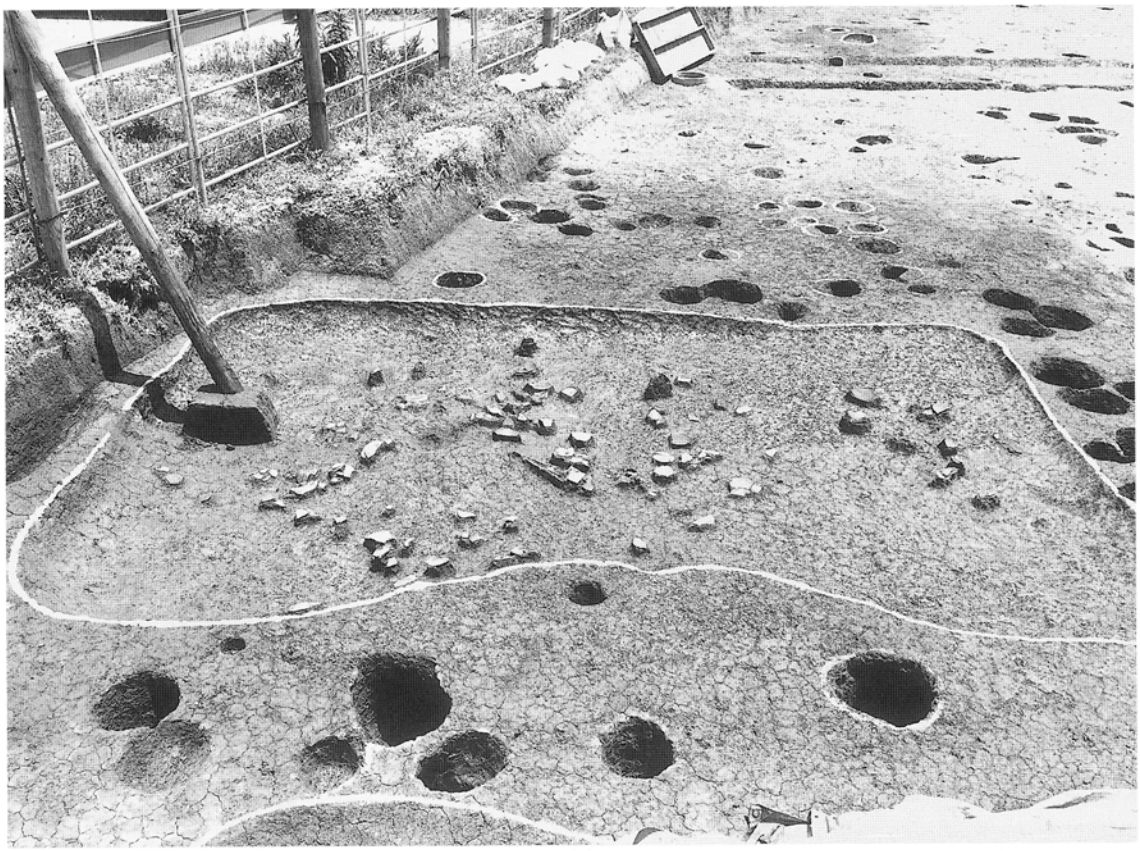
(2)ＳＫ－０２掘削状況（北東から）



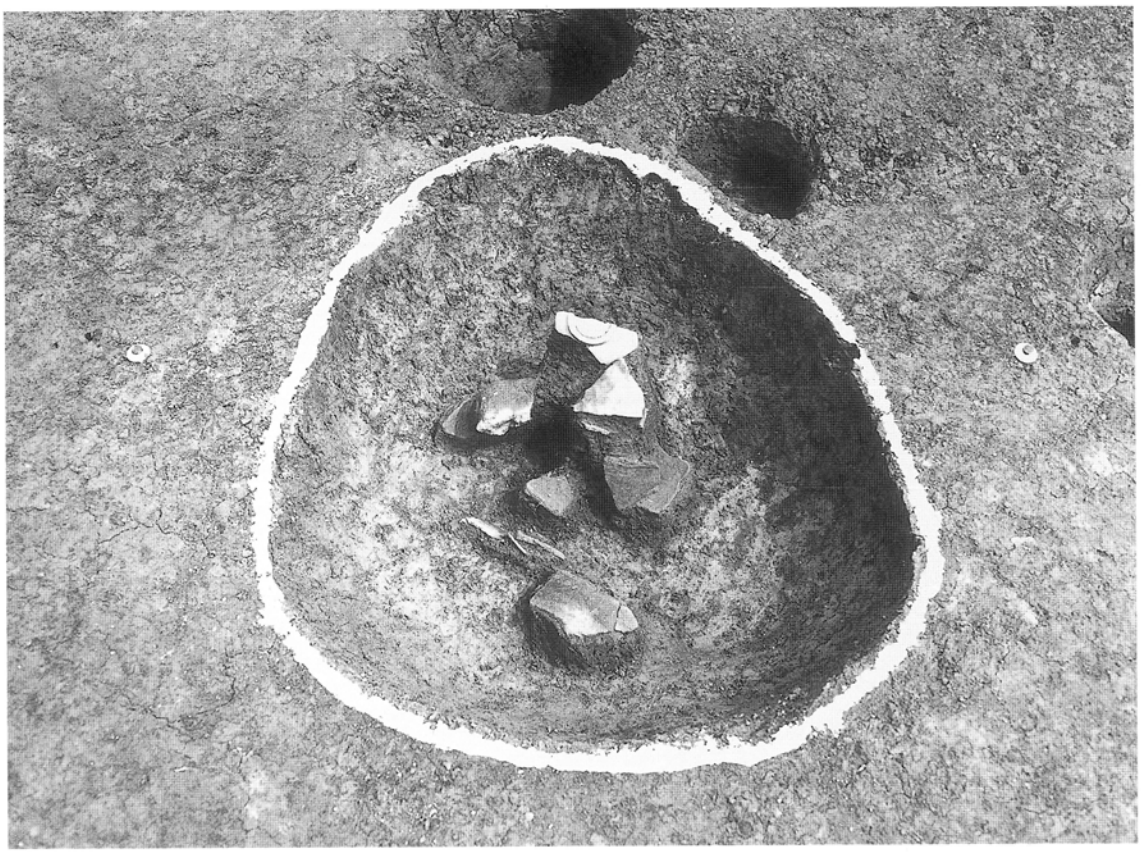
(1)ＳＫ－０３掘削状況（北から）



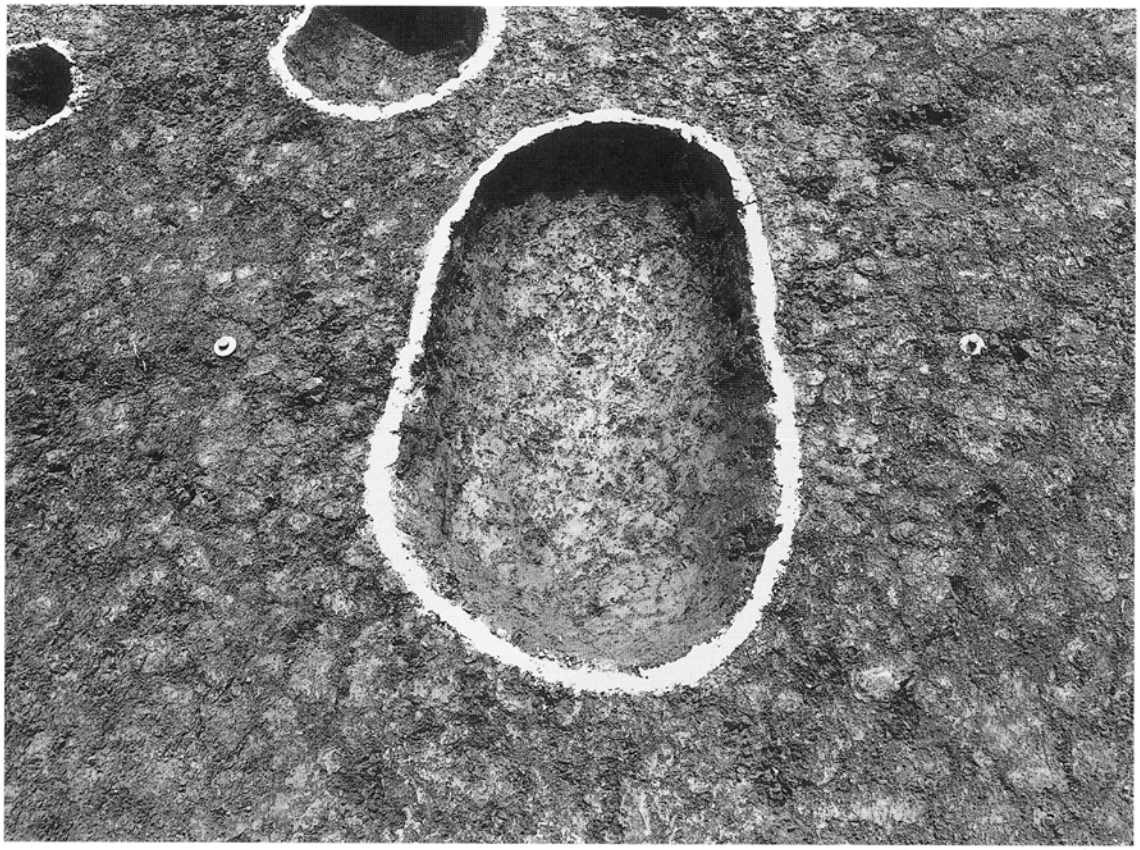
(2)ＳＫ－０４掘削状況（北から）



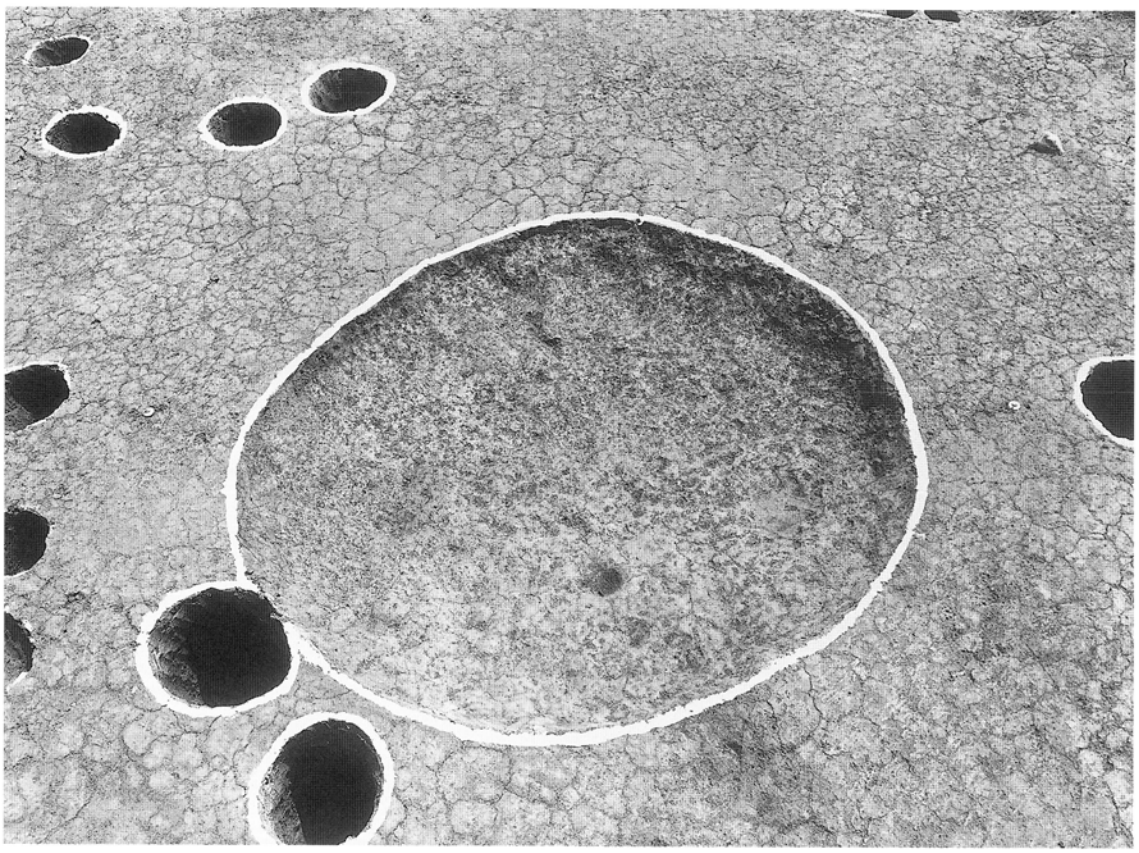
(1)ＳＫ－０７遺物検出状況（西から）



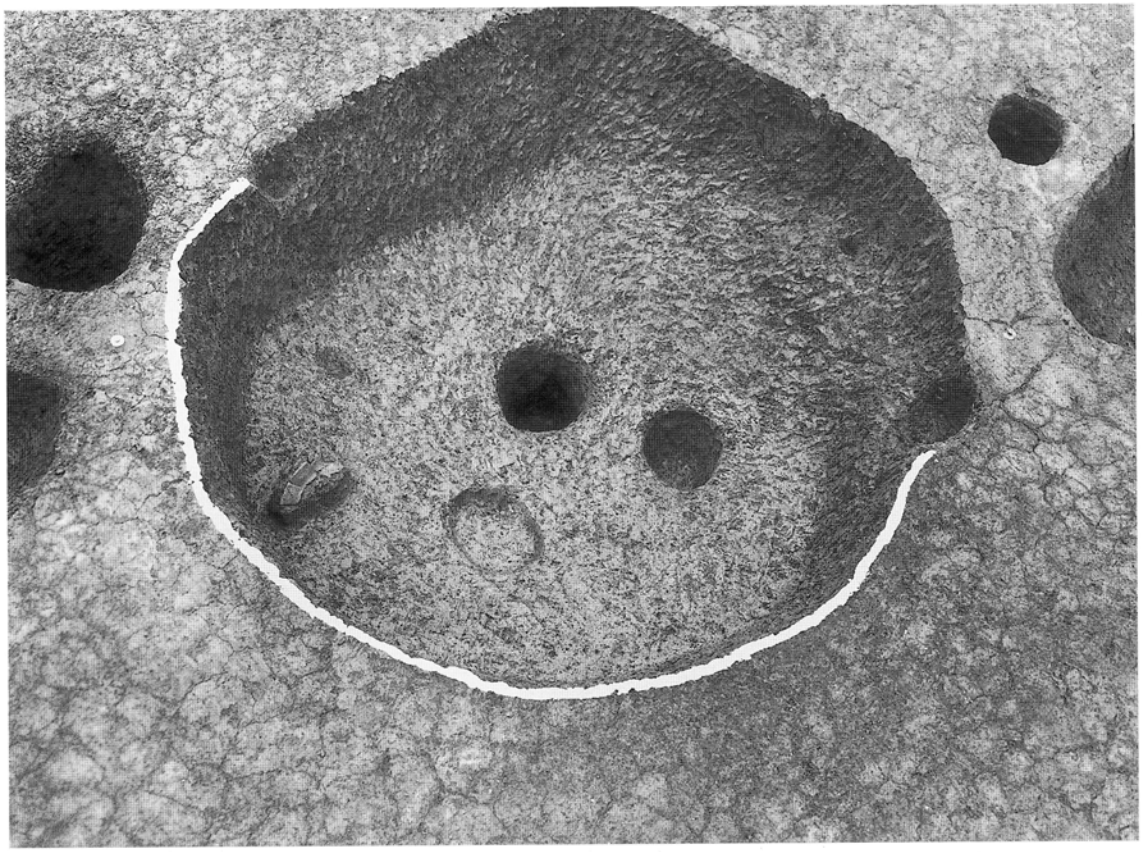
(2)ＳＫ－０８遺物検出状況（北から）



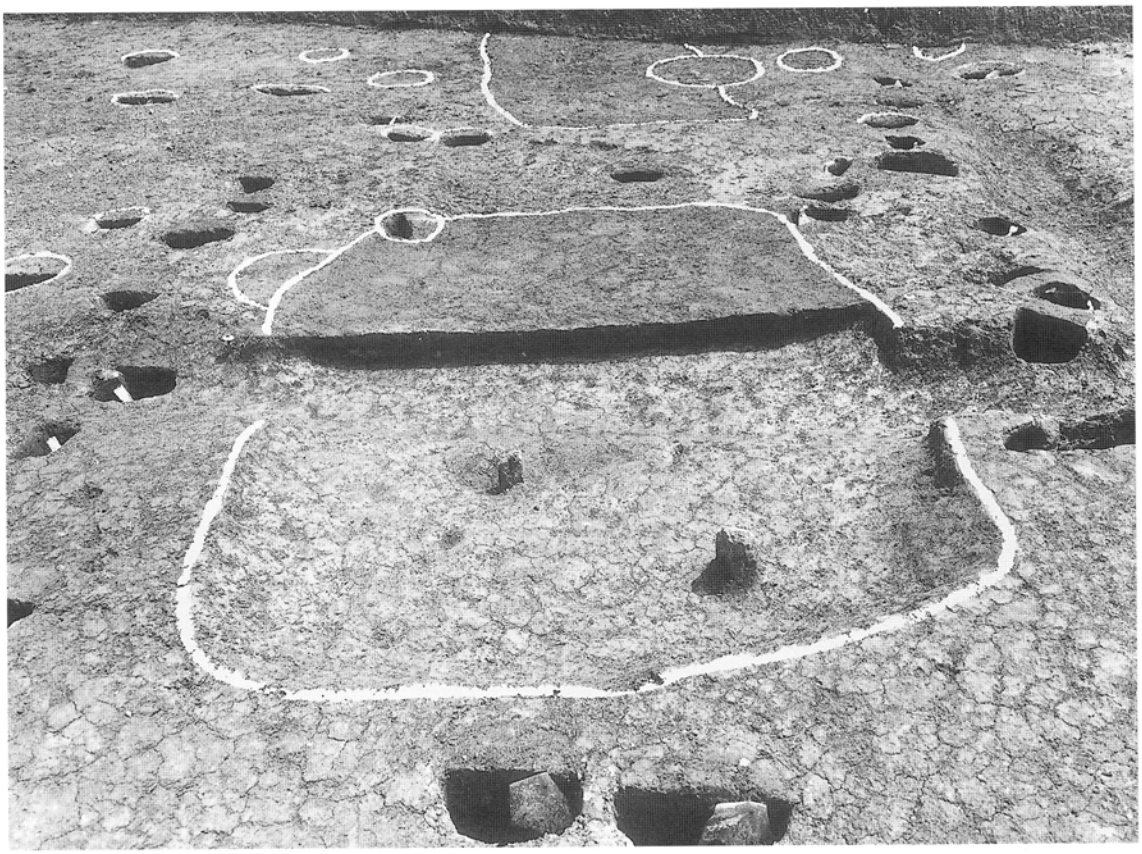
(1)ＳＫ－０９掘削状況（北東から）



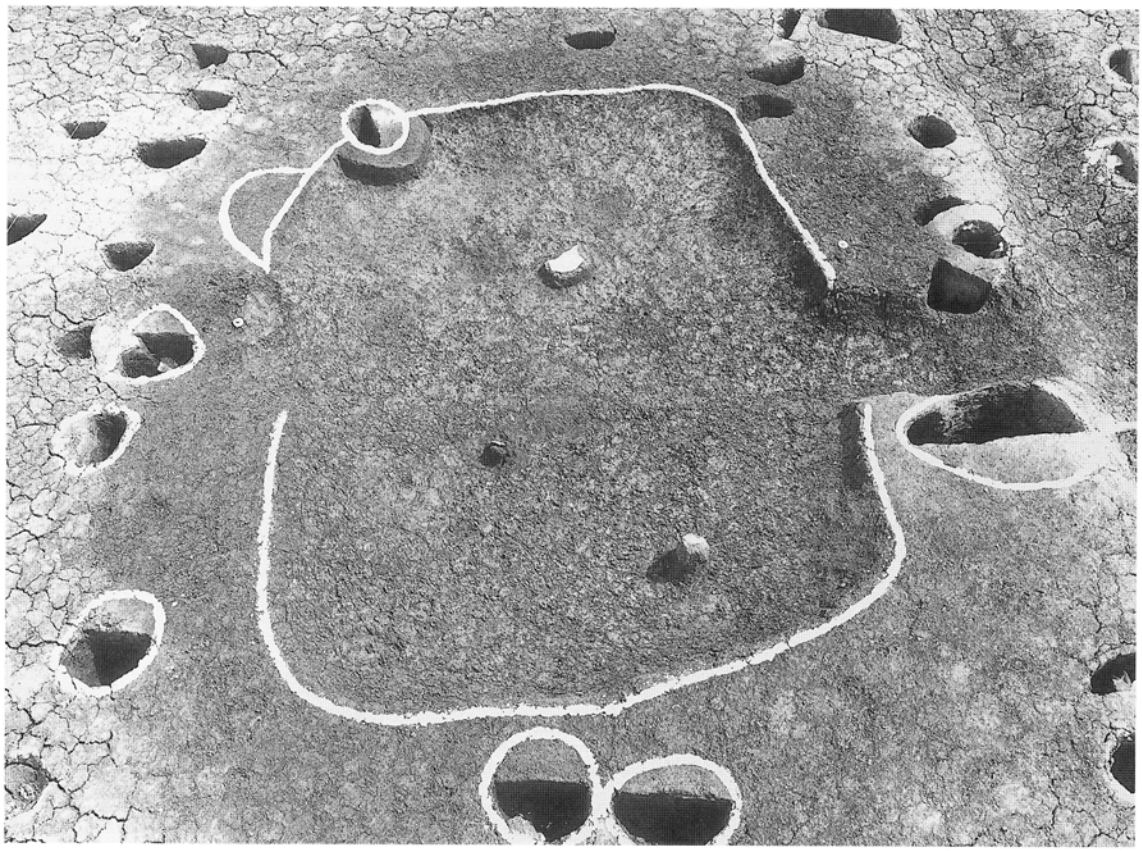
(2)ＳＫ－１０掘削状況（北東から）



(1)ＳＫ－１１掘削状況（北から）

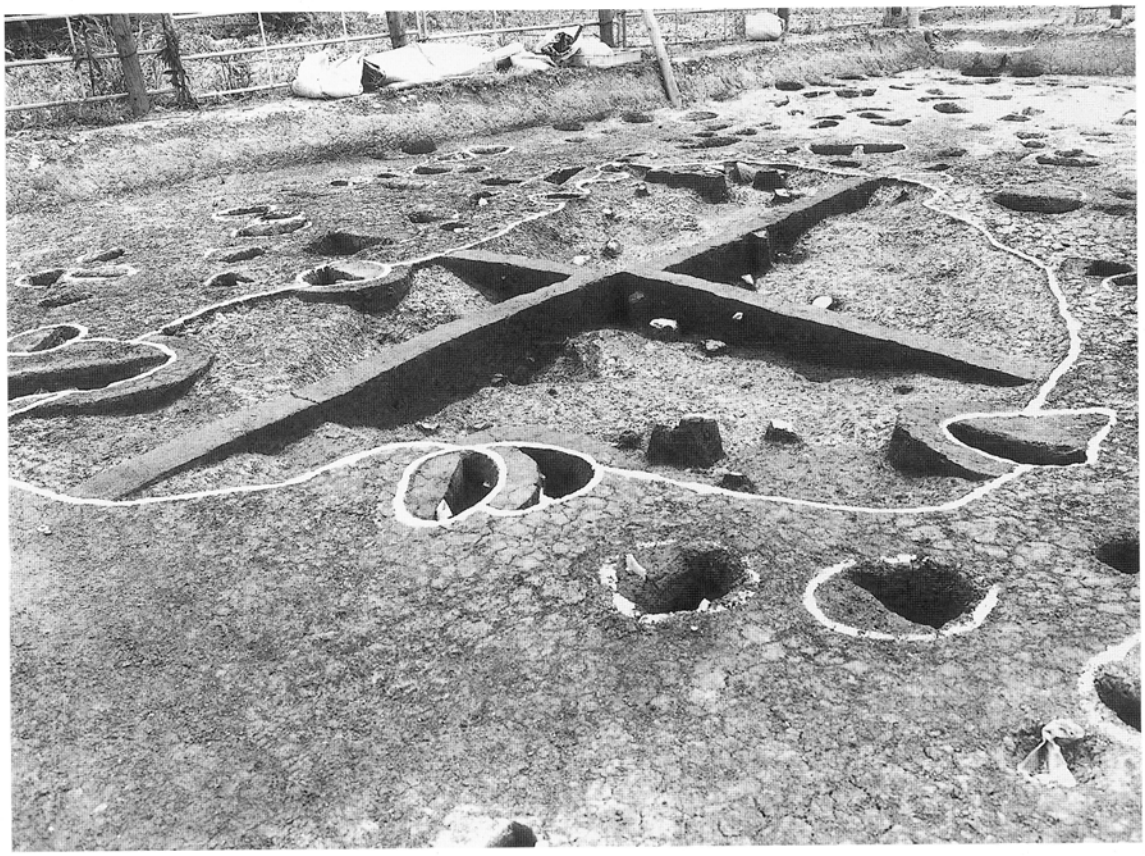


(2)ＳＫ－１２掘削状況（北から）

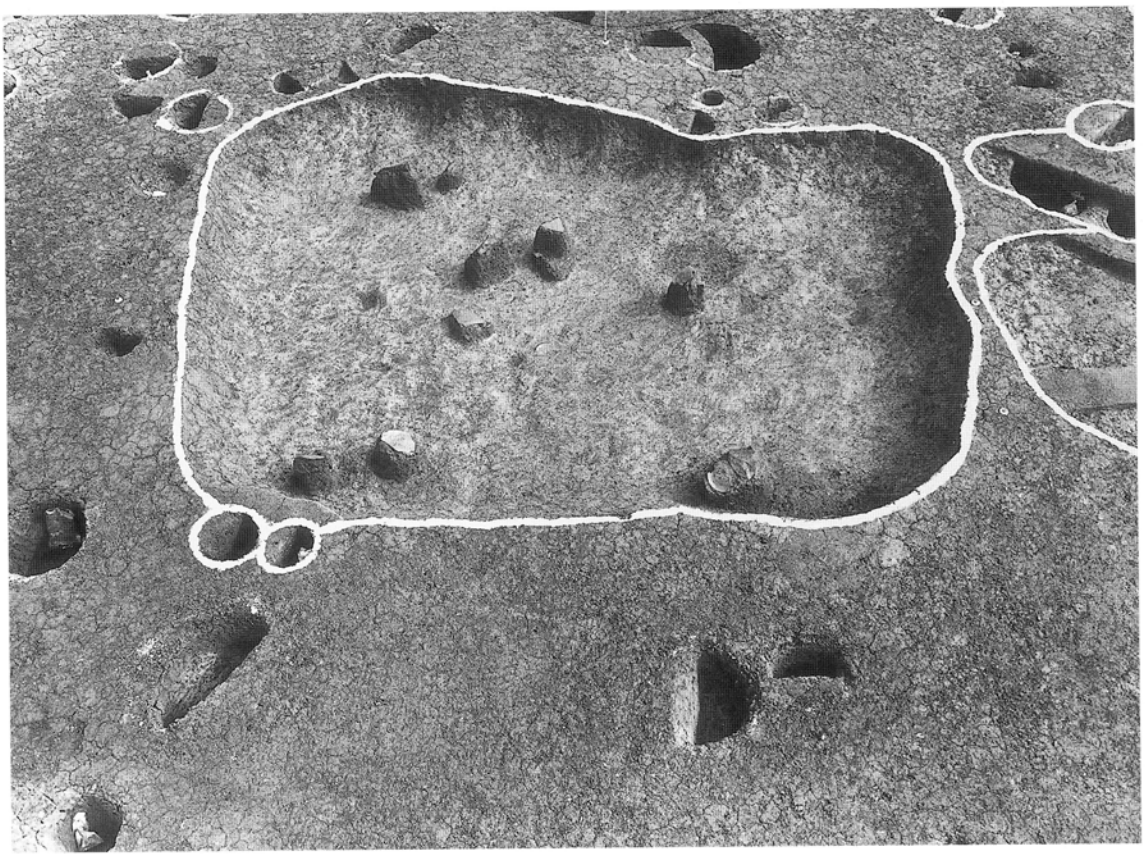


(1)ＳＫ－１２掘削状況（北から）

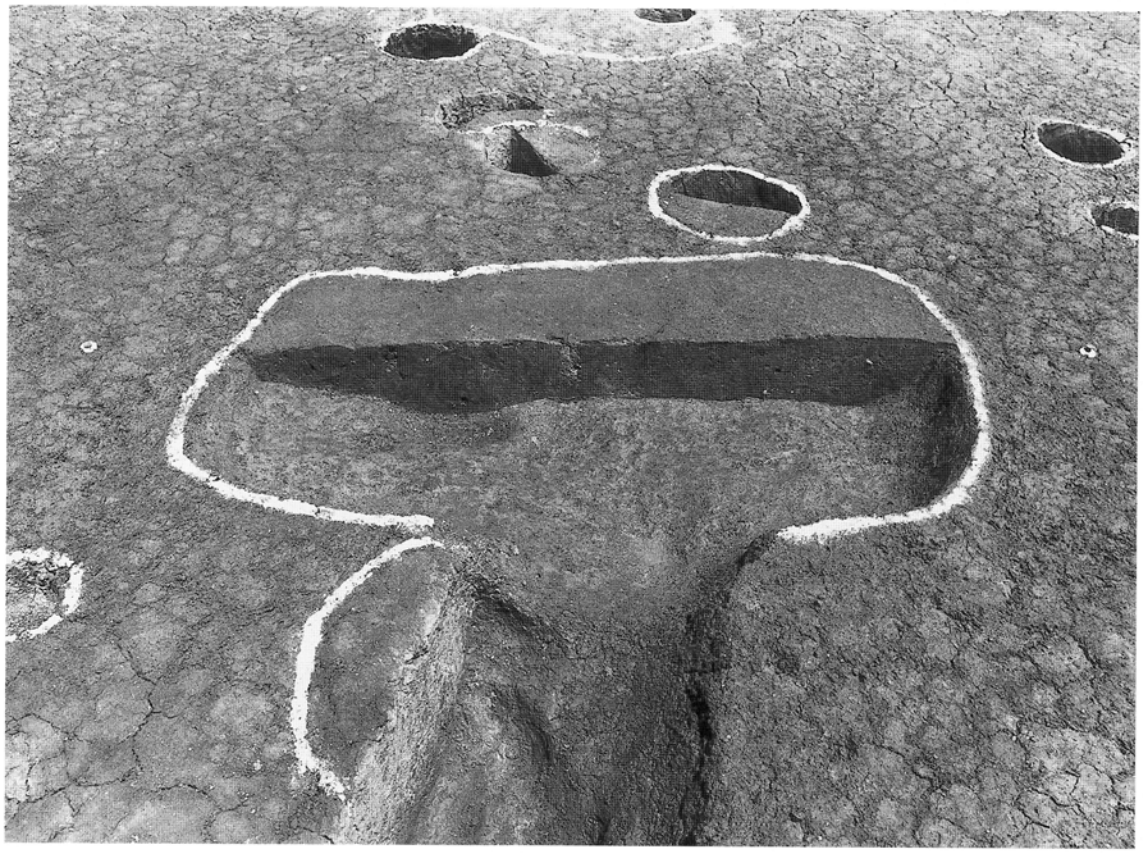
(2)ＳＫ－１３検出状況（東から）



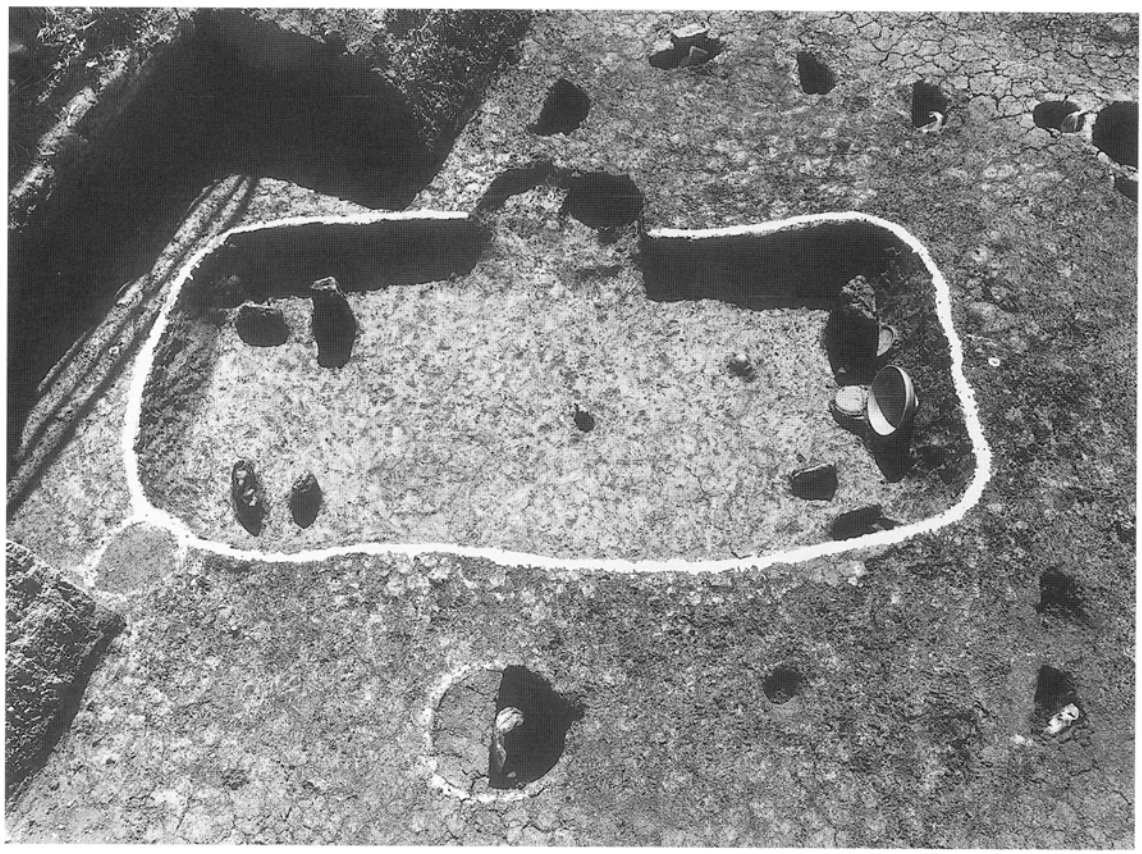
(1)ＳＫ－１６検出状況（北東から）



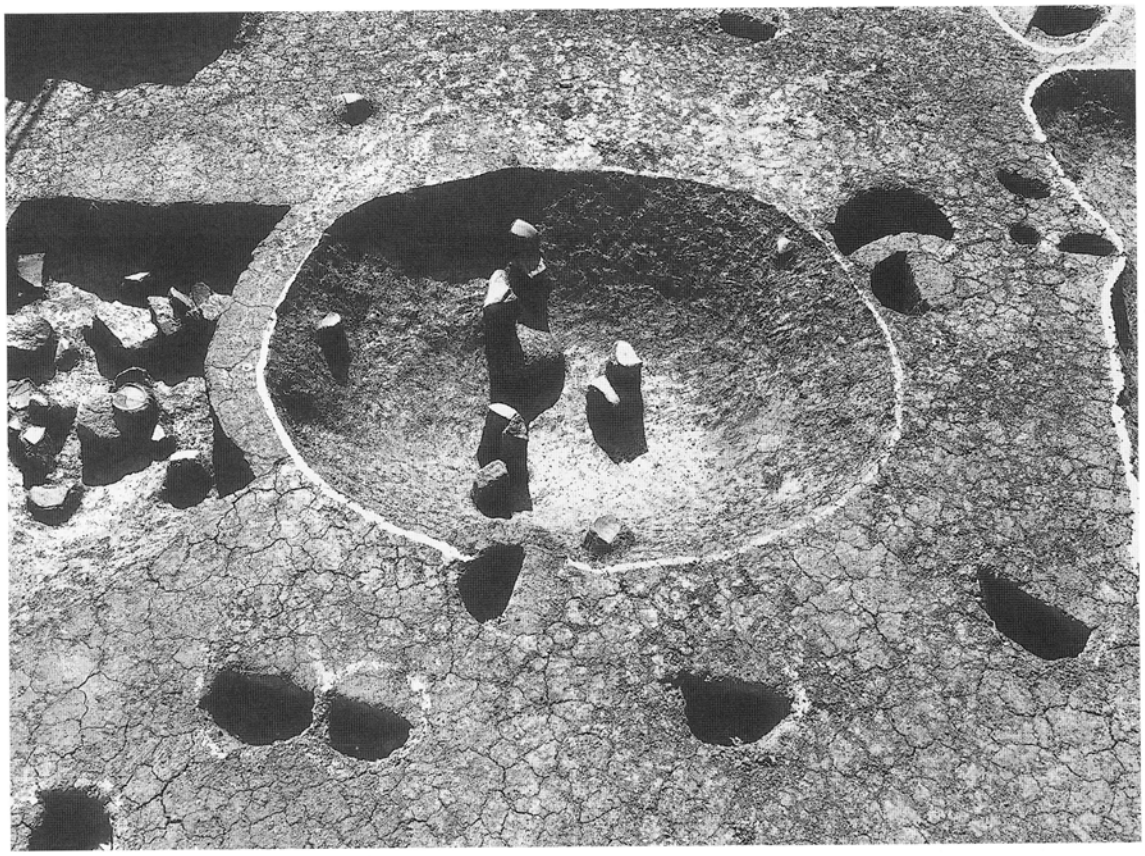
(2)ＳＫ－１８遺物検出状況（北から）



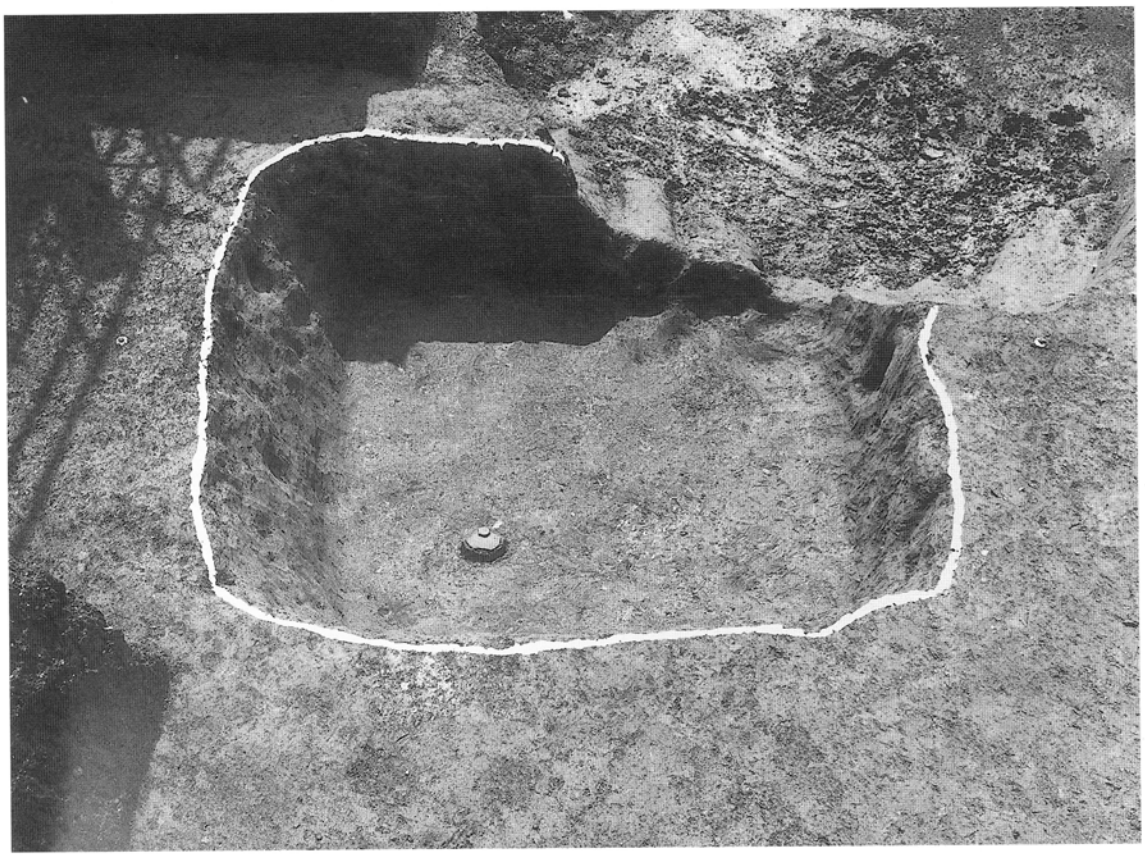
(1)ＳＫ－２０遺物検出状況（北西から）



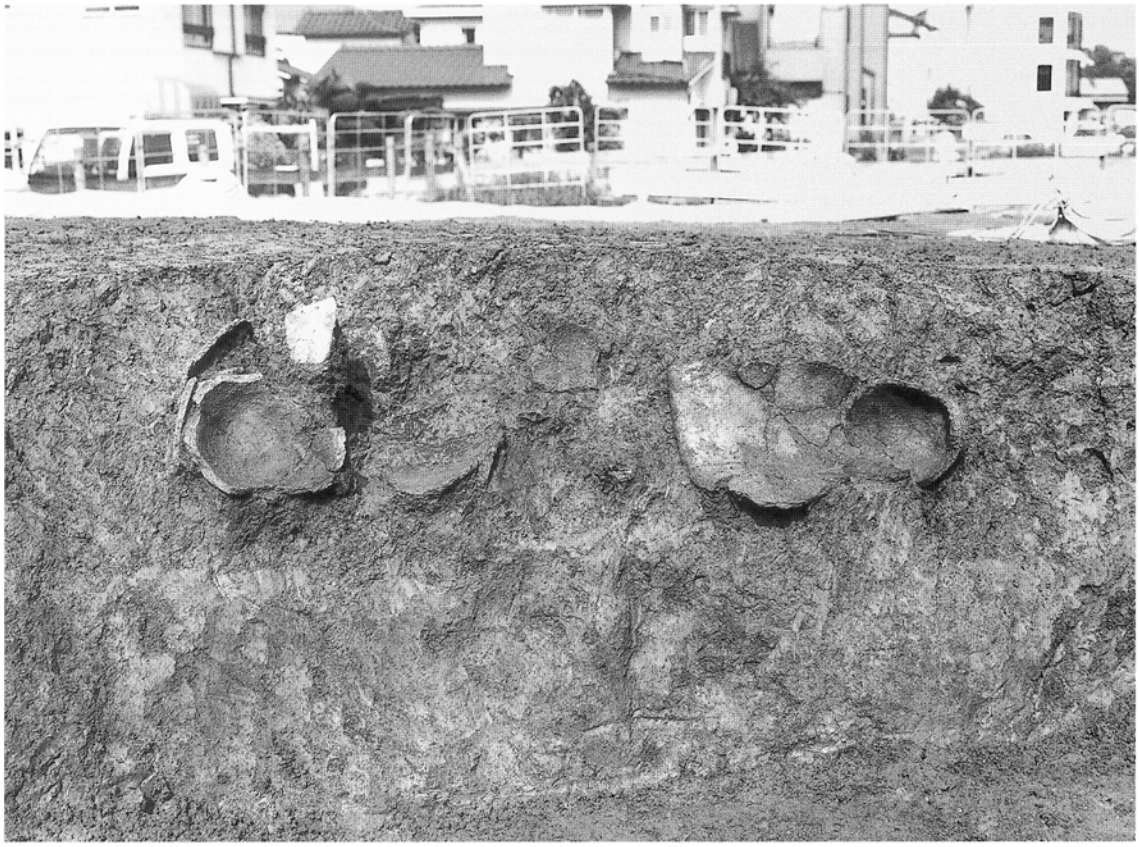
(2)ＳＫ－２１遺物検出状況（東から）



(1)ＳＫ－２２遺物検出状況（東から）

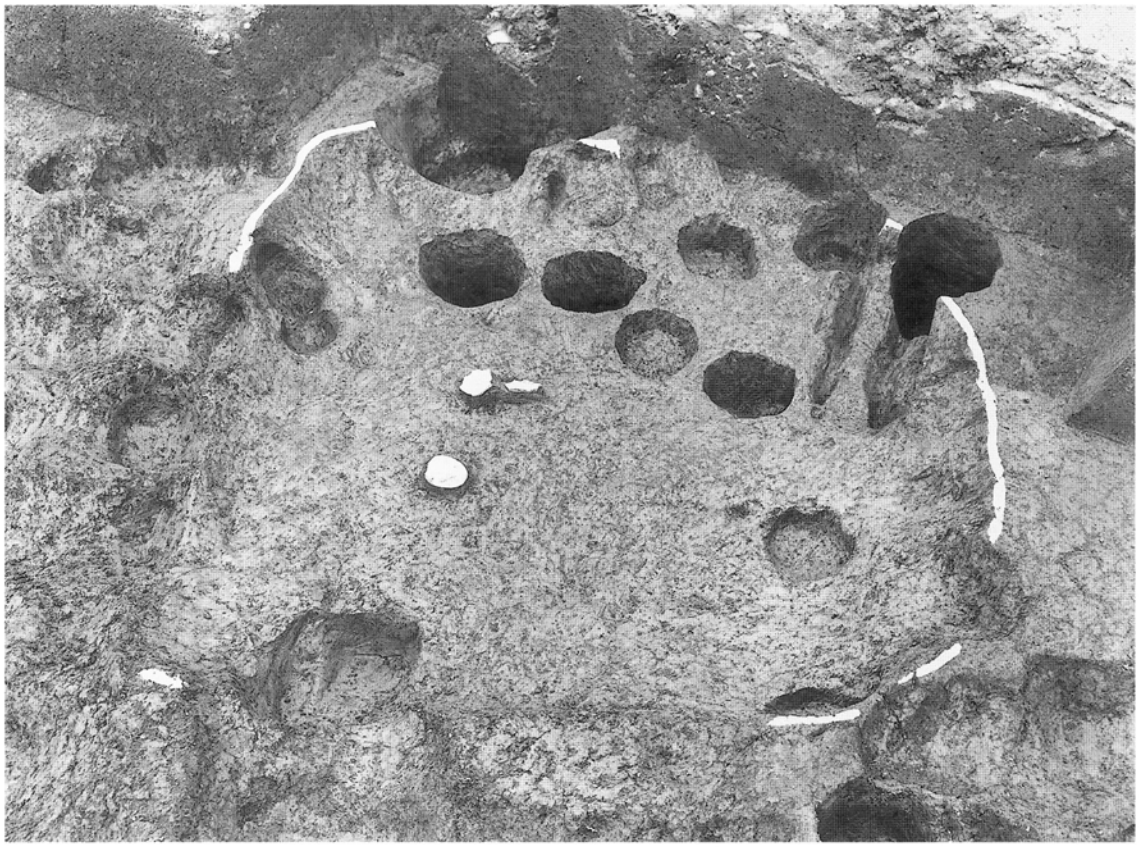


(2)ＳＫ－３３遺物検出状況（東から）

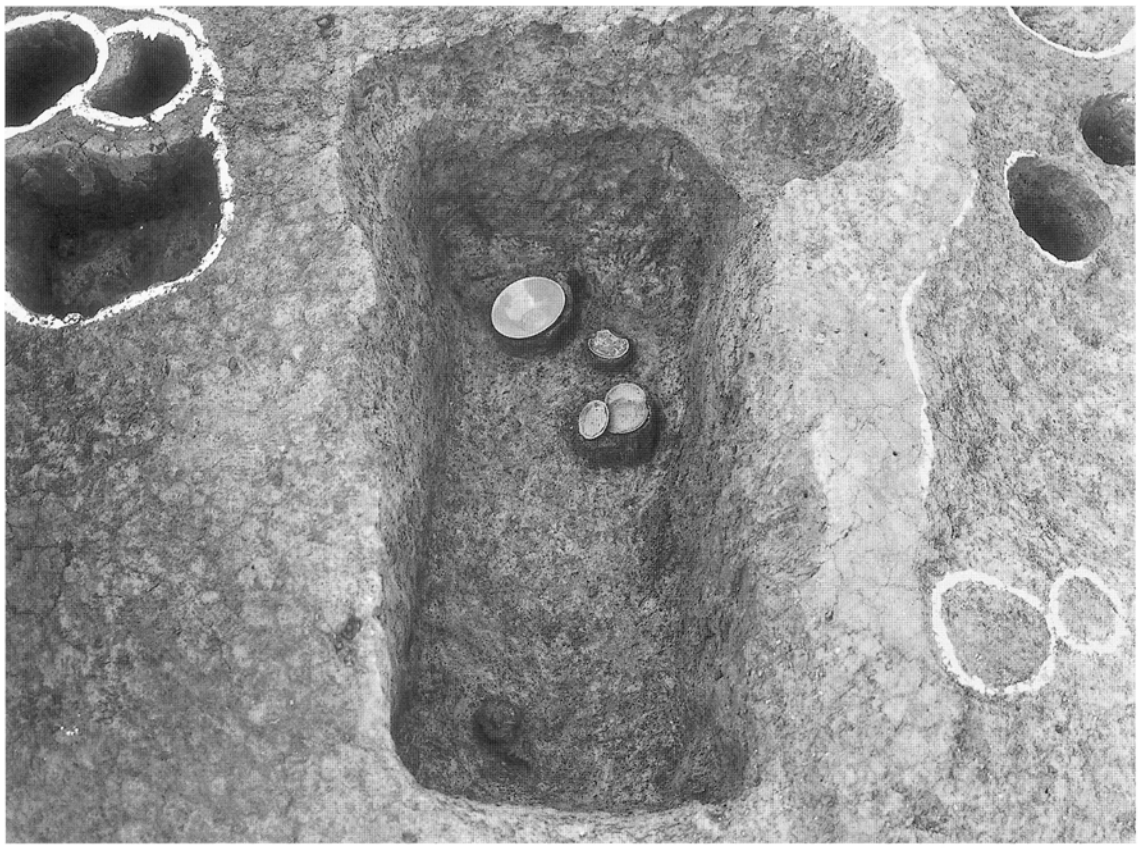


(1)ＳＫ－４１遺物検出状況（西から）

(2)ＳＫ－５５遺物検出状況（北から）

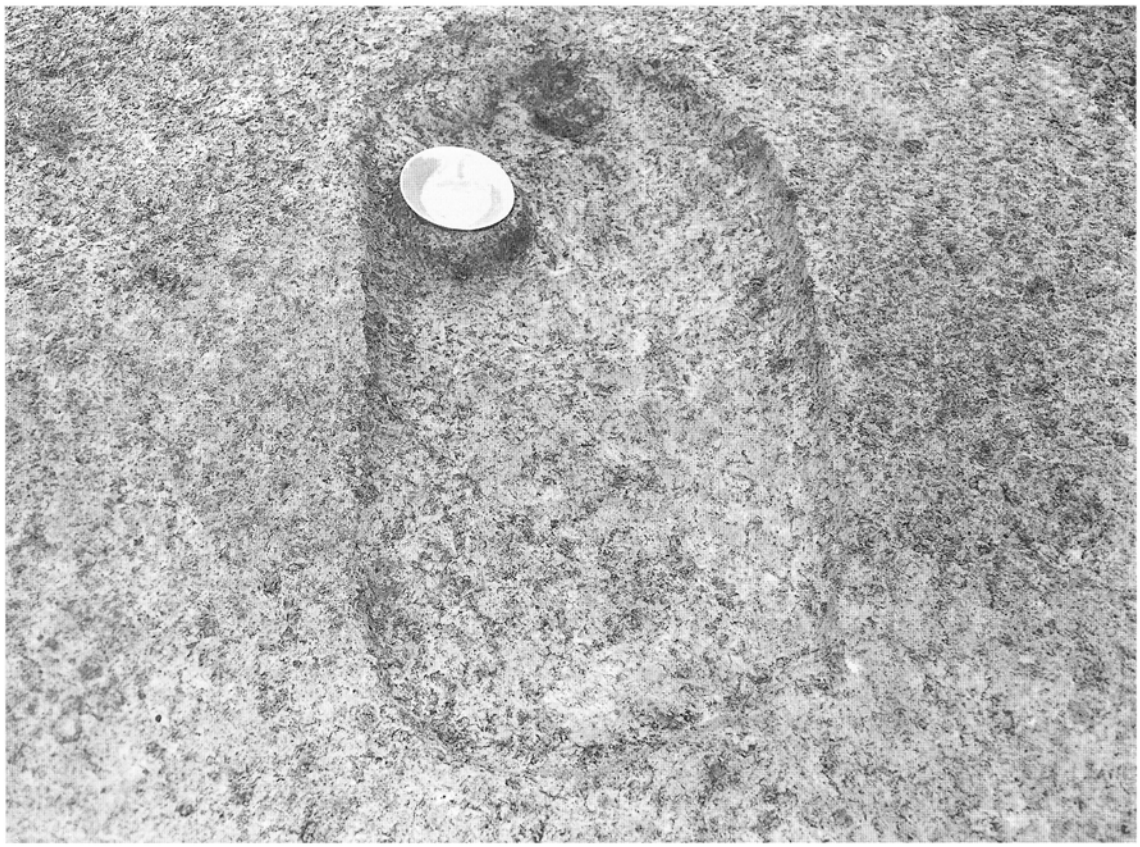


(1)ＳＫ－６９遺物検出状況（北から）

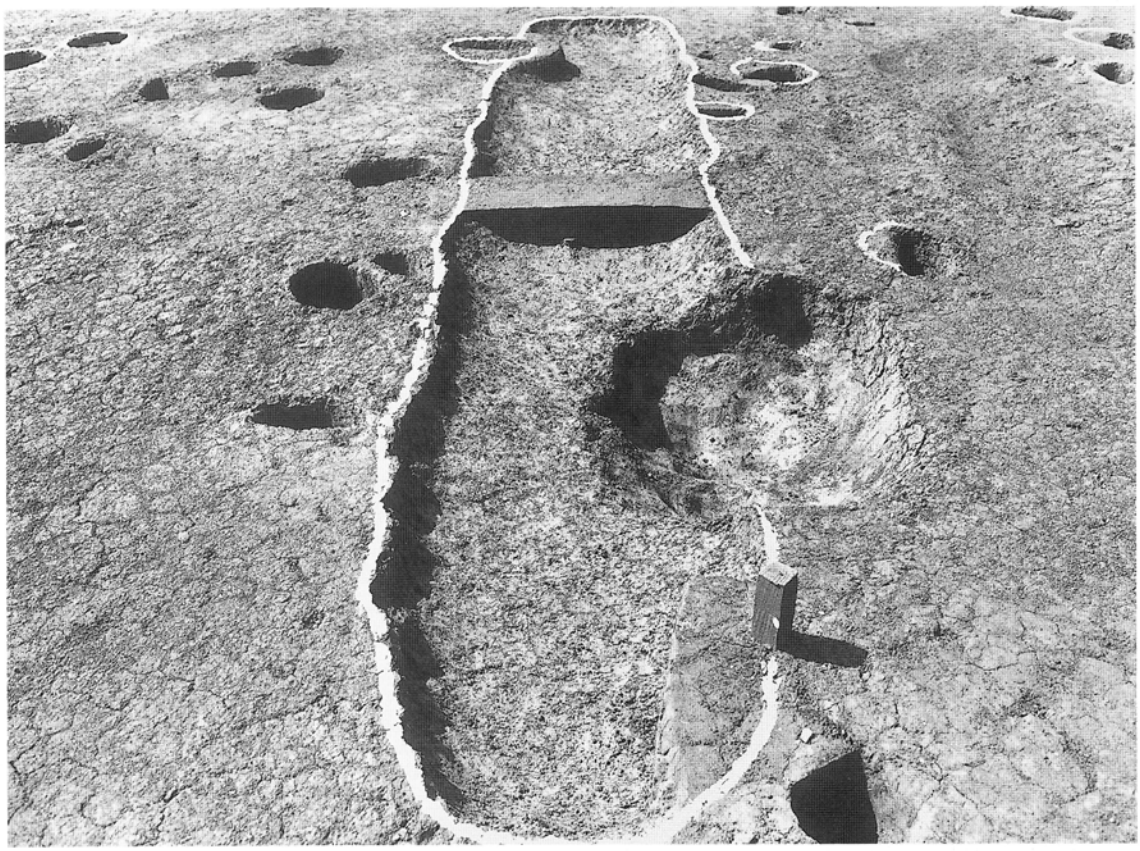


(2)ＳＫ－７３遺物検出状況（南から）

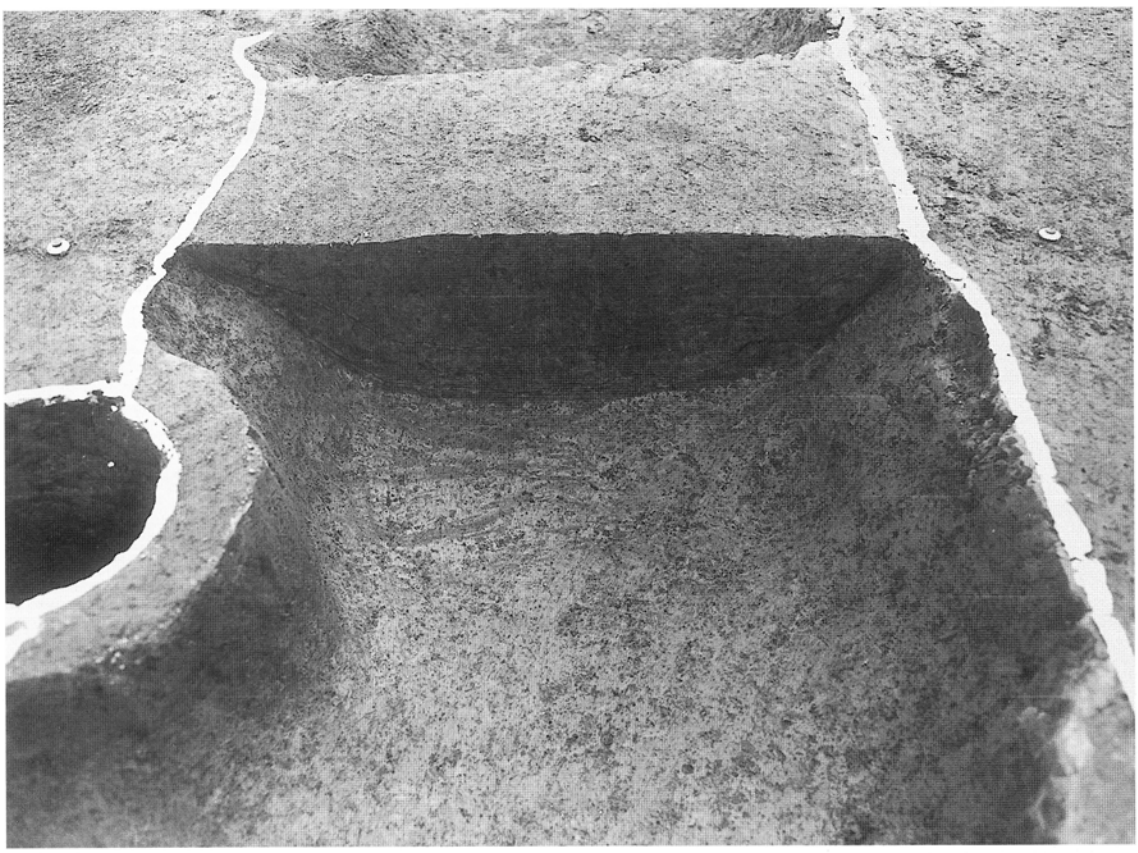
(1)ＳＫ－７９遺物検出状況（南から）



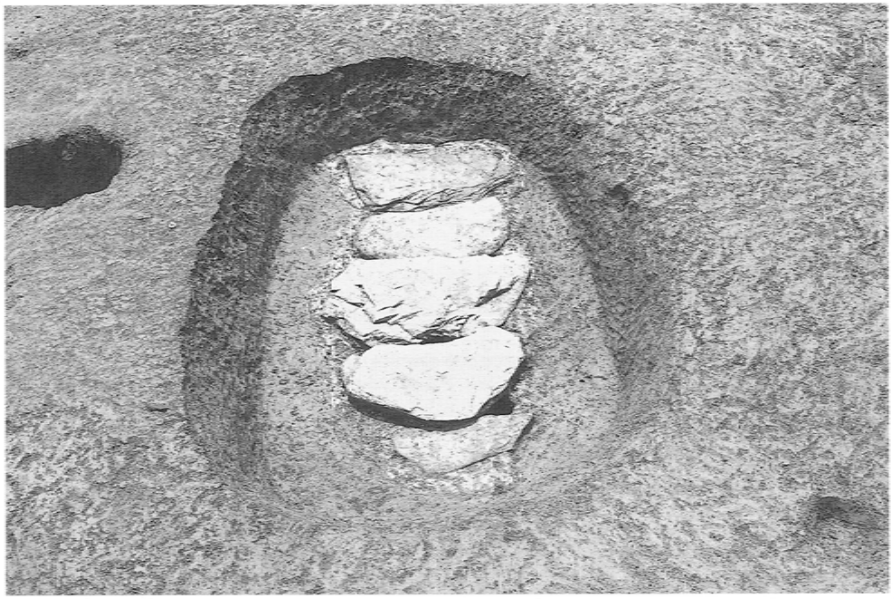
(2)ＳＫ－８５遺物検出状況（南から）



(1)ＳＤ－１９検出状況（北から）

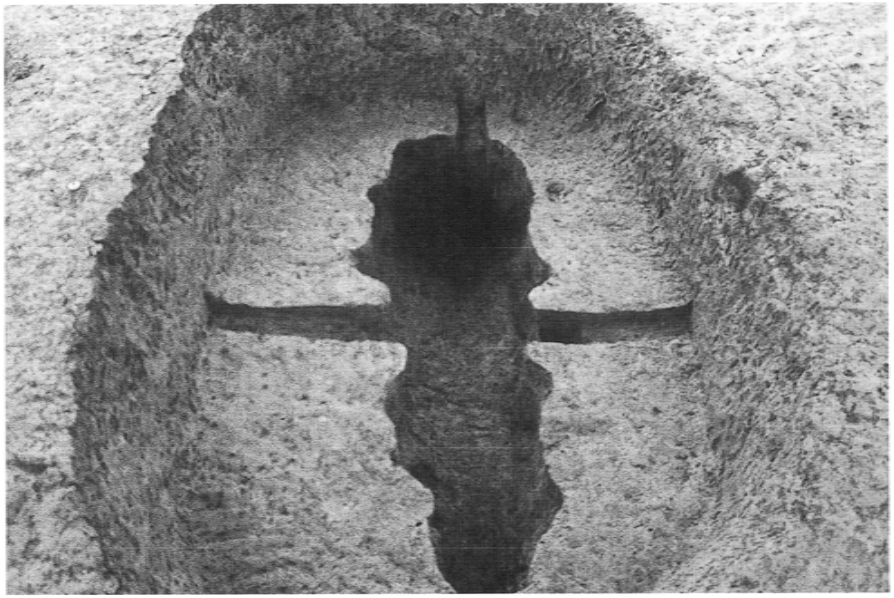


(2)ＳＤ－５９土層断面状況（北から）

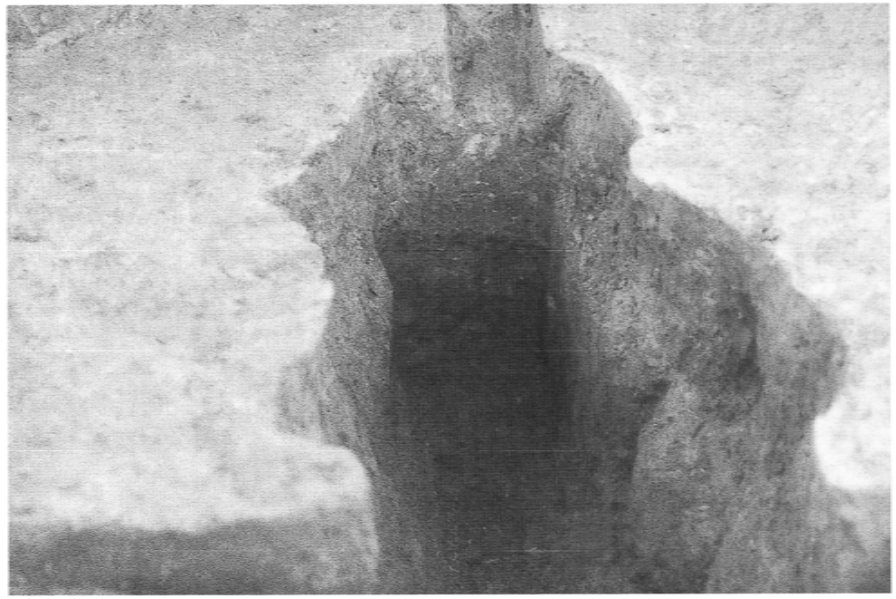


(1)ＳＫ－４２蓋石状況（北から）

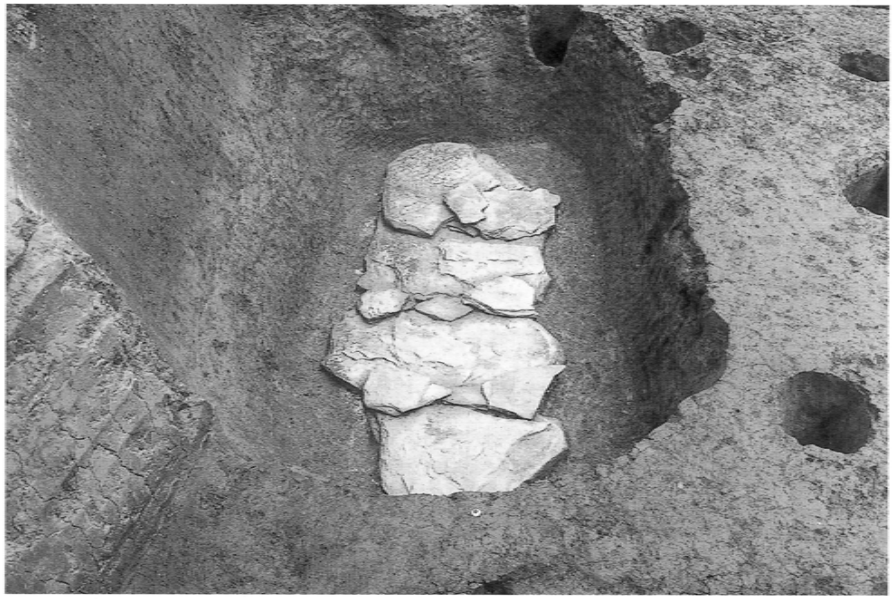
(2)ＳＫ－４２土壙内状況（北から）



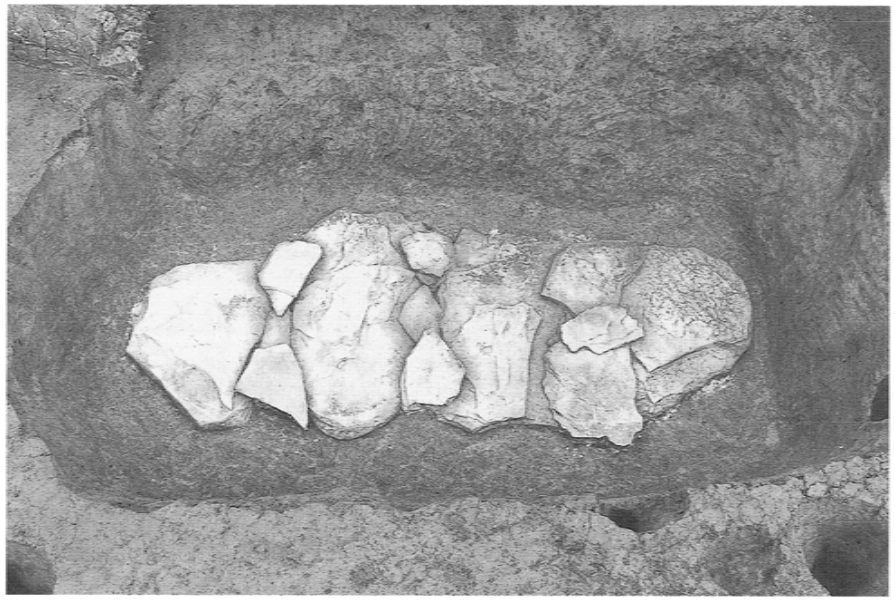
(3)ＳＫ－４２土壙掘削状況（北から）



(4)ＳＫ－４２土壙内小口部状況（北から）

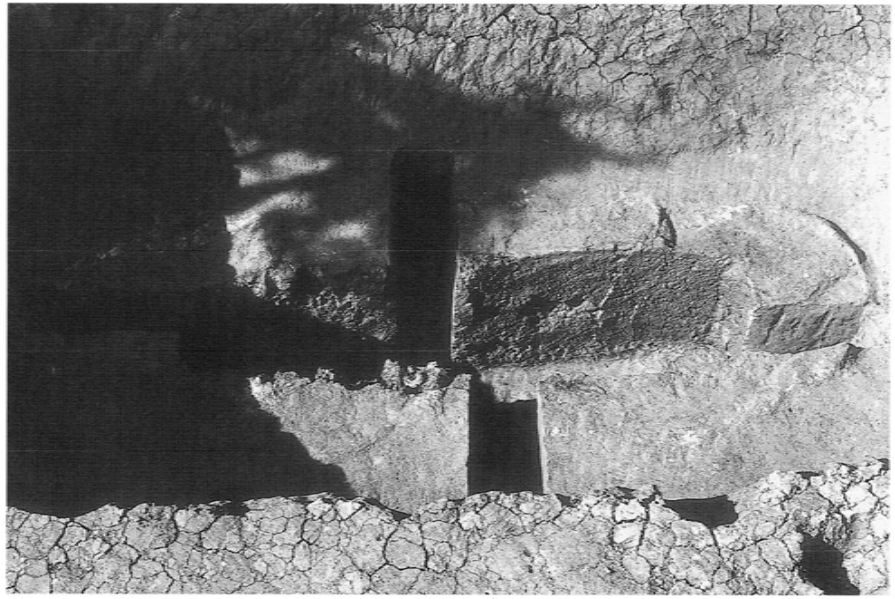


(1)ＳＫ－５１蓋石状況（西から）



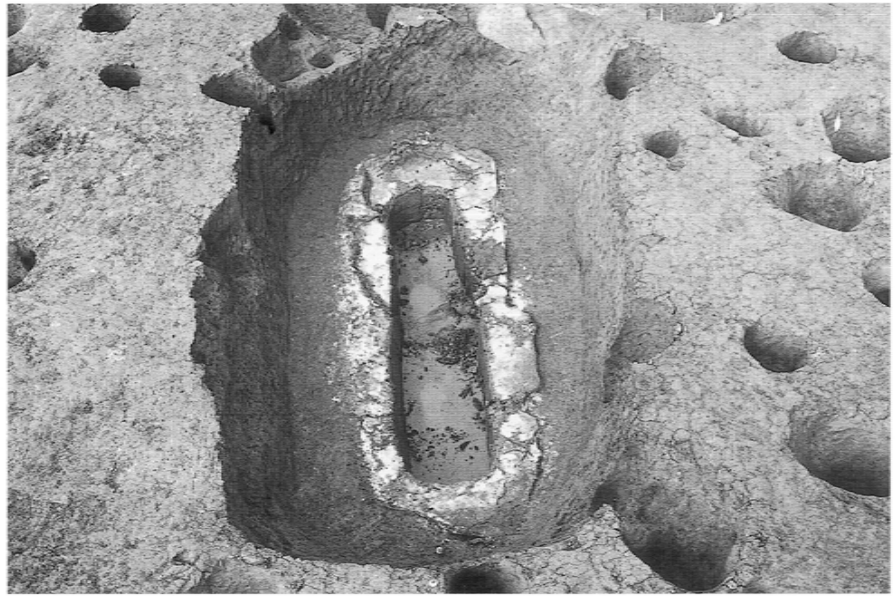
(2)ＳＫ－５１蓋石状況（南から）

(3)ＳＫ－５１土壙内状況（西から）

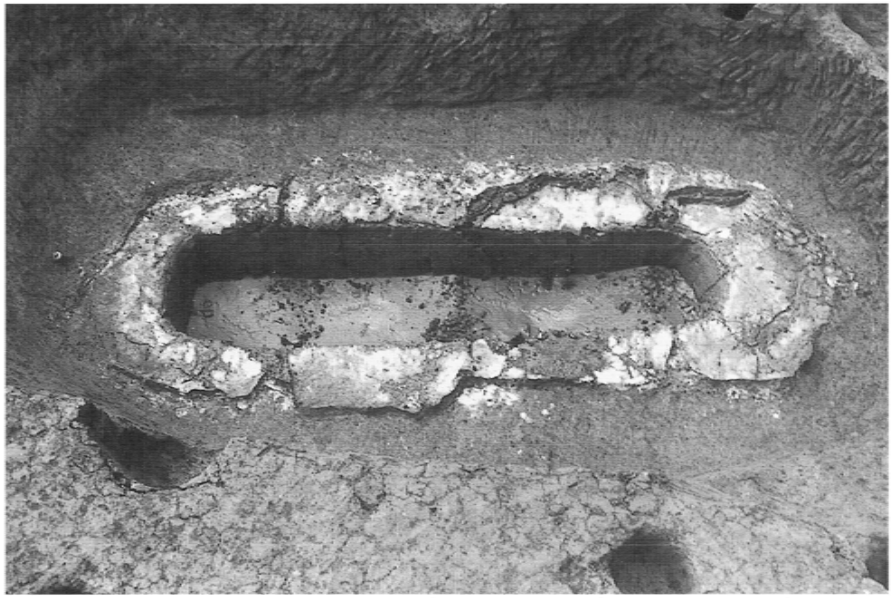


(4)土壙調査状況（南から）

(1)ＳＫ－５２蓋石状況（北から）

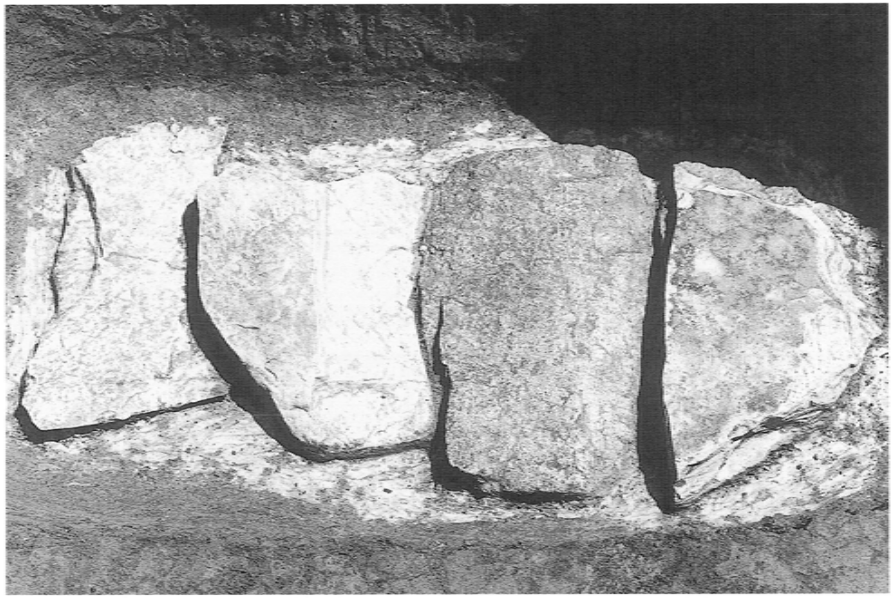


(2)土壙内状況（東から）

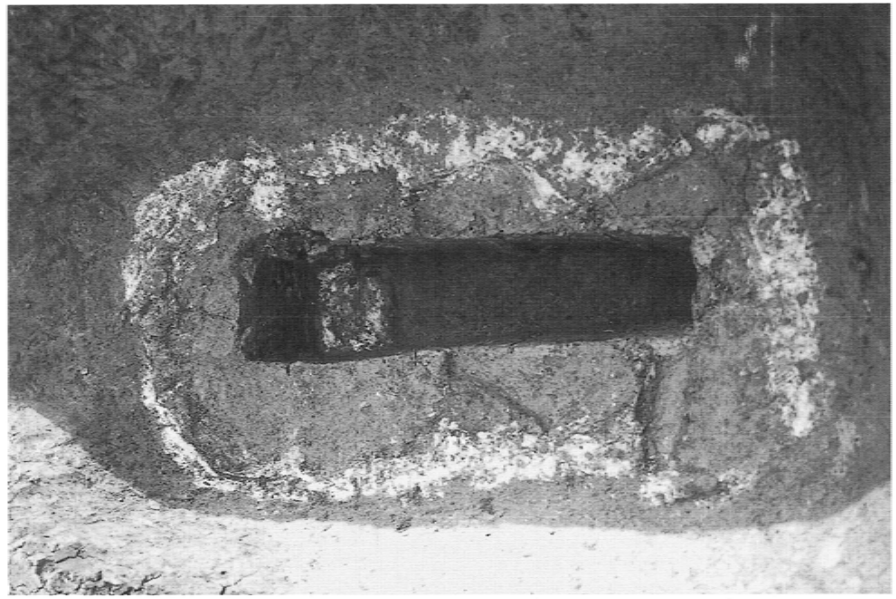


(3)土壙内状況（北から）

(4)土壙内堆積土掘削状況（南西から）



(1)ＳＫ－５３蓋石状況（西から）



(2)土壙内床面状況（西から）

(3)土壙内状況（南から）

(4)床面白色粘土状況（東から）

Ｐｈ．１２　合せ口壷４４調査状況

Ｐｈ．１３　溝４６遺物出土状況

田島小松浦　田島Ａ遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書
第647集
平成12年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１
印刷　高松印刷有限会社
福岡市東区松島１丁目４－１０